一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集

鷹取五反田遺跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

上 巻

—弥生時代包含層・古墳時代以降編—

1999

福岡県教育委員会

一般国道
２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集

鷹取五反田遺跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

上 巻

—弥生時代包含層・古墳時代以降編—

1999

福岡県教育委員会

巻頭図版

鷹取五反田遺跡第3次調査区全景（北西から　1994）

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55（1980）年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用も行なわれています。

この報告書は、平成２・５・６（1990・1993・1994）年度に発掘調査を実施した吉井町大字鷹取所在の鷹取五反田遺跡の記録です。当該地は筑後川と耳納山麓に挟まれた沖積平野に位置する肥沃な地勢であり、今回の調査によって、おもに弥生時代中期と古墳時代後期の集落遺跡を確認することができました。

本書が、地域史の研究や文化財保護思想の普及と活用の一助になれば幸甚に存じます。

発掘調査および出土遺物の整理作業や報告書作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対しまして深甚の謝意を表します。

平成11年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1．この報告書は、平成２・５・６（1990・1993・1994）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第10集である。

2．本書に記録した鷹取五反田遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第９－Ｂ地点にあたり、浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田・中ノ坪に所在する。

3．鷹取五反田遺跡の報告は平成９・10（1997・1998）年度の２カ年に分けて実施するが、平成９年度は弥生時代遺構編、平成10年度は弥生時代包含層編・古墳時代以降編・県道東側調査区編からなる。

4．本書に掲載した遺構図は、井上裕弘・木下修・小田和利・水ノ江和同・日高正幸・矢野和昭が作成した。なお、使用した方位はすべて真北である。

5．本書に掲載した遺構写真は井上・木下・小田・水ノ江が、遺物写真は北岡伸一・水ノ江が撮影した。なお、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。

6．出土遺物の整理・復原作業は九州歴史資料館において岩瀬正信の、実測作業は文化財保護課太宰府事務所において平田春美の、図面浄書作業は文化財保護課太宰府事務所と甘木事務所において豊福弥生・塩足里美の指導と協力によりそれぞれ実施した。

7．出土した炭化米の分析については佐賀大学農学部の和佐野喜久生教授と真鍋智子氏にお願いし、水ノ江とともに「Ⅲ　鷹取五反田遺跡の炭化米特性と稲作起源」として纏めた。

8．出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。

9．本書の執筆は「Ⅲ　鷹取五反田遺跡の炭化米特性と稲作起源」を除き、井上・木下・小田・水ノ江が分担し、編集は水ノ江が実施した。

本　文　目　次

[鷹取五反田遺跡Ⅱ(上巻)]

Ⅰ　はじめに
1．調査の経緯と組織……1
2．遺跡の位置と歴史的環境……6
Ⅱ　発掘調査の記録―古墳時代以降編―
1．遺跡の概要……10
2．竪穴住居跡……10
3．掘立柱建物跡……188
4．土坑……191
5．土壙墓……191
6．溝……196
7．ピット……203
8．ピット・包含層の古墳時代以降の土器……203
9．ピット・包含層の縄紋時代の土器……212
10．ピット・包含層の弥生時代の土器……212
11．ピット・包含層の石器・石製品……214
12．ピット・包含層の鉄器……215
13．県道東側調査区……215

[鷹取五反田遺跡Ⅱ(下巻)]

Ⅲ　鷹取五反田遺跡の炭化米特性と稲作起源
1．はじめに……233
2．材料および方法……233
3．結果および考察……236
Ⅳ　おわりに
1．鷹取五反田遺跡の概要……249
2．弥生時代の鷹取五反田遺跡……249
3．古墳時代以降の鷹取五反田遺跡……251

巻頭図版目次

巻頭図版　鷹取五反田遺跡第３次調査区全景（北西から　1994）

図版目次

図版１　鷹取五反田遺跡第３次調査区全景（北西から　1994）
図版２　鷹取五反田遺跡調査区西部より耳納山麓を望む（北東から　1990）
図版３　(1)　５～９号竪穴住居跡（東から）　(2)　５・６号竪穴住居跡（南から）
図版４　(1)　５号竪穴住居跡カマド（南から）　(2)　６号竪穴住居跡（北から）
図版５　(1)　７号竪穴住居跡（南から）　(2)　７号竪穴住居跡カマド（南から）
図版６　(1)　７・８号竪穴住居跡カマド（南から）(2)　８・９号竪穴住居跡（東から）
図版７　(1)　８号竪穴住居跡カマド（東から）　(2)　10号竪穴住居跡（東から）
図版８　(1)　20号竪穴住居跡（南から）　(2)　20号竪穴住居跡カマド（東から）
図版９　(1)　24号竪穴住居跡（南から）　(2)　24号竪穴住居跡カマド（南から）
図版10　(1)　31号竪穴住居跡（南から）　(2)　31号竪穴住居跡カマド（南から）
図版11　(1)　36・37号竪穴住居跡（南から）　(2)　38～45号竪穴住居跡（南東から）
図版12　(1)　38・39号竪穴住居跡（南から）　(2)　38号竪穴住居跡カマド（南から）
図版13　(1)　40・41号竪穴住居跡（東から）　(2)　40号竪穴住居跡カマド（東から）
図版14　(1)　42号竪穴住居跡（東から）　(2)　43号竪穴住居跡（南から）
図版15　(1)　38～44号竪穴住居跡（南から）　(2)　44号竪穴住居跡カマド（南から）
図版16　(1)　43号竪穴住居跡完掘（東から）　(2)　43号竪穴住居跡カマド（南から）
図版17　(1)　46・47号竪穴住居跡（南から）　(2)　46・47号竪穴住居跡完掘（東から）
図版18　(1)　50A・50B 号竪穴住居跡（北から）　(2)　50A 号竪穴住居跡カマド（東から）
図版19　(1)　51号竪穴住居跡（東から）　(2)　51号竪穴住居跡カマド（東から）
図版20　(1)　52・60号竪穴住居跡（南から）　(2)　60号竪穴住居跡カマド（南から）
図版21　(1)　52号竪穴住居跡完掘（西から）　(2)　53号竪穴住居跡（東から）
図版22　(1)　50～60号竪穴住居跡（北東から）　(2)　54・55号竪穴住居跡（東から）
図版23　(1)　54号竪穴住居跡カマド（南から）　(2)　55号竪穴住居跡（東から）
図版24　(1)　56号竪穴住居跡（西から）　(2)　57・59号竪穴住居跡（南から）
図版25　(1)　61号竪穴住居跡（南から）　(2)　66号竪穴住居跡（南から）
図版26　(1)　67号竪穴住居跡（南から）　(2)　67号竪穴住居跡カマド.1（南東から）
図版27　(1)　67号竪穴住居跡カマド.2（南東から）(2)　67号竪穴住居跡カマド.3（南西から）

図版28 (1) 68号竪穴住居跡（南西から） (2) 68号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版29 (1) 69～73号竪穴住居跡（南から） (2) 69号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版30 (1) 70号竪穴住居跡カマド（南から）
(2) 70号竪穴住居跡カマド土層横断面（南から）
(3) 70号竪穴住居跡カマド土層縦断面（東から）
図版31 (1) 71号竪穴住居跡カマド（南から） (2) 72号竪穴住居跡カマド（南から）
図版32 (1) 73号竪穴住居跡カマド（西から） (2) 74・109号竪穴住居跡（東から）
図版33 (1) 74号竪穴住居跡カマド（北東から） (2) 74号竪穴住居跡カマド復原（北から）
図版34 (1) 75号竪穴住居跡（南から） (2) 75号竪穴住居跡下層カマド（南から）
図版35 (1) 77号竪穴住居跡（東から） (2) 77号竪穴住居跡カマド（南から）
図版36 (1) 78号竪穴住居跡（西から） (2) 81号竪穴住居跡（北から）
図版37 (1) 80号竪穴住居跡（東から） (2) 80号竪穴住居跡カマド（南から）
図版38 (1) 85・86号竪穴住居跡（東から） (2) 87号竪穴住居跡（南西から）
図版39 (1) 87号竪穴住居跡カマド.1（南西から）
(2) 88・89・97・98号竪穴住居跡（南から）
図版40 (1) 90号竪穴住居跡（南から） (2) 90号竪穴住居跡完掘（南から）
(3) 90号竪穴住居跡土層断面（北から）
図版41 (1) 90号竪穴住居跡カマド.1（南から） (2) 90号竪穴住居跡カマド.2（南から）
図版42 (1) 104号竪穴住居跡（北から） (2) 104号竪穴住居跡カマド（北東から）
図版43 (1) 105号竪穴住居跡（北東から） (2) 105号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版44 (1) 108号竪穴住居跡（南西から） (2) 108号竪穴住居跡カマド（南から）
図版45 (1) 109号竪穴住居跡（南から） (2) 109号竪穴住居跡カマド（南から）
図版46 (1) 110・111号竪穴住居跡（南西から） (2) 111号竪穴住居跡完掘（東から）
図版47 (1) 112号竪穴住居跡.1（南から） (2) 112号竪穴住居跡.2（南から）
図版48 (1) 112号竪穴住居跡遺物出土状態.1（北東から）
(2) 112号竪穴住居跡遺物出土状態.2（西から）
図版49 (1) 112号竪穴住居跡カマド.1(北西から) (2) 112号竪穴住居跡カマド.2（南から）
図版50 (1) 114号竪穴住居跡（南から） (2) 114号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版51 (1) 116号竪穴住居跡（南から）
(2) 116号竪穴住居跡カマド（南から）
図版52 (1) 116・117・119号竪穴住居跡.1（南から）
(2) 116・117・119号竪穴住居跡.2（北から）
図版53 (1) 118号竪穴住居跡（東から） (2) 120号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版54 (1) 123号竪穴住居跡（南から） (2) 124号竪穴住居跡（南から）

図版55 (1) 1号掘立柱建物跡（西から） (2) 4号掘立柱建物跡（西から）
図版56 (1) 5号掘立柱建物跡（北から） (2) 6号掘立柱建物跡（北から）
図版57 (1) 7号掘立柱建物跡（南から） (2) 7号掘立柱建物跡周辺（南東から）
図版58 (1) 32号土坑（南西から） (2) 32号土坑土層断面（南から）
図版59 (1) 1・2号土壙墓（南から） (2) 1号土壙墓遺物出土状態（西から）
図版60 (1) 2号土壙墓（南西から） (2) 3号土壙墓（北西から）
図版61 (1) 4号土壙墓（東から） (2) 5号土壙墓（東から）
図版62 (1) 6号土壙墓（北から） (2) 6号土壙墓遺物出土状態（北から）
図版63 (1) 1050号ピット.1（西から） (2) 1050号ピット.2（東から）
図版64 (1) 15号溝土層断面（西から） (2) 調査最終段階の状態（西から）
図版65 (1) 県道東側調査区.1（南東から） (2) 県道東側調査区.2（北西から）
図版66 (1) 16号溝（北から） (2) 16号溝土層断面（北から）
図版67 竪穴住居跡出土土器.1（7・8・9・24・31号住居跡）
図版68 竪穴住居跡出土土器.2（36・37・40・47・48・50A号住居跡）
図版69 竪穴住居跡出土土器.3（50A・50B・51・52号住居跡）
図版70 竪穴住居跡出土土器.4（52号住居跡）
図版71 竪穴住居跡出土土器.5（53・54号住居跡）
図版72 竪穴住居跡出土土器.6（54号住居跡）
図版73 竪穴住居跡出土土器.7（54～57・59号住居跡）
図版74 竪穴住居跡出土土器.8（60・61・66号住居跡）
図版75 竪穴住居跡出土土器.9（66号住居跡）
図版76 竪穴住居跡出土土器.10（67・74号住居跡）
図版77 竪穴住居跡出土土器.11（75～77号住居跡）
図版78 竪穴住居跡出土土器.12（77・78・80・81号住居跡）
図版79 竪穴住居跡出土土器.13（87・88号住居跡）
図版80 竪穴住居跡出土土器.14（88・90号住居跡）
図版81 竪穴住居跡出土土器.15（90・101号住居跡）
図版82 竪穴住居跡出土土器.16（101号住居跡）
図版83 竪穴住居跡出土土器.17（101・104号住居跡）
図版84 竪穴住居跡出土土器.18（104号住居跡）
図版85 竪穴住居跡出土土器.19（108・109・111・112号住居跡）
図版86 竪穴住居跡出土土器.20（112号住居跡）
図版87 竪穴住居跡出土土器.21（112号住居跡）
図版88 竪穴住居跡出土土器.22（112号住居跡）

図版89　竪穴住居跡出土土器.23（112号住居跡）
図版90　竪穴住居跡出土土器.24（104•112•114•116号住居跡）
図版91　竪穴住居跡出土土器.25（116•117•119•123•124号住居跡）
図版92　土坑・土壙墓出土土器（32号土坑、1・4・5・6・10土壙墓）
図版93　溝・ピット・包含層出土土器
図版94　ピット・包含層出土土器.1
図版95　ピット・包含層出土土器.2
図版96　(1)　古墳時代の石器・石製品.1　(2)　古墳時代の石器・石製品.2
(3)　古墳時代の石器・石製品.3
図版97　(1)　ピット・包含層出土の石器.1　(2)　ピット・包含層出土の石器.2
(3)　ピット・包含層出土の石器.3
図版98　(1)　ピット・包含層出土の石器.4　(2)　ピット・包含層出土の石器.5
(3)　ピット・包含層出土の石器.6
図版99　(1)　古墳時代の鉄器.1　(2)　古墳時代の鉄器.2

挿　図　目　次

付　図　鷹取五反田遺跡全体図（1/300）
[上巻]
第1図　鷹取五反田遺跡の現況（1998．8撮影　北西から）…… 3
第2図　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点（1/75,000）…… 4
第3図　鷹取五反田遺跡周辺地形図（1/3,000）…… 5
第4図　鷹取五反田遺跡周辺主要遺跡分布図（1/5,000）…… 9
第5図　鷹取五反田遺跡遺構配置図（1/1,200）……11
第6図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）……12
第7図　6・7号竪穴住居跡実測図（1/60）……13
第8図　5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……14
第9図　5・7号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……16
第10図　8・9号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第11図　8号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……18
第12図　7～10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……19
第13図　10・20号竪穴住居跡実測図（1/60）……20
第14図　24号竪穴住居跡実測図（1/60）……22

第15図　20・24号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……23
第16図　31・46・47号竪穴住居跡実測図（1/60）……24
第17図　31号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……26
第18図　31号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……27
第19図　31・33号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……28
第20図　36・37号竪穴住居跡実測図（1/60）……30
第21図　36・37号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……31
第22図　38・39号竪穴住居跡実測図（1/60）……32
第23図　38号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……33
第24図　38・39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……34
第25図　40・41号竪穴住居跡実測図（1/60）……35
第26図　40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……35
第27図　42・43号竪穴住居跡実測図（1/60）……36
第28図　43・44号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……37
第29図　44・45号竪穴住居跡実測図（1/60）……38
第30図　46・47号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……40
第31図　43・44・46・47号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……41
第32図　48・49号竪穴住居跡実測図（1/60）……43
第33図　48・49号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……44
第34図　50A・50B 号竪穴住居跡実測図（1/60）……45
第35図　50A 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……47
第36図　50B 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……48
第37図　51号竪穴住居跡実測図（1/60）……49
第38図　51号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図（1/3　土製品は1/2）……50
第39図　52・60号竪穴住居跡実測図（1/60）……51
第40図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3）……52
第41図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3）……53
第42図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3）……54
第43図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 .4（1/3）……55
第44図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 .5（1/3）……56
第45図　53号竪穴住居跡実測図（1/60）……58
第46図　53号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3）……59
第47図　53号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3）……60
第48図　54号竪穴住居跡実測図（1/60）……61

第49図　54号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……62
第50図　54号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3）……64
第51図　54号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3）……65
第52図　54号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3）……66
第53図　54号竪穴住居跡出土土器実測図 .4（1/3）……67
第54図　54号竪穴住居跡出土土器実測図 .5（1/3）……68
第55図　55号竪穴住居跡・５号掘立柱建物跡実測図（1/60）……69
第56図　56号竪穴住居跡実測図（1/60）……70
第57図　55・56号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図（1/3　土製品は1/2）……71
第58図　57・59号竪穴住居跡実測図（1/60）……73
第59図　57・59号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……74
第60図　60号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……75
第61図　60号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……76
第62図　60・61号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……78
第63図　61・66号竪穴住居跡実測図（1/60）……79
第64図　66号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3）……80
第65図　66号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3）……81
第66図　66号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3）……82
第67図　67号竪穴住居跡実測図（1/60）……84
第68図　67号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……85
第69図　67号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3）……86
第70図　67号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3）……87
第71図　67号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3）……88
第72図　68号竪穴住居跡実測図（1/60）……89
第73図　68・69号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……90
第74図　68号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……91
第75図　69～73号竪穴住居跡実測図（1/60）……折込み　92-93
第76図　68号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……93
第77図　71号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……93
第78図　70号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……94
第79図　70・71号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……95
第80図　72号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……96
第81図　73号竪穴住居跡カマドＡ実測図（1/30）……97
第82図　73号竪穴住居跡カマドＢ実測図（1/30）……98

第83図　72・73号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……99
第84図　74・109号竪穴住居跡実測図（1/60）……100
第85図　74号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……101
第86図　74号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……102
第87図　75・76号竪穴住居跡実測図（1/60）……104
第88図　75号竪穴住居跡下層カマド実測図（1/30）……105
第89図　75号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……106
第90図　76号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……107
第91図　77・78号竪穴住居跡実測図（1/60）……108
第92図　77号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……109
第93図　77号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……110
第94図　77・78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……111
第95図　78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……112
第96図　80・81号竪穴住居跡実測図（1/60）……113
第97図　80号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……114
第98図　80・81号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……115
第99図　85・86号竪穴住居跡実測図（1/60）……116
第100図 85号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……117
第101図 87号竪穴住居跡実測図（1/60）……118
第102図 87号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……119
第103図 87号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）……120
第104図 87号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）……121
第105図 87号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）……122
第106図 88・89・97・98号竪穴住居跡実測図（1/60）……123
第107図 88号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……124
第108図 88・89号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……125
第109図 90号竪穴住居跡実測図（1/60）……126
第110図 90号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……128
第111図 90号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）……129
第112図 90号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）……130
第113図 90号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）……131
第114図 97号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……133
第115図 101号竪穴住居跡実測図（1/60）……133
第116図 101号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）……134

第117図 101号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3） ……135
第118図 101号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3） ……136
第119図 101号竪穴住居跡出土土器実測図 .4（1/3） ……137
第120図 104号竪穴住居跡実測図（1/60） ……139
第121図 104・109号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……140
第122図 104号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3） ……141
第123図 104号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3） ……142
第124図 104号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3） ……143
第125図 104号竪穴住居跡出土土器実測図 .4（1/3） ……144
第126図 105・108号竪穴住居跡実測図（1/60）……146
第127図 105・108号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……147
第128図 105・108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3） ……148
第129図 108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……149
第130図 110・111号竪穴住居跡実測図（1/60）……152
第131図 109～111号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3） ……153
第132図 112号竪穴住居跡実測図（1/60） ……156
第133図 112・114号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……157
第134図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3） ……158
第135図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3） ……159
第136図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .3（1/3） ……160
第137図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .4（1/3） ……161
第138図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .5（1/3） ……162
第139図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .6（1/3） ……163
第140図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .7（1/3） ……164
第141図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .8（1/3） ……165
第142図 112号竪穴住居跡出土土器実測図 .9（1/6） ……166
第143図 114号竪穴住居跡実測図（1/60） ……168
第144図 114号竪穴住居跡出土土器実測図 .1（1/3） ……169
第145図 114号竪穴住居跡出土土器実測図 .2（1/3） ……170
第146図 116・117・119号竪穴住居跡実測図（1/60） ……172
第147図 116号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……173
第148図 117号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……174
第149図 119号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……175
第150図 116・118・120号竪穴住居跡カマド実測図（1/30） ……176

第151図 118・120・121号竪穴住居跡実測図（1/60）……178
第152図 123号竪穴住居跡実測図（1/60）……179
第153図 123号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……180
第154図 124号竪穴住居跡実測図（1/60）……181
第155図 124号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……182
第156図 1号掘立柱建物跡実測図（1/80）……184
第157図 4・10号掘立柱建物跡実測図（1/80）……185
第158図 8号掘立柱建物跡実測図（1/80）……186
第159図 9号掘立柱建物跡実測図（1/80）……187
第160図 6・7号掘立柱建物跡実測図（1/60）……189
第161図 32号土坑実測図（1/40）……190
第162図 32号土坑出土土器実測図（1/3）……191
第163図 1～3号土壙墓実測図（1/30）……193
第164図 4～6号土壙墓実測図（1/30）……194
第165図 7・10号土壙墓実測図（1/20）……195
第166図 1・4～7・10号土壙墓出土土器実測図（1/3）……198
第167図 1～5・8～11・14号溝断面および15・16号溝土層断面実測図（1/30）……199
第168図 5・9・12・15号溝出土土器実測図（1/3）……200
第169図 15号溝出土土器実測図（1/3）……201
第170図 1050号ピット実測図（1/20）……203
第171図 1050号ピット出土土器実測図（1/6）……204
第172図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.1（1/3）……205
第173図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.2（1/3）……206
第174図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.3（1/3）……207
第175図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.4（1/3）……208
第176図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.5（1/3）……209
第177図 古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.6（1/3）……210
第178図 包含層出土縄紋土器実測図（1/3）……212
第179図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.1（1/4）……216
第180図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.2（1/4）……217
第181図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.3（1/4）……218
第182図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.4（1/4）……219
第183図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.5（1/4）……220
第184図 ピット・包含層出土弥生土器実測図.6（1/4）……221

第185図 ピット・包含層出土弥生土器実測図 .7（1/4）……222
第186図 ピット・包含層出土弥生土器実測図 .8（1/4）……223
第187図 ピット・包含層出土弥生土器実測図 .9（1/4）……224
第188図 ピット・包含層出土弥生土器実測図 .10（1/4）……225
第189図 古墳時代の石器・石製品実測図（1～3は2/3　4～16は1/2）……226
第190図 ピット・包含層出土石器実測図 .1（1～6は2/3　7～15は1/2）……227
第191図 ピット・包含層出土石器実測図 .2（1/2）……228
第192図 ピット・包含層出土石器実測図 .3（1/2）……229
第193図 ピット・包含層出土石器実測図 .4（1/3）……230
第194図 鉄器実測図（1/2）……231
[下巻]
第195図 鷹取五反田遺跡の位置と筑紫平野の地形図（1/12,000）……234
第196図 鷹取五反田および比較遺跡（北部九州・韓国）の炭化米粒長・幅平均値の分布図…238
第197図 鷹取五反田および比較遺跡（北部九州・韓国）の炭化米粒長・幅平均値
（付 .95%信頼区間）の分布図 ……238
第198図 鷹取五反田遺跡の頻度分布図 ……239
第199図 鷹取五反田遺跡の炭化米 .1（上は 4 号貯蔵穴　下は 5 号貯蔵穴）……245
第200図 鷹取五反田遺跡の炭化米 .2（上は25号土坑　下は83号竪穴住居跡）……246
第201図 鷹取五反田遺跡の炭化米 .3（上は32号土坑　下は P－3）……247
第202図 鷹取五反田遺跡の炭化米 .4（89号竪穴住居跡）……248
第203図 鷹取五反田遺跡の古墳時代年代別遺構分布図（1/1,200）……252

表　目　次

[上巻]
表 1　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点一覧 …… 4
[下巻]
表 2　稲粒（米、籾）特性の指数、指数別階級値および特性の表現法（和佐野、1995）…235
表 3　稲粒（米、籾）の粒長・粒幅指数による粒型分類（和佐野、1995）……235
表 4　鷹取五反田および比較遺跡の炭化米粒特性の平均値および標準偏差 ……236
表 5　鷹取五反田および比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差 ……241
表 6　鷹取五反田および比較遺跡の炭化米粒長 / 幅比の頻度分布・平均値・標準偏差 ……241
表 7　鷹取五反田および比較遺跡の炭化米粒の粒型分布図 ……243

Ⅰ　はじめに

1．調査の経緯と組織

一般国道210号浮羽バイパスは、浮羽郡内の交通混雑の緩和と、地域産業経済の発展を目的として、昭和48（1973）年度から事業化した片側２車線の大規模なバイパスである。田主丸町豊城から浮羽町山北までの総延長14.0㎞のうち、浮羽町と吉井町の一部においては現在暫定対面２車線で供用を開始しており、地域住民の生活に密着した道路となっている（第１図)。

さて、この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年２月３日付けで建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（以下「福岡工事事務所」とする）から福岡県教育庁管理部文化課（現在．総務部文化財保護課）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」という調査依頼があり、まずそれに基づき浮羽町所在の塚堂遺跡群の発掘調査が昭和54（1979）年度から同57（1982）年度までの４カ年に亘って実施された。その後、昭和61（1986）年４月２日付けで福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」という調査依頼が文化課にあり、文化課は塚堂遺跡を除く16地点の発掘調査必要箇所を回答した。現在まで、この回答による16地点についての調査を随時協議しながら実施しているが、それら調査地点の所在地は第２図を、その概要については表１を参照していただきたい。

本書に掲載した浮羽バイパス９-B地点「鷹取五反田遺跡」は、平成元～２（1989～1990）年度に発掘調査が実施され平成５（1993）年度に報告書が刊行された浮羽バイパス９-A地点「堺町・大碇遺跡」とともに、平成元（1989）年12月に吉井町大字生葉～鷹取間の約1.3㎞に亘って行なった試掘調査の結果、本調査が必要になった地区である。周辺では福岡県甘木農林事務所が県営ほ場整備事業を実施しており、その関連から福岡工事事務所・甘木農林事務所・吉井第四改良区と随時協議を重ねながら、平成２（1990）年４月15日より発掘調査を開始した。

当初は、平成２（1990）年度中に調査の対象となった約14,000㎡の全面発掘を予定していたが、弥生時代中期後半～後期前半、古墳時代後期、古代の３時期の多数の遺構が複雑に切り合う状況から、大幅な調査期間の延長が予想された。しかし、同時進行していたほ場整備事業との関係から、バイパス本線の両側に付設する用排水路部分の調査だけは当該年度中に終了しなければならなかったために、変則的ではあったが、調査途中より用排水路部分およびその工事に必要な用地、すなわちバイパス本線の中央部を除く両側の幅７ｍ分を先行して調査することとなった。その結果、平成２（1990）年度の調査を第１次（1990.4.15～11.28）とし、平成５（1993）年度を第２次（1993.10.26～12.10)、平成６（1994）年度を第３次（1994.5.26～10.26）とした。調査面積は7,420㎡。なお、平成５（1993）年度の第２次調査については、第１次調査において完掘していなかった部分の補足調査であり、新たな遺構を検出した調査では

なかった。

発掘調査および報告書作成に関係した福岡工事事務所と福岡県文化財保護課の組織構成は、下記のとおりである。またこの期間中、吉井町教育委員会には様々な面において多大なご配慮を賜りましたこと、記して感謝申しあげます。

なお、昨年度刊行した『鷹取五反田遺跡Ⅰ』は弥生時代遺構編であるのに対し、本書は『鷹取五反田遺跡Ⅰ』に掲載しなかった弥生時代包含層出土遺物編と古墳時代以降編とからなる『鷹取五反田遺跡Ⅱ』である。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成２年度	平成５年度	平成６年度	平成９年度	平成10年度
事務所長	中垣　光弘	長谷部正和	佐竹　芳郎	藤本　　聡	藤本　　聡
副所長	岩田　秀人	宮崎　暢隆	中馬　昌昭	兼武征二郎	兼武征二郎
	横溝　敏治	中空　　進	中空　　進	別府　五男	別府　五男
					新開幸一郎
建設監督官	梅田　正信	野鶴　博任	野鶴　博任	有家　信義	有家　信義
	山田　茂利	平川　澄雄	平川　澄雄	柴田　　智	柴田　　智
調査第一課長	並河　良治				
調査第二課長	中川　蔵太	西原　広寿	西原　広寿	田中　義高	赤星　文生
調査係長	松尾　義信	島　　義博	芹口　臣也	沓掛　　孝	沓掛　　孝
建設技官	竹下　卓宏	神崎　博章	桜井　俊郎	島田　隆一	田中　博明
工務課長	肥後橋譲治	久原　義宣	渕　　幸一	河野　良行	河野　良行
工務第一係長	笹山　勝之	田中　秀明	逆瀬川方久	梶原　俊之	梶原　俊之
工務第三係長	小島　一郎	逆瀬川方久	田口　　仁	斎藤　敬嗣	斎藤　敬嗣

福岡県教育委員会

（平成９年度まで教育庁指導第二部文化課　平成10年度から教育庁総務部文化財保護課）

総括	平成２年度	平成５年度	平成６年度	平成９年度	平成10年度
教育長	御手洗　康	御手洗　康	光安　常喜	光安　常喜	光安　常喜
教育次長	濱地　甫伯	光安　常喜	松枝　　功	松枝　　功	藤吉純一郎
	亀谷　陽三				
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	丸林　茂夫	若竹　幸二	
総務部長					富永　　勲
文化課長	六本木聖久	森山　良一	松尾　正俊	石松　好雄	
文化財保護課長					石松　好雄
参事兼文化財保護室長		柳田　康雄	柳田　康雄	柳田　康雄	
参事					柳田　康雄

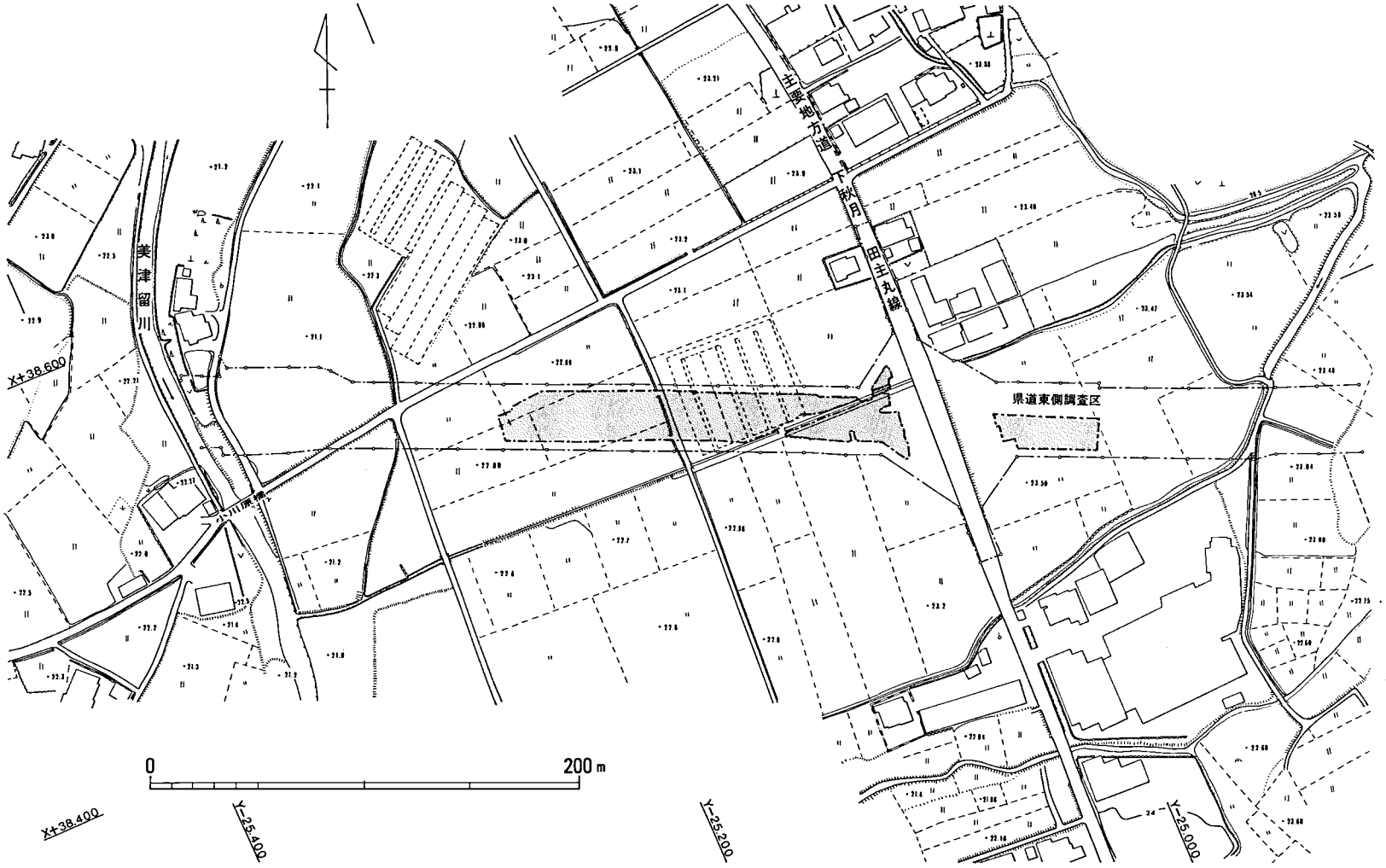
課長補佐	安野　義勝	国武　康友	清水　圭輔	城戸　秀明	
課長補佐兼管理係長					角　伸幸
参事兼課長技術補佐					井上　裕弘
課長技術補佐	石松　好雄			井上　裕弘	
参事補佐		柳田　康雄	井上　裕弘	橋口　達也	橋口　達也
	井上　裕弘	井上　裕弘	橋口　達也	木下　修	佐々木隆彦
	副島　邦弘	副島　邦弘	馬田　稔弘	中間　研志	中間　研志
	木下　修		池辺　元明	新原　正典	
技術主査					伊崎　俊秋
庶務					
管理係長	池原　脩二	毛屋　信	杉光　誠	黒田　一治	
事務主査		東　勇治	安丸　重喜	鶴我　哲夫	鶴我　哲夫
主任主事	沢田　俊夫	沢田　俊夫	久保　正志	田中　利幸	田中　利幸
調査	**平成２年度**	**平成５年度**	**平成６年度**	**平成９年度**	**平成10年度**
				（平成９・10年度は報告）	
参事兼課長技術補佐					井上　裕弘
課長技術補佐				井上　裕弘	
福岡県立美術館普及課長					木下　修
参事補佐	井上　裕弘			木下　修	
	木下　修				
技術主査				小田　和利	小田　和利
主任技師	小田　和利		水ノ江和同	水ノ江和同	水ノ江和同
技師		水ノ江和同			
文化財専門員	日高　正幸				

第１図　鷹取五反田遺跡の現況（1998．８撮影　北西から）

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積㎡	発掘面積㎡	調査年度	報告書年度
1	浮　羽	9.日永	日　永	19,000	16,800	S61	H4・5
2	吉　井	7.塚堂	塚　堂	18,479	12,768	S54-57・9-61	S57-59・62
3	吉　井	7.能楽	—	試掘のみ		H6	—
4	吉　井	6・7.三牟田	堂　畑	8,400		H8～	
5	吉　井	6.新治	仁衛右門畑Ⅱ	8,400	8,400	H7～9	H11・12
6	吉　井	6.稲崎A	稲　崎	6,300	1,600	S62	H9
7	吉　井	6.稲崎B	稲　崎	4,900	520	S62	H9
8	吉　井	6.清宗	—	2,400	試掘のみ	H元	—
9	吉　井	5・6.上菅A	堺町・大碇	21,000	18,800	H元・2	H5
	吉　井	5・6.上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10
10	田主丸	5.船越A	船越高原	25,000		H8～	
11	田主丸	5.船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6～9	H10
12	田主丸	5.殖木		19,200			
13	田主丸	5.常磐		15,000			
14	田主丸	5.野田A		14,800			
15	田主丸	5.野田B		10,800			
16	田主丸	5.野田C		13,500			
17	浮　羽	7.	—	2,400	試掘のみ	H6	—

表1　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点一覧

第2図　国道210号浮羽バイパス用地内の各調査地点（1/75,000）



第３図　鷹取五反田遺跡周辺地形図（1/3,000）

2．遺跡の位置と歴史的環境

［遺跡の位置］

鷹取五反田遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田328・343・349番地他および字中ノ坪349番地に所在する。本遺跡の所在する吉井町は、日本屈指の穀倉地帯である筑後平野の南東部に位置する。遺跡の南側には標高700～800mの耳納（水縄）山脈が立ちはだかり、八女郡とは一線を画している。耳納山脈の北麓には筑紫次郎の異名をとる筑後川によって形成された広大な扇状平野が広がっている。江戸時代には天領日田に貫ける街道筋として、また商人の町として栄え、現在でも国道210号線沿いには白壁づくりの町並みが残っており、平成９年２月に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、往時の繁栄を今に伝えている。

遺跡は筑後川と耳納山脈のほぼ中間に位置し、北側の美津留川と南側の巨瀬川に挟まれた標高22m程の扇状低地部に立地する。また、調査区の西端部には河原石が露出しており、氾濫源の様相を呈する。

［歴史的環境］

ここでは、近年調査された浮羽郡内の古墳～奈良時代の遺跡を中心に述べることとする。

まず、吉井町内の集落遺跡からみていくと、浮羽バイパス建設に伴い調査された塚堂遺跡がある。塚堂遺跡は標高32m程の微高地に立地し、古墳時代前期を主体とする集落遺跡である。当該竪穴住居跡は５世紀前半代において既にカマドを付設しており、初期カマドの良好な資料を提供するに至った。鷹取五反田遺跡の１km東方に位置する生葉地区遺跡群では、ほ場整備に伴い古墳時代後期（６世紀後半）に属する集落跡が調査された。また、浮羽バイパス建設に伴い調査された大碇遺跡は鷹取五反田遺跡の約500m東方に位置し、標高26m程の微高地に立地する。７世紀後半代を主体とする集落跡が調査されている。同じく仁衛門畑遺跡では古墳時代前期（４世紀後半～５世紀前半）と古墳時代終末～奈良時代にかけての集落跡が調査された。７世紀後半代の遺構としては、２×６間の掘立柱建物跡があり、８世紀代の83号竪穴住居跡からは円面硯が出土している。

次に浮羽町に目を向けると、農業水利事業に伴い調査された沖出遺跡がある。本遺跡は筑後川左岸の標高46.5mの沖積平地に立地し、塚堂遺跡同様古墳時代前期を主体とする集落遺跡が調査された。同じく農業水利事業に伴い調査された大口遺跡は沖出遺跡の約800m西方に位置し、古墳時代後期（６世紀中～後半）の集落跡が調査された。田島北遺跡・田島南遺跡はほ場整備に伴ない調査され、両遺跡では縄文～歴史時代に至る遺構が検出された。微高地の北側に位置する北淀遺跡では、弥生時代から歴史時代に至る集落跡が調査されている。浮羽バイパス建設に伴い調査された日永遺跡は標高52m程の扇状平地に立地し、弥生時代後期～奈良時代に至る集落跡が調査された。また、筑後川対岸の朝倉郡には百済救援のため斉明七（661）年に

築造された朝倉橘広庭宮があり、田中正日子氏は杷木町志波地区から吉井町橘田を含めた広い地域を比定されている。筑後平野部内において、突如として7世紀中〜後半代の集落が急増するのは朝倉橘広庭宮築造に起因するものと捉えられる。

浮羽郡の著名な墳墓としては、月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳・重定古墳・法正寺古墳・矢次郎丸古墳などの前方後円墳および耳納山麓に立地する珍塚古墳・鳥船塚古墳・原古墳・古畑古墳〜屋形古墳群の装飾古墳がある。以下、主要な古墳を紹介してゆこう。

月岡古墳・日岡古墳・塚堂古墳—若宮古墳群は筑後川中流域左岸の沖積平野に築造されている。月岡古墳は墳丘全長約95mの前方後円墳で、1985年に実施された周溝の確認調査により三重の周溝が巡っているものと推測されている。後円部の埋葬施設は長持形石棺をもつ竪穴式石室と想定されているが、石室は破壊され現状を全く留めていない。国の重要文化財として一括して指定された副葬品には、金銅装眉庇付冑を始めとする豊富な武具・馬具・農工具の他に鏡類があり、築造時期は5世紀中頃とされている。また、的臣の奥津城としての性格と畿内政権との関連性も指摘されている。

塚堂古墳は墳丘全長約91mの前方後円墳で、二重の周溝を巡らせている。埋葬施設は前方部と後円部にあり、初期横穴式石室を主体部としている。後円部の石室からは桂甲・金銅装馬具・胡録金具・環鈴・鉄製武器・鏡・玉類などが出土している。前方部の石室からは衝角付冑・短甲・馬具・鉄製武器・鏡・玉類などが出土しており、5世紀後半の築造とされている。国指定史跡の日岡古墳は月岡古墳の約200m東方に位置し、月岡古墳同様、後円部を東側に向けている。埋葬主体部は横穴式石室で、壁面には同心円・蕨手・盾・三角文などの文様が描かれている。築造年代は石室形態からみて6世紀中頃とされている。

前述した生葉地区遺跡群では、三重に巡る周溝を有する生葉1号墳を調査している。埋葬主体部は削平されて不明であるが、周溝からは二重口縁壺が出土しており、4世紀後半頃の築造と推定されている。墳形は18×22mの隅丸方形を呈し、後出して築造される月岡古墳・塚堂古墳との歴史的背景を考える上で貴重な古墳と言えよう。

また、吉井町大字富永の山麓部には、屋形古墳群として一括して国指定史跡となっている珍塚古墳・原古墳・鳥船塚古墳・古畑古墳らの装飾古墳が集中し、石室壁面には船・鳥・人物・靫・同心円・三角文などが描かれている。

月岡古墳から東に約3km程行った浮羽町大字朝田には、法正寺古墳・矢次郎丸古墳・重定古墳の前方後円墳と西隈上古墳・塚花塚古墳・楠名古墳の円墳で構成される朝田古墳群が立地する。塚花塚古墳・重定古墳は装飾古墳で、楠名古墳とともに国指定史跡になっている。

吉井町に西隣する田主丸町においては、これまで前方後円墳は確認されていなかった。しかし、墳径約50mの円墳とみられていた大塚3号墳は、前方部が確認されたことにより新たな首長層の存在が浮かび上がってきた（全長約100mの前方後円墳）。また、耳納山北麓には東から千代久古墳群・森部古墳群・大塚古墳群・平原古墳群・益生田古墳群などの後期群集墳がひし

めき合っており、今後は、浮羽町から久留米東部にかけての首長墓系列の再編作業が必要となってこよう。

最後に、浮羽郡内ではほ場整備などに伴い多数の遺跡が調査されたが、調査報告書が未完の遺跡が大半を占めており、報告書の速やかな刊行が切望されるところである。

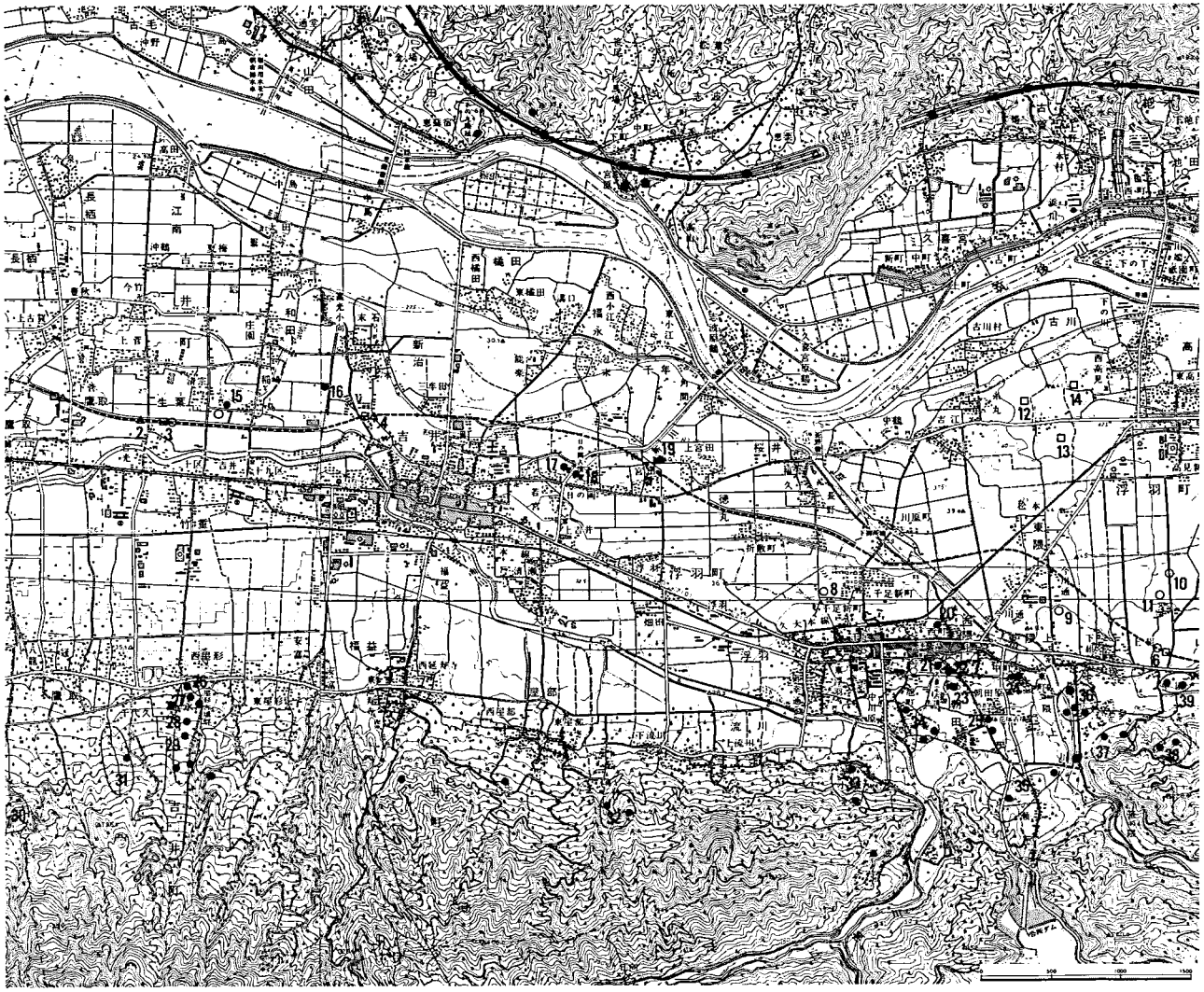
［参考・引用文献］

『塚堂遺跡Ⅰ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第1集）1983 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅱ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第2集）1984 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅲ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第3集）1984 福岡県教育委員会
『塚堂遺跡Ⅳ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第4集）1985 福岡県教育委員会
『日永遺跡Ⅰ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第6集）1993 福岡県教育委員会
『日永遺跡Ⅱ』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第7集）1994 福岡県教育委員会
『堺町・大碇遺跡』（浮羽バイパス関係文化財調査報告第8集）1994 福岡県教育委員会
『西隈上古墳・楠名古墳』（浮羽町文化財調査報告書第1集）1986 浮羽町教育委員会
『楠名古墳』（浮羽町文化財調査報告書第2集）1987 浮羽町教育委員会
『沖出遺跡Ⅰ』（浮羽町文化財調査報告書第3集）1987 浮羽町教育委員会
『田島北遺跡』（浮羽町文化財調査報告書第6集）1991 浮羽町教育委員会
『原古墳』（吉井町文化財調査報告書第2集）1984 吉井町教育委員会
『若宮古墳群Ⅰ』（吉井町文化財調査報告書第4集）1989 吉井町教育委員会
『生葉地区遺跡Ⅰ』（吉井町文化財調査報告書第5集）1990 吉井町教育委員会
『若宮古墳群Ⅱ』（吉井町文化財調査報告書第6集）1990 吉井町教育委員会
『吉井町遺跡等詳細分布調査報告書』（吉井町文化財調査報告書第7集）1995 吉井町教育委員会
田中正日子 1987「筑後古代史の展開（中）」『田主丸郷土史研究』創刊号
田中正日子 1996「朝倉橘広庭宮とその時代」『甘木歴史資料館だより』№24
宮田浩之 1998「地域別・近年の研究動向～筑後」『九前研通信』№2

1 鷹取五反田遺跡
2 堺町遺跡
3 大碇遺跡
4 仁衛門畑遺跡
5 塚堂遺跡
6 日永遺跡
7 生葉地区遺跡群
8 雷遺跡
9 大口遺跡
10 沖出遺跡Ⅰ区
11 沖出遺跡Ⅱ区
12 田島北遺跡
13 田島南遺跡
14 北淀遺跡
15 生葉1号墳
16 女塚古墳
17 月岡古墳
18 日岡古墳
19 塚堂古墳
20 西隈上古墳
21 楠名古墳
22 重定古墳
23 法正寺古墳
24 矢次郎丸古墳
25 塚花塚古墳
26 珍塚古墳
27 原古墳
28 鳥船塚古墳
29 古畑古墳
30 森部古墳群
31 千代久古墳群
32 手白古墳群
33 小坂古墳群
34 菰ノ上古墳群
35 一ノ瀬古墳群
36 山北古墳群
37 谷ノ口古墳群
38 清水古墳群
39 峠古墳群

凡　例

時　代	集　落	墓　地
縄文時代	◇	■
弥生時代	□	●
古墳時代	○	▲
奈良・平安時代	△	



第4図　鷹取五反田遺跡周辺主要遺跡分布図（1/5,000）

Ⅱ　発掘調査の記録　―古墳時代以降編―

1．遺跡の概要

遺跡は福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取字五反田328・343・349番地他、および字中ノ坪に所在し、西流する筑後川の支流である美津留川と、南側の美津留川に注ぐ小さな流れに挟まれ、西、南側に若干傾斜する標高23.5m～22.8mの微高地上に立地する。調査地点は県道下秋月・田主丸線をまたいで西側300m、東側50mの範囲、幅30mで全面調査を実施した。検出された遺構は主に弥生時代から古墳時代にかけての集落および墓地関係のもので、県道の西側に集中し東側にはほとんど存在しない。また、調査地点西端と美津留川の間約140mは試掘から河原石等が多量にみられることから氾濫原であり、調査区西端で検出された谷状遺構は、この氾濫原に続くものであろう。

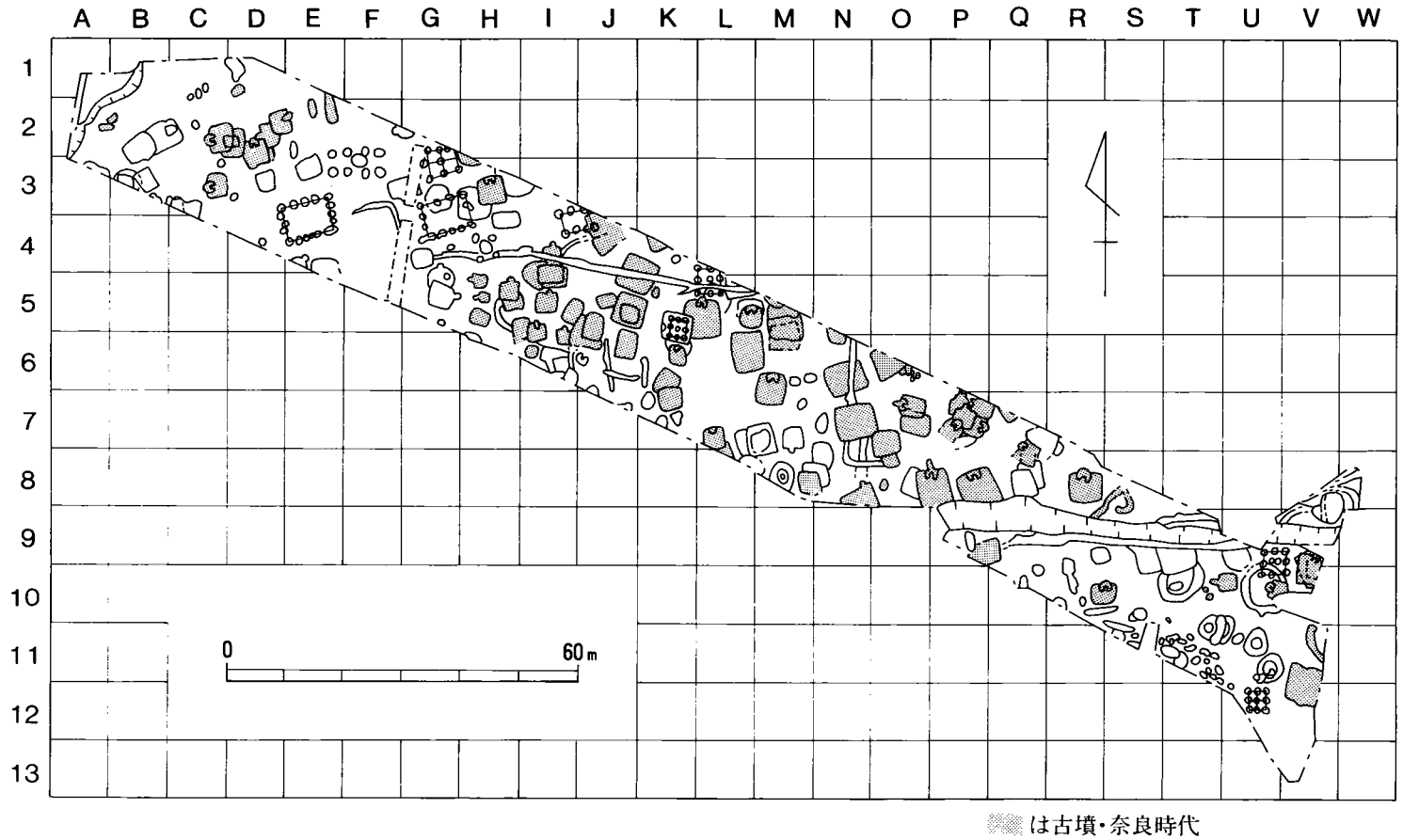
調査は国土座標軸に合わせて10m間隔のグリッドを設定し、東西方向にアルファベットでA～W、南北方向に1～13の番号を付した（第5図）。調査面積は7,420㎡。

古墳時代中期から奈良時代の遺構は竪穴住居跡78軒、掘立柱建物跡5棟以上、土坑1基、溝状遺構16条、土壙墓7基、中世では土壙墓1基が検出された。また、弥生時代から古墳時代にかけての多くの柱穴が存在する。遺構は調査区全域にわたるが、調査区の東端部周辺では古墳時代以降の遺構の密度が低い。

2．竪穴住居跡

古墳時代以降の竪穴住居跡については、調査区西端部（C-D2-3区）や中央部（H-Q3-9区）に集中しており、合計で76軒検出された。年代別の内訳は5世紀代前葉～中葉7軒、6世紀後半代52軒、8世紀中葉～後葉17軒からなる。平面プランは正方形もしくはそれに近い長方形を呈する。一辺が5m前後のやや規模の大きい住居跡はおよそ5世紀～6世紀代に属し、4本の主柱穴は確実に検出でき、カマドを中心とした軸線はいずれもほぼ真北を向く。これに対し、8世紀代の住居跡は一辺が3～4m程度で主柱穴が明確に確認できることが少なく、カマドも竪穴部の外へ突出して、軸線の方位も西から北東の範囲でバラツキが著しい。切り合い関係による新旧関係は以下のようになる（古→新）。

20号→6号→5号　8号→7号→6号　8号→9号　37号→36号　39号→38号
50A→48・49・50B号　54号→55号　59号→57号　60号→52号　86号→85号
109号→74号　111・112号→110号　60号→52号　73号→71・72号→70号→69号
97号→89・98号→88号　121号→120号　119号→117号→116号



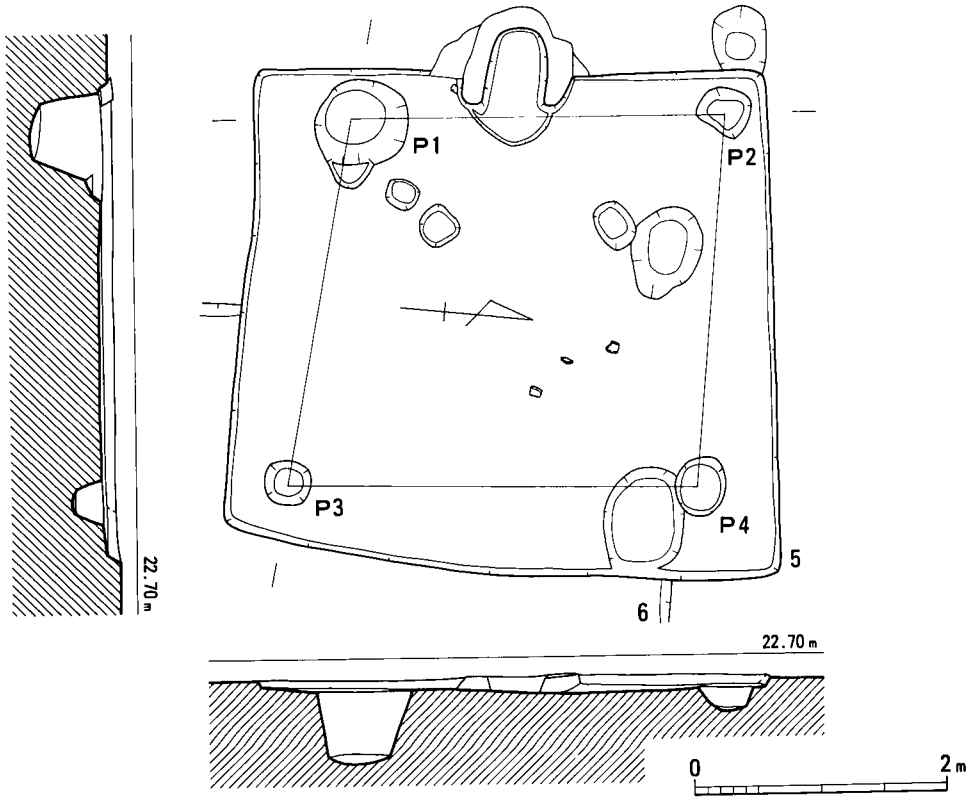
第5図　鷹取五反田遺跡遺構配置図（1/1,200）

5号竪穴住居跡（図版3　第6図）

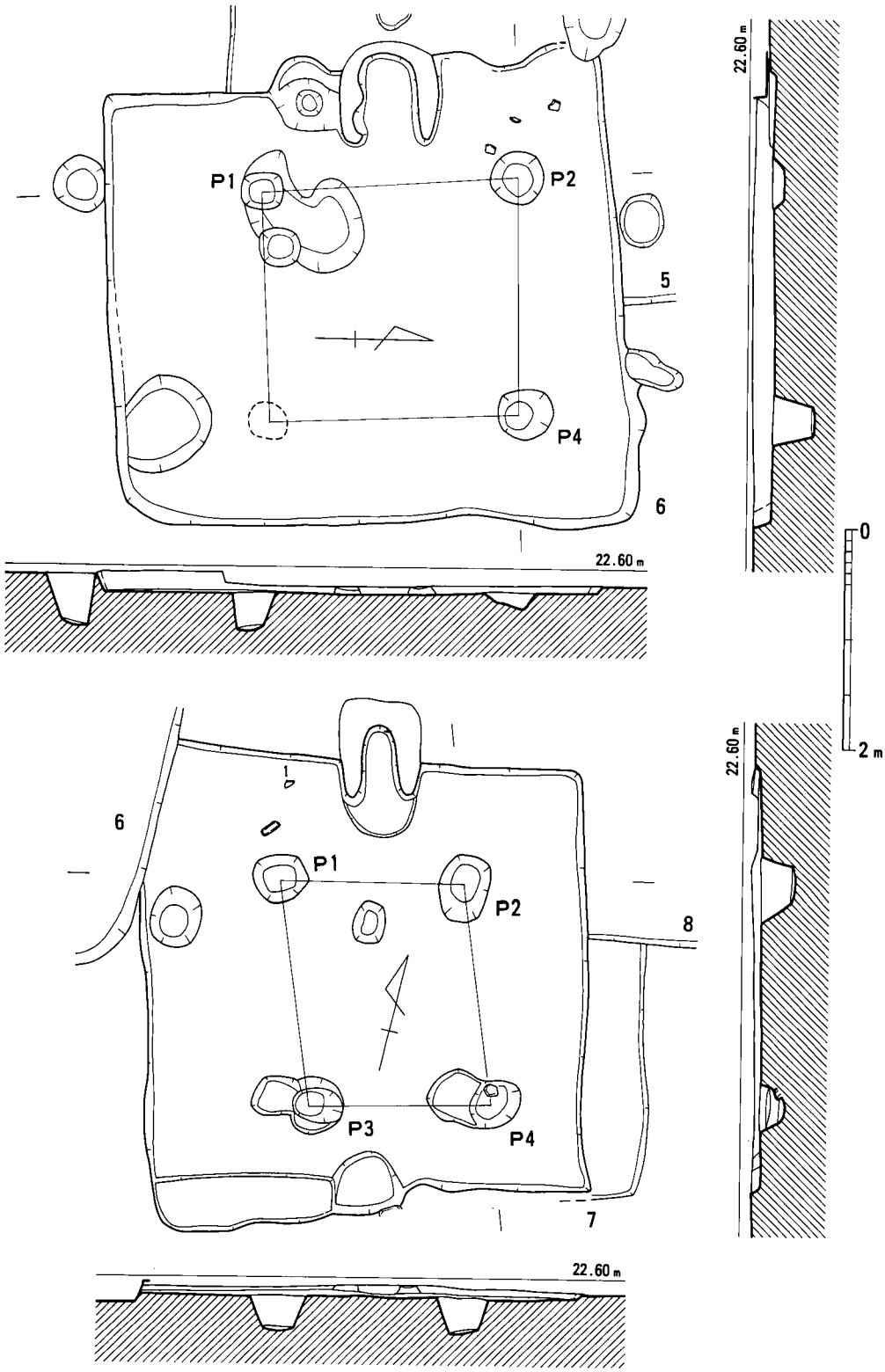
発掘区西端C2区にあって6号竪穴住居跡を切った状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で、東壁に対して西壁が若干狭い。カマドは西壁の中央よりやや南に付設されていて、柱穴は四隅のP1～P4の4本である。礫層中に掘り込まれた住居のため、床面は貼り床して叩き締められていた。床面からは少量の土師器・須恵器片が出土しただけである。住居の規模は、東西4.0m、南北4.2m、壁高12cmを測り、全体に著しく削平されている。

カマド（図版4　第9図）燃焼部が竪穴部外に突出するタイプで、煙道は削平されているためか不明である。燃焼部の袖は暗黄褐色粘土を貼り付けて構築しており、明確な火床は確認されていない。燃焼部内面には炭・焼土を含む黒褐色土が堆積していた。

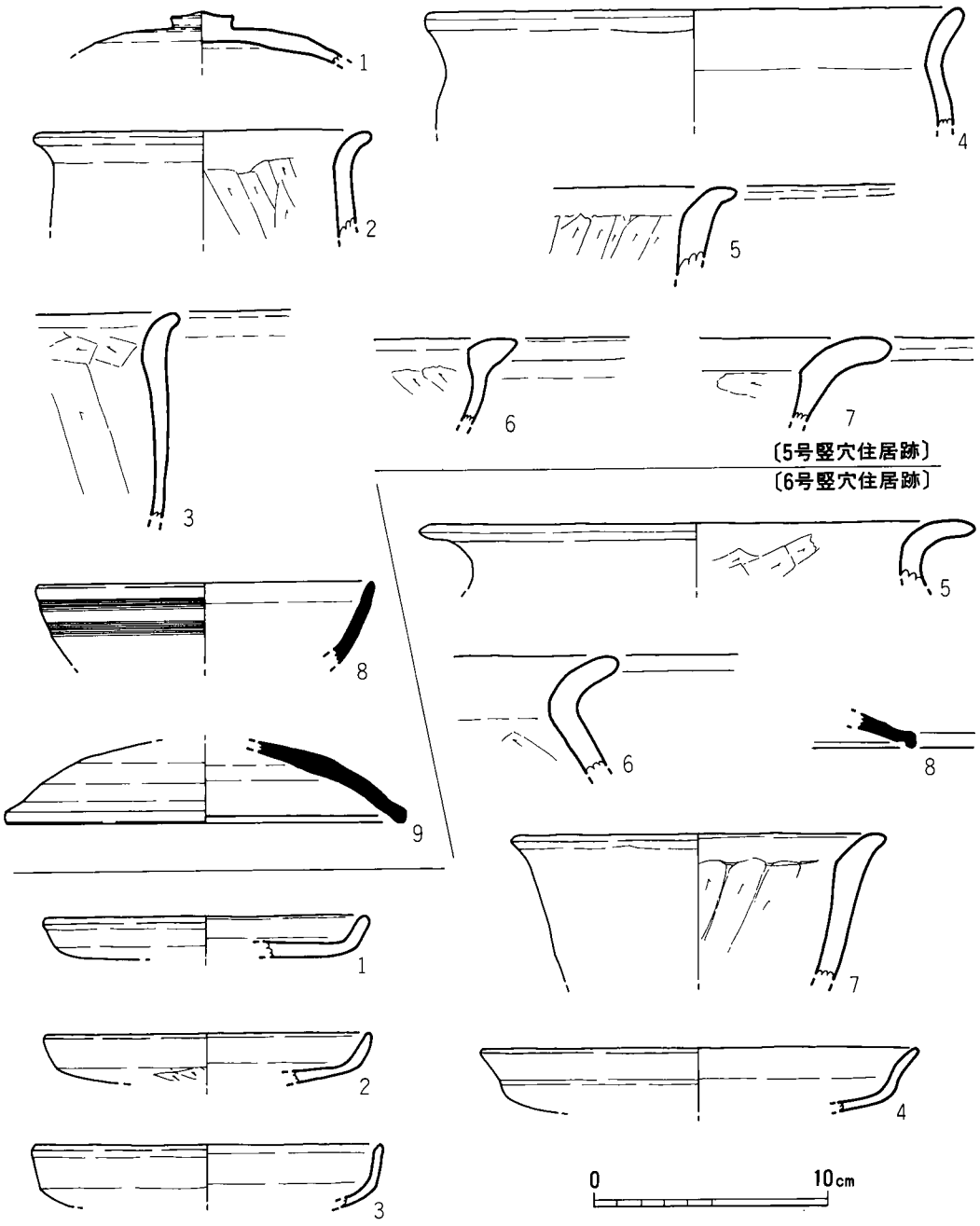
土器（第8図1～9）1～7は土師器である。1は扁平な宝珠形のツマミを有す坏蓋で、内外とも風化しているため、調整手法は不明である。色調は白黄褐色を呈し、焼成も良い。2～5は甕で、大小がある。2は緩やかに外反する小型の甕で、復原口径14.4cmを測る。胴部外面は器面風化のため調整手法は不明であるが、内面ヘラケズリ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し、焼成良好で、口縁部外面は二次加熱により赤変している。3・



第6図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）



第7図　6・7号竪穴住居跡実測図（1/60）



第8図　5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

4は大型品で、口縁部内外ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面はいずれも風化のため不明である。4は復原口径20cmを測り、3の内外には煤の付着が見られる。色調は3が黒灰色、4が淡橙褐色を呈し、焼成良好である。5は「く」字状口縁甕の口頸部付近の破片資料で、復原口径23cmを測り、内外ともナデて仕上げている。色調は黄橙色を呈し、焼成も良い。6・7は口縁部が大きく開く浅鉢で、口縁部内面に屈折稜を残す。胴部内面ヘラケズリし、他は内外ともヨコナデで仕上げている。6の外面は二次加熱のため赤変しているとともに、煤の付着が見られる。

8・9は須恵器。8は高坏坏部の破片で、復原口径14.4cmを測る。体部内外回転ナデ仕上げ、外面はさらにカキ目を施している。色調は白青灰色を呈す。器形などからして古い時期のもので、混入品と思われる。9はツマミが欠落した坏蓋で、口縁部内外回転ナデ、天井部内外をナデて仕上げている。復原口径17cmを測る。色調は白灰色を呈し、焼成も良好である。

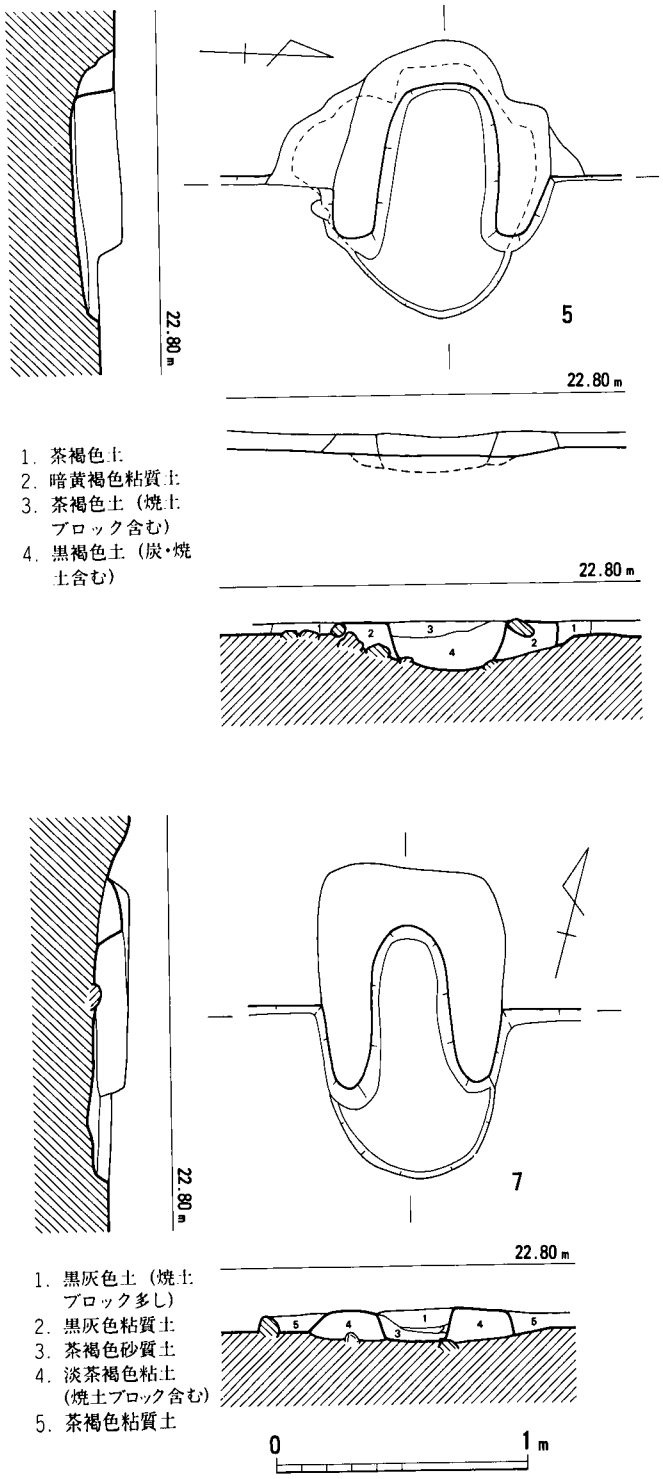
6号竪穴住居跡（図版3　第7図）

調査区西端部のC-D2区に位置し、5号竪穴住居跡に切られた状態で検出された長方形プランの竪穴住居跡で、カマドは西壁の中央よりやや北に付設されている。柱穴は南東隅が不明であるが、P1～P3の配置から4本柱と思われ、床面は礫層中に掘り込んだ住居であるため、黒褐色土を貼り床して叩き締められていた。床面からは少量の土師器と須恵器片と、3×5cm大の鉄滓が1点出土している。住居の規模は、東西4.10m、南北4.66m、壁高20cmを測る。

カマド　燃焼部が竪穴部外にわずかに張り出すタイプで、煙道は削平されているためか確認されなかった。燃焼部の袖は、5号竪穴住居跡と同様に暗黄褐色粘土を貼り付けて構築している。燃焼部内面には炭・焼土を含む黒褐色土が堆積しており、使用期間が短いのか火床は不明確。

土器（第8図1～8）1～7は土師器である。1～4は坏の資料で、1～3は復原口径14～15cm、復原器高1.8～2.7cmの小型品、4は復原口径18.6cm、復原器高2.8cmの大型品である。調整手法は器面の風化が著しいが、残りの良い1は底部外面ヘラケズリ、内底部ナデ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は1・4が灰黄褐色、2・3が淡黄褐色を呈し、焼成良好である。5～7は甕の破片資料で、5・6は口縁部が「く」字状に強く外反するタイプ、7は緩やかに外反する小型の甕である。調整手法は胴部内面ヘラケズリ、外面は器面風化のため不明なものが多いが、7はナデ、口縁部内外はいずれもヨコナデで仕上げている。復原口径は5が23.6cm、7が16.0cmを測る。色調は5が橙褐色、7が茶橙褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。

8の須恵器は坏蓋の口縁部付近の小破片で、口縁端部のつまみ出しは不明瞭ながらも三角形状を呈しており、内外とも回転ナデで仕上げている。



第9図　5・7号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

7号竪穴住居跡

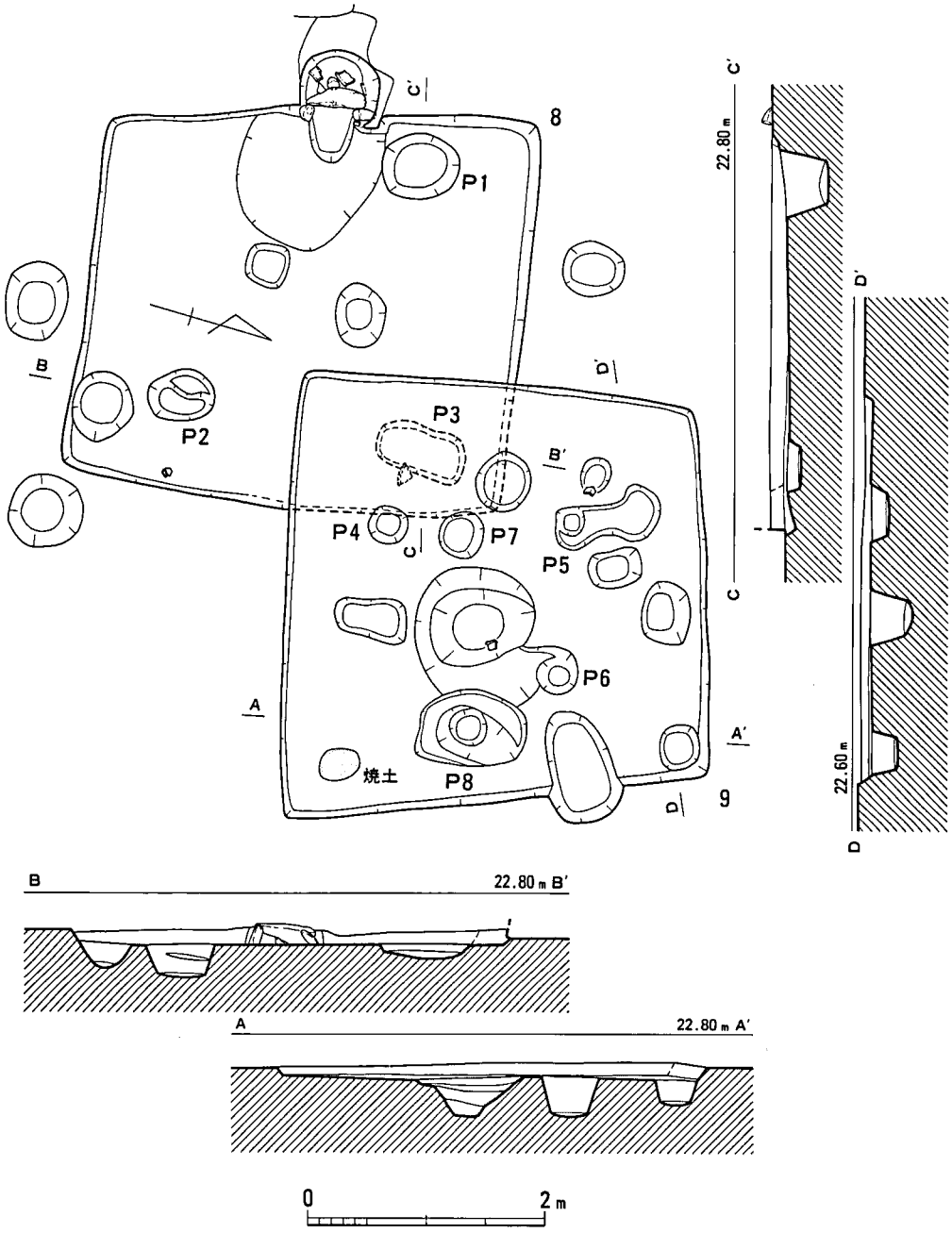
（図版5　第7図）

調査区西端部のD2－3区に位置し、6号竪穴住居跡に切られ、8号竪穴住居跡を切った状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で、南西隅に狭いがベット状の遺構が付設されている。カマドは北壁のほぼ中央にあり、柱穴は四隅のP1～P4の4本である。他の竪穴住居跡と同様に礫層中に掘り込んでいるため、床面は貼り床している。住居の規模は、東西4.05m、南北3.90m、壁高6㎝を測る。遺物としては、土師器片が若干出土しただけである。

カマド（図版7　第9図）

燃焼部が大きく突出するタイプで、煙道は削平のためか不明である。燃焼部の袖は茶褐色粘土を貼り付けて構築しており、内面には炭・焼土ブロックを含む黒灰色土や茶褐色砂質土が堆積し、明確な火床は確認できない。

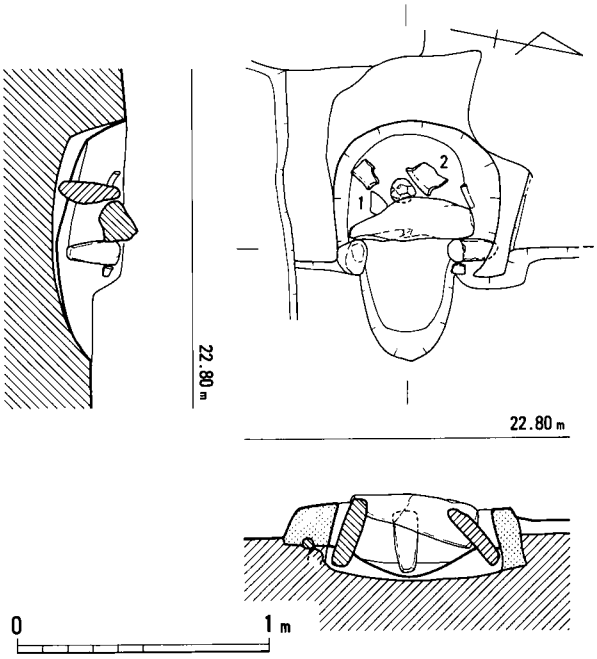
土器（第12図1）緩やかに外反する土師器の甕で、復原口径26㎝を測る。調整は胴部外面ハケ、内面粗いヘラケズリ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。



第10図　8・9号竪穴住居跡実測図（1/60）

8号竪穴住居跡(図版6 第10図)

調査区西端部のD2－3区に位置し、古墳時代の7号竪穴住居跡と9号竪穴住居跡に切られた状態で検出された長方形プランの竪穴住居跡で、北壁に対して南壁が若干狭い。カマドは長辺の西壁の中央よりやや北に付設されていて、柱穴は南西隅が不明であるが、P1～P3の配置などからすれば4本柱かもしれない。床面は貼り床で固く叩き締められていた。カマド内から土師器甕破片、床面からは少量の土師器片が出土しただけである。住居の規模は、東西3.4m、南北3.7m、壁高14cmを測る。



第11図 8号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

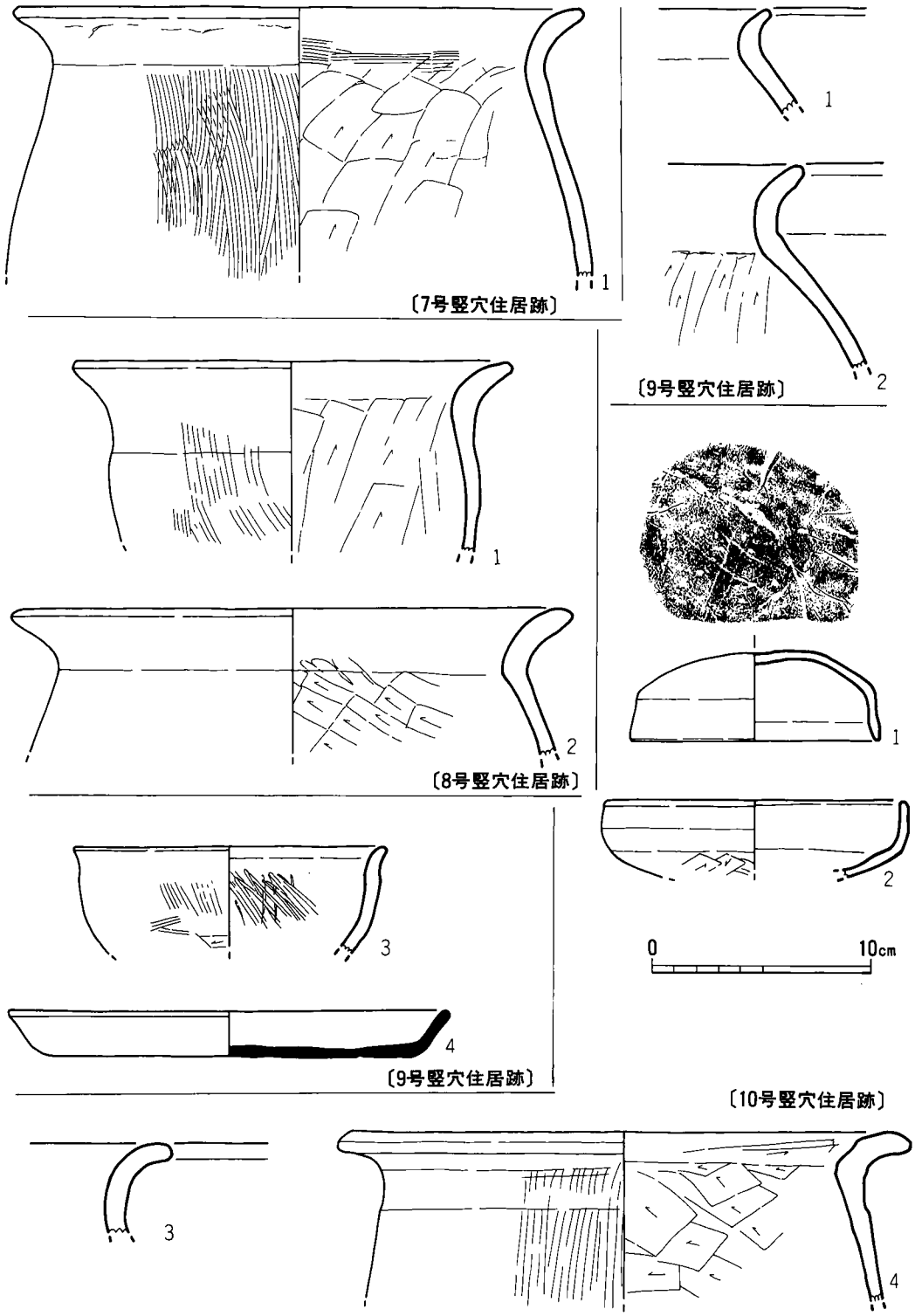
カマド(図版6 第11図)燃焼部が大きく突出するタイプで、煙道は他と同様に削平のためか不明である。焚口部両側には長楕円形の河原石を立てて、それに近接して花崗岩の横長の石を架構している。燃焼部中央からは支脚石が立つた状態で検出された。

土器(第12図1・2)いずれも土師器の甕の破片資料で、1は口縁部が緩やかに外反するタイプ、2は強く「く」字状に外反するタイプである。調整手法は1が胴部外面粗いハケ、2が器面風化のため不明、内面は両者ともヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は1が20cm、2が25.6cmを測る。色調は1が橙褐色、2が淡茶橙褐色を呈する。

9号竪穴住居跡(図版6 第10図)

調査区西端部のD-E2区に位置し、8号竪穴住居跡を切った状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で、南壁に対して北壁が狭い竪穴住居跡である。カマドは不明であるが、南東隅床面上には焼土が存在しており、隅に付設したカマドの火床痕跡かもしれない。主柱穴は南東隅が欠落しているので明確ではないが、P4～P6を採るとすれば4本柱、そうでなければP7・P8の2本柱の可能性もある。床面は他の住居と同様に礫層を切り込んでいるため、貼り床をして叩き締めている。住居の規模は、東西3.60m、南北3.55m、壁高10cmを測る。遺物としては土師器・須恵器片が若干出土しただけである。

土器(第12図1～4)1～3は土師器。3は小型の鉢で、復原口径14.2cmを測る。調整は体



第12図　7～10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

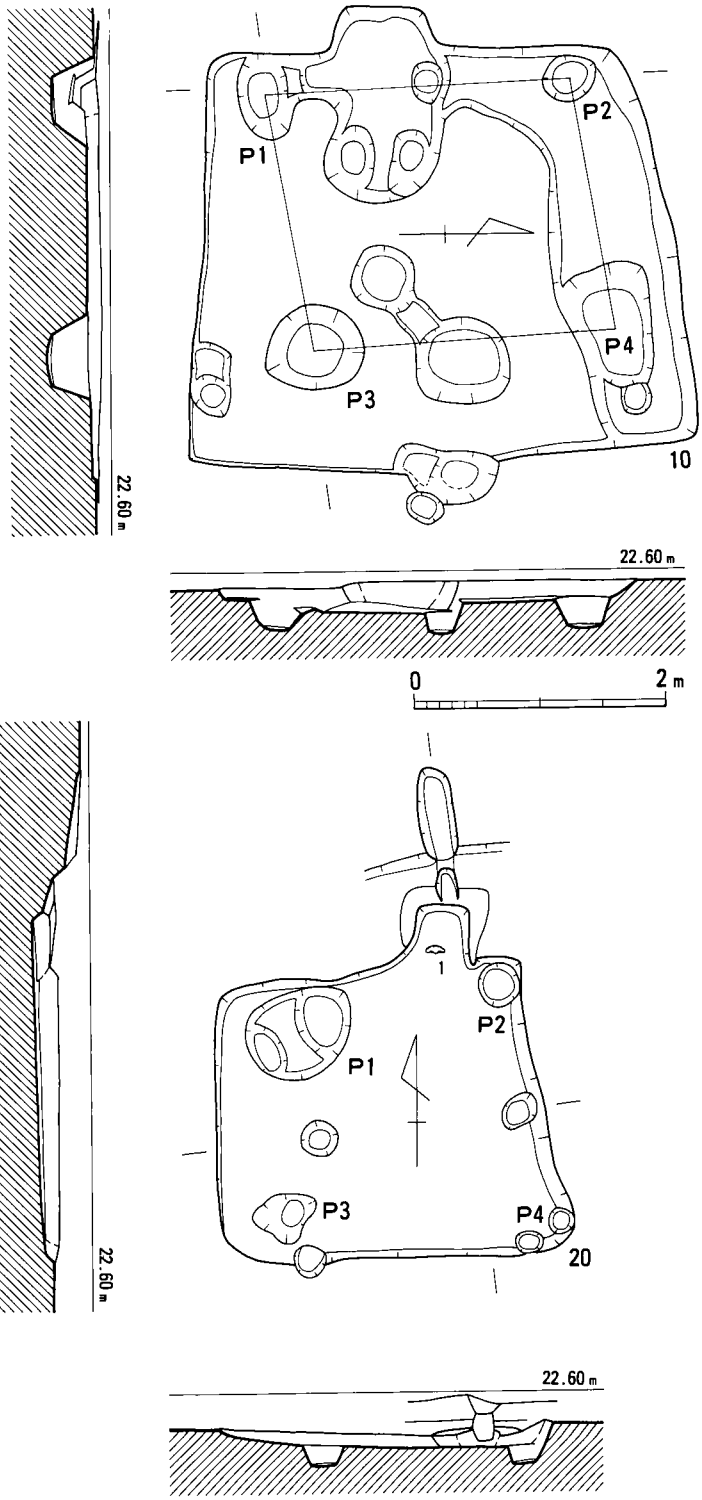
部外面ハケ、下半をヘラケズリ、内面ヘラミガキ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は灰黄褐色を呈し、内外には煤の付着がみられる。1・2は「く」字状に緩やかに外反する口縁部を有す甕の小破片である。調整手法は器面風化のため明確ではないが、2の胴部内面はヘラケズリしている。

4は須恵器の大皿で、復原口径20㎝、器高2.1㎝、底径16.8㎝を測る。調整手法は内底部ナデ、体部内外はヨコナデ、底部の切り離しはヘラ起こしのままである。色調は淡青灰色を呈し、焼成も良好である。

10号竪穴住居跡

（図版7　第13図）

調査区西端部のC3区に位置し、5号竪穴住居跡の南側から検出された長方形プランの竪穴住居跡で、東壁に対して西壁が少し狭く、カマドは西壁の中央よりやや南側に偏して構築されている。主柱穴は四隅のP1～P



第13図　10・20号竪穴住居跡実測図（1/60）

4の4本で、住居が礫層に切り込んでいるため、他と同様に床面は貼り床して叩き締めていた。遺物としては少量の土師器片が出土しただけである。住居の規模は東西3.3m、南北3.8m、壁高18cmを測る。

カマド　燃焼部の一部が竪穴部外に僅かに突出したタイプで、燃焼部の袖は消失しており、焚口部には立石を据え付けたと思われるピットが2個検出されている。

土器（第12図1～4）1～4はいずれも土師器である。1は体部外面に身受けの屈折稜を残す坏蓋で、復原口径11.6cm、器高4cmを測る。調整手法は口縁部内外ヨコナデ、天井部内面ナデ、外面は器面風化のため不明である。天井部外面には「井」字状のヘラ記号が記されている。色調は黄橙色を呈し、焼成も良好である。2は坏身の破片資料で、復原口径14cmを測る。底部外面静止ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外ヨコナデ仕上げである。3・4は「く」字状に緩やかに外反する甕の破片資料で、4は復原口径26cm測る。調整手法は3が風化のため不明であるが、4は胴部外面ハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデである。

20号竪穴住居跡（図版8　第13図）

調査区西端部のC-D2-3区に位置する5・6号竪穴住居跡の下位から検出された方形プランの小型の竪穴住居跡で、南壁に対して北壁が狭く、カマドは北壁の北東隅に偏して構築されている。主柱穴は隅のP1～P4の4本で、床面は貼り床して叩き締めている。遺物としてはカマド内や床面から少量の土師器・須恵器片が出土してる。住居の規模は、東西2.60m、南北2.35m、壁高20cmを測る。

カマド（図版8）燃焼部が竪穴部外に突出するタイプで、幸い煙道も長さ108cmにわたり残っていた。燃焼部の袖は暗黄褐色粘土を貼り付けて構築しており、他の住居と同様に明確な火床は確認されていない。燃焼部内面には炭・焼土を含む黒褐色土が堆積していた。

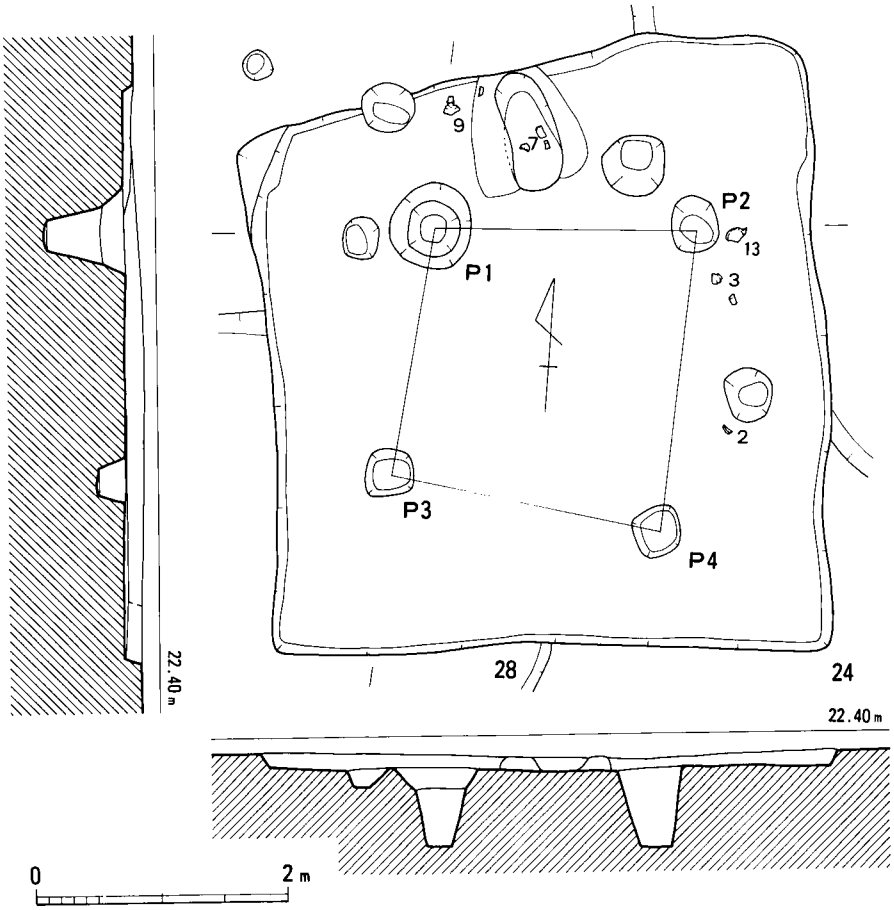
土器（第15図1・2）1は土師器坏の破片資料で、復原口径13.6cmを測る。調整は底部外面静止ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外ヨコナデ仕上げである。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

2の須恵器は低平な坏蓋の破片資料で、復原口径16cmを測る。色調は灰色で、焼成も良好。

24号竪穴住居跡（図版9　第14図）

調査区西側のH3区に位置し、23・29号竪穴住居跡を切った状態で検出された長方形プランの竪穴住居跡で、東壁に対して西壁が若干狭く、カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。主柱穴の配置は悪いがP1～P4の4本で、床面は貼り床している。床面やカマド内からは土師器坏身・壺・甕・高坏、須恵器坏身・坏蓋・椀など多数が出土している。住居の規模は、東西4.42m、南北4.70m、壁高15cmを測る。

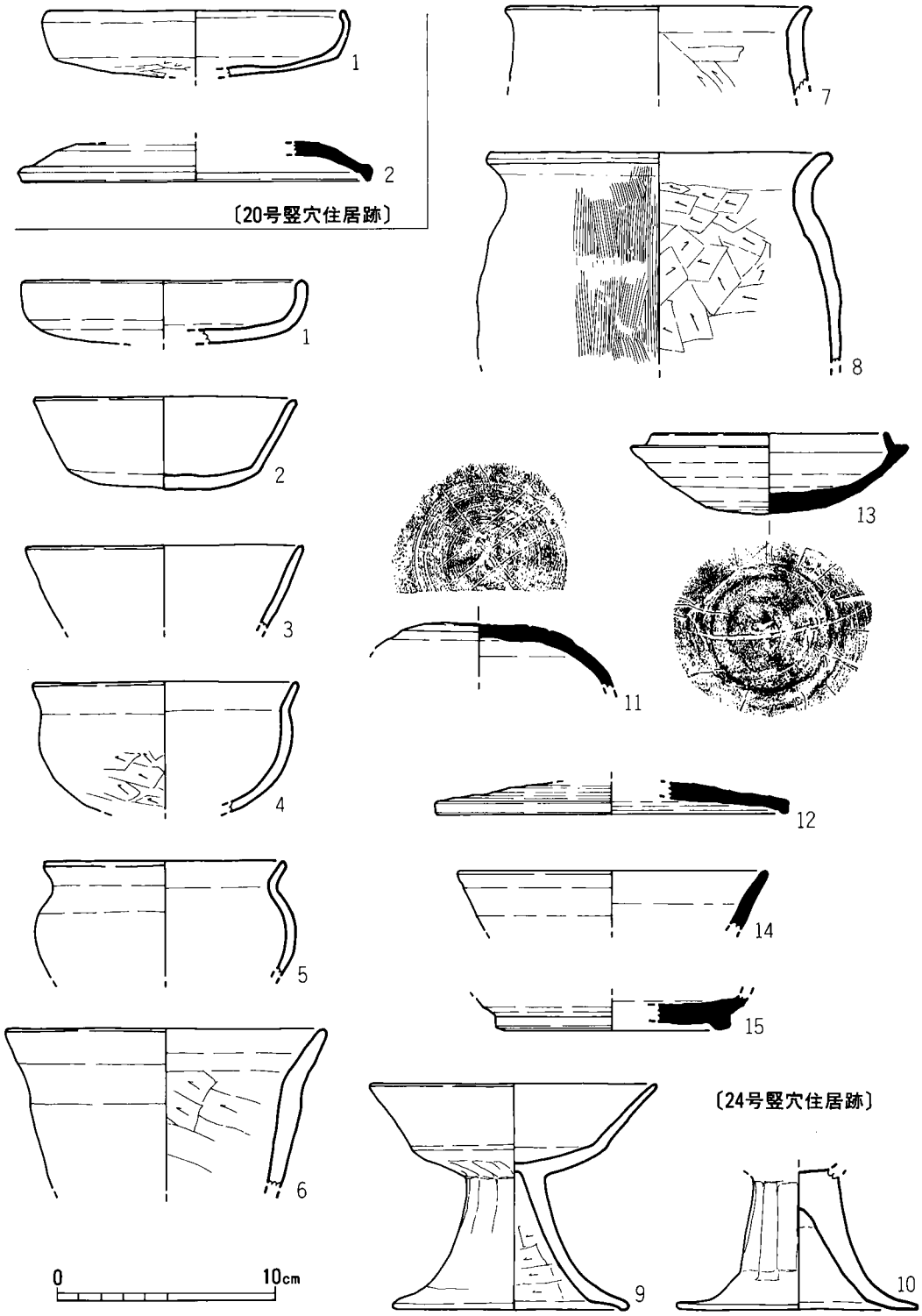
カマド（図版9）燃焼部が住居内にあるタイプで、燃焼部の袖は暗黄褐色粘土を貼り付けて



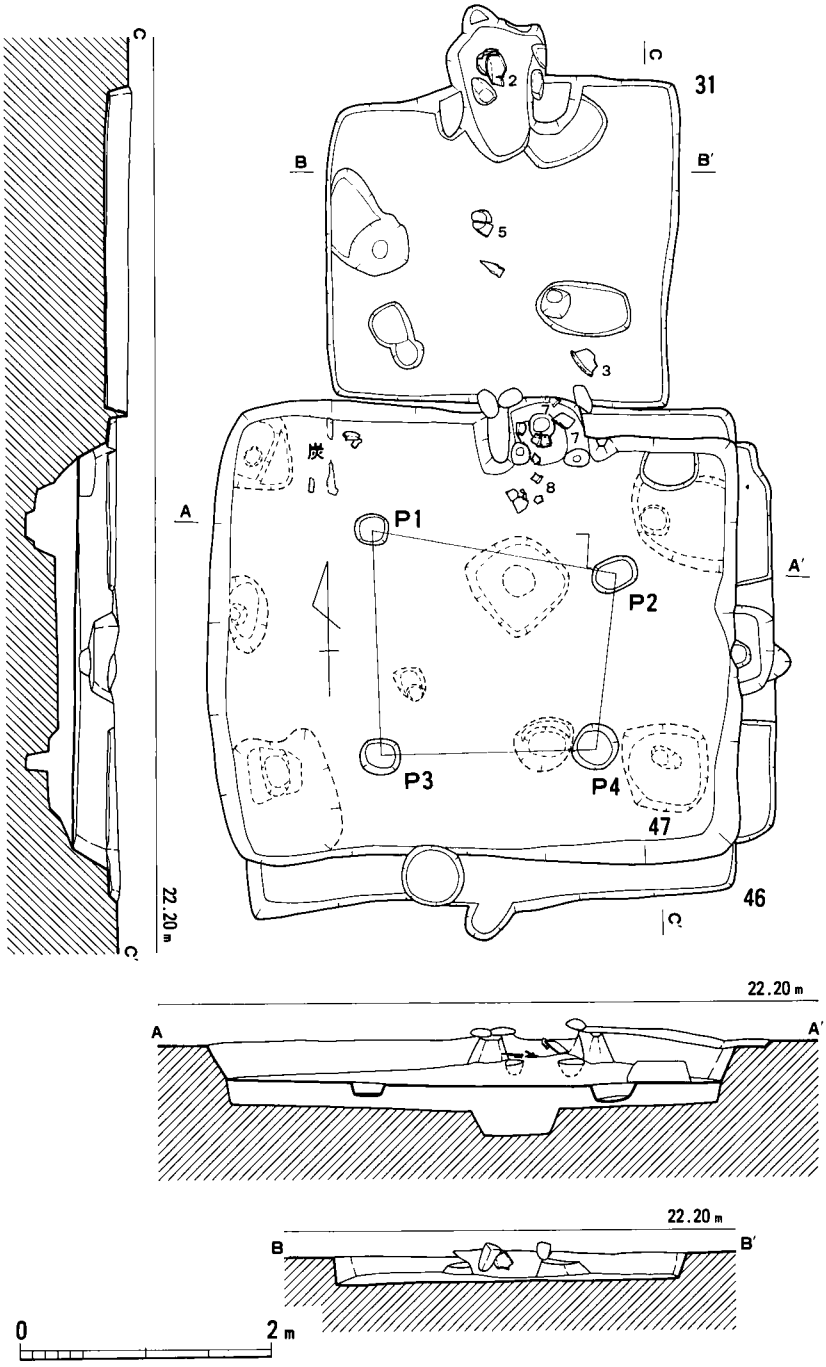
第14図　24号竪穴住居跡実測図（1/60）

構築している。燃焼部内面には炭・焼土を含む黒褐色土が堆積し、明確な火床は確認できない。

土器（第15図1～15）1～10は土師器。1は浅目の坏、2・3は深目の坏の破片資料である。復原口径は1が13cm、2が11.9cm、3が12.6cm、器高は2が4.2cmを測る。調整手法は1が外底部静止ヘラケズリのあとナデ、内面ナデ、口縁部内外ヨコナデ、2・3は器面風化のため不明である。4・5は鉢の破片資料で、復原口径は4が12cm、5が11cmを測る。調整手法は胴部外面4がヘラケズリ、5がヘラケズリののちナデ、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデである。色調は4が黄橙色、5が灰黄褐色を呈し、焼成も良好である。6は小型の甑で、復原口径は14.6cmを測る。胴部外面ヘラケズリのあとナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。7・8は緩やかに外反する「く」字状口縁の甕の破片資料で、復原口径は7が14cm、8が15.6cmを測る。胴部外面は8がハケ、内面は7・8ともヘラケズリ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。8の口縁部外面は二次加熱のため赤変している。9・10は高坏で、10はラッパ状に開く脚部の資料で、復原裾部径11cmを測る。9はほぼ完形に復原できる資料で、体部外面に緩やかな屈折稜を有す坏部にラッパ状に開く短い脚部が付く高坏である。調整手法は



第15図　20・24号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第16図　31・46・47号竪穴住居跡実測図（1/60）

坏部下半と脚部内外をヘラケズリののちナデ、坏部上半と内面はナデて仕上げている。色調は橙褐色を呈し、焼成も良好である。坏部径は13cm、復原裾部径10.7cm、器高10.2cmを測る。

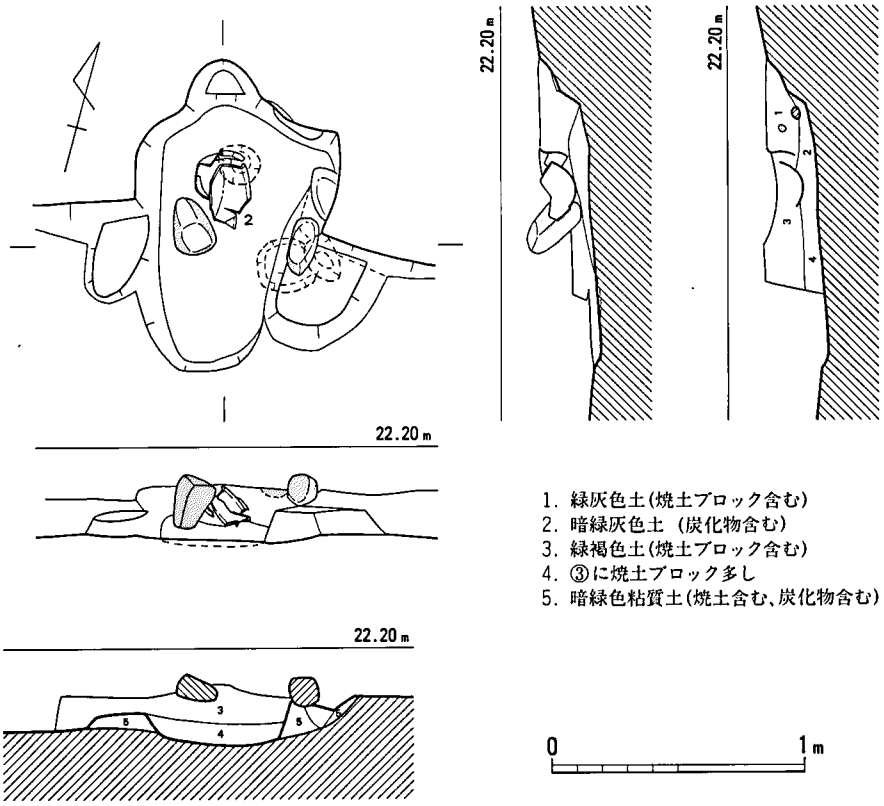
11～15は須恵器。11は坏蓋の天井部の破片資料で、天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、天井部内外回転ヨコナデで仕上げており、天井部外面にはヘラ記号が施されている。12は低平な坏蓋の破片資料で、復原口径16cmを測る。調整手法は天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外は回転ヨコナデである。13は蓋受けの立上りの低い坏身で、復原口径10.8cm、受部径12.6cm、器高3.8cmを測る。底部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部と体部内外は回転ヨコナデである。外底部には1条のヘラ記号が施されている。14・15は高台付椀の破片資料で、14は口縁部、15は高台部の資料である。調整手法は14が体部内外回転ヨコナデ、15は底部内外ナデ、高台と体部内外は回転ヨコナデである。色調は灰色で、焼成も良好である。14が復原口径14cm、15が復原高台径10.6cmを測る。

31号竪穴住居跡（図版10　第16図）

I4区に位置し、47号竪穴住居跡・5号溝に切られ、40号土坑・3号溝を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長2.72m、東壁長2.57mと小型の竪穴住居跡である。壁高は約20cmを留めるにすぎない。床面には3個のピットがあるものの位置関係からして主柱穴ではない。所謂、主柱穴が竪穴部内に存在しない小型無柱穴竪穴住居跡に該当するものである。遺物は床面よりやや浮いた状態ではあるが、土器が出土している。

カマド（図版10　第17図）北壁中央に付設する。壁面を幅75cm、奥行き47cm掘り込んだ突出型のカマドである。遺存状態は割合良好で、煙道の一部も残っていた。右袖は残存長42cm・基部幅44cm・残存高14cmで、左袖は残存長33cm・基部幅28cm・残存高10cmを測る。火床は住居床面を僅かに掘り込んでいた。カマド奥壁から15cmの位置に径16cmの小ピットがあり、支脚の抜き取り痕と考えられる。また、カマド内には表面が焼けた河原石が浮いた状態で出土しており、恐らくこの河原石がピット内に納まっていたのであろう。煙道は立上がり部分を残す程度である。カマド内からは土師器の甕・鍋が出土している。

土器（第18・19図1～6）1～4は土師器。1は甕の口頸部破片で、口径は27cmに復原した。頸部から緩やかに外反し、口唇部には稜を有する。頸部内面の稜線は明瞭で、それ以下がヘラケズリ調整である。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目による。2は器高の低い鉢形の甕で、器高14.2cm、口径21.5cmを測る。口縁部は逆L字形に屈曲し、口唇部は丸く納めている。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによるが、胴部中位でハケ目・ヘラケズリの方向が異なっていることからこの部位で別々の個体を接合したものと思われる。また、胴部下位には煤が付着している。胎土には赤褐色粒・角閃石を含む。3・4は洗面器形の鍋で、3の復原口径は27.4cmを測り、口縁部は短く肥厚する。4の復原口径は42cmで、口径・口縁部とも3より大きい。器面調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。3・



第17図 31号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

4とも胎土に雲母を多く含む。1・2・4はカマド内の出土である。

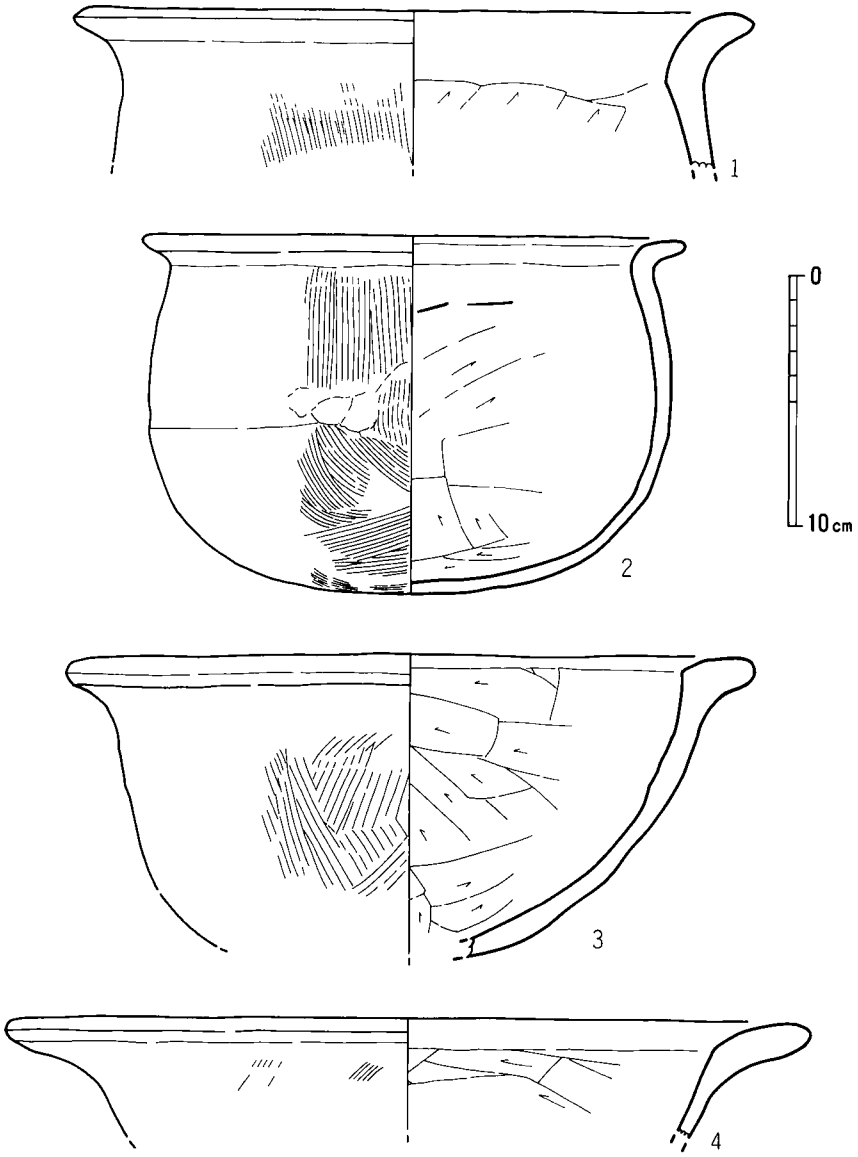
5・6は須恵器。5は平底の壺で、口頸部を欠く。肩部と胴部は接合しないものの同一個体として復原した。底径は12.7cmを測る。調整は内外面とも回転ナデで、胴下半部外面は回転ヘラケズリによる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。6は胴下半部以下の破片で、底径12.2cmを測る。外面回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整による。また、底部外面には同心円の当て具痕がみられる。いずれも竪穴住居跡埋土中の出土である。時期を明瞭にする土器を欠くが、1の土師器甕および3・4の鍋から8世紀中頃であろう。

33号竪穴住居跡

H3区の調査区北面に位置し、29号竪穴住居跡の土層を精査中に検出した竪穴住居跡である。弥生時代の29号竪穴住居跡を切っているが、住居形態・規模については不詳。また、24号竪穴住居跡と重複するものと思われるが、レベル的に当竪穴住居跡が上位にあることから24号竪穴住居跡より後出するものと考えられる。なお、遺跡全体として住居プランが判然としなかった

ので重機による表土除去の時点で強く下げてしまい、結果として遺構の遺存状態を悪くしてしまった。当竪穴住居跡に伴う遺物としては、『鷹取五反田遺跡Ⅰ』で既報告の土層図第6層から土師器高坏が出土している。

土器（第19図1） 1は土師器高坏の破片で、口縁部と脚裾部を欠く。坏部はナデで、脚部外



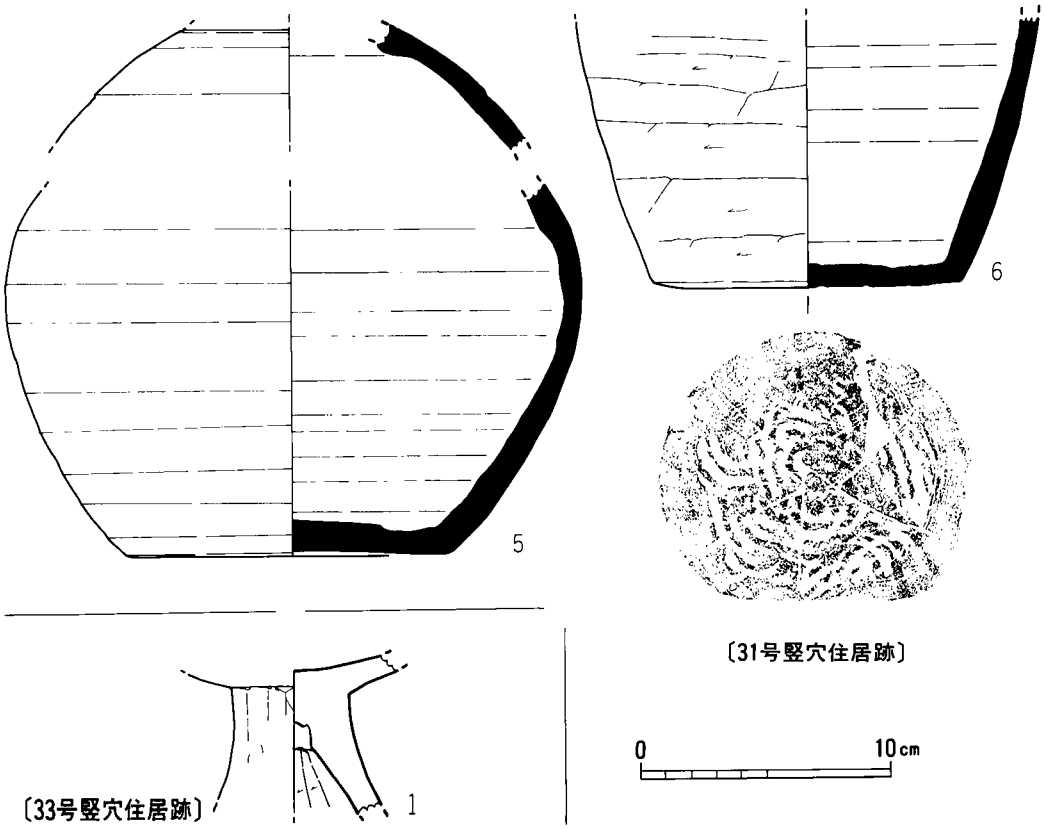
第18図 31号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

面はヘラによる面取り、内面はヘラケズリ調整による。出土土器が高坏1点なので時期を明瞭にし難いが、概ね6世紀後半代であろう。

36号竪穴住居跡（図版11　第20図）

J4区に位置し、37号竪穴住居跡と接するが、前後関係はつかめなかった。また、弥生時代の3号掘立柱建物跡を切っている。竪穴住居跡の遺存状態は悪く、西壁と北壁の一部を留める程度である。西壁長3.98mで、残存壁高は北壁側で22cmを測る。床面にはピットが7個程あり、深さは25cm前後であるが、方形を呈するなど整然と配列されておらず、いずれも主柱穴とはみなし難い。また、北壁側で土器を検出したが、床面から10数cm程浮いた状態であった。

カマド　西壁のやや南側には台形の突出部があり、埋土中には焼土・炭化物を多量に含んでいることからこれがカマドと考えられる。住居壁を50cm程掘り込んだ突出型であるが、袖部および支脚に関しては遺存していないため判然としない。焚口幅は50cmを測る。火床・壁体はさほど焼けておらず、煙道も削平により遺存していない。



第19図　31・33号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

土器（第21図１～７）１・２は土師器である。１は甕の底部破片で、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。また、外面と内面の一部には煤が付着している。２は鉢の小片で、口縁部はＳ字形に屈曲する。器面の磨滅が著しく調整は不明。

３～６は須恵器の坏身で、たちあがりは低く内傾する。口径は３が10.6cm、４は9.4cm、５は11.2cm、６は12.0cmに復原した。４は口径の１/５程の破片から復原したため口径はもう少し大きくなるか。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。また、５の口唇部は打ち欠いており、３の外面にはヘラ記号がみられる。７は須恵器甕の口頸部破片で、口径は23.0cmに復原した。口縁部は肥厚し、端部を丸く納めている。また、口縁部の屈曲部には削り出しによる突帯を施している。口縁部ヨコナデ、頸部外面平行タタキ→カキ目、内面青海波当て具による。竪穴住居跡の時期は、３～６の須恵器坏身から６世紀後半～末と考えられる。

37号竪穴住居跡（図版11　第20図）

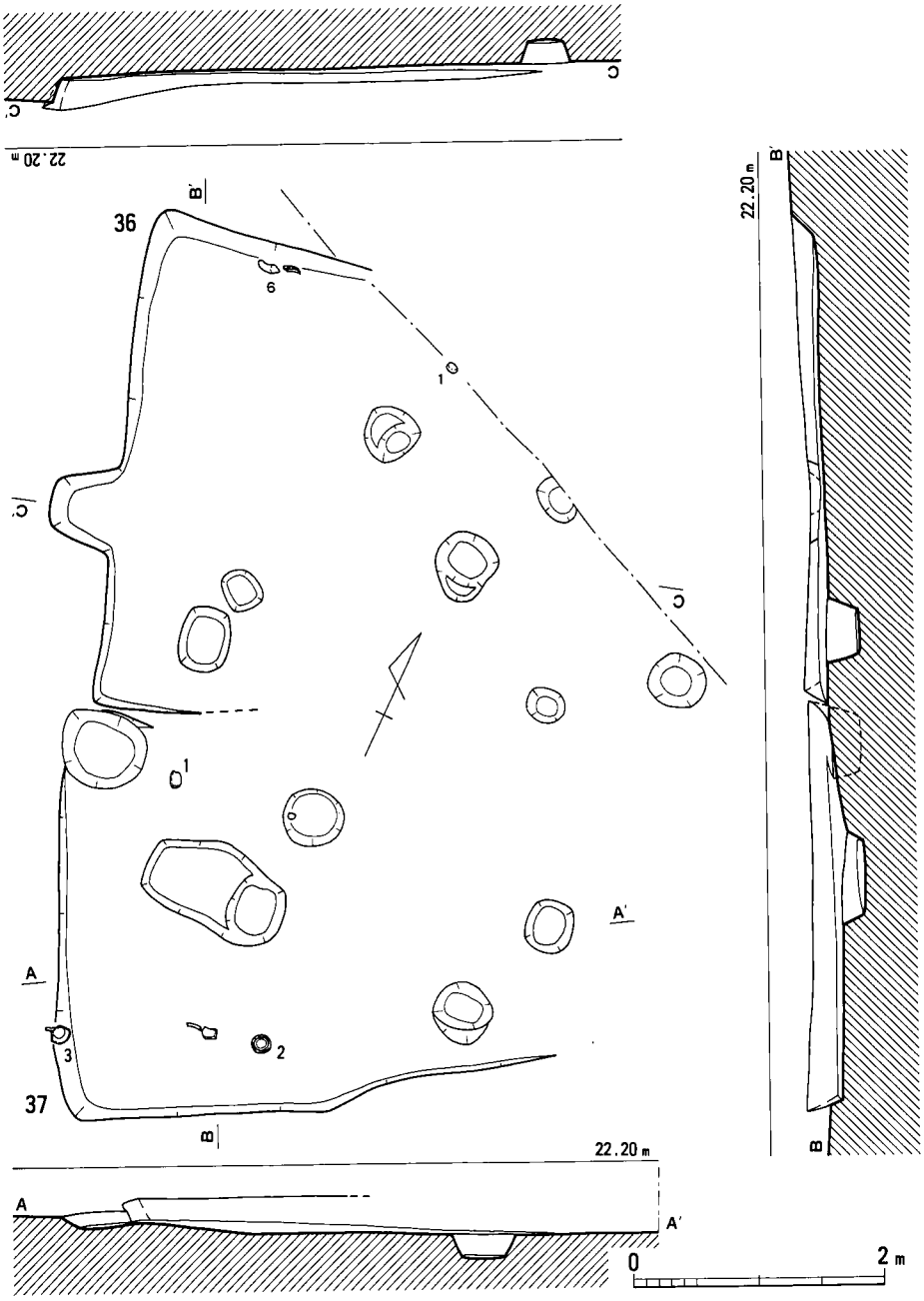
Ｊ４区に位置し、前述の36号竪穴住居跡と接するものの前後関係は不明。当竪穴住居跡も遺存状態は悪く、西壁と南壁を留める程度である。長軸を東西方向に取り、南壁長3.85m＋α、西壁長3.26m、残存壁高20cmを測る。床面にはピットが５個みられるが、整然とした配列をなしておらずいずれも主柱穴には成り得ない。また、カマドおよび焼土もみられないことから住居とするよりは竪穴とした方が妥当かと思われる。遺物は埋土中から土器および鉄滓が出土している。

土器（第21図１～３）１・２は土師器坏で、口縁部との境の屈曲部には稜を有する。丸底気味の底部から直線的に口縁部に移行する。器高は１が4.5cm、２は4.8cmで、口径は１が12.4cm、２は14cmに復原した。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリによる。胎土には砂粒の少ないきめ細かな粘土を使用している。３は土師器の取手付椀で、器高8.3cm、復原口径14.2cmを測る。体部のやや下位に細身の取っ手を貼付している。また、体部には径3.6cmの円孔があり、焼成後に穿っている。外面ヘラケズリ、内面ナデ調整による。竪穴住居跡の時期は１・２の坏から６世紀後半～末と思われる。

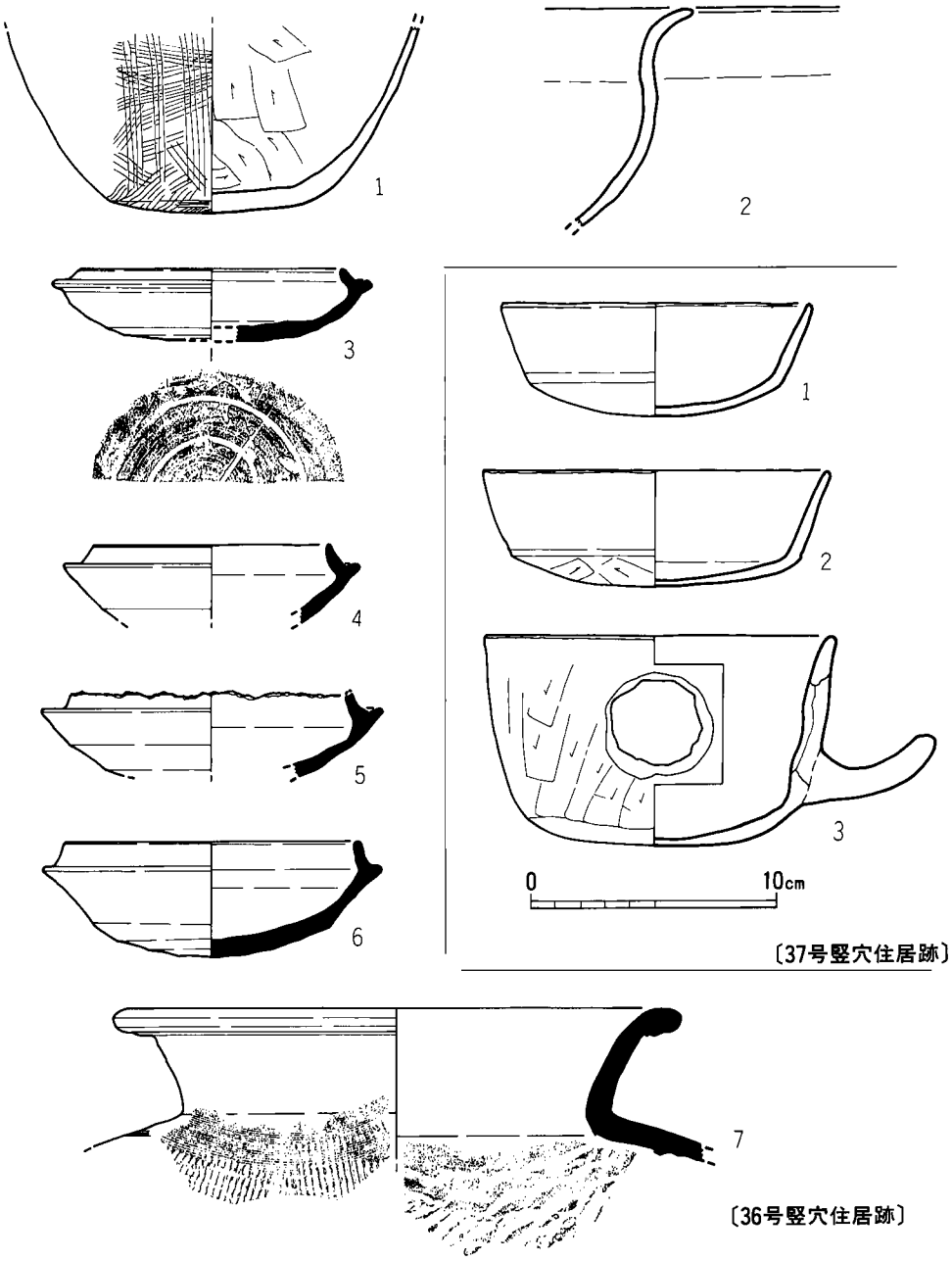
38号竪穴住居跡（図版11・12　第22図）

Ｈ５区に位置し、39号竪穴住居跡・４号溝を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸を南北方向に取る。東壁長3.02m、北壁長2.67mで、残存壁高は西壁側で19cmを測る。当竪穴住居跡の最大の特徴は竪穴部に主柱穴がみられない点で、所謂、小型無柱穴竪穴住居跡に該当する。遺物は床面より若干浮いた状態で土器が出土している。

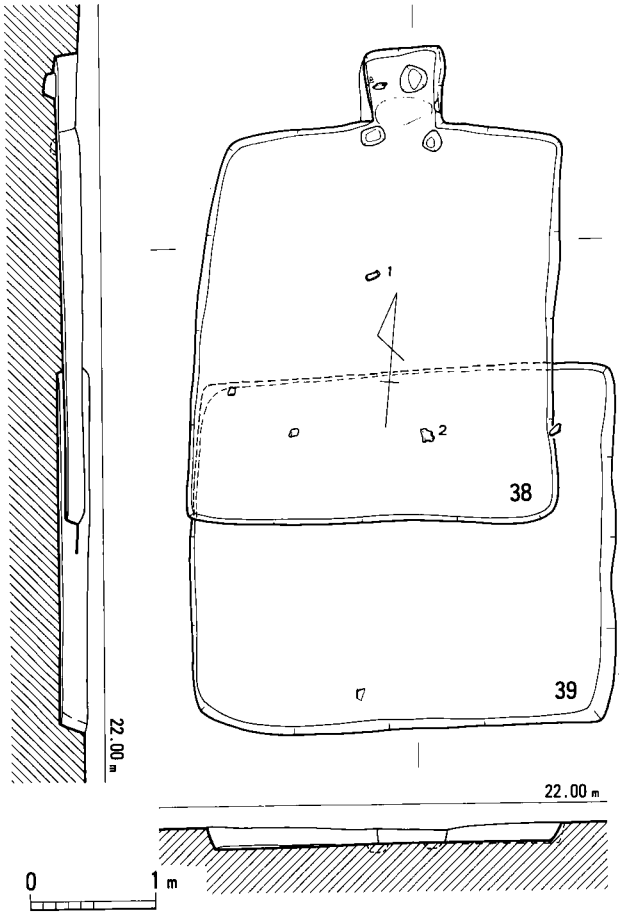
カマド（図版12　第23図）北壁中央に付設する。壁面を方形に60cm程掘り込んだ突出型のカマドである。遺存状態は極めて悪く、煙道は削平により喪失するが、東西両壁には壁体の粘土



第20図　36・37号竪穴住居跡実測図（1/60）



第21図　36・37号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第22図　38・39号竪穴住居跡実測図（1/60）

を辛うじて留める。掘り込みの両隅部前面には径15～18cmの小ピットがあり、袖石の抜き取り痕と考えられることから焚口幅は30cmを測る。また、火床の奥には径22cmの小ピットがあり、やや東側に偏ってはいるものの支脚としていた河原石を抜き取った痕になるものと思われる。カマド内からは土師器片が出土している。

土器（第24図１・２）１・２は土師器甕の口頸部破片で、１の口径は30.0cmに復原した。１は頸部から緩やかに外反し、口唇部は丸く納めている。器面調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリにより、頸部内面の稜は鋭い。口縁部の形状からして８世紀代と思われる。

39号竪穴住居跡（図版12　第22図）

Ｈ５区に位置し、38号竪穴住居跡に北壁を切られ、４号溝を切っている。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈し、南壁長3.24m、東壁長2.84m、残存壁高20cmを測る。床面には柱穴がみられないことから竪穴若しくは竪穴部に柱穴を付設しない小型無柱穴竪穴住居跡かと思われる。小型無柱穴竪穴住居跡と仮定すると、東・西・南壁の３壁にはカマドがみられないことから北壁側に付設していたものであろう。埋土中から若干の土器が出土している。

土器（第24図１・２）１は土師器甕の口頸部破片で、口径は29.4cmに復原した。頸部から緩やかに外反し、口縁端部は丸く納めている。頸部内面のヘラケズリによる稜は鋭い。

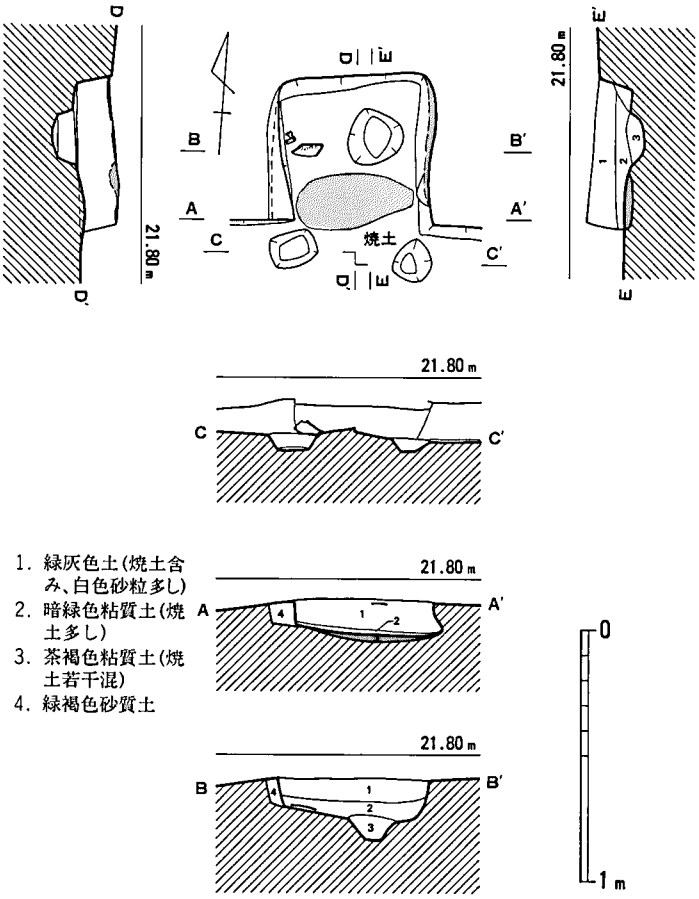
２は須恵器坏身で、復原口径は10.8cmを測る。口縁部は短く内傾する。口縁部ヨコナデ、内外面回転ナデによる。２は６世紀末の所産と思われるが、１の土師器甕は38号竪穴住居跡出土の土師器甕（１）に類似しており、埋土中出土の２を混入品とみなして当竪穴住居跡の時期を

8世紀代と考えたい。

40号竪穴住居跡

（図版13　第25図）

調査区中央部に集中する古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡群の西端（H５区）に位置し、41号竪穴住居跡に北接する小型の竪穴住居跡。東西2.25m、南北2.5mの隅丸方形を呈し、西壁の北寄りにカマドを有す。本来は４本柱と考えられるが、東側に深さ10cmのＰ１とＰ２の２本を検出したに留まる。Ｐ１～Ｐ２の柱間は心心で1.4m。出土遺物は土師器の杯身が床面から出土した。６世紀後半。なお、当該住居跡の周辺に検出されたＰ３～Ｐ５および壁の遺存度からして、別の竪穴住居跡と切り合っていた可能性がある。



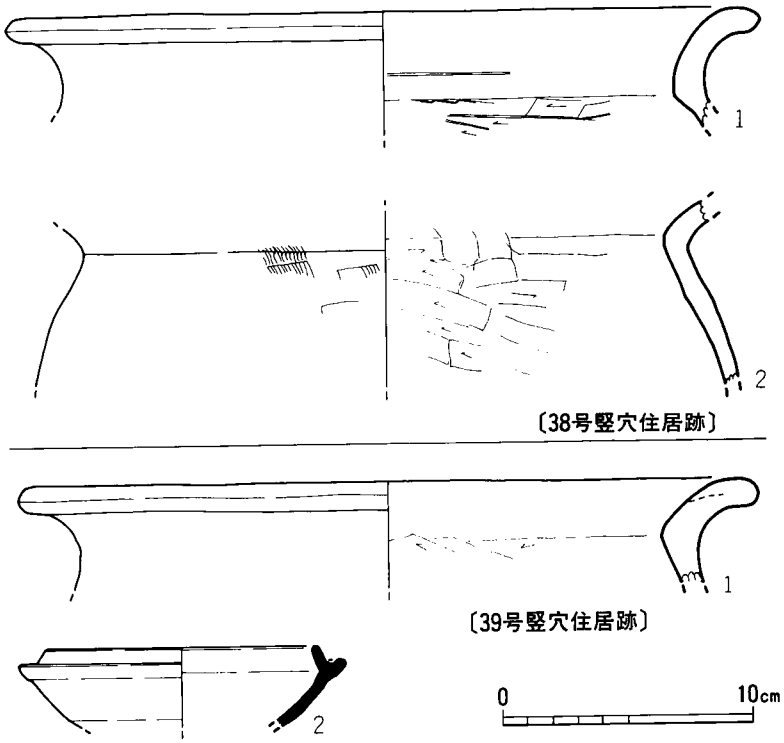
第23図　38号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版13）壁より50cm突出し、幅63cmの広がりを持つ。焼土の広がりは住居跡内20cmに達する。甕が横倒しの状態で出土した。

土器（第26図１・２）１は胴部中央から直に立ち上がる薄手の坏身で、外面には手持ちヘラケズリが施される。復原口径14cm。２はややしも膨らみの甕で、外面は工具によるナデ、内面上半はヘラケズリ、下半はその後にナデ。なお、内面中央部には煤が付着する。口径14cm、器高12.9cm。

41号竪穴住居跡（図版13　第25図）

調査区中央部に集中する古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡群の西端（H５区）に位置し、40号竪穴住居跡の南側に位置する長方形の住居跡で、壁高は５cmに満たない。東西



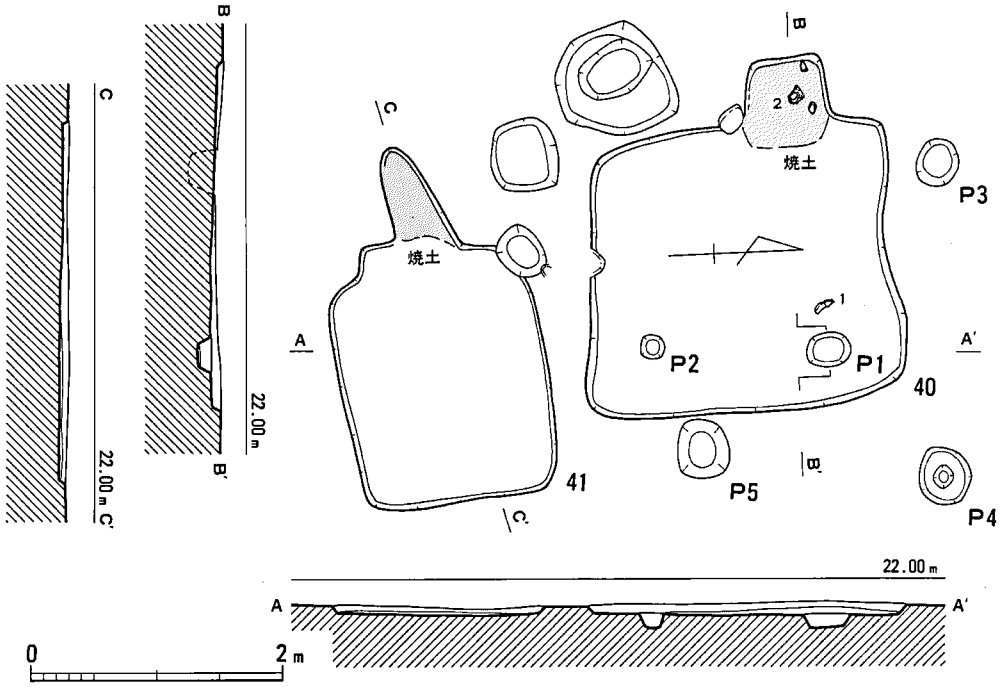
第24図　38・39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

2.15m、南北1.65mと小型で、住居跡内に柱穴は無い。西壁中央に75cm、幅25～43cmの突出部があり、床面は堅い焼土であることから、カマドであった可能性が強い。遺物の出土はない。

42号竪穴住居跡（図版14　第27図）

H５区で39号竪穴住居跡の２m南西に位置する。また、当竪穴住居跡の北側には40・41号竪穴住居跡がある。主軸を東西方向に取るが、平面形は西壁が歪な長方形を呈し、南壁長3.34m、北壁長2.72m、西壁長2.52m、東壁長2.61mと小型の竪穴住居跡である。住居壁の遺存状態は極めて悪く、北壁側で４cm程度と著しい削平を受けている。主柱穴はＰ１～４の４本であるが、径24～31cm、深さ13～18cmと小振りである。柱間間隔はＰ１～２間1.61m、Ｐ２～４間2.08m、Ｐ１～３間1.83m、Ｐ３～４間1.83mを測り、主柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。また、Ｐ１の東側には径67cmと主柱穴より大きなピットがあるが、当竪穴住居跡に付随するものかはつかめなかった。埋土中から若干の土器が出土しているが、小片のため図示を割愛した。投弾状の石製品（第189図５）が１点出土した。

カマド　西壁中央に付設するが、遺存状態は極めて悪く、火床と袖石の抜き取り痕を留める



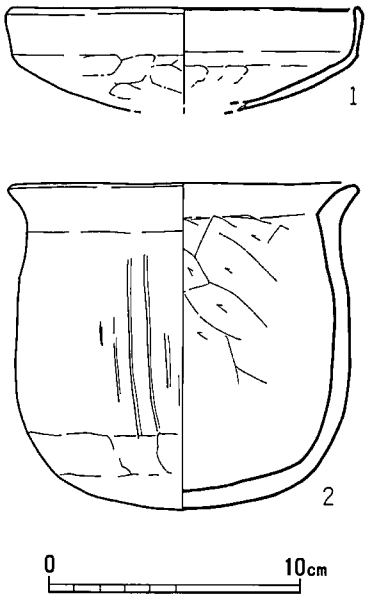
第25図　40・41号竪穴住居跡実測図（1/60）

程度である。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型になる。径15cmの袖石抜き取り痕があることから袖部の長さは右袖が36cm、左袖が47cm、焚口幅45cmに復原できる。煙道が遺存していないのは削平によるものである。また、支脚に関しては、抜取り痕がみられないことから土器若しくは土製品を転用していたものであろう。

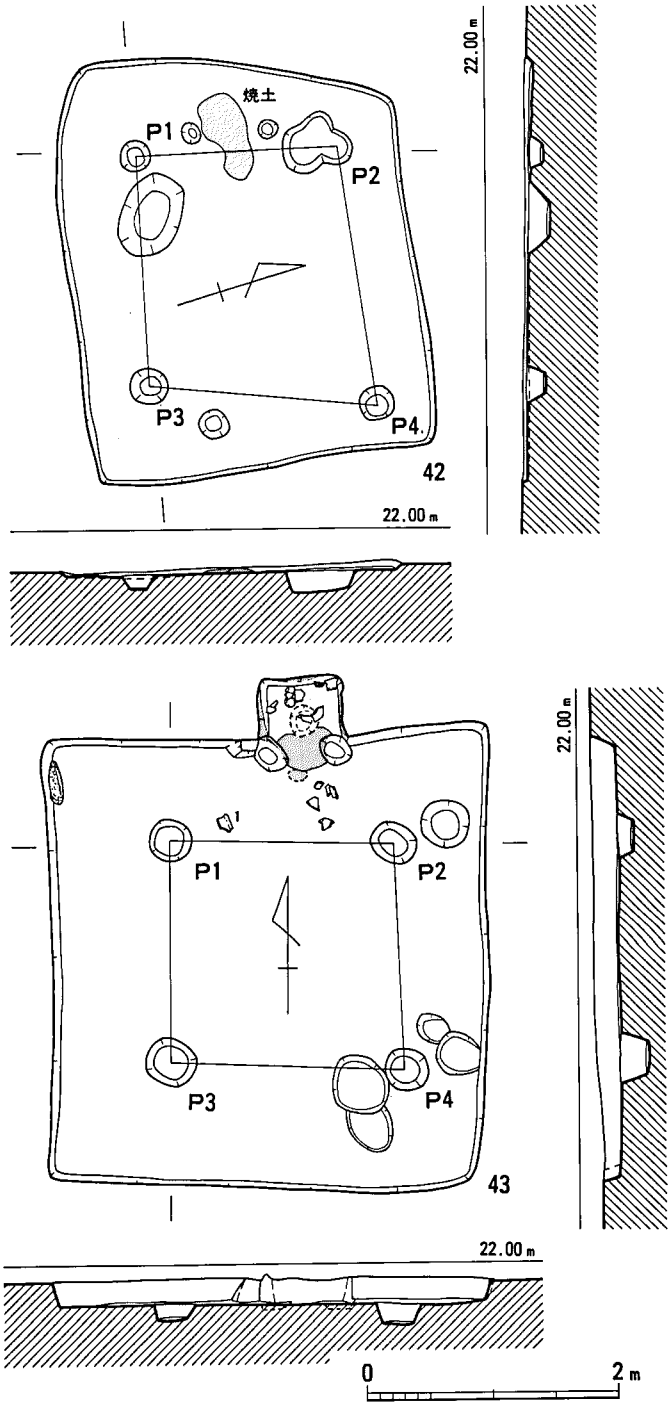
石製品（第189図５）軽石製の製品で、サイズおよび形態的には投弾と類似するが、かなり軽いためその用途は不明。重量は2.1ｇ。

43号竪穴住居跡（図版14・16　第27図）

Ｉ５区に位置し、46号竪穴住居跡・４号溝を切っている。また、2.5m西側には38・39号竪穴住居跡が構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長3.53m、東壁長3.62mと小型の竪穴住居跡である。



第26図　40号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

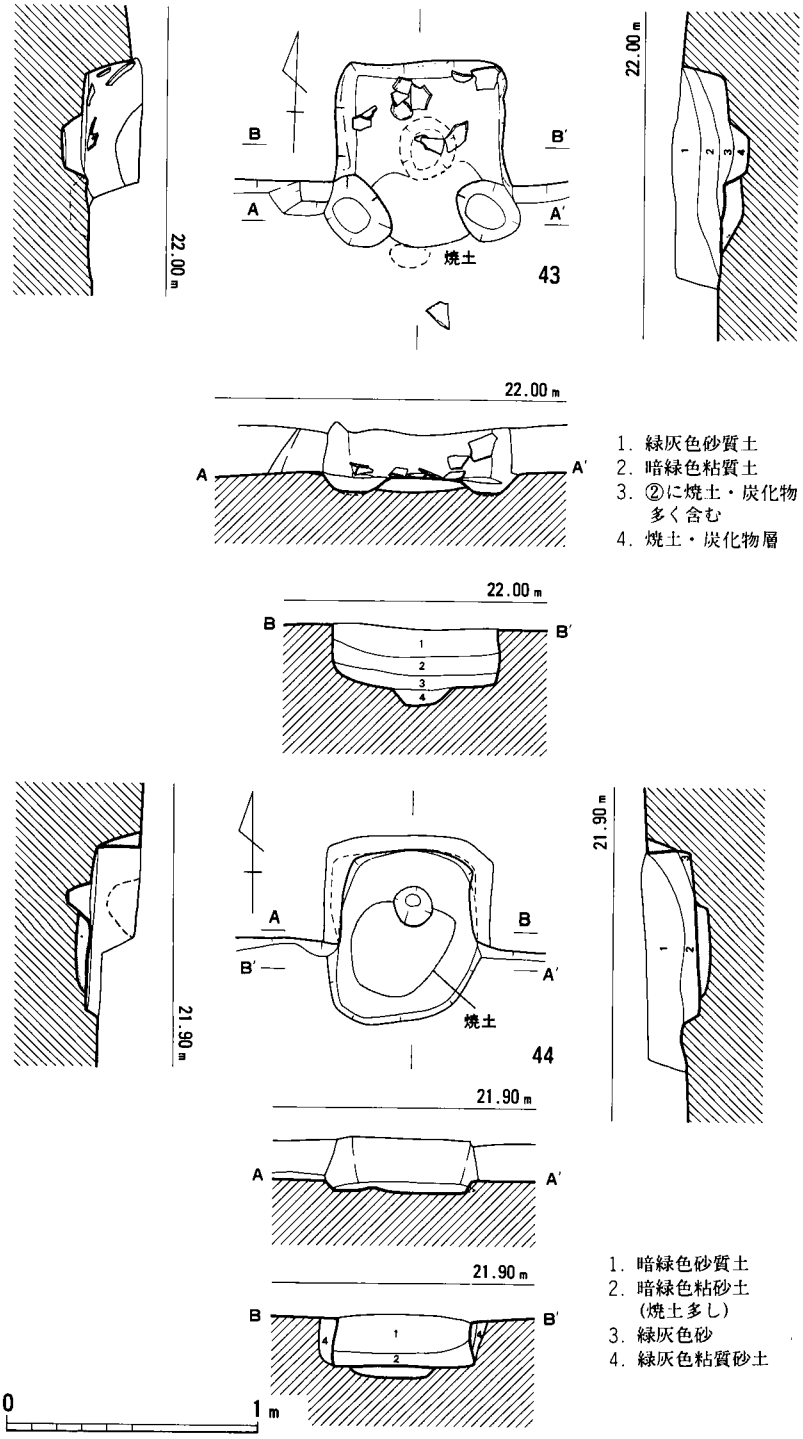


第27図　42・43号竪穴住居跡実測図（1/60）

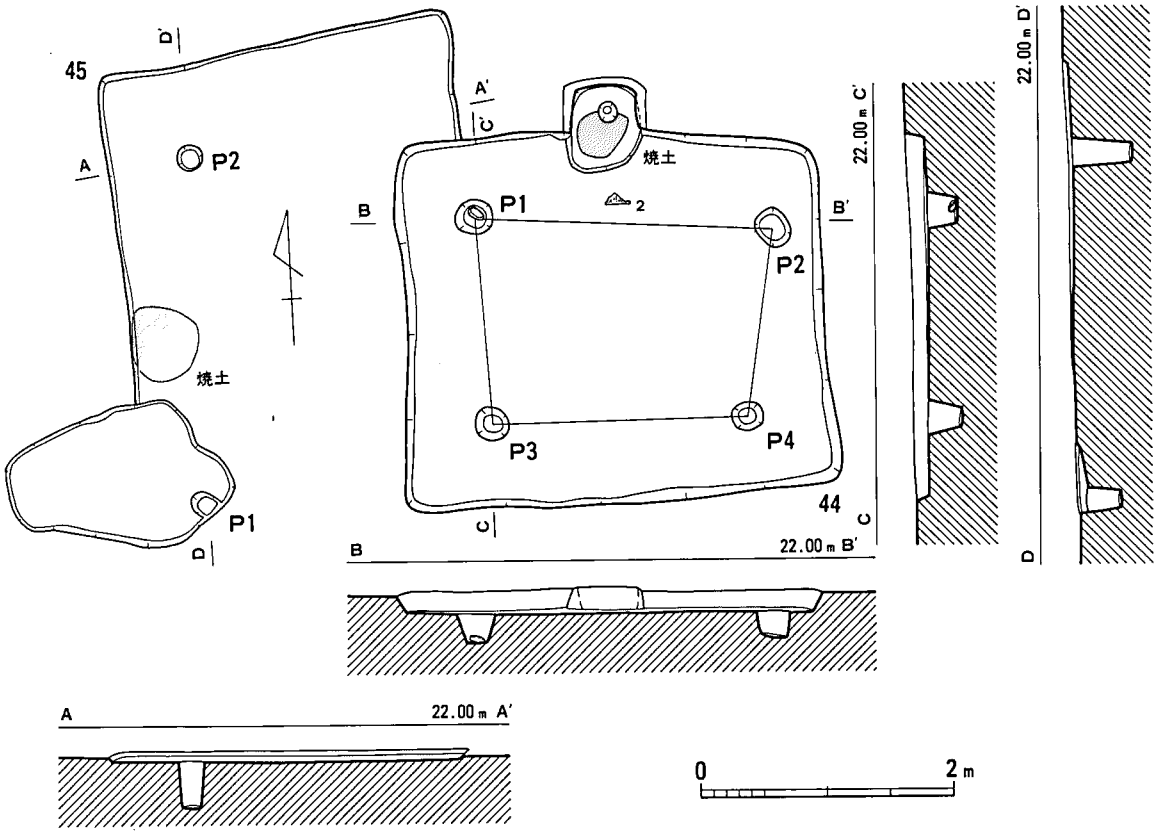
残存壁高は北壁側で19cmを測る。主柱穴はＰ１～４の４本で、径35～40cm、深さ11～20cmである。柱間間隔はＰ１～２間1.79m、Ｐ２～４間1.79m、Ｐ１～３間1.75m、Ｐ３～４間1.86mを測り、主柱穴を結んだ線は方形を呈する。埋土中およびカマド内とカマド前面から若干の土器が出土している。

カマド（図版16　第28図）北壁中央に付設する。壁面を方形に50cm程掘り込んだ突出型のカマドである。遺存状態は極めて悪く、左袖の一部を辛うじて留めるが、壁体・煙道は削平により喪失する。左袖は残存長13cm・基部幅25cm・残存高19cmを測る。掘り込みの両隅部には径25～30cmの小ピットがあり、袖石の抜き取り痕と考えられることから焚口幅は27cmを測る。また、カマド奥壁から15cmの位置に径24cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き取った痕と思われる。３個の小ピット間が火床で、よく焼けていた。カマド内からは土師器片が出土している。

土器（第31図１）１は土師器甕の口頸部破片で、口径は26.0cmに復原した。口縁部は



第28図　43・44号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第29図　44・45号竪穴住居跡実測図（1/60）

J字形に屈曲し、口唇部はシャープである。器面調整は口縁部内面横ハケ目、外面ハケ目、内面ヘラケズリにより、頸部内面のヘラケズリによる稜は不明瞭である。竪穴住居跡の時期は甕の形態からして6世紀後半～末頃と思われる。

44号竪穴住居跡（図版15　第29図）

I5－6区に位置し、45・65号竪穴住居跡を切っている。また、当竪穴住居跡の東側には48～50号竪穴住居跡がある。平面形は東西方向にやや長い隅丸方形を呈し、北壁長3.30m、東壁長2.69m、残存壁高14cmを測る。主柱穴はP1～4の4本であるが、径25～30cm、深さ20cm前後と小振りである。柱間間隔はP1～2間2.37m、P2～4間1.51m、P1～3間1.64m、P3～4間2.02mを測り、主柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。また、P1内には長さ10cm程の小石が入っていたが、どういう意図があるかは不明。埋土中からは若干の土器が出土している。

カマド（図版15　第28図）北壁中央に付設する。壁面を方形に40cm程掘り込んだ突出型のカ

マドである。遺存状態は極めて悪く、煙道は削平により喪失するが、壁面にはカマド壁体の粘土を辛うじて留める。火床は床面を一段掘り窪めており、37×40cmの範囲で焼けて硬くなっていた。また、火床の奥には径15cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き取った痕と思われる。埋土中およびカマド内からは土師器片が出土している。

土器（第31図１・２）１は土師器甕の口頸部破片で、口径は29.6cmに復原した。口縁部は肥厚することなくＬ字形に屈曲し、口唇部は丸く納めている。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。また、頸部内面のヘラケズリによる稜は不明瞭である。２は土師器小型甕の口頸部破片で、口径は16.0cmに復原した。口縁部は僅かに内湾する。胎土は砂粒を殆ど含まない精良なもので、色調は黄橙色を呈する。１はカマド前面、２は埋土中の出土である。竪穴住居跡の時期は６世紀後半頃と思われる。

45号竪穴住居跡（第29図）

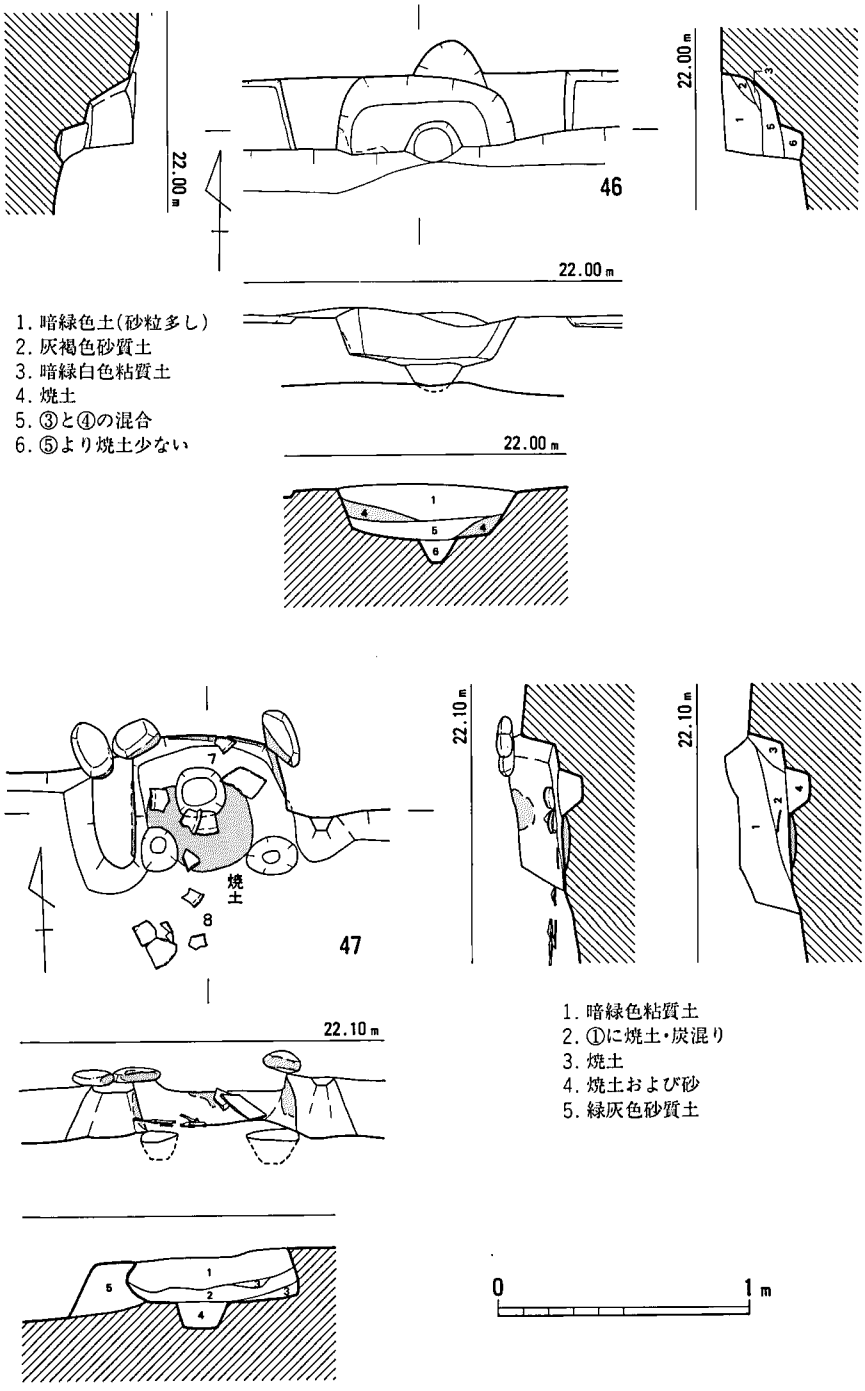
H-I５－６区に位置し、44号竪穴住居跡に切られ、４号溝を切っている。また、当竪穴住居跡の南側には弥生時代の11号土坑と442号ピットが存在する。遺存状態は極めて悪く、壁高は３cmを留めるにすぎない。検出当初は長軸を3.3mとしていたが、カマドが南壁に寄りすぎていることとカマドの１m南側に主柱穴と考えられるピットが存在すること、および11号土坑とは切り合っていないなどの点から南北長は４m程になろう。北壁長は2.80mを測る。主柱穴はＰ１・２の２本しか検出できなかった。径20cm前後、深さ34～46cm前後と大きさの割にはしっかりしている。Ｐ１～２間の柱間間隔は2.76mを測る。埋土中から土器の小片が出土しているが、図示を割愛した。

カマド　西壁中央に付設するが、遺存状態は極めて悪く、火床を留めるのみである。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型になる。火床は55×60cmの範囲でよく焼けていた。支脚は遺存していないが、支脚石の抜き取り痕がみられないことから土製品若しくは土器を転用していたものであろう。

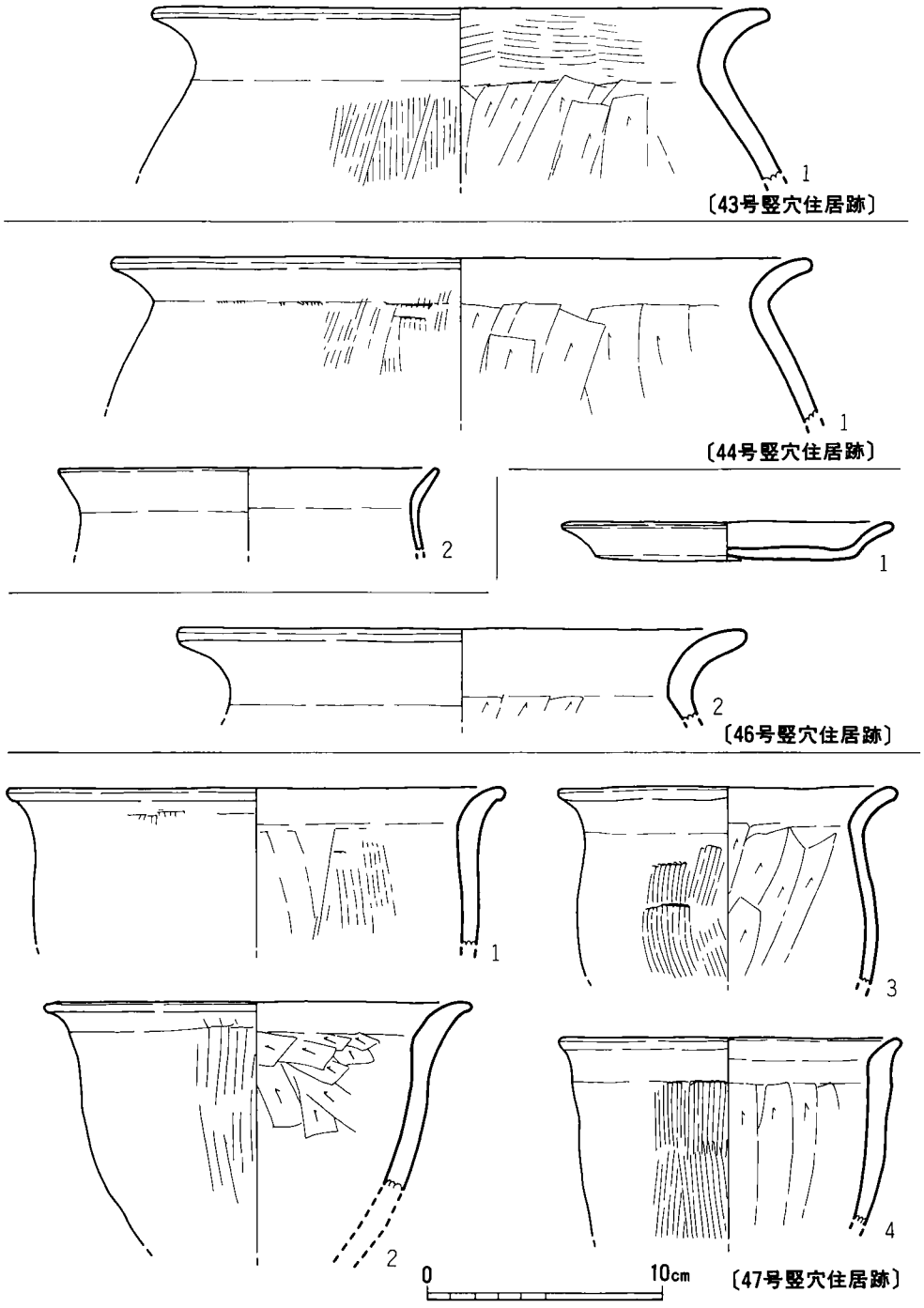
46号竪穴住居跡（図版17　第16図）

Ｉ４－５区に位置し、竪穴部の大部分が47号竪穴住居跡と重複する。検出当初は一軒の竪穴住居跡と認識していたが、住居壁の南東コーナー部が鈎形になっていること、東壁に付設するカマドの床面が南壁の床面より15cmも下がっていることから別個の竪穴住居跡と考えた。以下、カマドを付設している方を46A 号竪穴住居跡、南壁だけのものを46B 号竪穴住居跡として説明を加える。

46A 号竪穴住居跡は東壁長3.06mの規模で、柱穴は不詳。住居壁中央にカマドを付設している。カマド壁体は住居のテラス部分に掘り込んだもので、幅71cm、奥行き29cmの遺存状態である。また、両袖とテラス部分とのレベル差は４cmあるが、袖部は盛土によるものではなく、



第30図　46・47号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第31図　43・44・46・47号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

この部分は地山の削り出しによるものである。袖部の基部幅は35cm前後を測る。カマド奥壁から8cmの位置に径20cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き取った痕と考えられる。また、右袖の北側には幅29cm、長さ15cm、高さ6cmの浅い落ちがあり、さほど焼けてはいないが煙道の立上がり部と考えられる（第30図）。

46B号竪穴住居跡は南壁長3.88mの規模で、柱穴・カマドは不詳。壁高は東側で6cmの遺存状態であるが、床面は西側に下がっており、両端部では10cmの比高差を有する。埋土中からは若干の土器が出土している。

土器（第31図1・2）1は土師器皿で、器高1.6cm、復原口径16.0cm、復原底径11.0cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く納めている。口縁部から内面にかけてはナデにより、底部外面には板状圧痕がみられる。2は土師器甕の口頸部破片で、口径は24.0cmに復原した。口縁部は肥厚することなく緩やかに外反し、端部は丸く納めている。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリにより、頸部内面の稜は鋭い。1・2ともに竪穴住居跡埋土中の出土で、8世紀後半代に属しよう。

47号竪穴住居跡（図版17　第16図）

I4－5区に位置し、31・46号竪穴住居跡および弥生時代の40号土坑を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、東西方向に長軸を取る。北壁長3.91m、東壁長3.53mとやや小型の規模で、壁高は東壁側で32cmと割合遺存状態の良い竪穴住居跡である。主柱穴はP1～4の4本で、径26～36cm、深さは10cm前後である。柱間間隔はP1～2間1.94m、P2～4間1.38m、P1～3間1.80m、P3～4間1.71mを測り、P2がやや内側に寄ることから主柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。また、床面下層からは一辺70cm前後の方形の柱穴を検出しており、弥生時代の掘立柱建物を構成する柱穴になる可能性がある。埋土中およびカマド内からは小型の土師器甕が出土している。

カマド（第30図）比較的残存状態の良好なカマドで、北壁のやや東寄りに付設している。当竪穴住居跡のカマドは、左袖が住居壁に直接粘質土を貼付した作り付け型をなすのに対し、右袖は住居のテラス部分に短い袖部を付加した突出型を呈するという特異な形態のものである。右袖は残存長17cm・基部幅23cm・残存高24cmで、左袖は残存長53cm・基部幅31cm・残存高22cmを測る。両袖部の先端には径15cm程の袖石抜き取り痕があることから焚口幅は25cmに復原できる。また、奥壁から8cmの位置に径19cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き去った痕と思われる。火床はこの三つの小ピット間でよく焼けており、壁体も加熱により赤変していた。壁体部分には河原石が3個あり、カマド側は焼けて黒っぽくなっていた。煙道が遺存していないのは削平によるものと考えられる。カマド内および前面からは土師器が出土している。

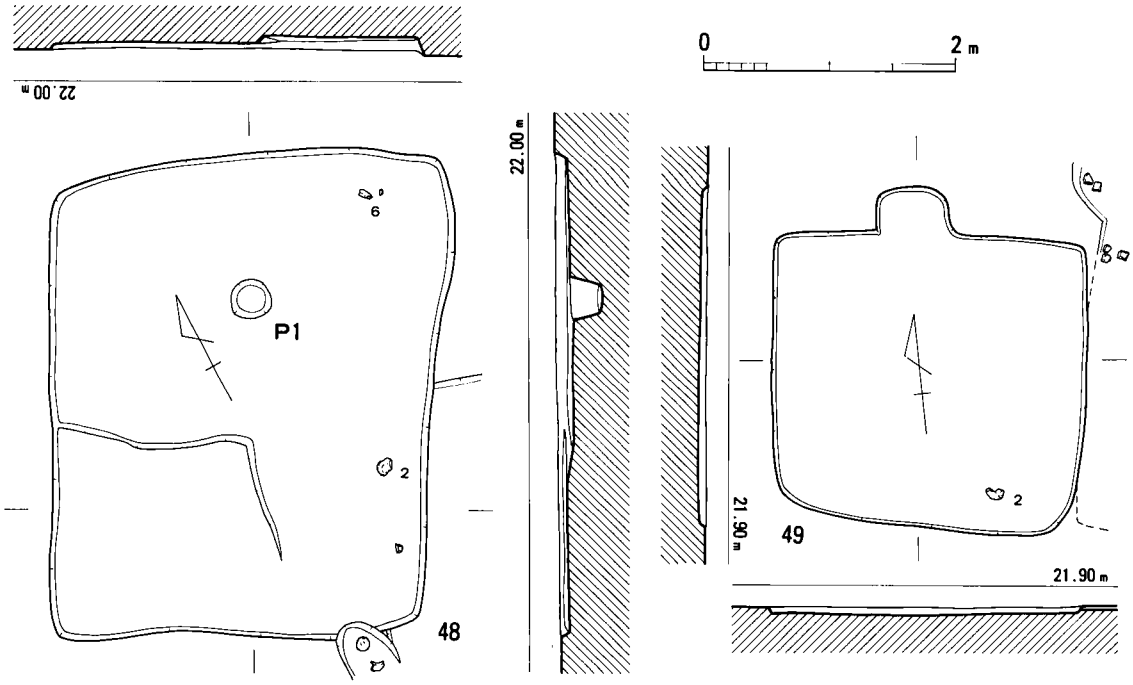
土器（第31図1～4）1～4は土師器小型甕の破片で、口径は1が21.0cm、2は18.0cm、3は14.0cm、4は14.5cmに復原した。3は頸部から緩やかに口縁部に移行し、端部を丸く納める

が、1・2・4の頸部は締まりがない。口縁部が肥厚するため、口縁端部はよりシャープにみえる。器面調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリにより、2・3の頸部内面のヘラケズリによる稜は鋭い。1は竪穴住居跡埋土中、2～4はカマド内の出土である。当竪穴住居跡の時期は出土土器により8世紀後半頃と考えられる。

48号竪穴住居跡（第32図）

調査区中央部のやや西寄りI5区に位置し、50A号竪穴住居跡の北東隅を切っている。主軸はやや西へ偏するが、東西方向に長い隅丸長方形のプランを呈し、カマドは持たない。長辺3.85m、短辺2.98～3.23m、深さは5cmを残すのみである。南西部に1.5m四方のベット状の高まりがある。柱穴はP1を検出したに過ぎない。遺物はすべて土師器で、床面より坏身（第33図1・2）と高坏（第33図6）が出土。6世紀末頃の時期である。

土器（第33図1～6）1は蓋受け部を有す薄手の坏で、底部を欠く。口縁部は受け部から真直ぐに立ち上がる。復原口径11.2cm。2は胴部下半部で屈曲し、直線的に外に開く器形を有す。内外面とも磨滅しているが外面下半はケズリを施す。口径12.4cm、器高4.8cm。3は内弯して立ち上がる坏。4・5は甕で両者とも胴部下半を欠く。4は口縁部内面に稜線を持つが、5は丸く短い口縁部である。4の口径12.8cm。両者とも埋土出土。6は高坏で脚部にはケズリ痕が残る。



第32図　48・49号竪穴住居跡実測図（1/60）

49号竪穴住居跡（第32図）

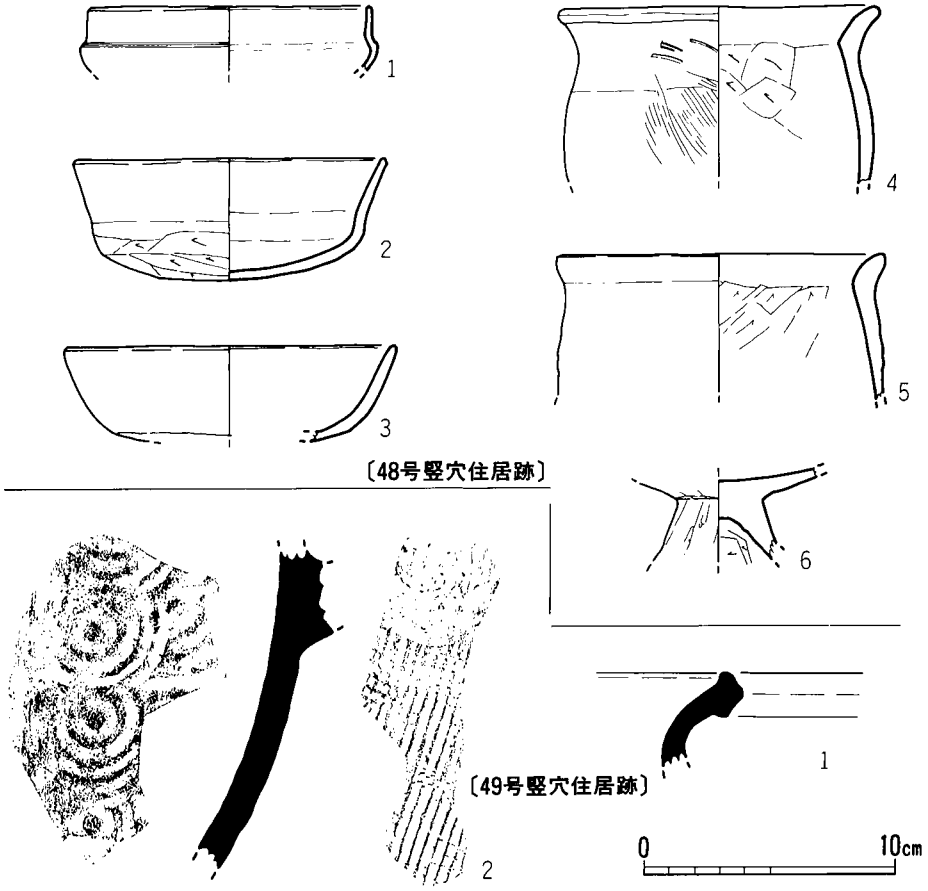
調査区中央部のやや西寄りＩ６区で48号竪穴住居跡の南６ｍに位置し、50A 号竪穴住居跡の南西壁を切っている。北側にカマドを持つ東西2.5m、南北2.3mの方形に近い竪穴住居跡。住居跡内には柱穴は無い。床面より須恵器甕が出土した。

カマド　北壁のやや西寄りに築かれ、幅55cmで35cmほど突出する。内部床面は黒変し、固く締まる。

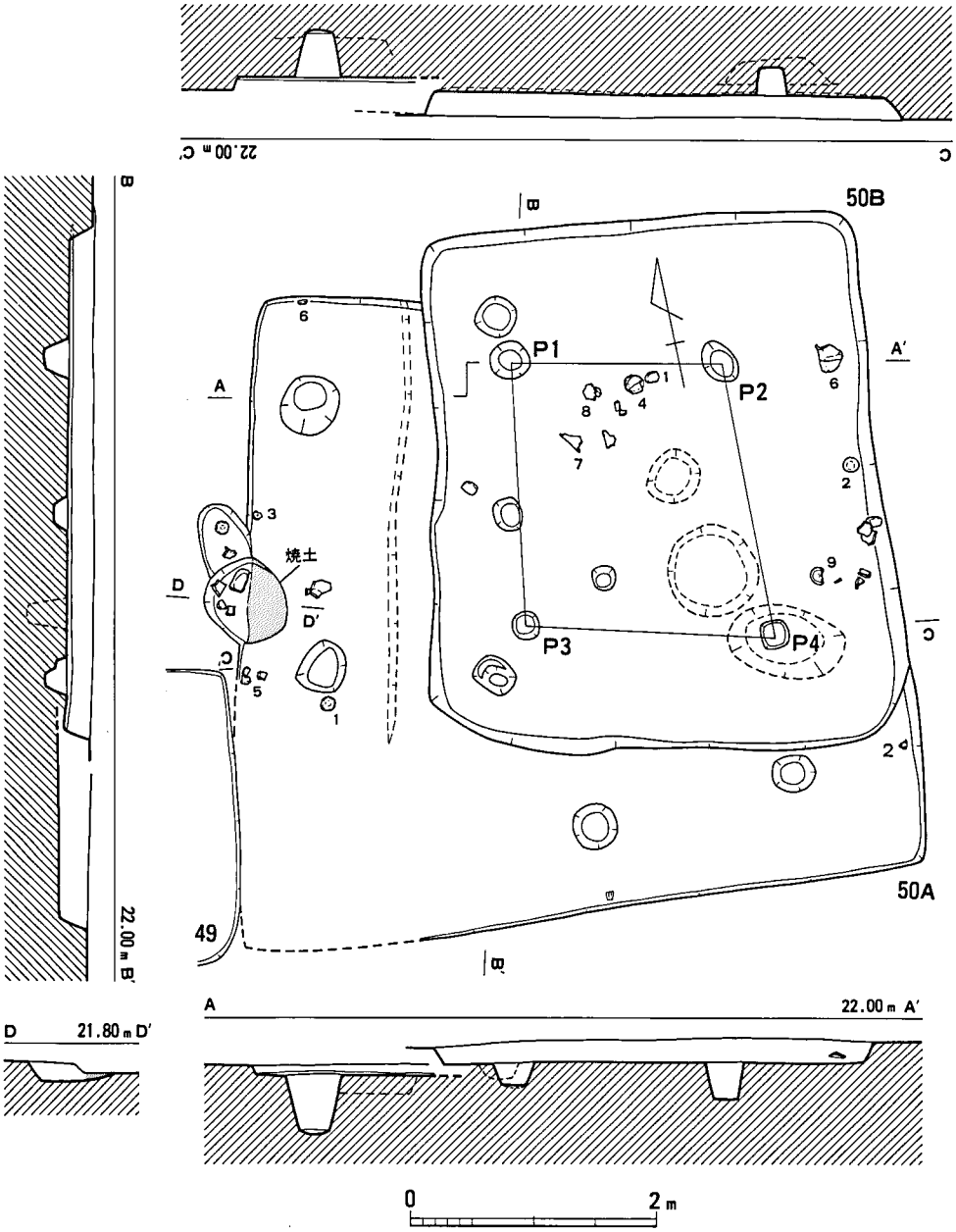
土器（第33図１・２）１・２とも須恵器の甕。２の外面は格子目のタタキ。

50A 号竪穴住居跡（図版18　第34図）

調査区中央部のやや西寄りI–J６区に位置し、西壁を48・49号竪穴住居跡に、50B 号竪穴住居跡にも東側を切られる。東西5.5m、南北5.3mに復原され、深さは５cm程しか遺存しない。西辺中央部にカマドを持つ。この住居跡に伴う柱穴はいくつかあるが、いずれも確実に主柱穴



第33図　48・49号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第34図　50A・50B号竪穴住居跡実測図（1/60）

にはなりえない。西壁から1.3m東に住居の辺に沿った下層の段落ちがある。土師器坏・椀・甕、須恵器坏身が床面より出土。6世紀末であろう。

カマド（図版18）円形の掘りかたを有し、35cmほど外に突き出る。奥の深さは15cmを測り、住居跡内に浅く、固く焼き締まる。

土器（第35図1～6）1～5は土師器。1は蓋受けを持つ坏身で、丸みのある胴部下半から内傾する口縁部に移行する。内外面ともナデないしヨコナデ調整。口径10.6cm、器高4.65cm。2は直線的に外方に開く坏。口径12.4cm、器高4.9cm。3は大きく内弯する器形から椀になろう。外面中央部はヘラケズリ。口径11cm、器高4.65cm。4は甕の胴部から口縁部片。口縁部は肥厚せずに「く」の字状を呈す。口径12.4cm。5は大型で平底の甕ないし甑。内外面ともヘラケズリ。底径14.6cmを測る。

6は須恵器の坏身で短く立ち上がる受け部を有す。復原口径12.3cm。

50B号竪穴住居跡（図版18　第34図）

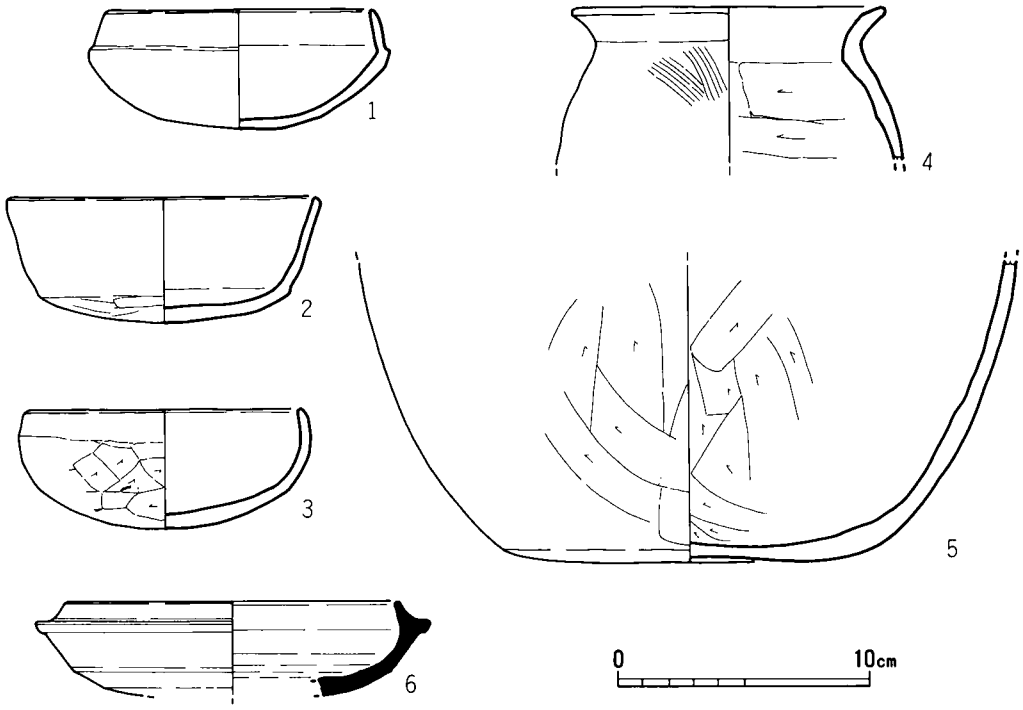
調査区中央部のやや西寄りI-J6区に位置し、50A号竪穴住居跡を切る隅丸長方形プランの竪穴住居跡で、カマドは持たない。東西3.7m、南北4～4.37m、深さは20cmと比較的遺存状態が良好である。床面は固く締まり、径40cmと小さな掘りかたを持つP1～P4が主柱穴で、深さは30cm前後を測る。床面より土師器坏身･壺･甕および須恵器坏身が出土した。6世紀末であろう。

土器（第36図1～9）1～8は土師器。1・3は中位に段を有す坏で、1の方が薄手で屈曲度が強い。2は内弯度の強い器形である。1の口径10.7cm、器高4.45cm、2の口径11.7cm、器高4.2cm、3の口径12.1cm、器高4.8cmを測る。3の下半はケズリ後のナデ調整で、黒斑が残る。4は短頸壺で、やや偏球状の胴部に短い外反する口縁部を持つ。口径9.6cm、器高9.35cm。5は口縁部が若干外反する薄手で小型の甕。内外面とも横方向のヘラケズリを施す。口径14cm。6は口縁部が大きく外反する甕。外面の頸部以下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のヘラケズリを施す。口径16.8cm。7は肥厚して緩く外反する口縁部から6mmと薄く直線的な胴部に移行する甑で、焼成前の小さな円形の穿孔がある。内面は横方向のヘラケズリ。口径30cm。6は甑の把手。

9は須恵器の坏身で、内傾度の強い立ち上がりを有す。浅い器高からすると蓋の可能性もある。底部は回転ヘラケズリで、2本の平行沈線によるヘラ記号を持つ。口径11cm、器高3.55cm。

51号竪穴住居跡（図版19　第37図）

調査区中央部のやや西寄りJ6区で、50B号竪穴住居跡の東、60号竪穴住居跡の南に位置し、西辺中央部にカマドを有す長方形プランの竪穴住居跡。南北方向に長く4.55m、東西3.75m、深さは5cmに満たない。床面は固く締まり、やや北側に寄ってP1～P4の主柱穴がある。P



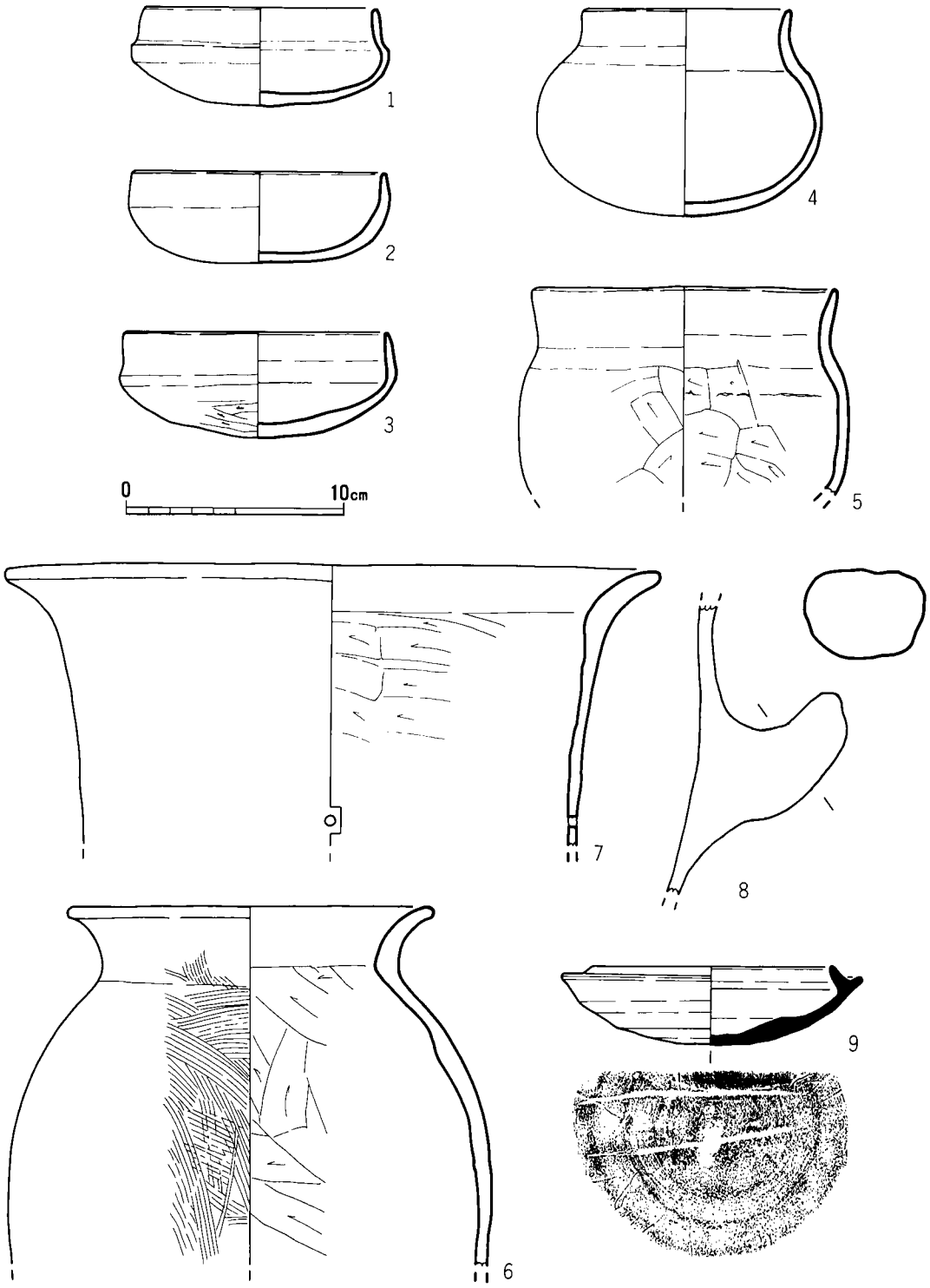
第35図　50A 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

1～P 2 間2.6m、P 2 ～P 4 間2.3mを測り、柱穴の深さは25～45cmである。床面より土師器坏・高坏・甑・土製品等が出土。6 世紀後半の時期であろう。

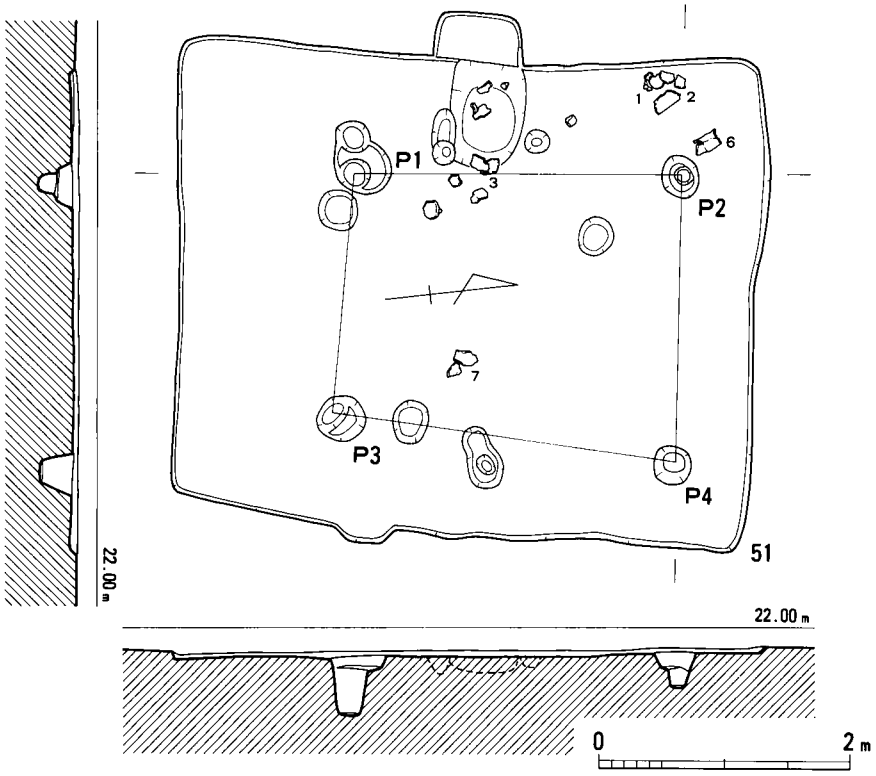
カマド（図版19）西壁より38cm突出し、幅70cmの掘りかたは住居跡の床面より 2 cmほど上がる。その手前に60×85cm、深さ10cmの浅い掘込みがカマドの火床である。火床の前面にある径15cm、深さ10～15cmの小さなピットは袖石の抜き跡であろう。カマド内より二次的に加熱を受けた甕（3）、土製品が出土。

土器（第38図 1 ～ 7 ）いずれも土師器である。1 ・ 2 は胴部から口縁部にかけて屈曲する坏身。1 は 2 に比べ深みのある器形で、胴部下半から底部にかけてヘラケズリ痕を残す。底部には「×」印のヘラ記号がある。口径12.3cm、器高5.3cm。2 の口径13.4cm、器高4.6cm。3 は火床から掻き出された状態で出土した甕で、底部を欠く。張りのない胴部下半にはハケ調整が残る。口径15.3cm。6 は大型の甕。口縁部は肥厚させずに大きく外反する。外面は細かいハケ調整、内面は斜め方向のヘラケズリを施す。復原口径22cm。4 は高坏で、坏部を欠く。脚は短いが大きく広がる。脚部径10.3cm。5 ・ 7 は甑。5 は底部から 5 cmほど上に焼成前の穿孔がある。内面は底部方向からのヘラケズリ。底部径11cmで埋土より出土。7 の口縁部は肥厚させる。口径30cmと 5 に比べ一回り大型。

土製品（第38図 9 ）指先状を呈す土製品の欠損品。断面長円形で、表面は整形時の稜線が残



第36図　50B 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



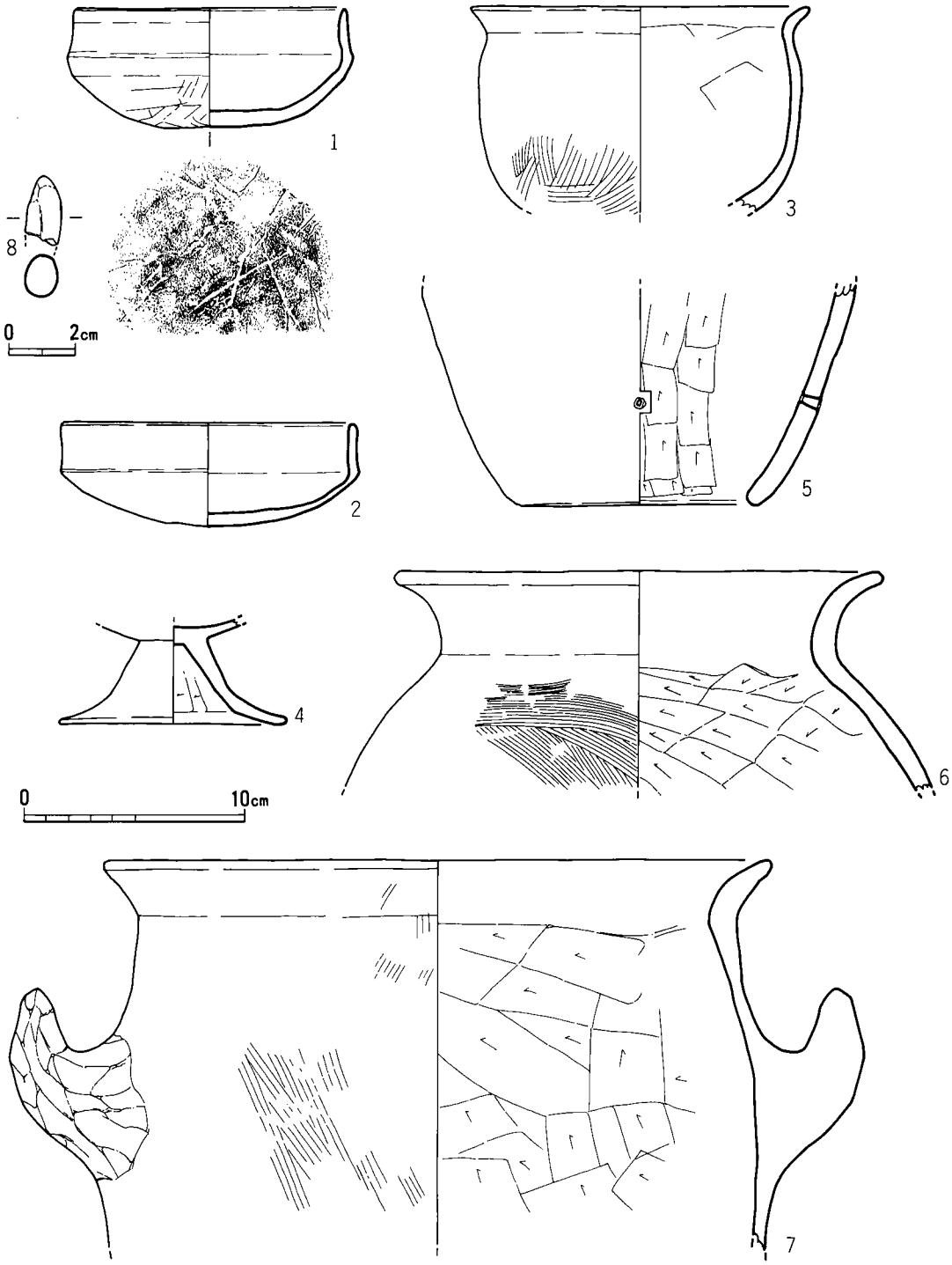
第37図　51号竪穴住居跡実測図（1/60）

る。赤褐色、残長2.1cm、幅1.15～1.3cm、重さ1.1g。

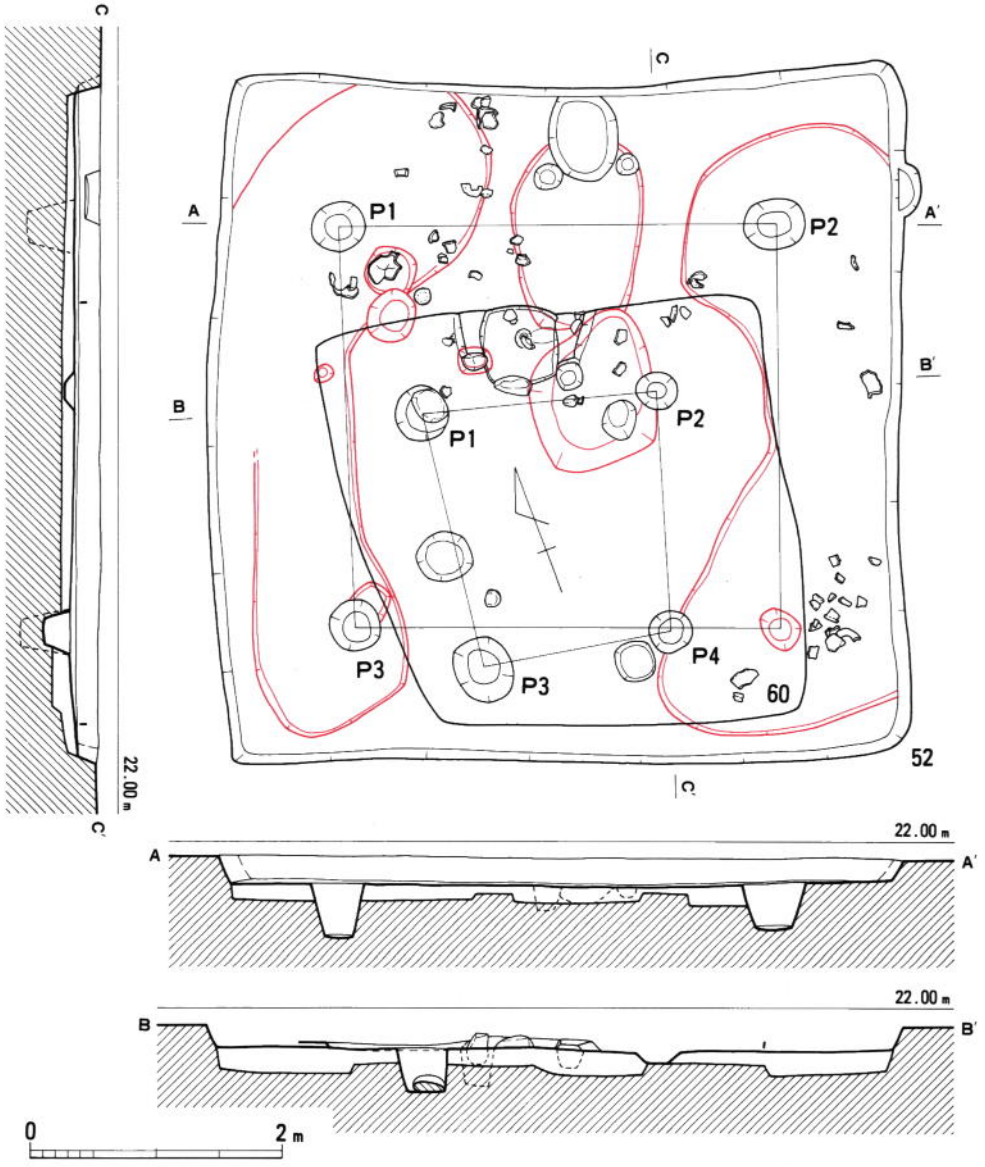
52号竪穴住居跡（図版20・21　第39図）

調査区中央部のやや西寄りJ5区に位置し、51・53号竪穴住居跡に南北の壁を接し、弥生時代の58号竪穴住居跡を切っている。また、住居内は60号竪穴住居跡によって大半が切られているが、遺存状態は良好である。東西5.5m、南北5.35mとほぼ正方形に近いプランで、北側中央にカマドを持つ。固く締まる床面の四隅に深さ35～45cmの主柱穴（P1～P3）がある。P1～P2間3.45m、P1～P3間3.2mで、主柱穴内の面積は11.04㎡を測る。赤で表示した部分は住居の下層で、当該住居の構築にあたり西壁と東壁に沿って幅1～1.5m、床面よりの深さ20cmの掘込み地業を行なっているが、主柱穴はその地業地内に3本とも含まれる。住居内より土師器としては坏・甕、須恵器としては蓋・坏・提瓶等多くの土器が、埋土からは鉄器（第194図1・2）も出土。

カマド　作り付け型で、北壁中央に付設している。遺存状態は極めて悪く、袖部・支脚・煙道は留めていない。しかし、北壁から45cmの位置に袖石抜き取り痕の小ピットがあることから



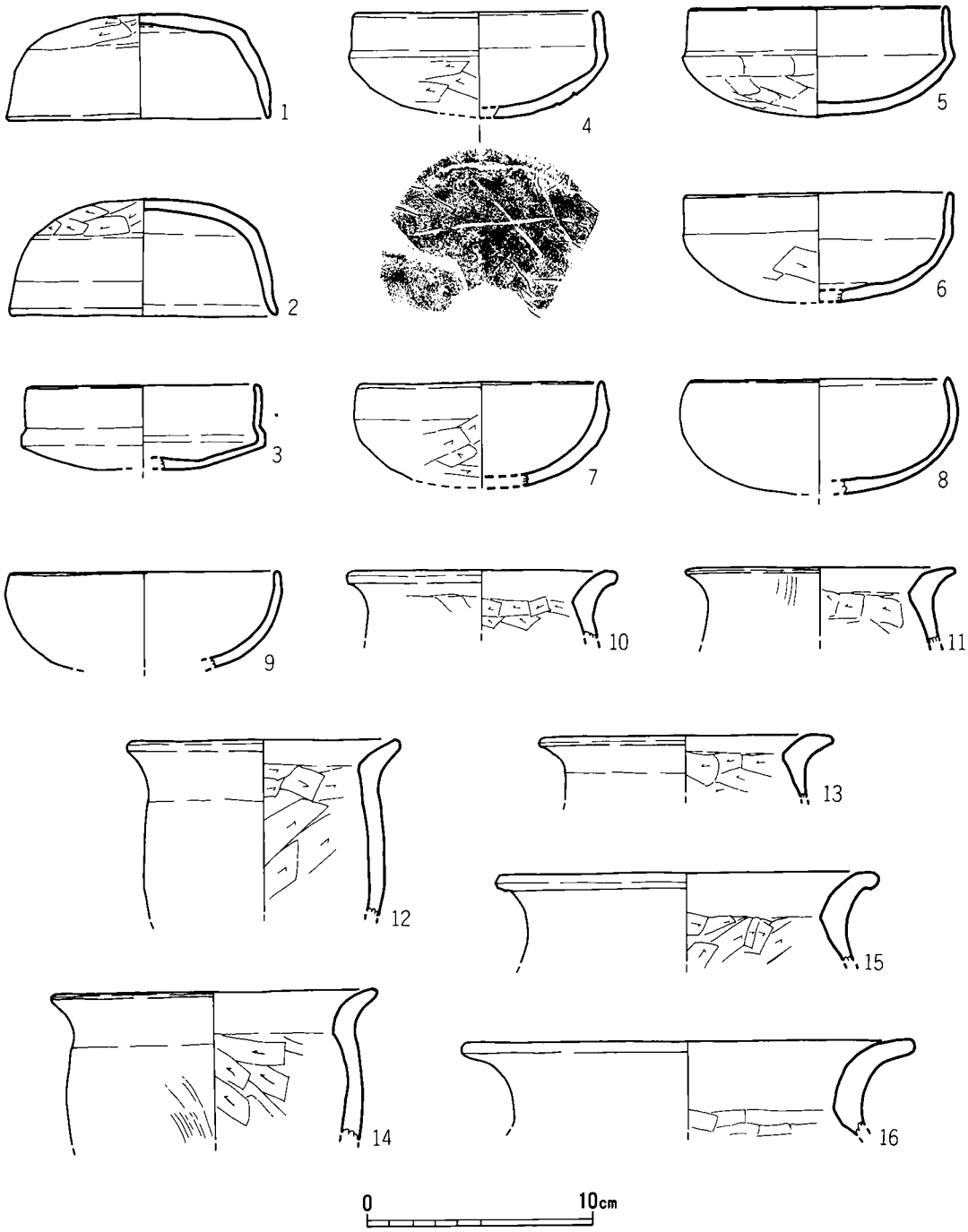
第38図　51号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図（1/3　土製品は1/2）



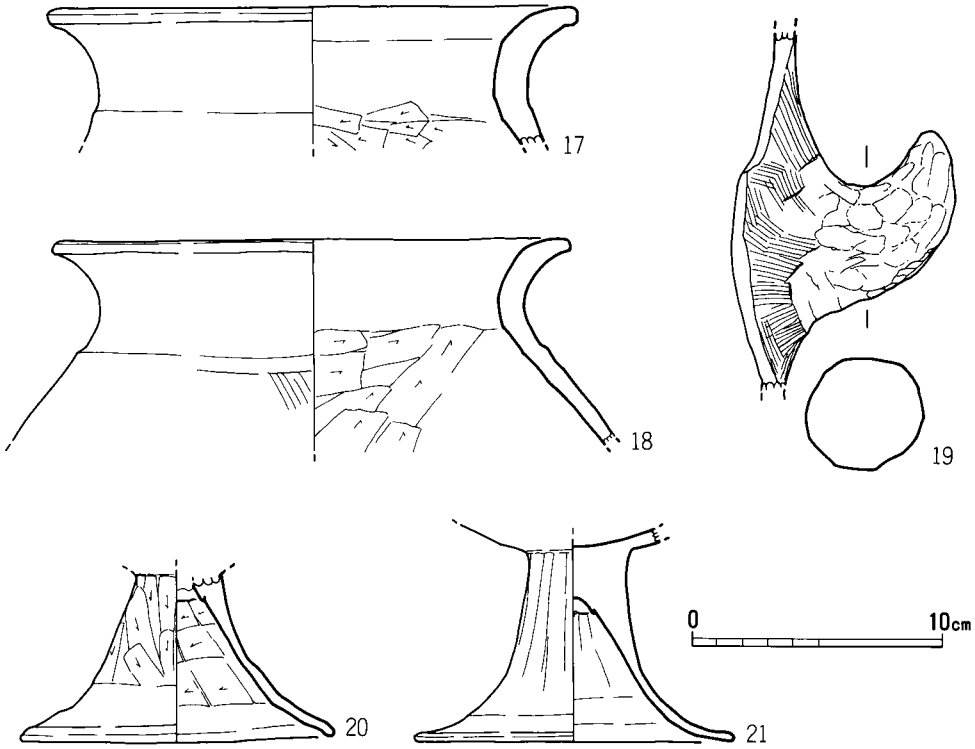
第39図　52・60号竪穴住居跡実測図（1/60）

右袖の長さ70㎝、左袖の長さ81㎝、焚口幅43㎝に復原できる。また、当カマドは火床を住居床面より一段掘り下げたタイプのものである。

土器（第40～44図１～41）１～25は土師器。１・２は胴部に段を持たないので坏蓋とした。２の口唇部はやや外反する。両者とも天井部にヘラケズリを残す。１の口径11.6㎝、器高4.6㎝。２は口径11.9㎝、器高5.1㎝。３～６は坏身で、胴部に段を有す。３の段は胴部下半にあり、他に比べて強い。口径10.1㎝。４～６は丸みのある胴部の中位からやや上位に軽い段を有



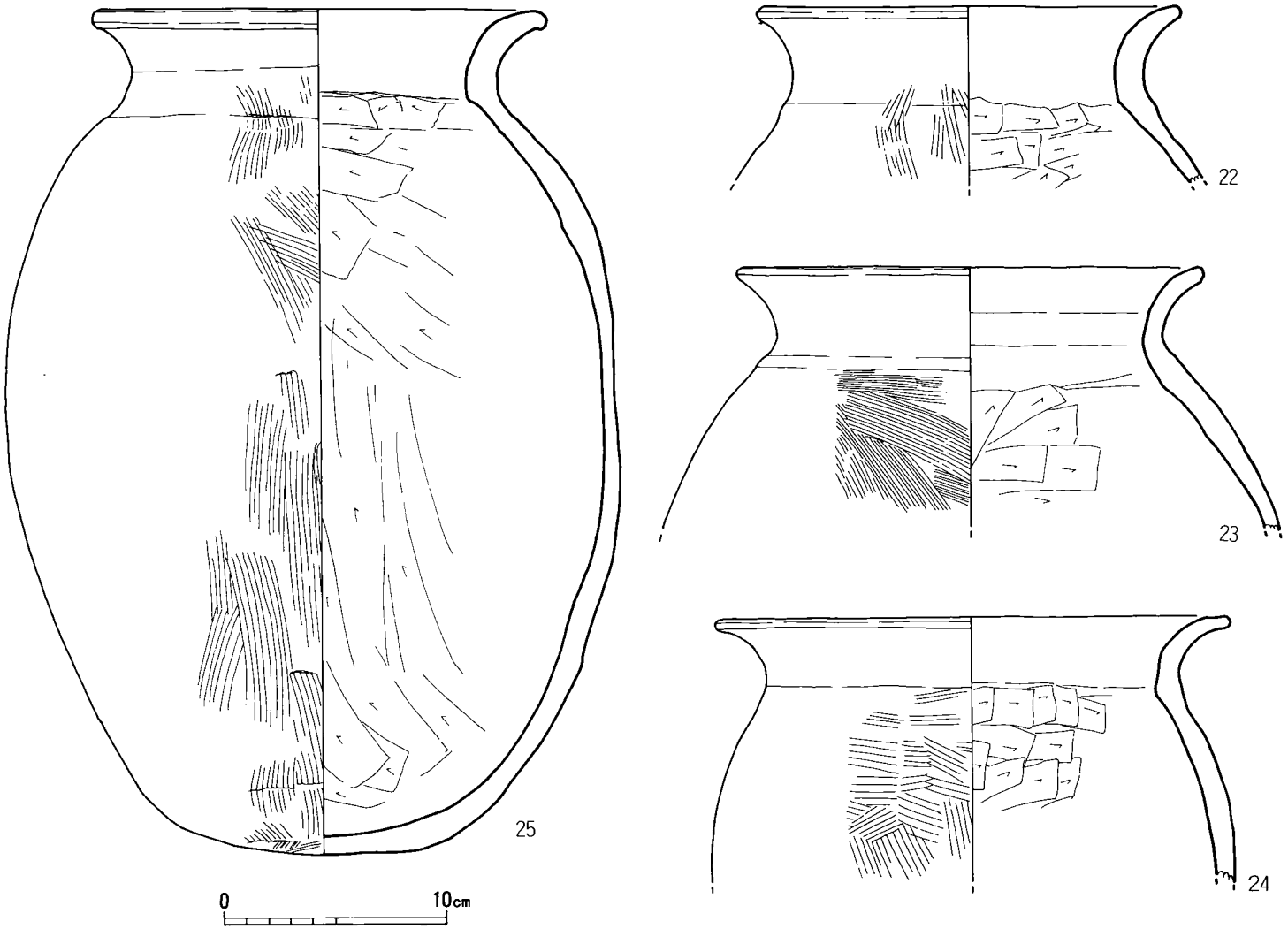
第40図　52号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



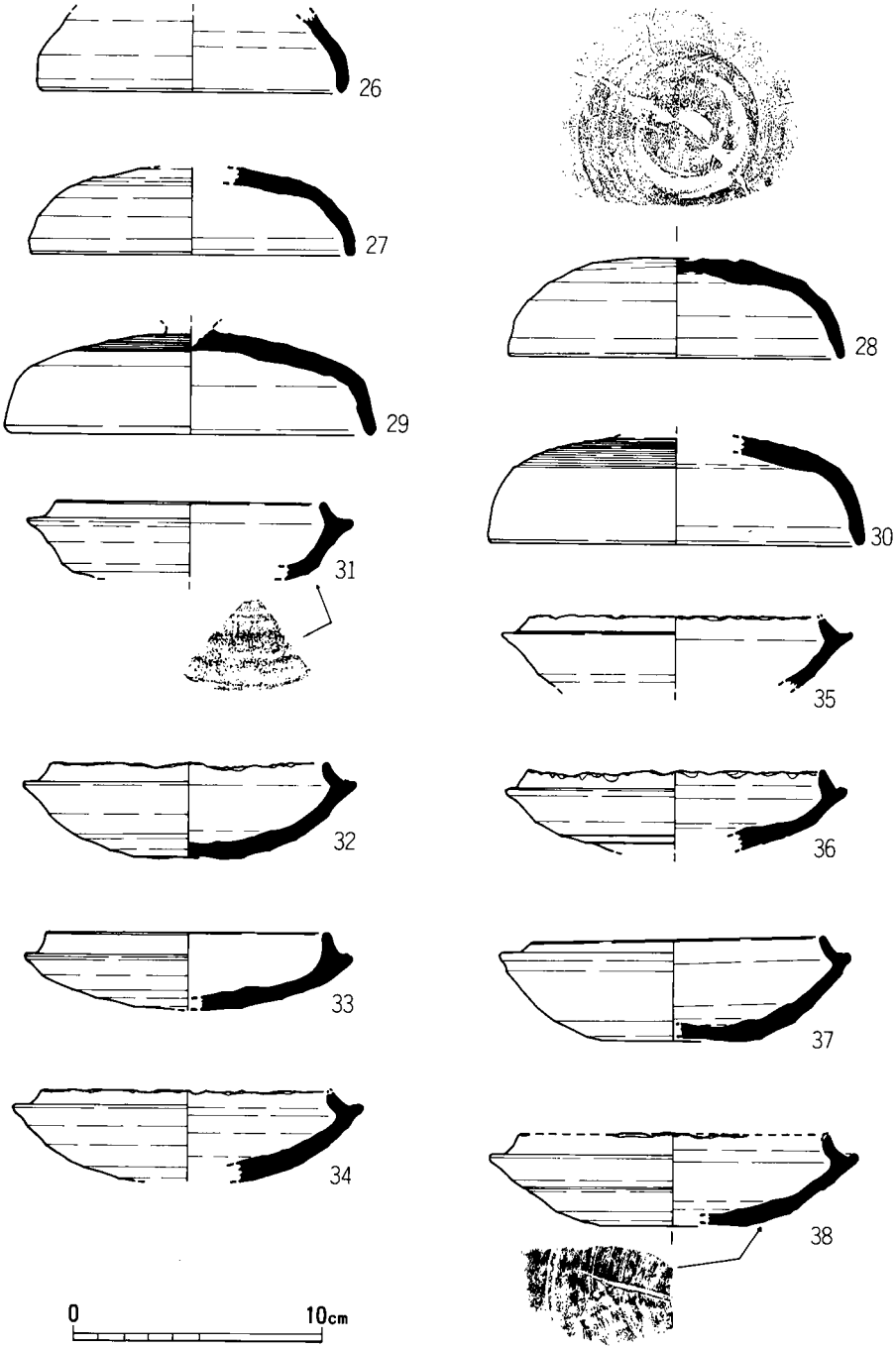
第41図　52号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）

し、やや内傾気味に立ち上がる。胴部外面下半はヘラケズリ、内面はナデである。4の底部には「×」印のヘラ記号がある。色調は黄褐色を呈す。4は口径11cm、器高4.7cm。5の口径11.6cm、器高4.8cm。6は口径12cm、器高4.7cm。7～9は椀で、いずれも底部を欠く。8の内弯度は強い。口径は10.7cm、11.3cm、12cm。10～18、22～25は甕で25を除きいずれも胴部以下を欠損する。口径12cm～22cmと大小様々であるが、口縁部の屈曲が強く、内面に明瞭な稜線が付く甕（10～15、24・25）と稜線が入らない甕に分けられ、後者の口唇部は丸く納められる。外面の胴部はハケ調整、内面の頸部以下はヘラケズリを施す。口径は10～12が12cm、13は13cm、14は14.4cm、15は16.8cm、16は20cm、17は21cm、18は26cm、22は19cm、23は21cm、24は23cmを測る。25は唯一底部まで残った資料である。長胴で平底に近い底部を有す。胴部上半で急にすぼまり、口縁部は直に立ち上がってから強く屈曲し口唇部は口縁部とほぼ平行になる。外面の頸部以下はハケ、内面ヘラケズリだが、口縁部はナデ調整。口径22cm、器高37.9cm。色調は内外面とも褐色で、外面底部付近には煤が付着する。19は甑の把手で、丁寧な面とりを施す。20・21は高坏の脚部。20は脚短部が内弯し、21は外に開く。21の脚部径12.4cm、21は12.6cm。

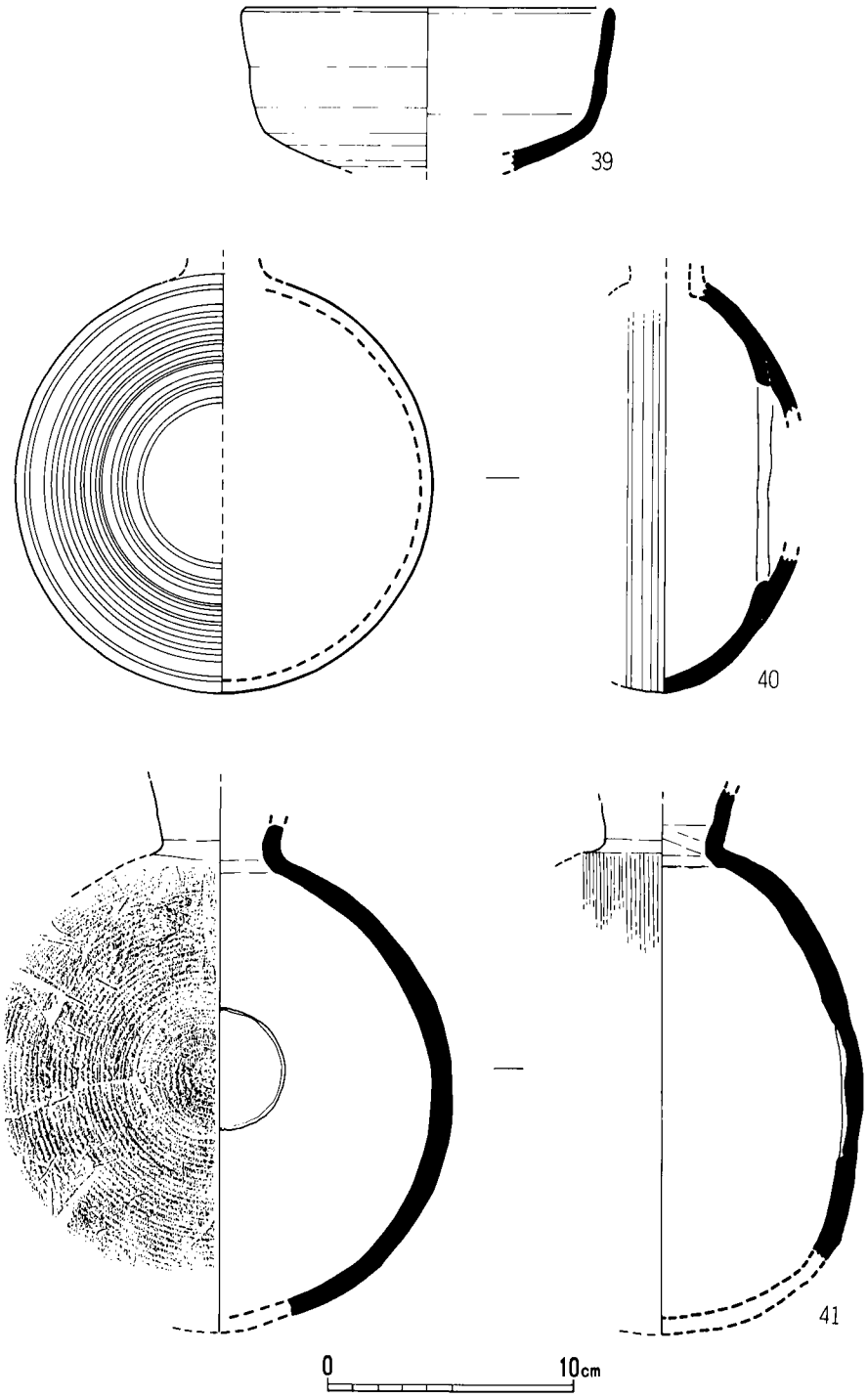
26～41は須恵器で、30までが坏蓋。26・27は口縁部付近でやや直口気味になるが、他はその



第42図　52号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）



第43図　52号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/3）



第44図　52号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/3）

まま広がる器形である。天井部は回転ヘラケズリをそのまま残すものが多いが、29・30はカキ目調整である。28は「×」印のヘラ記号を有す。26は口径12cm、27は13cm、28は13.4cmで器高4.9cm、29は口径14.4cm、30は口径15cmを測る。31～38は坏身。蓋受けの立ち上がりは短く、45°前後の傾きを有す。胴部下半から底部にかけては回転ヘラケズリ。32・34・36・38の口唇部には打ち欠きが見られる。また、31・38の底部にはヘラ記号がある。なお、坏蓋と身のセットは出土状態からは無い。口径は31が10.8cm、32は11.2cm、器高3.75cm、33は11.3cm、34は11.7cm、35～37は11.8cm、38は12.2cmを測る。39はやや外開きになる胴部を持つ鉢。口径16.7cm。40・41は提瓶で、41のカキ目は1cm当たり5本を数える。

鉄器（第194図6・26）6は鉄鏃の茎先端の小片で、長さ2.6cm残る。断面形は長方形を呈し、幅5mm、厚さ3mmを測る。残存部位において木質は確認できない。その他に長さ3cm×幅2cm程の鉄塊が出土しているが、銹化が著しく図示していない。26は長さ4.2cmの棒状の鉄器であるが、銹膨れが著しく湾曲しているため形状は不明。釘になるのであろうか。

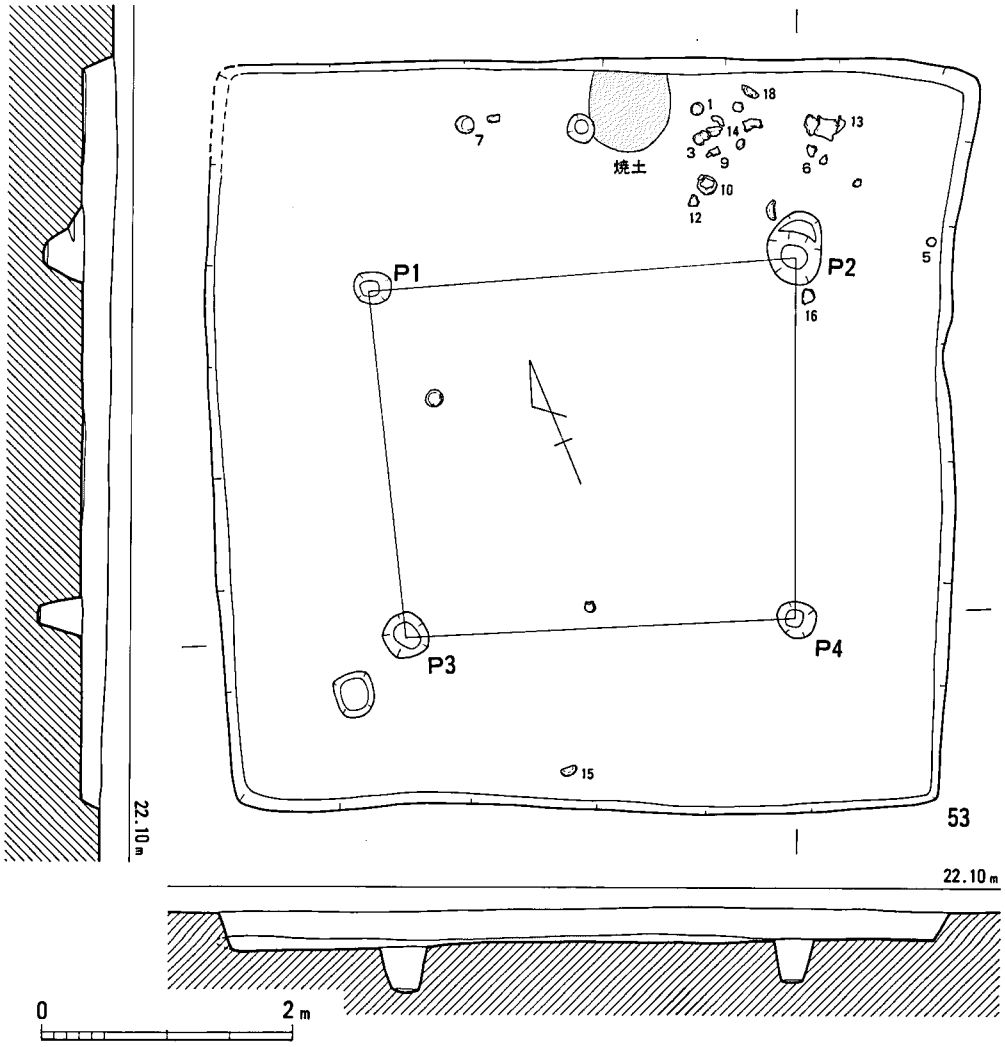
53号竪穴住居跡（図版21　第45図）

調査区中央部のやや西寄りJ-K4-5区に位置し、52号竪穴住居跡の北4mに接し、東西5.9m、南北5.9mの正方形プランの竪穴住居跡である。住居跡の中央部を東西方向に5号溝が走る。北壁のやや東寄りにカマドを持つが遺存度は良くない。主柱穴はP1～P4で深さ30～35cmを測り、P1～P2間3.4m、P1～P3間2.8m。固く締まった床面より土師器としては坏蓋・坏身・鉢・高坏、須恵器としては坏蓋・坏身等が出土。

カマド　住居跡の内側に径70cmほどの焼土面があり、その西側に袖石の抜き跡が1ケ所検出された。

土器（第46・47図1～18）1～13は土師器。1～8は坏身で、胴部中央ないしやや下位に段をもつもの（1～6）と、持たないものに分けられる。7は蓋の可能性が強い。外面の胴部下半にはケズリ痕が残り、1・2の内面には工具による圧痕が見られる。また、1の底部には細い「×」印のヘラ記号がある。1の口径11.5cm、器高4.8cm、2は11.5cm、4.3cm、3は11.7cm、4.3cm、4の口径12cm、5は口径11.6cm、6は口径12.4cm、器高4.2cm、7は口径12.4cm、器高4.4cm、8の口径は13cm。9は薄手で丸い胴部を有す鉢。磨滅して調整等は不明。口径20.8cm。10・13は甕。10は内外面とも頸部以下はヘラケズリを施す。口径15.2cm。13は胴部に張りを持つ器形で、口縁部は強く屈曲する。外面胴部はハケ調整ののち部分的にナデ消す。内面頸部以下はヘラケズリで口縁部はヨコナデ調整。色調は黄褐色を呈し、口径16.8cm。11は甑の口縁部破片でカマドの袖より出土。12は高坏。坏部は外方に直線的に拡がり、外面には黒斑が見られる。脚部は3分の1の箇所から大きく広がる。色調は黄褐色を呈し、坏部径15.1cm、器高11.9cm、脚部径12.7cm。

14～17は須恵器坏蓋。14は天井部に2条の沈線を、16は「×」印のヘラ記号を持つ。17はカ

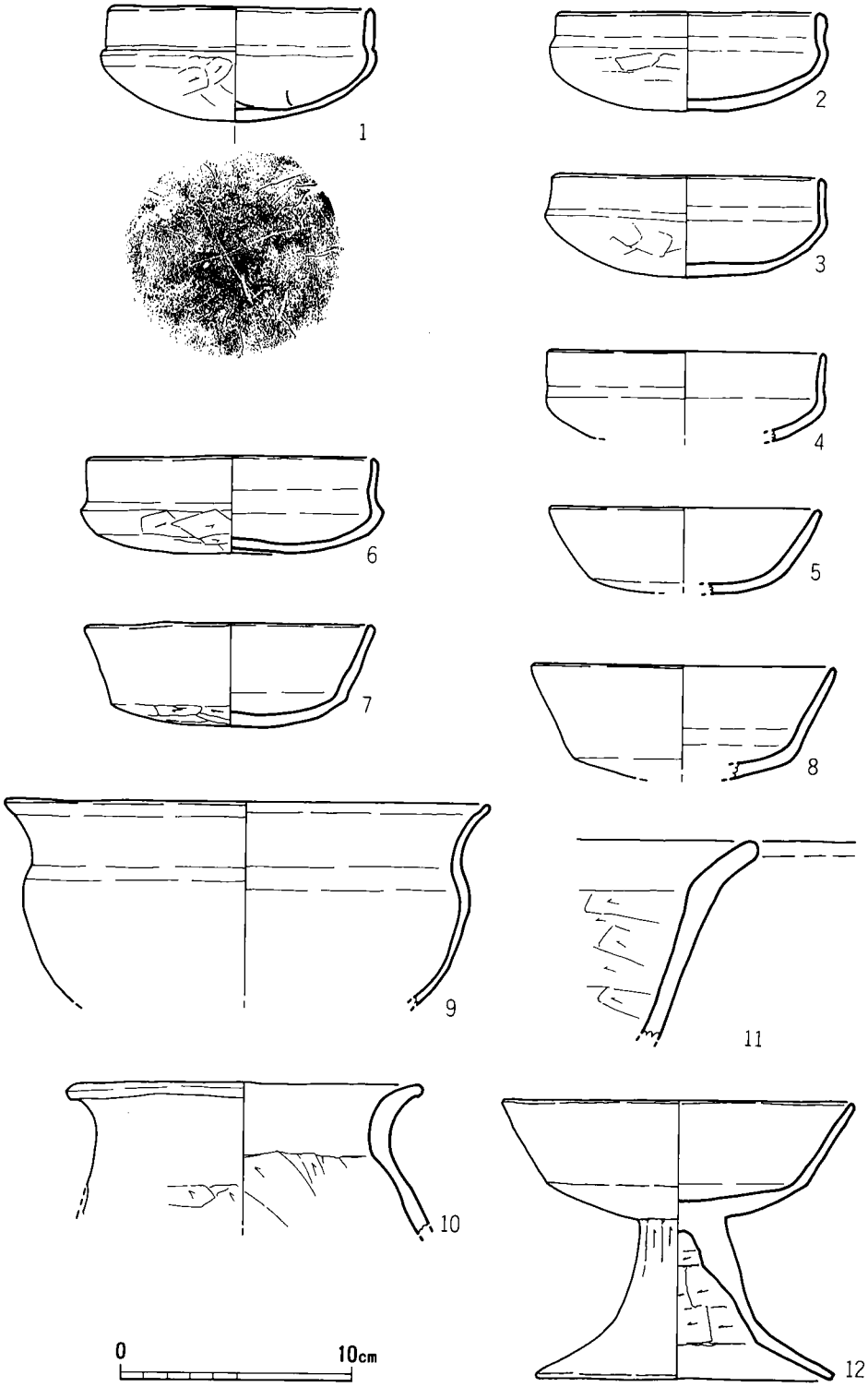


第45図　53号竪穴住居跡実測図（1/60）

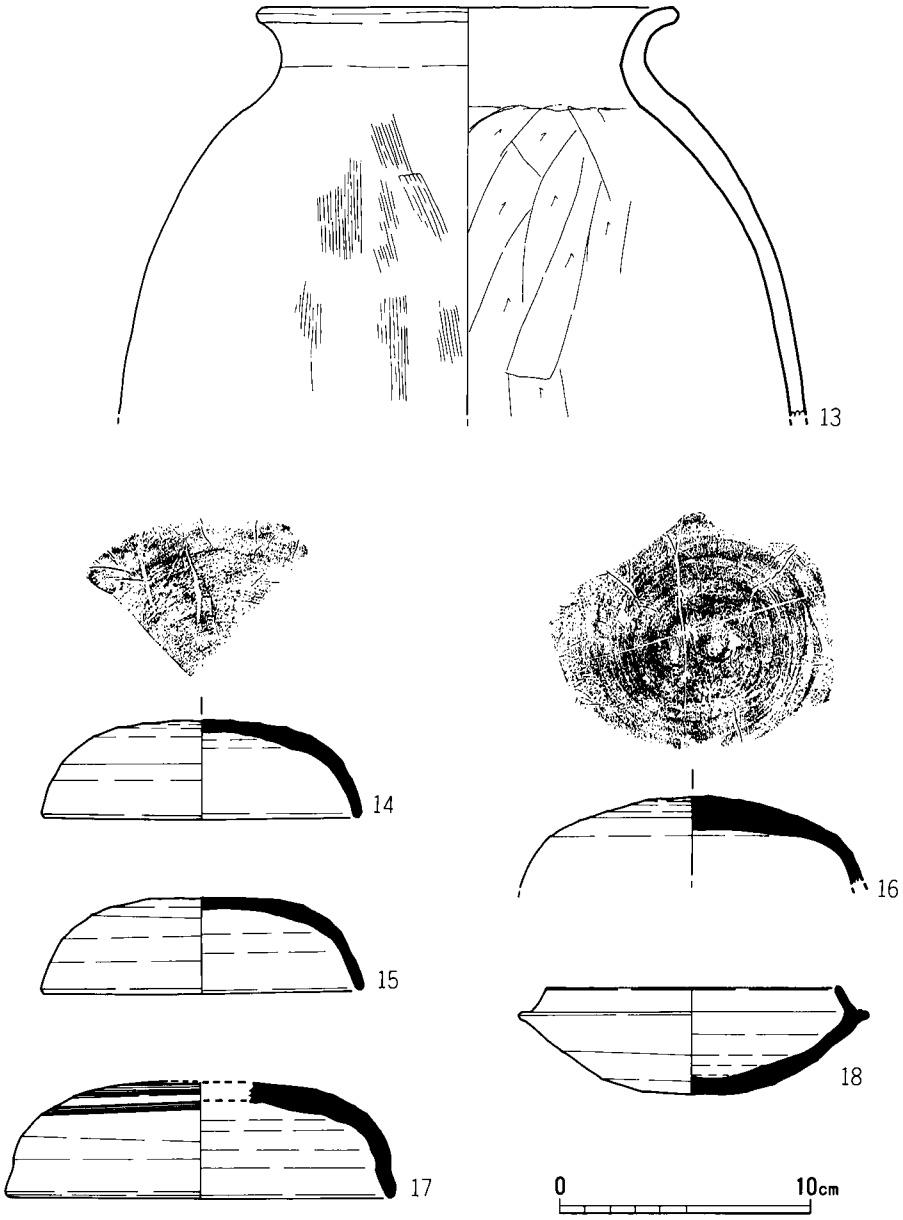
キ目痕が残る。14・15はほぼ同形で口径12.6cm、器高3.8cm。17は口径15cm、器高4.6cm。18は坏身でやや長めの受け部を有す。底部付近に回転ヘラケズリの跡を残す。口径11.6cm、器高4.2cm。4・17は埋土、他は床面より出土。

54号竪穴住居跡（図版22　第48図）

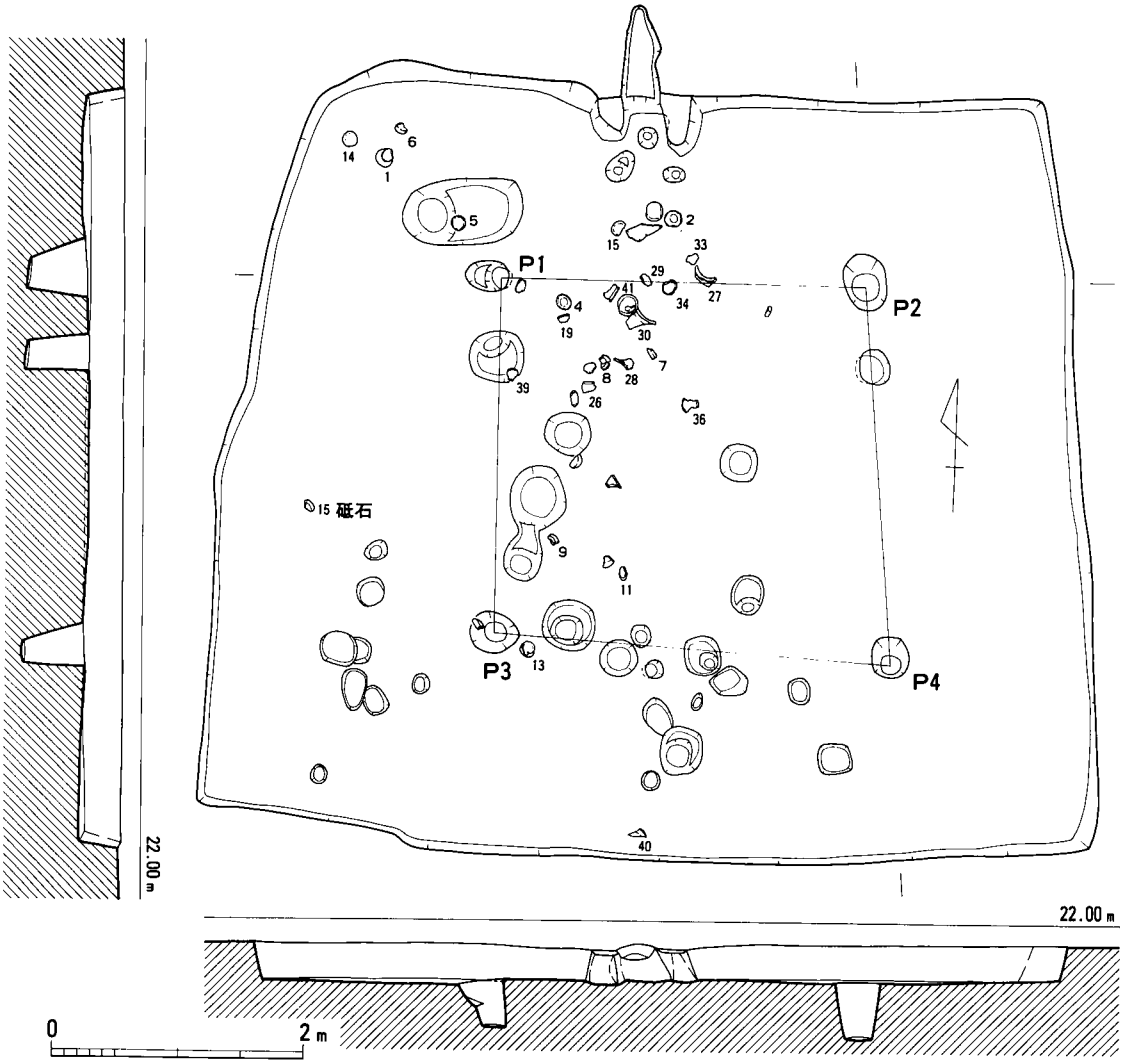
K-L５区に位置し、55号竪穴住居跡に切られ、弥生時代の96号竪穴住居跡を切っている。平面形は台形を呈し、北壁長5.76m、東壁長5.94m、南壁長7.02mと大型の竪穴住居跡である。



第46図　53号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



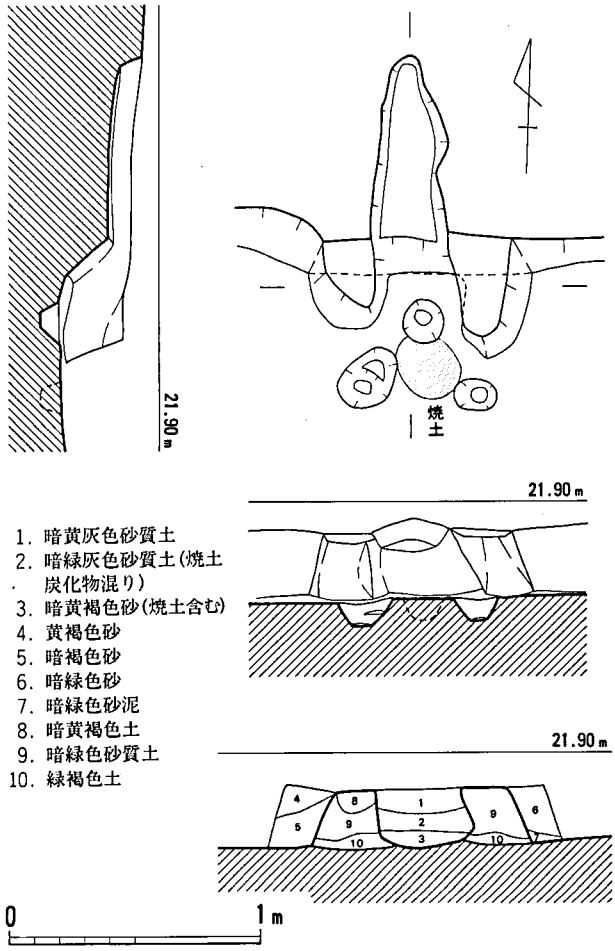
第47図　53号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）



第48図　54号竪穴住居跡実測図（1/60）

遺存状態は割と良好で、壁高は東壁側で32cmを測る。主柱穴はＰ１～４の４本で、径30～40cm前後、深さは40～50cm前後としっかりしている。柱間間隔はＰ１～２間2.91m、Ｐ２～４間3.02m、Ｐ１～３間2.83m、Ｐ３～４間3.16mを測り、主柱穴を結んだ線は方形を呈する。また、Ｐ１とＰ２の30cm南側にはピットがあり、こちらを主柱穴とみなすことも可能であるが、一応先の穴を主柱穴としておく。埋土中および床面からは多くの土器が出土している。

カマド（図版23　第49図）作り付け型で、北壁のやや西寄りに付設している。遺存状態は良



第49図　54号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

好で、袖部・煙道部を留めている。袖部は現状で30cm程の遺存状況であるが、住居壁から42cmの位置に袖石抜き取り痕の小ピットがあることから右袖の長さ42cm、左袖の長さ33cm、焚口幅25cmに復原できる。また、奥壁から9cmの位置に径17cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き去った痕と思われる。火床はこの三つの小ピット間で焼けていた。煙道は長さ72cm、基部幅30cm、残存高8cmで、床面は先端側にすぼまりながら高くなっている。

土器（第50～54図1～43）1～33が土師器である。1は広口壺に「ハ」字形に開く脚部を付けた脚台付壺で、残高12.6cm、復原口径10.4cmを測る。口縁部は球形の胴部から緩やかに開き、口唇部を丸く納めている。器面調整は口縁部から肩部外面にかけて横方向の細かいヘラミガキで、胴下半部外面は縦方向のヘラケズリによる。胴部内面は上半部がハケ目、下半部はナデを施している。2～13は坏で、体部の屈曲部から外反して開くもの（2～10）と直立するもの（11～13）とがあり、底部が丸いもの（3～6・13）と平坦面を残すもの（2・10）がある。器面調整はいずれも口縁部ヨコナデ、体部外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。2～6は口径が12.0～12.6cm、器高4.0～5.0cm程で、13は器高5.0cm、口径10.0cmを測る。14～17は丸底の椀で、口縁部はやや内湾する。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。器高は14が5.0cm、15は4.5cmで、口径は14が11.3cm、15は10.8cmを測る。坏・椀ともに胎土は精良で、色調は黄橙色ないしは橙褐色を呈する。18・19は小型の甕で、19の頸部は肥厚する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリによる。両者とも口縁部外面には煤が遺存している。口径は18が11.0cm、19は13.2cmに復原した。20～22は口径が14cm前後の中型甕。

20の口縁部は外反する程度で、頸部の締まりも悪い。21・22の口縁部は「S」字形に屈曲し、頸部の締まりはよい。23～31は口径が18～22cm程の大型甕で、24～26は口縁端部がシャープで、他は丸く納めている。肩部が張るもの（26）と撫肩のもの（25・28～30）と長胴のもの（31）とがある。器面調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。また、頸部内面のヘラケズリによる稜は不明瞭で、口縁部も肥厚してしない。32は鉢で、口縁部は緩く内湾する。口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデ調整による。砂粒を殆ど含まない精良な胎土を用いており、色調は黄橙色を呈する。33は甑で、口径は26.8cmに復原した。口縁部は大きく開き、太めの取っ手を貼付している。

34～43は須恵器である。34は器高が低く、口唇部が平坦であることから短頸壺の蓋になるものと思われる。口径は11.2cmに復原した。35～39は坏蓋で、天井部はドーム状を呈する。いずれも口唇部は丸く納めている。38は器高4.3cm、口径13.8cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。また、34～37はヘラ記号を施している。40～42は坏身で、立ち上がりは短く内傾する。40は器高3.6cm、口径11.5cm、受部径14.0cmを測る。41の口唇部は焼成後に打ち欠いている。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。43は高坏の脚部破片で、端部は爪先立つ。上部外面カキ目で、全体にしぼり痕がみられる。当竪穴住居跡の時期は6世紀末頃と考えられる。

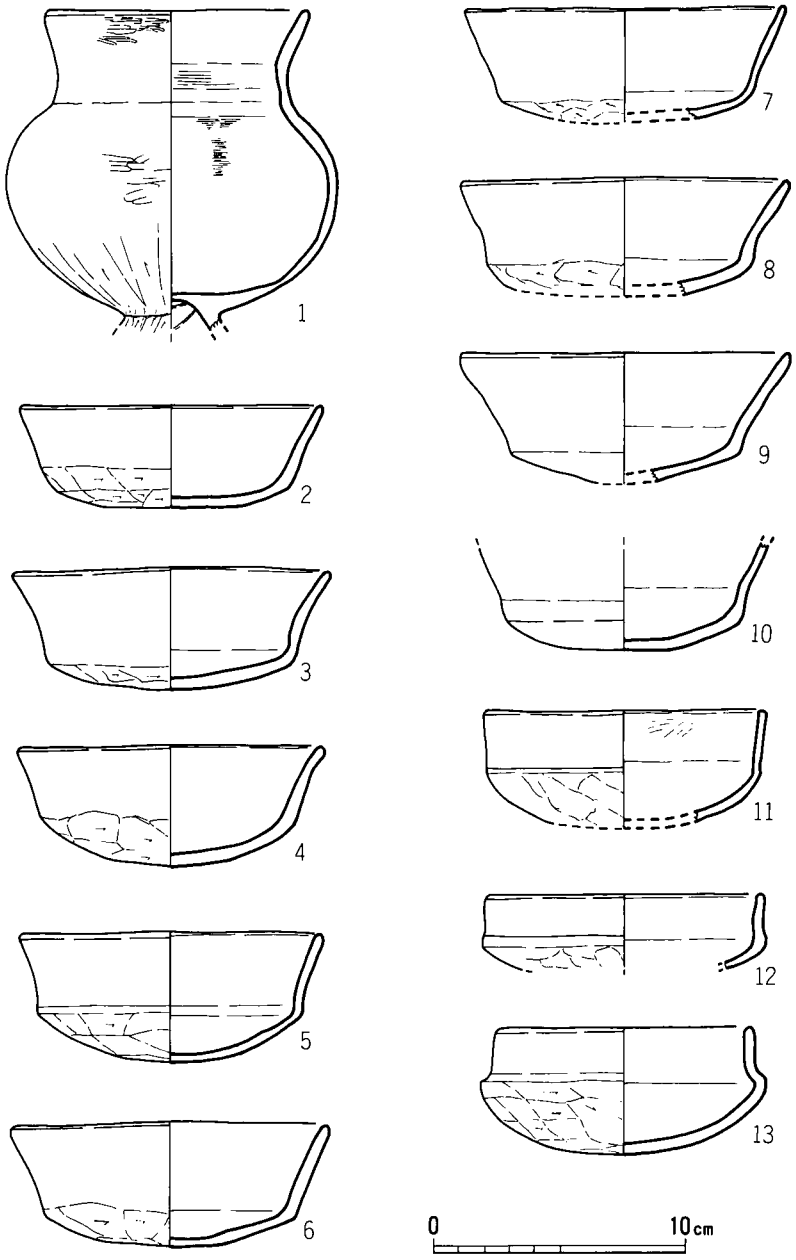
石器（第189図15）15は頁岩製の砥石で、欠損した一端以外はほぼ全面が使用される。

55号竪穴住居跡（図版23　第55図）

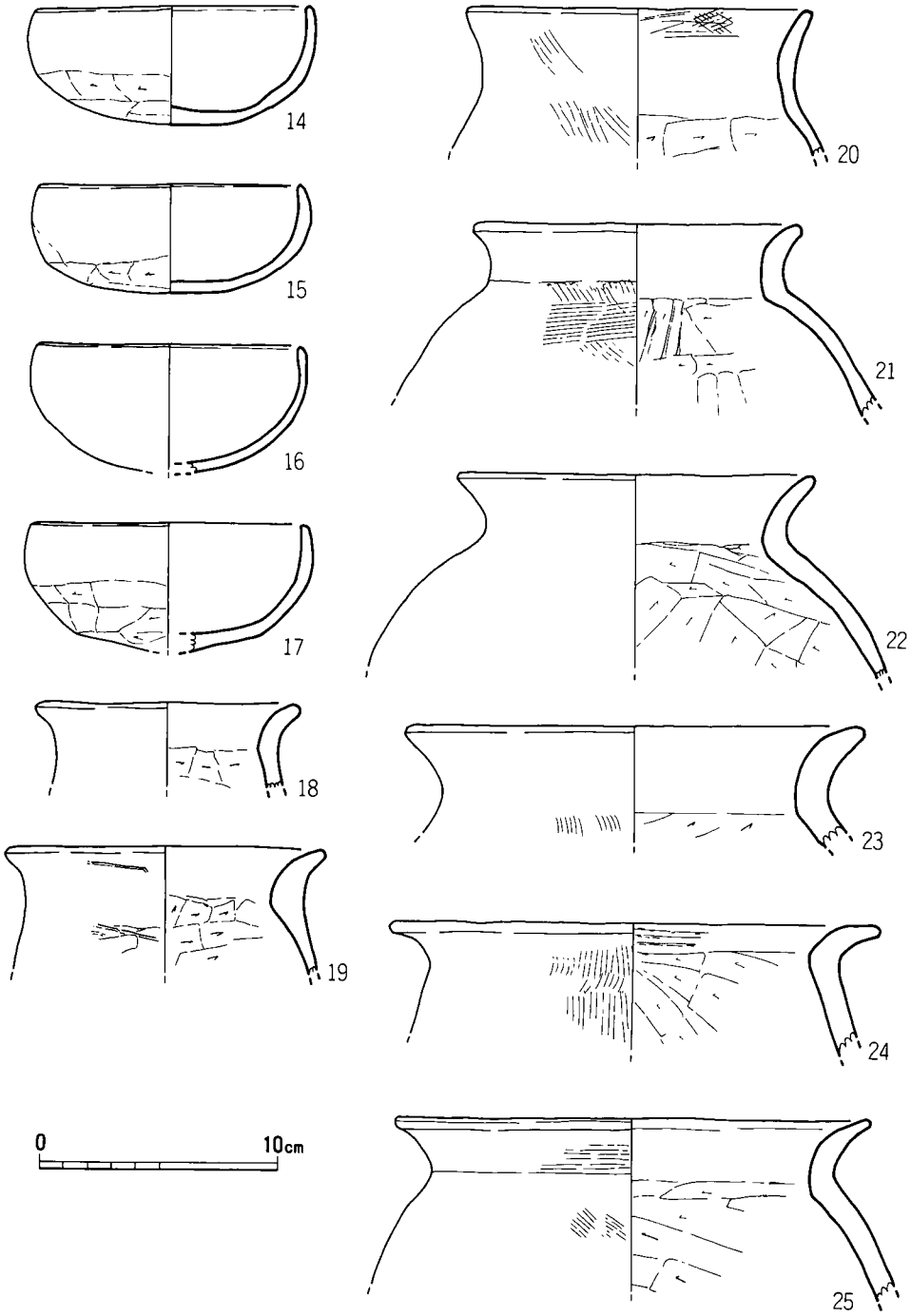
K5－6区に位置し、5号掘立柱建物跡に切られ、54号竪穴住居跡および弥生時代の39号土坑を切っている。平面形は長方形を呈し、長軸を東西に取る。北壁長4.90m、西壁長4.46mで、深さは北壁側で27cmを測る。主柱穴はP1～4の4本で、径20～30cm前後、深さは23～50cm前後である。柱間間隔はP1～2間2.23m、P2～4間2.18m、P1～3間2.24m、P3～4間2.48mを測り、主柱穴を結んだ線は不整方形を呈する。また、西壁中央には116cm、深さ23cmの屋内土坑があり、埋土中から土器・土製品・石製品が出土している。

カマド　壁体・煙道は留めていないが、カマドの残骸かと思われる焼土がP1の南側にみられる。東壁寄りには大きさ・深さの同じ小ピット（▲印）があり、これを袖石の抜き取り穴とみなしてカマドとした。遺存状態は極めて悪いが、住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型になる。規模的には袖石抜き取り穴から袖部の長さは右袖が76cm、左袖が74cm、焚口幅50cmに復原できる。また、支脚に関しては、抜取り痕がみられないことから土製品若しくは土器を転用していたものであろう。

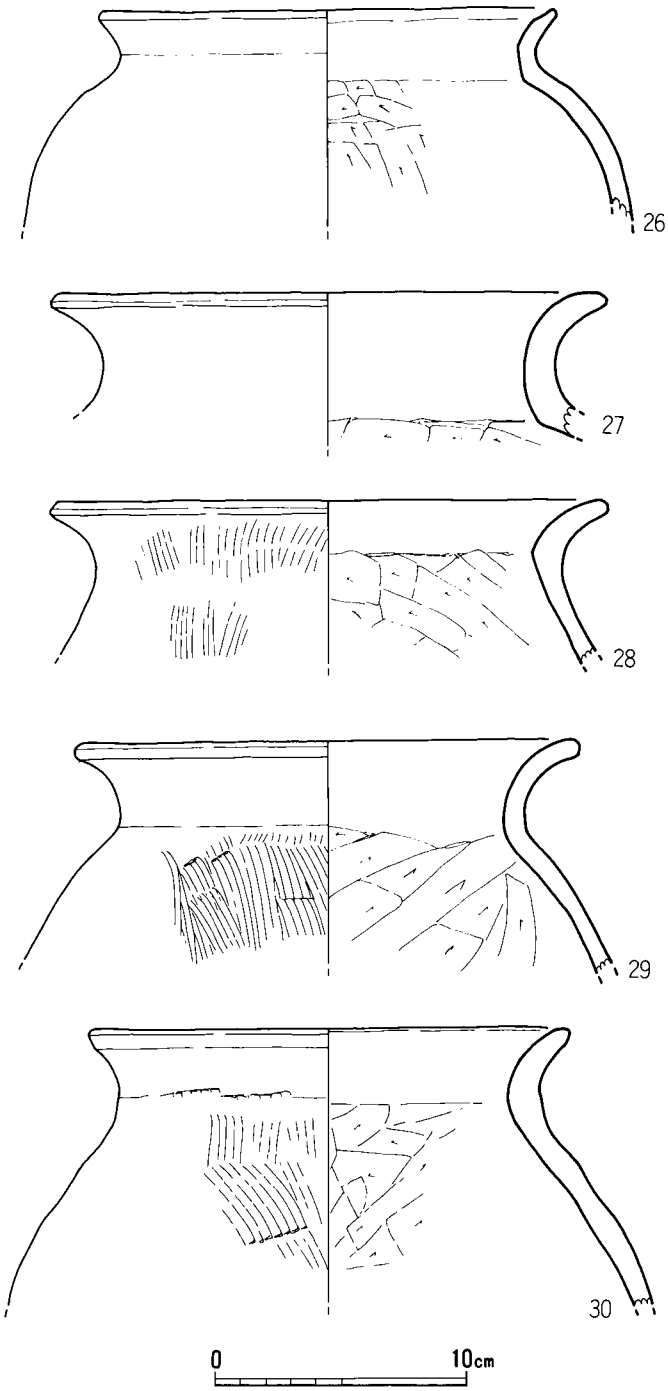
土器（第57図1～5）1～5は土師器。1～3は坏で底部を欠く。口縁部は体部の屈曲部から開くもの（1）と直立するもの（3）と内傾するもの（2）がある。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。胎土は精良で、橙褐色を呈する。4は椀



第50図　54号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第51図　54号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)



第52図　54号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）

で、底部を欠くものの丸底を呈するものと思われる。口唇部はシャープである。5は復原口径14.0cmの小型甕で、口縁部は緩く外反する。口縁部内面には煤が遺存している。当竪穴住居跡の時期は6世紀末頃であろう。

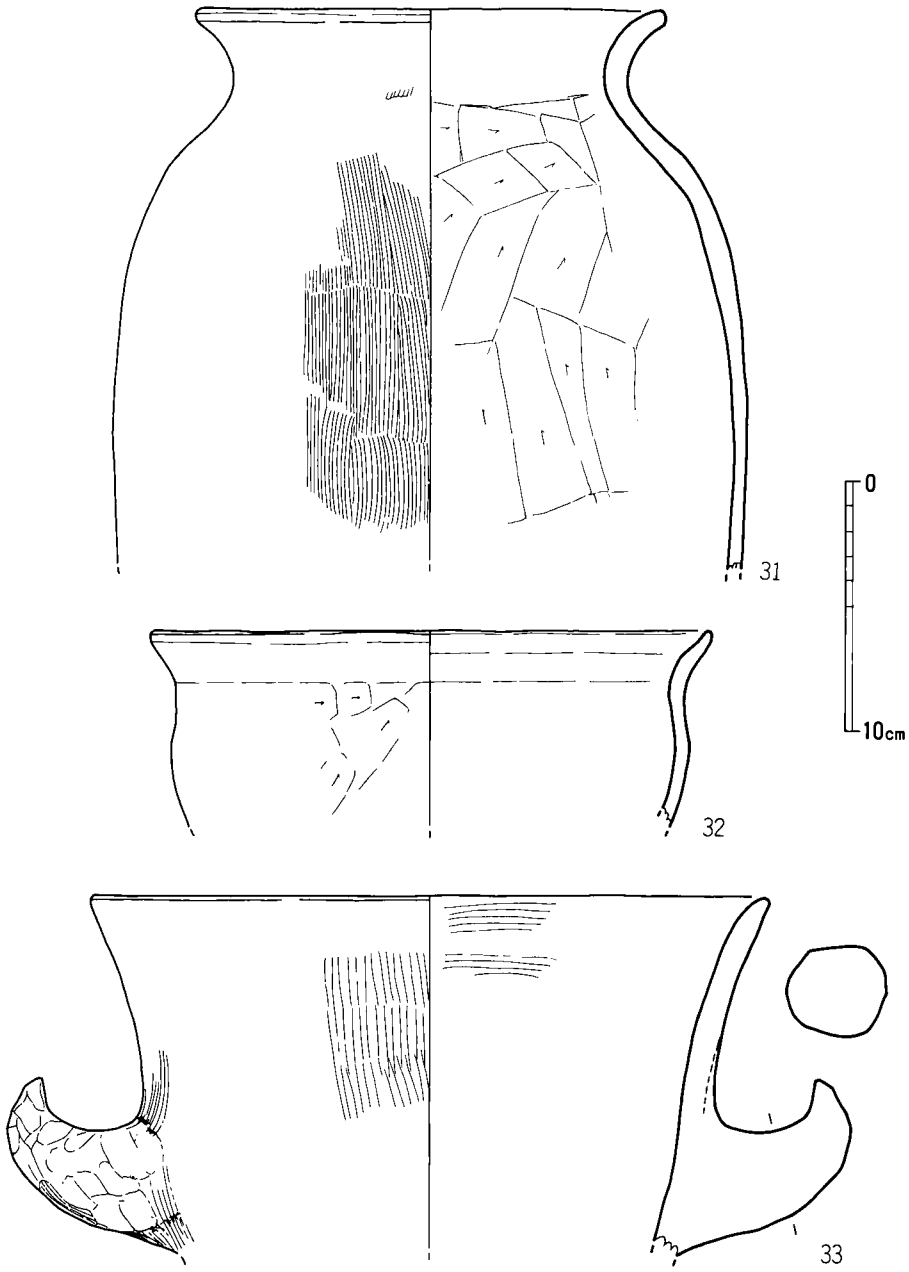
土製品（第57図6）投弾状の土製品で、形態は弥生時代に出土するラクビーボール状ではなく、倒卵形を呈す。表面には整形時の凹面が目立つ。長さ3.6cm、径2.2cm、を測る。

石製品（第189図7）用途および石材不明の石製品。全面を研磨してこのような棒状の形態になっているが、この研磨が製作によるものか、あるいは使用によるものかは不明。

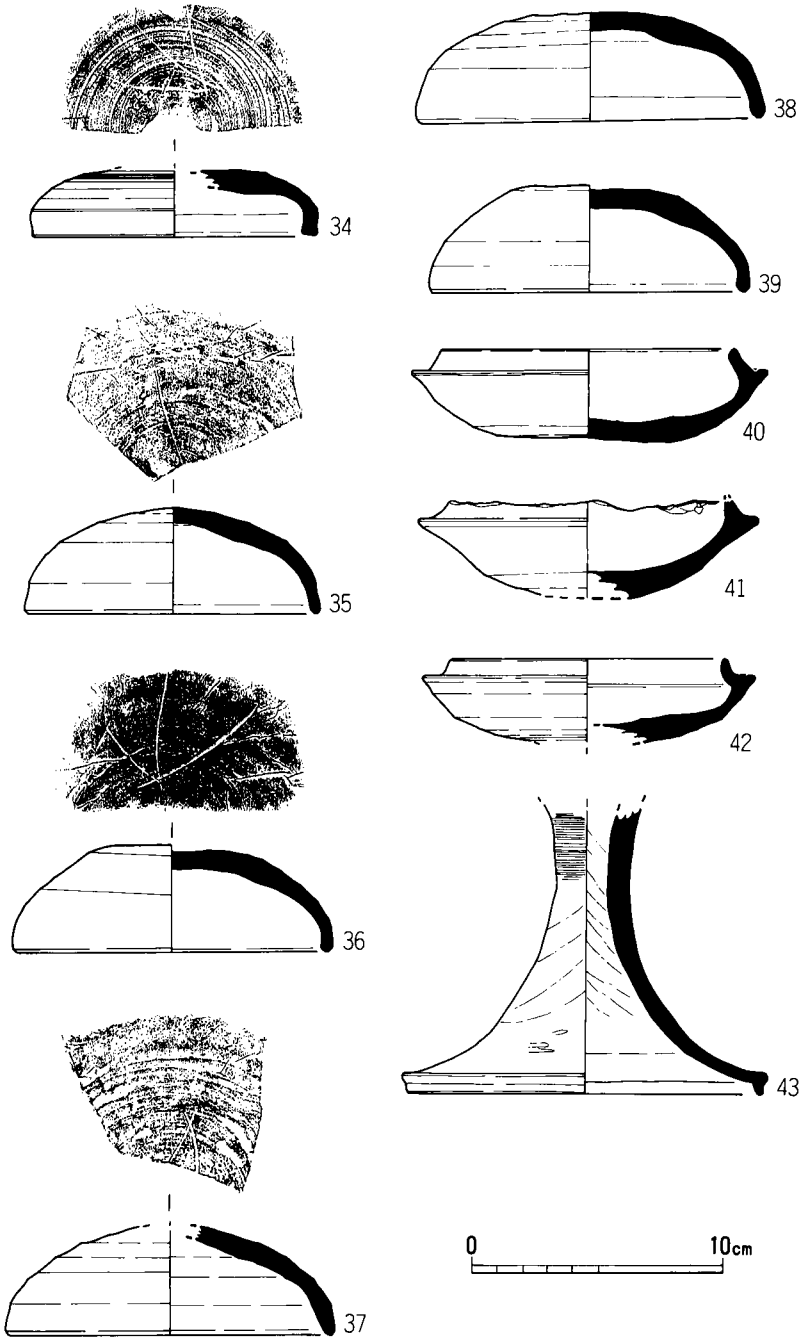
56号竪穴住居跡

（図版24　第56図）

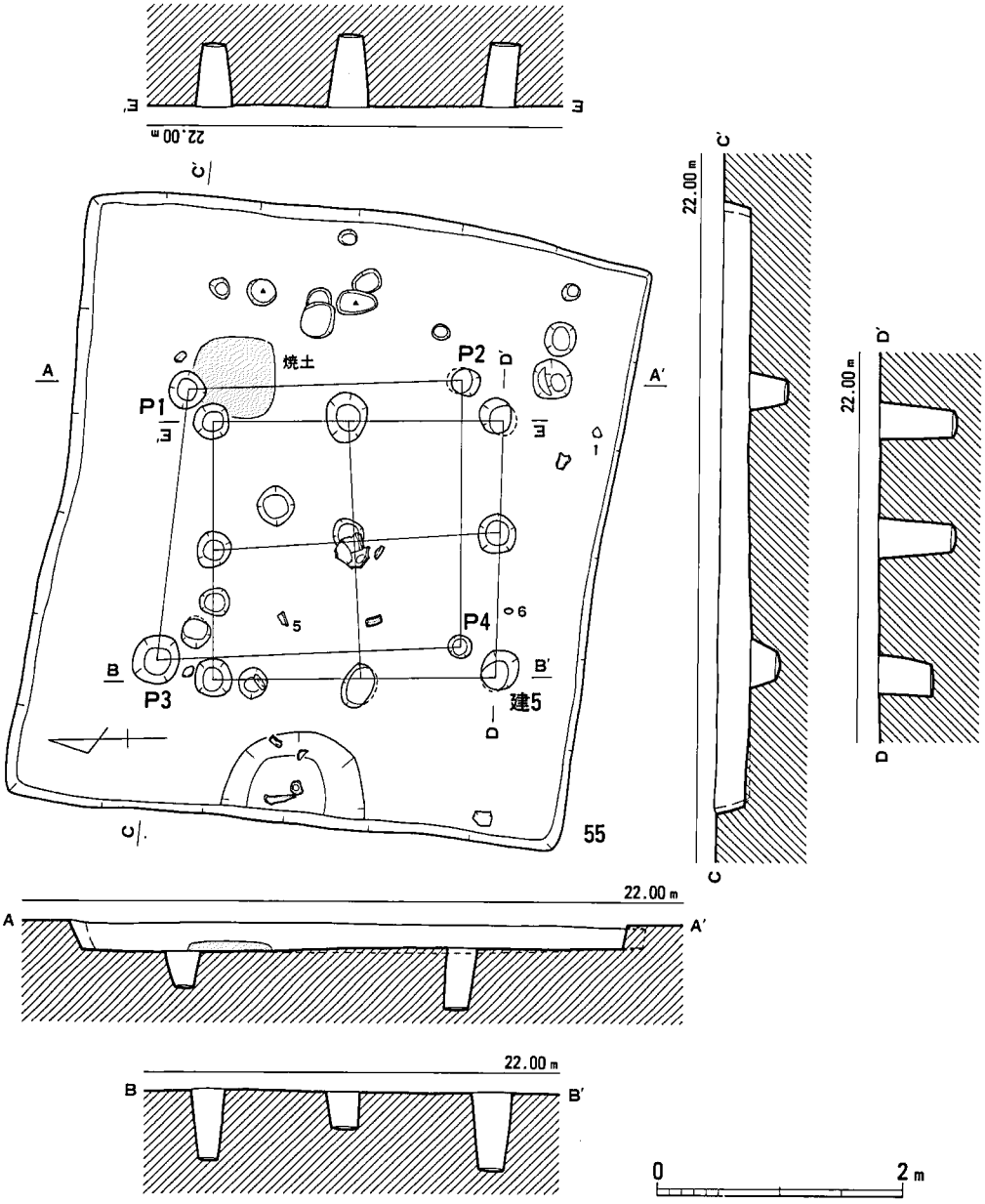
K6区で55号竪穴住居跡の0.6m南側に位置し、弥生時代の39号土坑を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、西壁長3.32m、北壁長3.23m、東壁長2.94mを測り、長軸を南北方向に取る。壁高の遺存状態は悪



第53図　54号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/3）

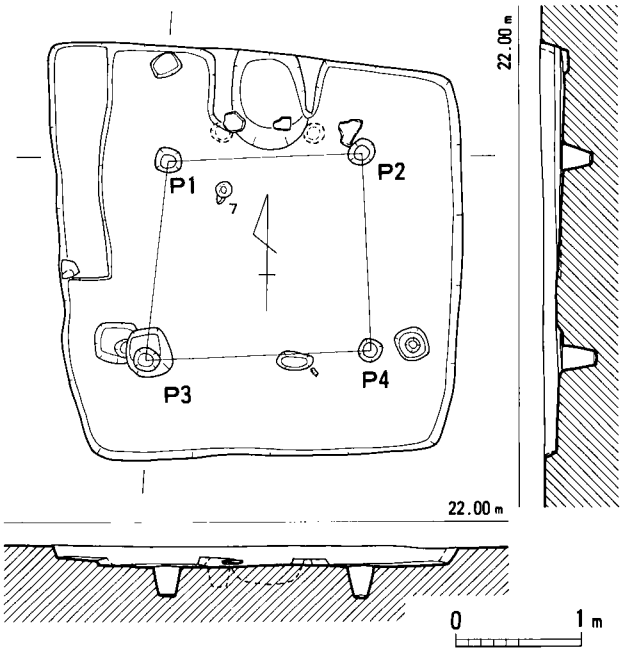


第54図　54号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/3）



第55図　55号竪穴住居跡・5号掘立柱建物跡実測図（1/60）

く、北壁側で14cmを留めるにすぎない。また、西壁側には長さ185cm、幅46cmのテラスを付設している。当住居は小型であるが、竪穴内部に主柱穴を有している。主柱穴はＰ１～４の４本で、径20cm前後、深さは25cm前後である。柱間間隔はＰ１～２間1.54m、Ｐ２～４間1.57m、Ｐ１～３間1.59m、Ｐ３～４間1.79mを測り、主柱穴を結んだ線はほぼ方形を呈する。土器が出土しているが、埋土上位の出土である。

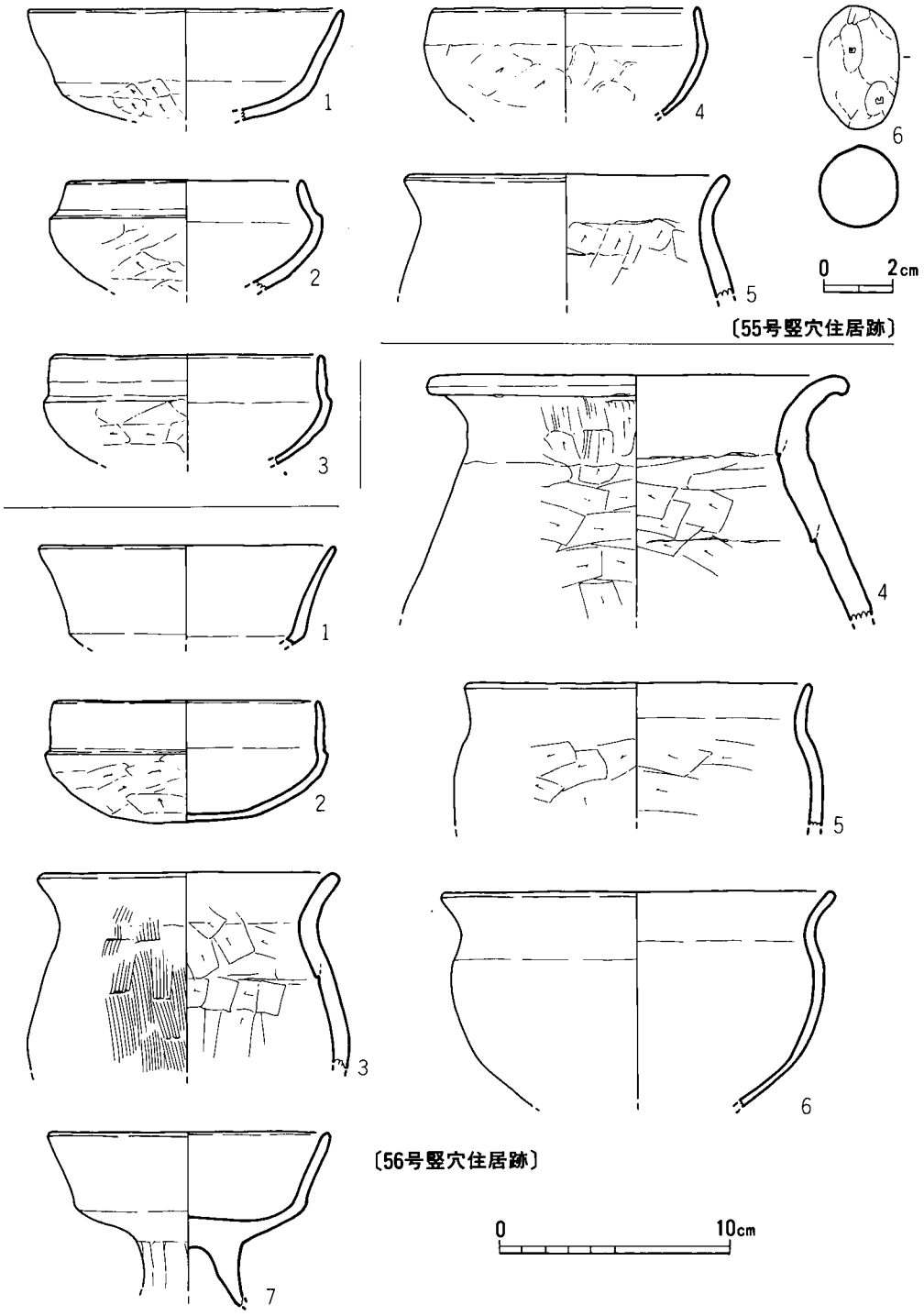


第56図　56号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド　作り付け型で、北壁中央に付設している。一応、袖部を留めているものの遺存状態は思わしくない。両袖部の先端には袖石の抜き取り穴があることから、右袖は長さ67cm・基部幅31cm・残存高４cmで、左袖は長さ74cm・基部幅37cm・残存高７cmを測る。焚口幅は55cmで、火床は床面を一段掘り窪めている。支脚は遺存していないが、抜取り穴がみられないことから土製品若しくは土器を転用していたものかと思われる。

土器（第57図１～７）すべて土師器。１・２は坏で、１は底部を欠く。口縁部形態は体部の屈曲部から開くもの（１）と直立するもの（２）とがある。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。胎土は精良で、黄橙色を呈する。２は器高5.2cm、復原口径11.4cm。３・４は甕で、３は復原口径が13.0cmの小型品で、４は18.0cmの大型品。調整は３が口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデによるのに対し、４は体部外面もヘラケズリを施している。５・６は鉢で、５の口縁部は直立気味に立ち上がるが、６は「く」字形に屈曲する。５は４の甕同様、体部外面にもヘラケズリを施している。口径は５が15.0cm、６は17.0cmに復原した。７は高坏の坏部破片で、復原口径は12.2cm。口縁部は体部から緩やかに開き、口唇部を丸く納めている。坏部と脚部の接合部は器肉が1.3cmと厚い。７を除き埋土上層の出土である。当竪穴住居跡の時期は、６世紀後半～末頃であろう。

鉄器（第194図10）10は現状を留めない程銹化が著しく、現存長5.5cm、最大幅1.3cmを測る。断面形が逆三角形状を呈し、図示した下側に刃部が認められるので刀子として実測した。刃部幅は4.5cmで、茎部を欠損する。



第57図　55・56号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図（1/3　土製品は1/2）

57号竪穴住居跡（図版24　第58図）

K６－７区に位置し、59号竪穴住居跡の南壁を切っている。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、北壁長4.14m、東壁長3.32m、西壁長3.72m、残存壁高15cmを測る。主柱穴はＰ１～４の４本で、径は30cm前後、深さは８～50cmとばらつきがある。柱間間隔はＰ１～２間1.69m、Ｐ２～４間2.23m、Ｐ１～３間2.03m、Ｐ３～４間1.51mを測り、主柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。埋土中からは若干の土器が出土している。

カマド　西壁中央から40cm程離れて45×50cmの焼土面を検出した。これがカマドの火床と考えられるが、遺存状態は極めて悪く、袖部・煙道は遺存していない。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型になる。支脚に関しては、抜取り痕がみられないことから土製品若しくは土器を転用していたものであろう。

土器（第59図１～３）１・２は土師器である。１は体部の屈曲部から口縁部が直立する坏で、口径は11.8cmに復原した。割と精良な胎土で、色調は黄橙色を呈する。２は鉢とも甕ともつかない形態であるが、器高がさ程高くならないようなので一応鉢としておく。口縁部は「S」字形に屈曲し、復原口径は16.0cmを測る。磨滅により器面調整は判然としない。

３は須恵器の坏蓋で、器高3.8cm、復原口径11.8cm。ドーム状を呈し、外天井部には「―」のヘラ記号を付している。当竪穴住居跡の時期は６世紀末頃であろう。

59号竪穴住居跡（図版24　第58図）

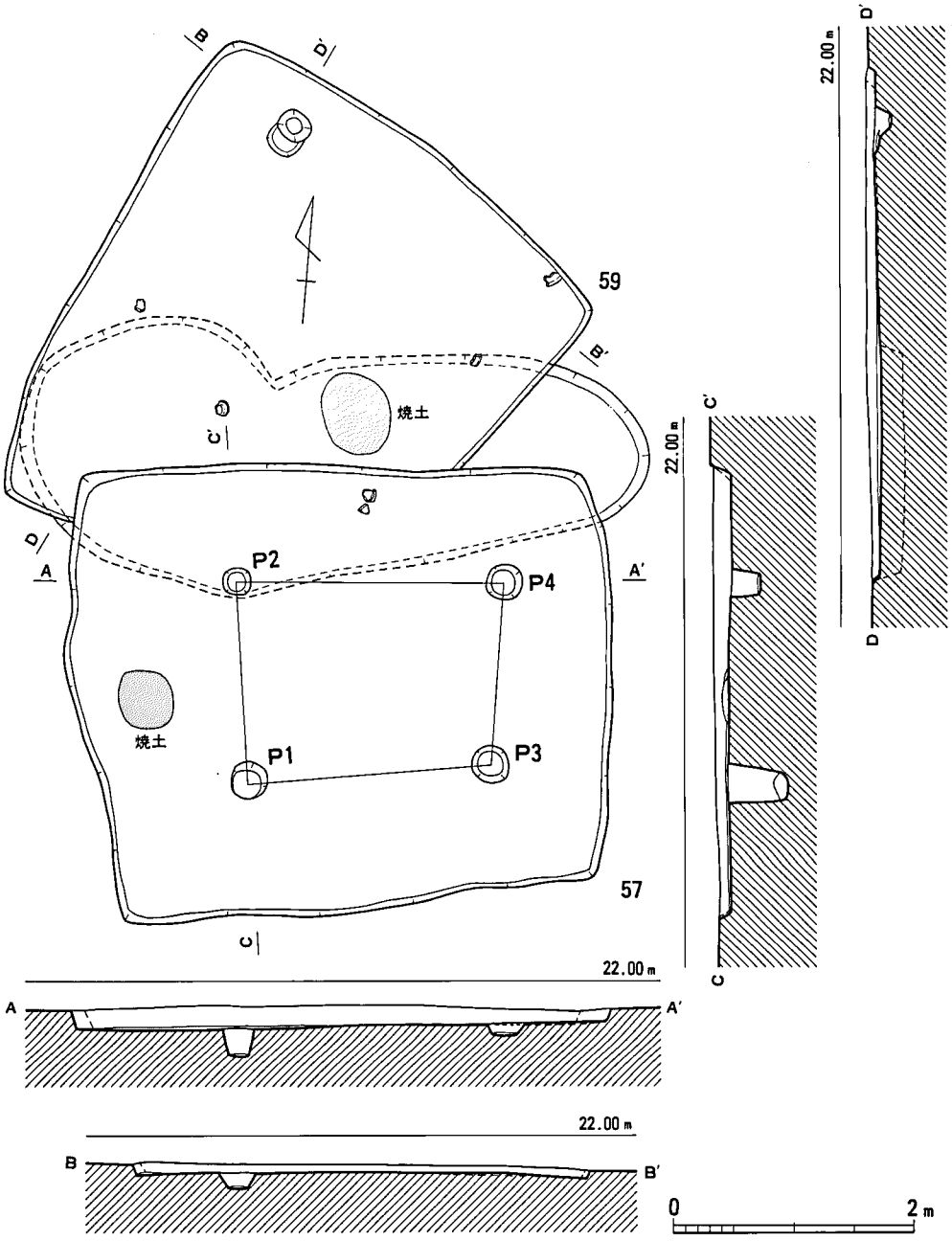
K６区に位置し、57号竪穴住居跡に南壁隅側を切られる。また、床面下層には楕円形状のＰ481があり、当竪穴住居跡の１m北側には56号竪穴住居跡が位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、北西壁長4.22m、北東壁長3.74mで、残存壁高は７cmと削平が著しい。北側隅部に径25cm程のピットがあるが、これ１個のみであり、主柱穴は判然としない。埋土中およびカマド内から土器や管玉等が出土している。

カマド　北東壁から60cm程離れて70×60cmの焼土面を検出した。これをカマドの火床とした場合、住居壁から焚口先端まで130cm離れていることになり、離れすぎのきらいがあることからカマドとはみなし難い状況にある。

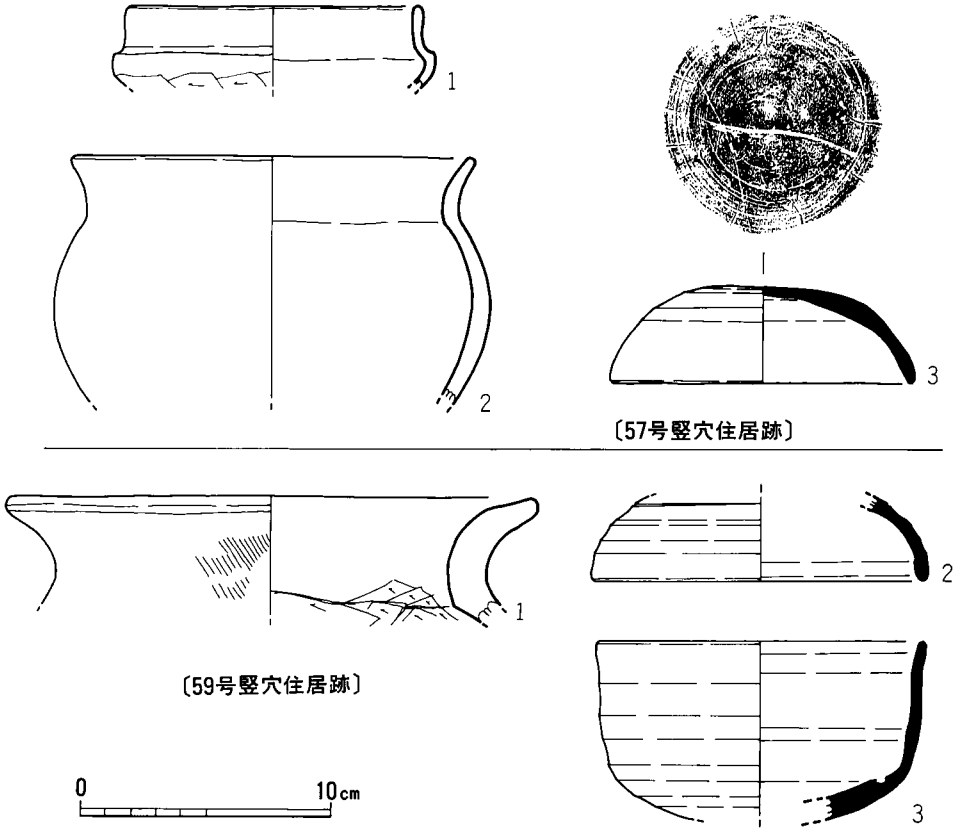
土器（第59図１～３）１は土師器大型甕の口頸部破片で、口縁部は大きく屈曲する。口径は21.0cmに復原した。

２・３は須恵器である。２は坏蓋の口縁部破片で、復原口径は13.0cm。口縁端部はやや肥厚し、端部を丸く納めている。３は深めの椀で、口縁部は体部から直線的に立ち上がる。底部を欠損するが、推定器高7.3cm、復原口径12.8cm程であろう。口縁部から体部内外面にかけて回転ナデ、外底部回転ヘラケズリ調整による。当竪穴住居跡の時期は、６世紀後半～末頃であろう。

石製品（第189図２・６）２は深緑色を呈する碧玉製管玉。長さ16mm、太さ4.0mm。６は用途



第58図　57・59号竪穴住居跡実測図（1/60）



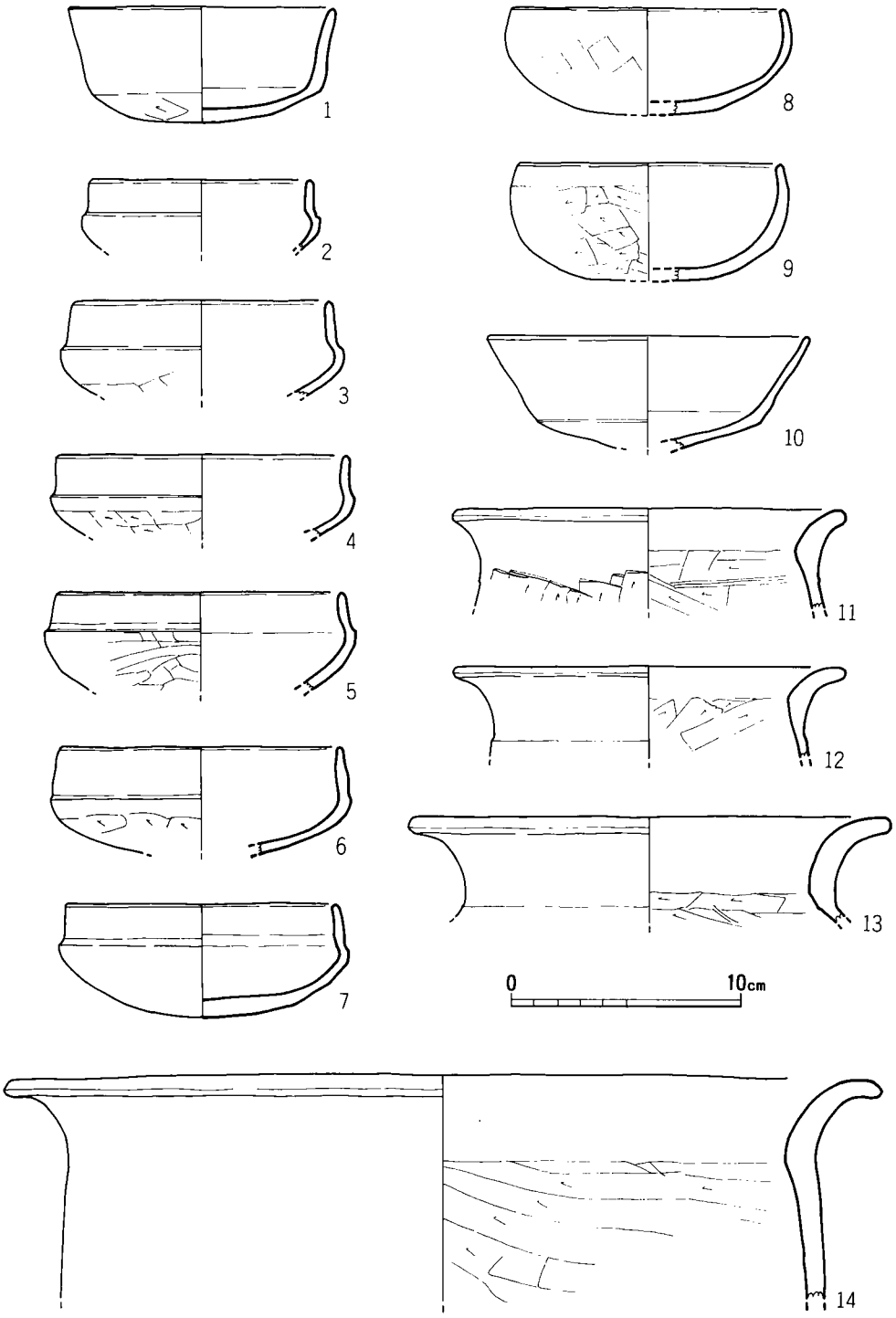
第59図　57・59号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

および石材不明の石製品。全面を研磨してこのような楕円形状の形態になっているが、この研磨が製作あるいは使用によるものかは不明。

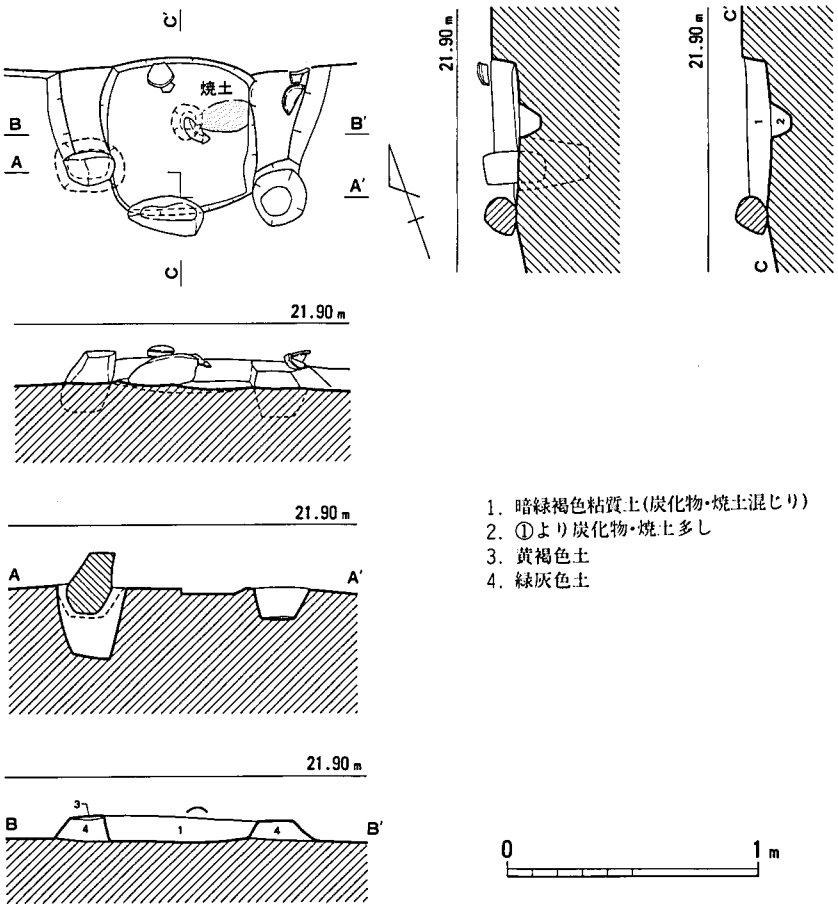
60号竪穴住居跡（図版22　第39図）

J５区に位置し、52号竪穴住居跡を切っている。当竪穴住居跡は52号竪穴住居跡を掘り下げていた時に気づいたもので、結果として遺存状態が悪くなってしまった。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長3.54m、東壁長3.28mを測る。主柱穴はＰ１～４の４本で、径30～40cm前後、深さ８～21cmとばらつきがある。柱間間隔はＰ１～２間1.87m、Ｐ２～４間3.22m、Ｐ１～３間3.19m、Ｐ３～４間2.51mを測り、主柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。埋土・カマド中からは若干の土器が出土している。

カマド（第61図）作り付け型のカマドで、北壁のやや西側に付設している。遺存状態は割合に良好で、両袖部を留めている。右袖は長さ39cm・基部幅33cm・残存高８cmで、先端には袖石



第60図　60号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第61図　60号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

の抜取り穴がある。左袖は長さ32cm・基部幅28cm・残存高７cmを測り、先端には袖石が遺存している。火床は床面を一段掘り下げたもので、焚口幅は56cmと広めである。奥壁から16cmの位置に径14cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き去った痕と思われる。また、焚口部には長さ30cmの河原石が据えてあり、これが右袖石かと思われる。カマド内からは土師器坏片・高坏脚部、右袖の上部埋土中からは須恵器坏蓋片・土師器甕の小片などが出土している。

土器（第60・62図１～17）１～14が土師器である。１～７は坏で、体部の屈曲部から外反して開くもの（１）と直立するもの（２～７）とがある。器面調整はいずれも口縁部ヨコナデ、体部外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。１は器高5.0cm、口径11.4cm。７は器高4.9cm、復原口径11.8cm。８・９は丸底の椀で、口縁部はやや内湾する。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。器高は８が4.6cm、９は5.0cmで、口径は14が11.8cm、15は11.5cmに復原した。坏・椀ともに胎土は精良で、色調は黄橙色ないしは橙褐色を

呈する。11～14は甕の口頸部破片で、11・12は復原口径が17.0cmの中型品。13は復原口径21.0cmの大型品で、14は38.2cmの特大品。口縁部はいずれも大きく外反し、下位部内面のヘラケズリによる稜は明瞭である。調整は口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリにより、11の体部外面にはヘラによる擦過痕がみられる。4・7・9・12・14はカマド内の出土である。

15～17は須恵器である。15・16は坏蓋で、天井部はやや低平である。口径は15が15.8cm、16は12.8cmに復原した。調整は口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面回転ナデを主体とするが、15の外天井部にはカキ目を施していることから有蓋高坏の蓋になる可能性がある。また、16の外天井部には「M」字形のヘラ記号を付している。17は坏身の口縁部破片で、立ち上がりは短く内傾する。口径は11.2cmに復原した。当竪穴住居跡の時期は6世紀後半～末頃と考えられる。

61号竪穴住居跡（図版25　第63図）

53号竪穴住居跡の北側に位置（K4区）し、2／3は調査区外である。一辺が2.7m以上の方形プランで、調査区内ではカマドの痕跡は無い。P1は主柱穴と考えられ、径40cm、深さ30cm。

土器（第62図1～5）1～4が土師器である。1は坏で、口縁部は体部の屈曲部から直立する。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。焼成は良好で、黄橙色を呈する。器高4.7cm、口径10.3cmを測る。2・3は甕で、2は復原口径14.0cmの小型品。3は復原口径20.0cmの大型品で、2・3ともに口縁部は大きく外反する。3は頸部内面にもハケ目を施している。4は高坏の脚部破片で、坏部と裾部を欠く。内外面ともヘラケズリ調整による。

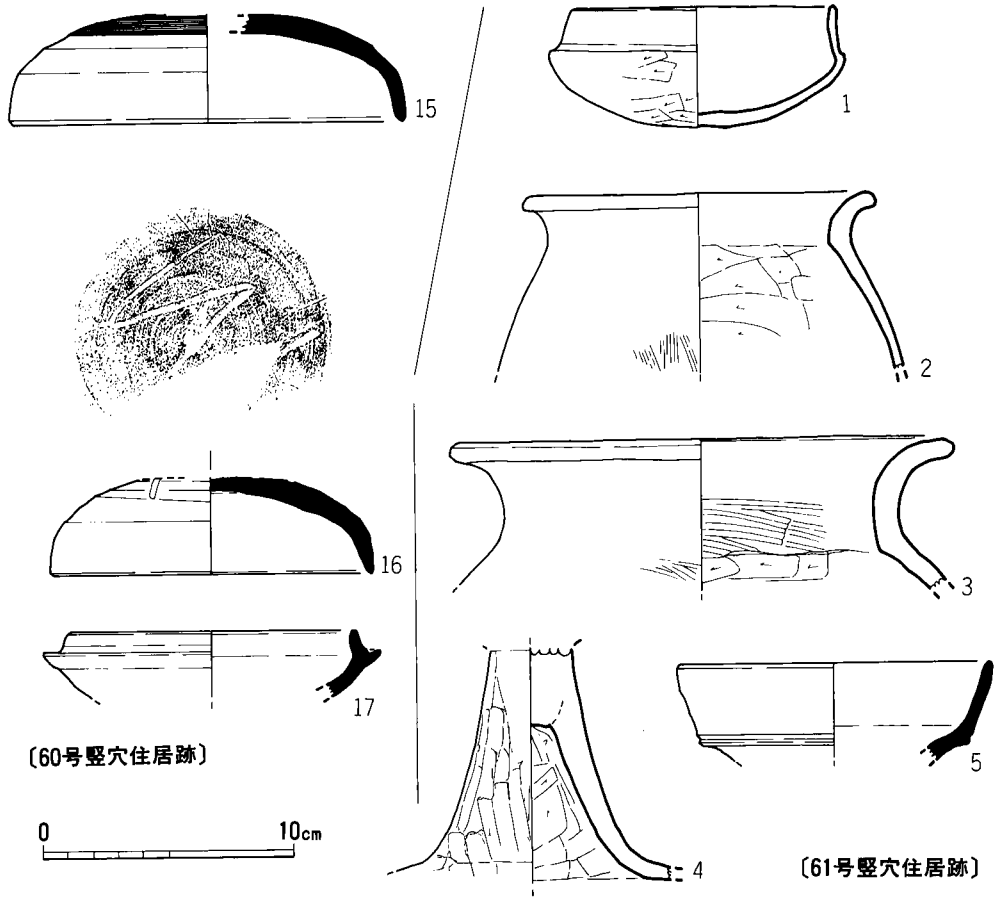
5は須恵器甕の口縁部破片で、口径は12.4cmに復原した。頸部との屈曲部にヘラ描き沈線を1条巡らしている。焼成は堅緻で、灰色を呈する。当竪穴住居跡の時期は、6世紀後半～末頃であろう。

65号竪穴住居跡（付図）

調査区中央部のやや西寄りI6区に検出されたが、南側の1辺を確認したのみである。44・49・50A竪穴住居跡に切られ、弥生時代の64号竪穴住居跡を切る。出土遺物はないが、切り合い関係や埋土の状況から、から古墳時代後期の時期と推定される。

66号竪穴住居跡（図版25　第63図）

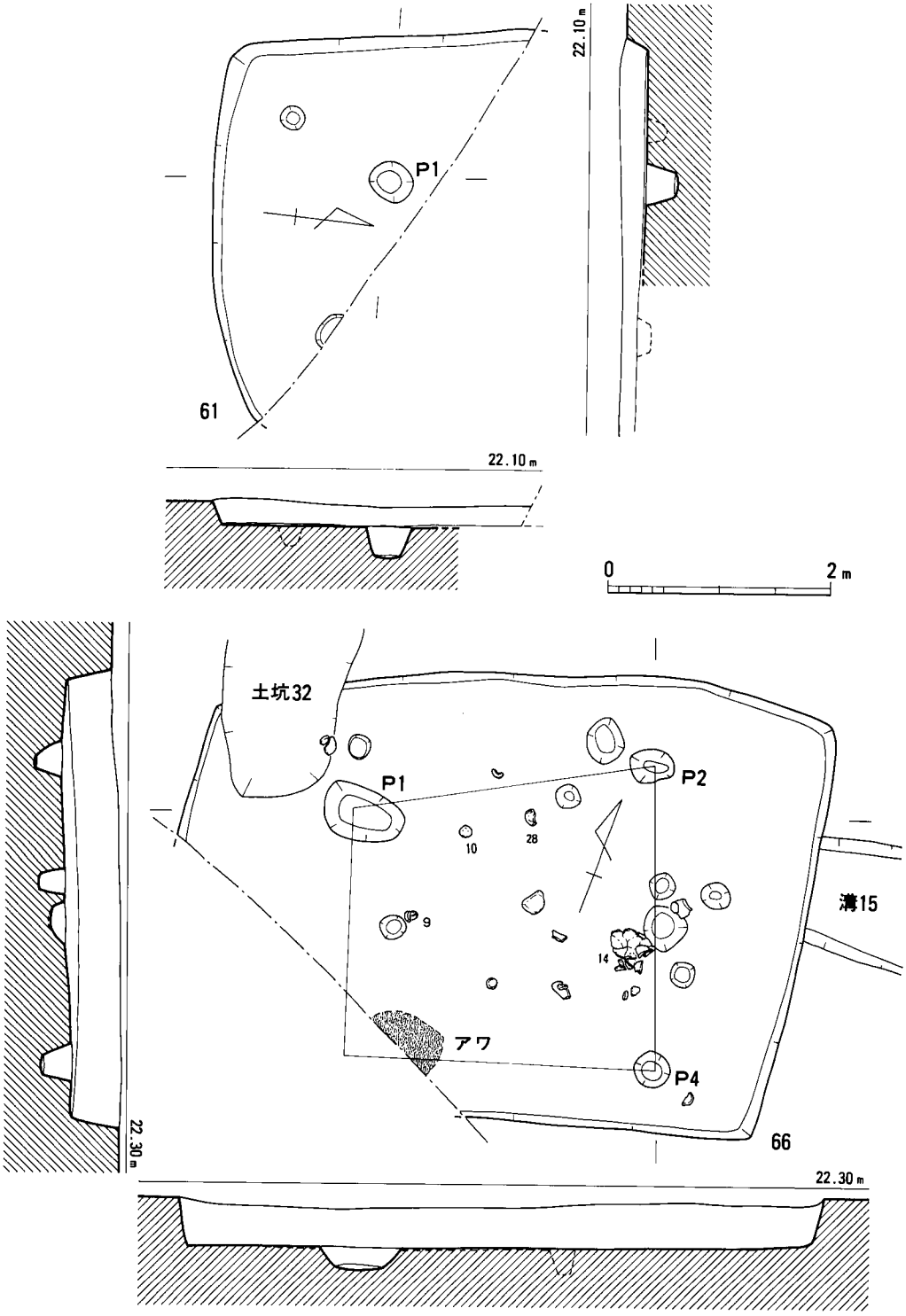
調査区東寄りのP9区に位置し、北西隅を古墳時代の32号土坑に切られ、南側は区域外になる。東西5.7m、南北4mの長方形プランを呈し、カマドは調査区内には見られない。主柱穴はP1～P4の3本で、残りの1本は調査区外であろう。P1～P2間2.7m、P2～P3間2.7mを測り、深さは20～25cm。床面より土師器としては坏蓋・坏身・椀・甕・台付壺、須恵器としては坏蓋・坏身等多くの土器の他、植物遺体としてアワ550g、不明遺体少量が出土。古墳時代



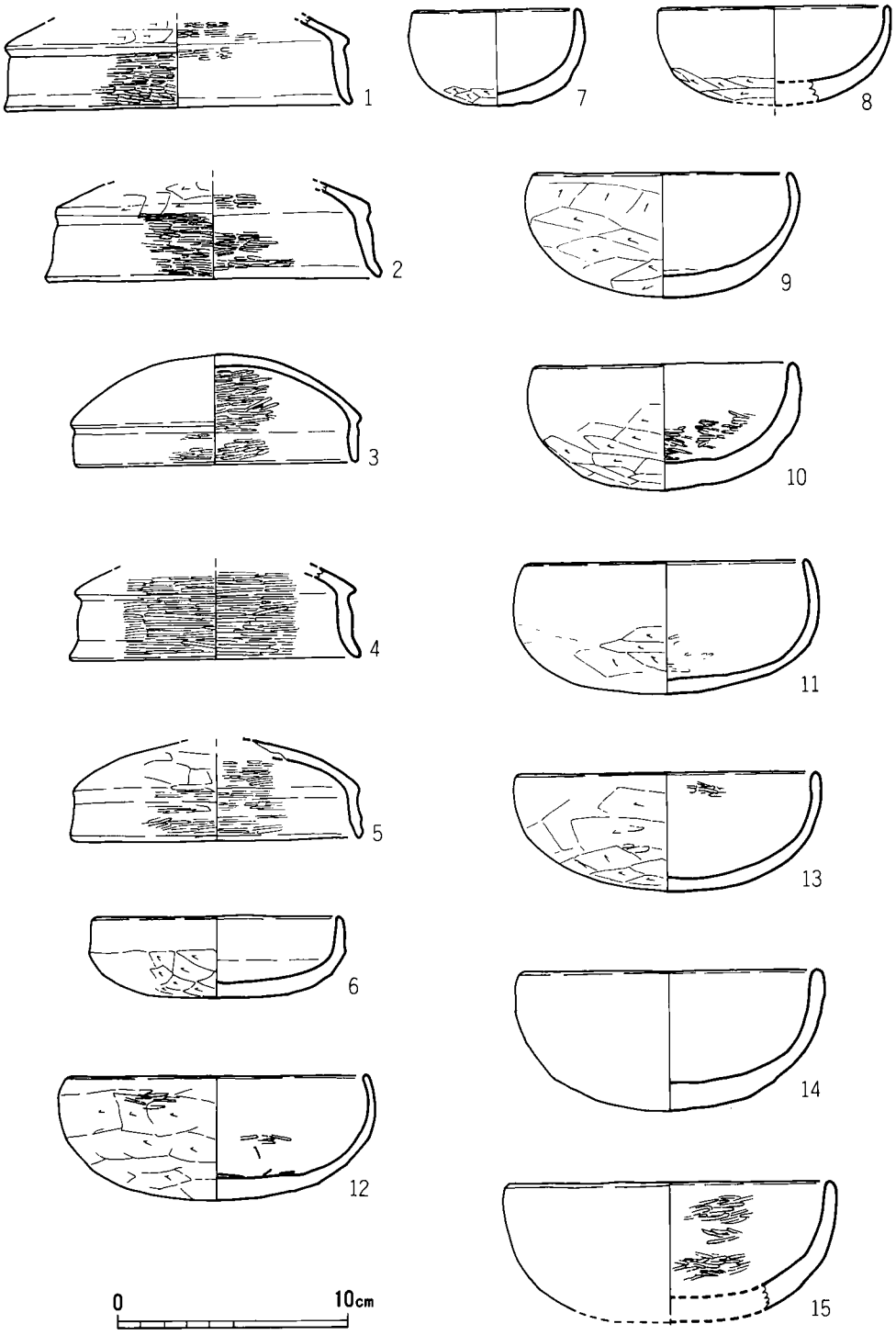
第62図　60・61号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

後期。

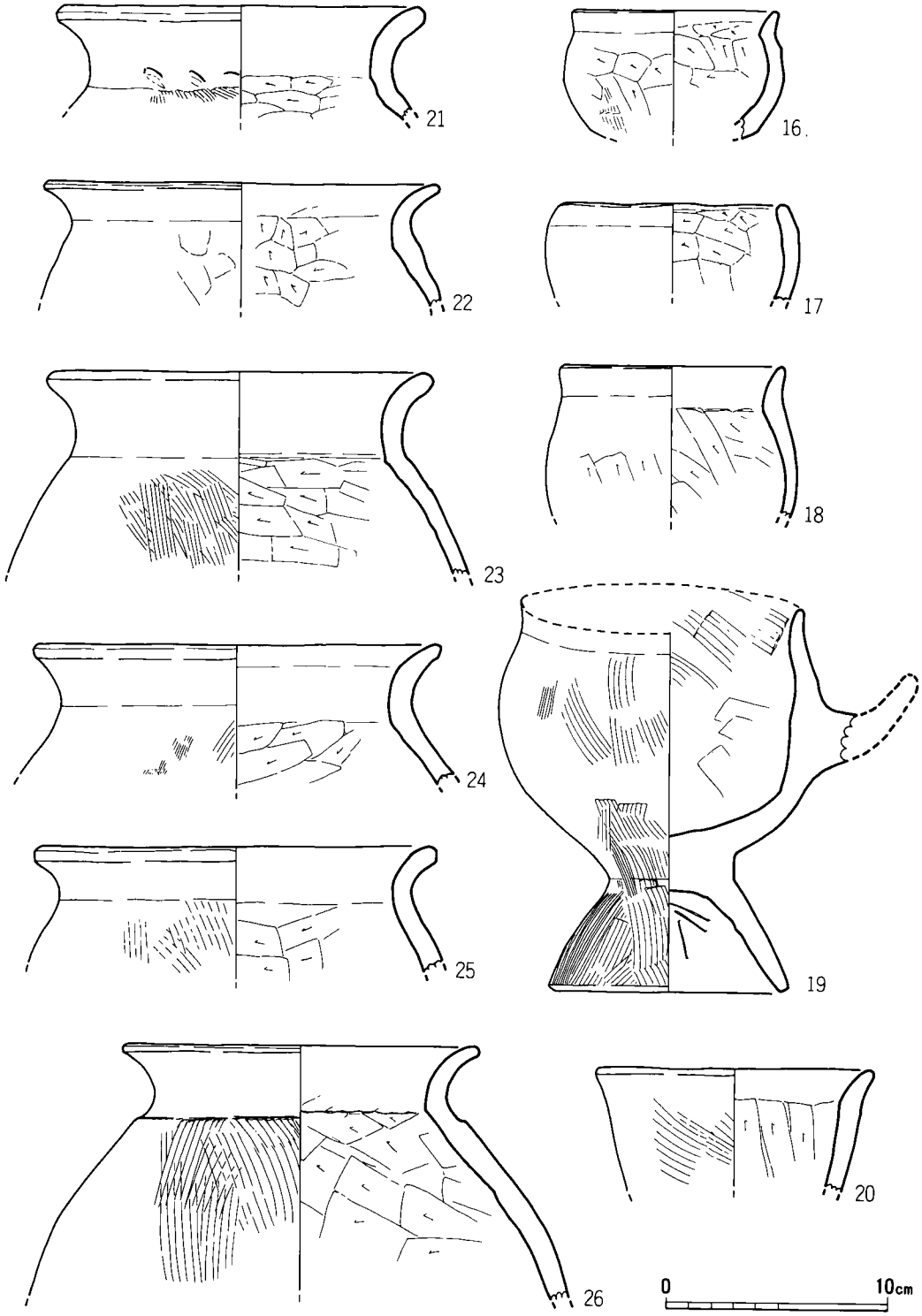
土器（第64～66図1～36）1～28は土師器。1～5は坏蓋。胴部と口縁部の境には突出した段を持ち、低い天井部を有す。器面調整は、天井部外面がヘラケズリで、天井部内面や口縁部内外面には細かいヘラミガキが施されるのが一般的。いずれも本来は黒塗りであったと考えられるが、摩滅により器表面の剝落しているものも多い。1の口径15cm、2は14.6cm。3は口径10.8cm、器高3.6cm。4は口径12cm、器高4.75cm。5は口径12.5cm。6～15は椀で口縁部が胴部より内に入るもの（6～12）と胴部に最大径をもつもの（13～15）の2者がある。6は口径12.6cmを測る。7は小型で底部はヘラケズリ。口径7cm、器高4cm。8～13も外面下半をヘラケズリを、12は口縁部付近にヘラミガキを施す。内面にもヘラミガキを施すものが多い。なお、15は二次加熱を受けている。色調は黄褐色を呈すものが多い。8は口径10cm、9は口径10.1cm、器高5.3cm、10は口径11cm、11は口径12cm、器高5.7cm、12は口径13cm、器高5.4cm、14は復原



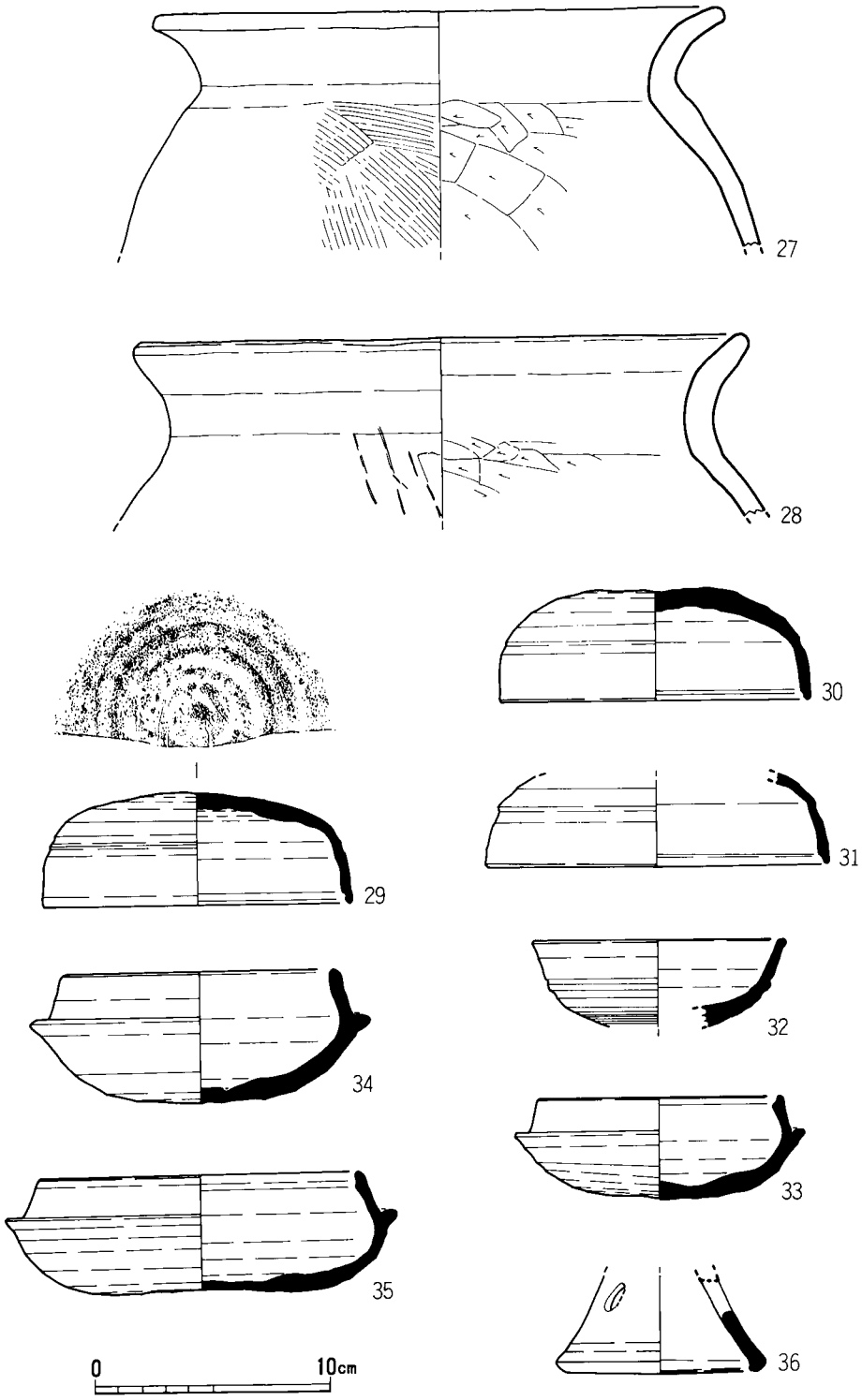
第63図　61・66号竪穴住居跡実測図（1/60）



第64図　66号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第65図　66号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）



第66図　66号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）

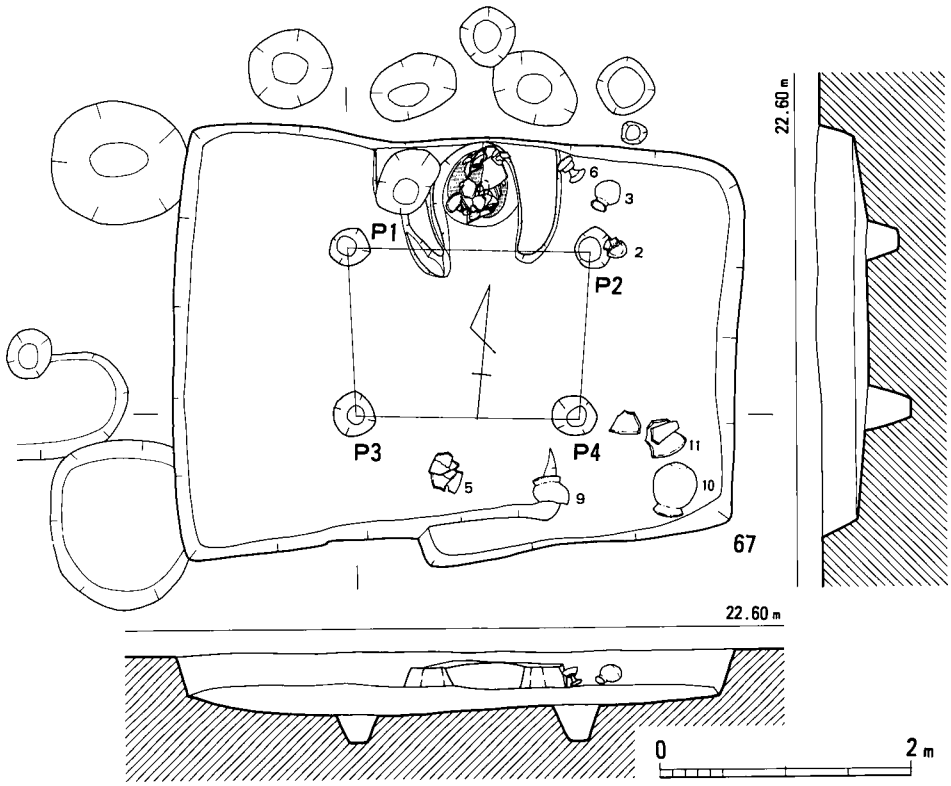
口径13cm、器高6cm、15は口径14.2cmを測る。16は短頸壺で内外面ともヘラケズリ。復原口径9.7cm。17は内弯する口縁部を有す無頸壺。内面には斜め方向のヘラケズリ。口径10.4cm。19は把手付脚台壺。口縁部が若干外反し胴部の膨らみは少ない。胴部の中央には把手が付くが欠損する。脚は内弯気味で「ハ」の字状に広がる。脚部から胴部にかけてはハケ調整、内面はヘラケズリ。復原口径12.7cm、器高15.9～18cm、脚部径10.6cm。色調は内面茶灰色、外面は橙褐色。20は口縁部がやや外反する筒形の器形。外面は荒いハケ、内面は下方向からのヘラケズリ。21～28は甕。いずれも口縁部を大きく「く」の字状に屈曲させる。内面の頸部以下はヘラケズリを施すため、稜線を持つ。外面の頸部以下もハケ調整で、口縁部の内外はヨコナデ。21は口径16.6cm、22は17.7cm、23は16.7cm、24は18.2cm、25は18.3cm、26は16.1cm、27は24.2cm、28は26cmを測る。

29～36は須恵器。29～31は天井部と胴部の境に軽い段を有し、口唇部内側が嘴状を呈す。天井部は回転ヘラケズリ、それ以下は回転ヨコナデ。29は口径13cm、30は復原口径13.3cm、器高4.6cm。32は高坏の坏部で口径10.6cm。33～35は坏身。33の受け部は直に近く立ち上がり、端部は鋭い。口径10.4cm、器高4.25cm。34は丸みのある口唇部で、受け部の立ち上がりは長い。口径11.3cm、器高5.5cm。35は口唇部が嘴状を呈し、内径が大きい。口径13.6cm、器高4.9cm。いずれも胴部以下が回転ヘラケズリ。36は高坏の脚部で3孔ある。

鉄器（第194図1）1は両丸造の鉄鏃で、茎先端部分を欠損する。現存長11.2cm、身の長さ10.2cm、刃部長1.7cmを測る。先端は三角形を呈し、頭部長1.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmで、断面形は杏仁形を呈する。また、鏃身の断面形は刃部側が0.4cmと平坦であるが、茎側は方形を呈し、厚さも0.6cmと厚みを増している。

67号竪穴住居跡（図版26　第67図）

67号竪穴住居跡は調査区東端部のR-S10区に位置する。この一帯は古墳時代の遺構密度がかなり低い地区で、近接する古墳時代の遺構としては、北16mに90号竪穴住居跡が、東20mに105号竪穴住居跡が、西17mに66号竪穴住居跡が見られる程度である。東西4.5m、南北は西壁3.5m、東壁3.0mで、平面プランとしては長方形というよりも台形に近い形態を呈する。この変則的なプランは南壁によって生じているが、その南壁は中央部付近で鍵状の段が意図的に作出され、結果として南東隅が拡張されたように突出している。主柱穴との位置関係から見ると、おそらくは当初のプランではあまりにも南東隅が狭かったために、拡張されたものと考えられよう。壁高は最高で35cm程度であるが、住居跡の中央部付近は大きく窪み、遺構検出面からの深さは最高で50cmを測る。4本の主柱穴は、いずれも径30～35cm、深さ25～35cmの範囲に纏まる。遺物の出土は比較的多くパンケース3箱ほどになるが、その大部分は土師器で、出土した数点の須恵器はいずれも小破片であり、図示できるものはなかった。床面からは比較的大きな破片が纏まって出土したが、カマド内およびその周辺では完形の状態での土器の出土が見られ

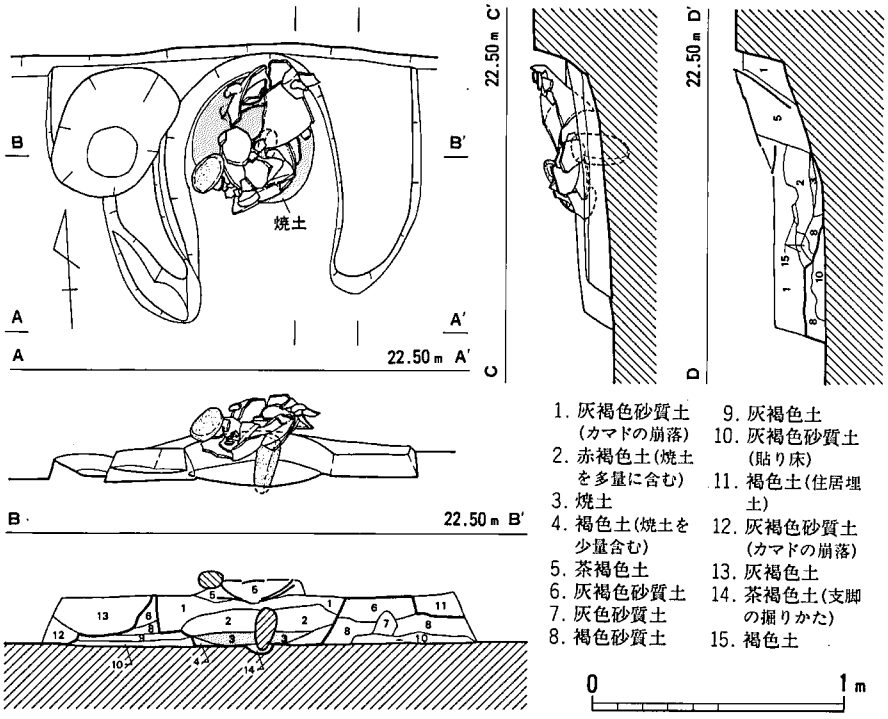


第67図　67号竪穴住居跡実測図（1/60）

た。図示した土器は12点で、1・3～6・10・11は床面から、2・7・8・12はカマドから、他は埋土からの出土である。年代的には6世紀前半代に位置づけられよう。

カマド（図版26・27　第68図）カマドの規模は126×111cmで、西側袖の付け根、すなわち壁に接した部分はピットによって大きく削平される。焚き口との高低差が4cmほどある火床は52×49×5cmで、その中央部に地山を刳り貫いて自然石の支脚が据えられる。この支脚の直上には、第71図12の完形に復原できる甑が、さらにその上には第70図7の残存状態3／4の甕と、第70図8の残存状態1／2の甕とが、一気に潰れたような状態で出土した。祭祀を行なったような痕跡は窺えないだけに、おそらくはカマド自体が何等かの要因で崩壊したままの状態を示していると考えられる。このことは、これらの土器がカマドの天井部分に相当すると見られる灰褐色砂質土によって覆われていることからも推察されよう。カマドの東側では第69図1の椀や3の壺や6の高坏が完形で出土した。

土器（第69～71図1～12）先述したように、遺物の大部分は土師器で、数点の須恵器はいずれも小破片であり図示できるものはなかった。1は完形の椀で口径12.4cm、器高6.0cm。外面の底部一帯にはケズリが観察されるが、それ以外の内外面はナデ。2の坏は摩滅が著しいが、

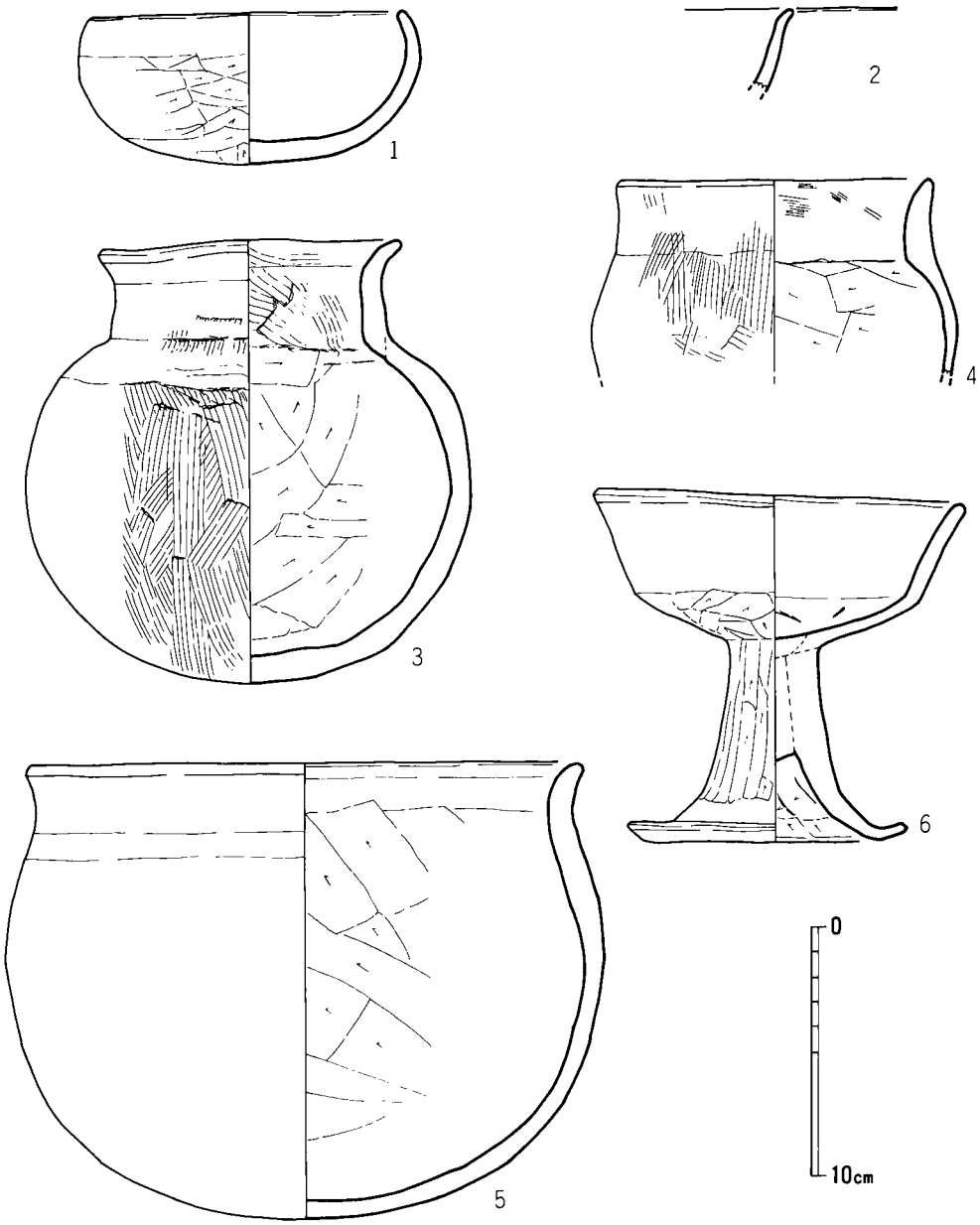


第68図　67号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

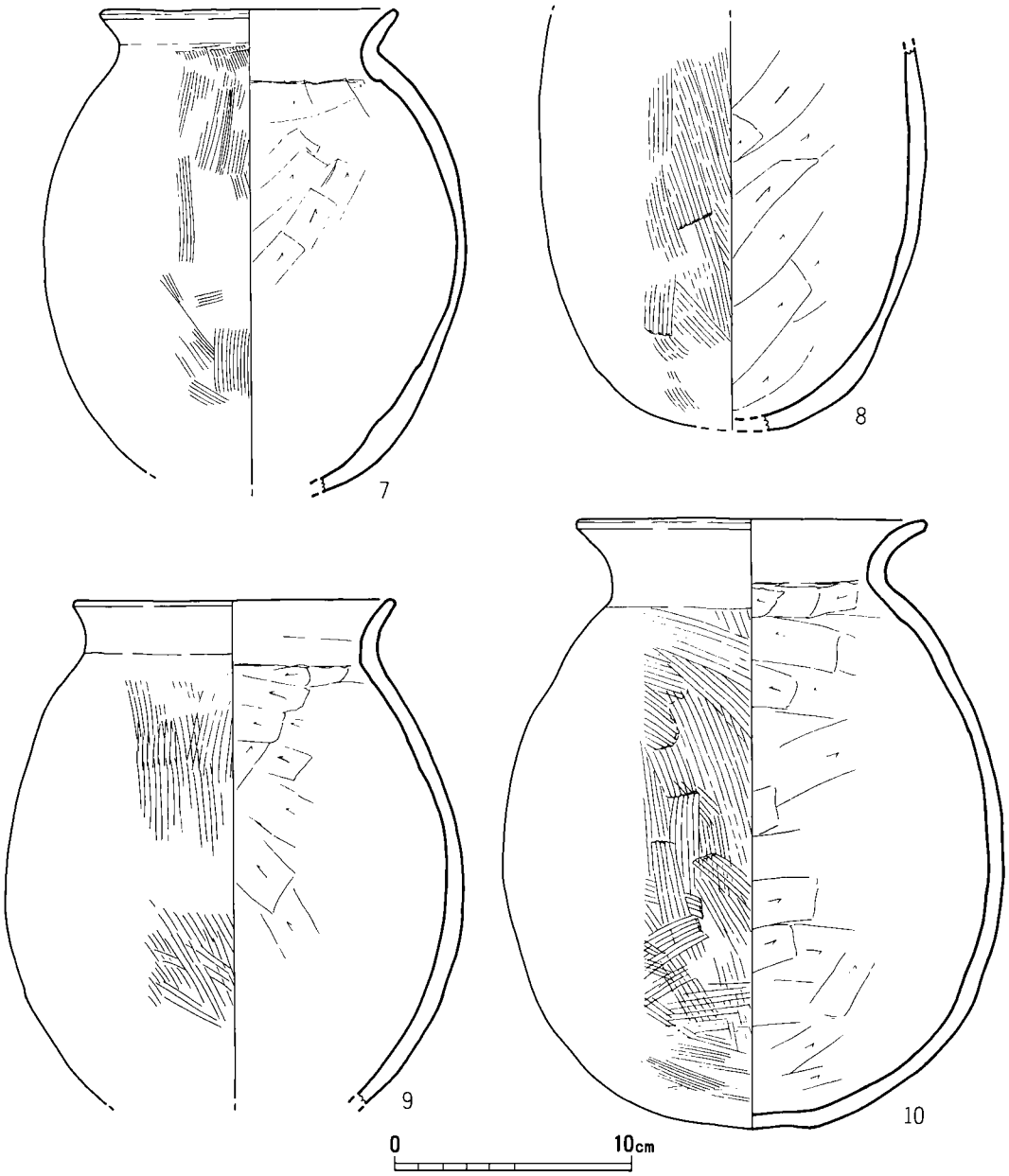
二次加熱により淡く変色。3は完形の壺で、口径12.0cm、最大腹径17.6cm、器高17.4cmを測る。器面調整は基本的には外面がハケ、内面がケズリであるが、部分的にナデが施されることもある。底部外面は擦れた摩滅痕があり、外面の胴下半部には二次加熱による赤褐色の変色が見られる。4は復原口径13cmの小型甕。5は甕というより鉢に近い器形で、復原口径22cm、器高18.2cmを測る。外面は摩滅により調整不明だが、底部の接置面には擦痕が見られる。7は底部付近が欠落する復原口径17cmの甕、8は胴部下半部しか残らない甕で、いずれも二次加熱により外面が変色する。9の甕は残存率1／2程度の甕で、復原口径は18cmを測り、内外面ともに二次加熱による変色が見られる。10は口縁部が一部欠損するもののほぼ完形に復原できる甕で、口径19.6cm、器高34.2cmを測る。底部の接置面には擦痕が見られるが、二次加熱の痕跡はまったくない。11は残存率4／5の甑で、全体に摩滅が著しい。口径28.3cm、底部径8.6cm、器高25.7cmで、二次加熱二より全体的に変色している。12は完形に復原できる甑で、遺存状態は極めて良好。口径30.5cm、底部径9.0cm、器高30.2cmを測り、ナデは口縁部と底部の外面にのみ施される。二次加熱による変色が著しい。

68号竪穴住居跡（図版28　第72図）

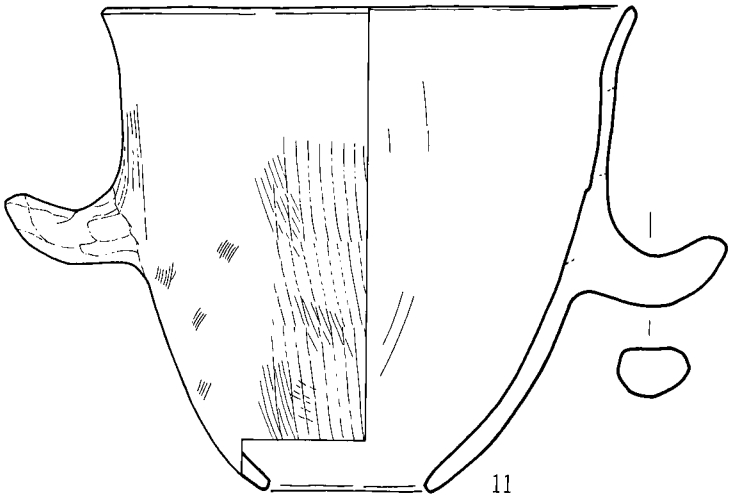
東側調査区の北端に位置（Q8区）し、北側で弥生時代の82号竪穴住居跡と切り合い、南側

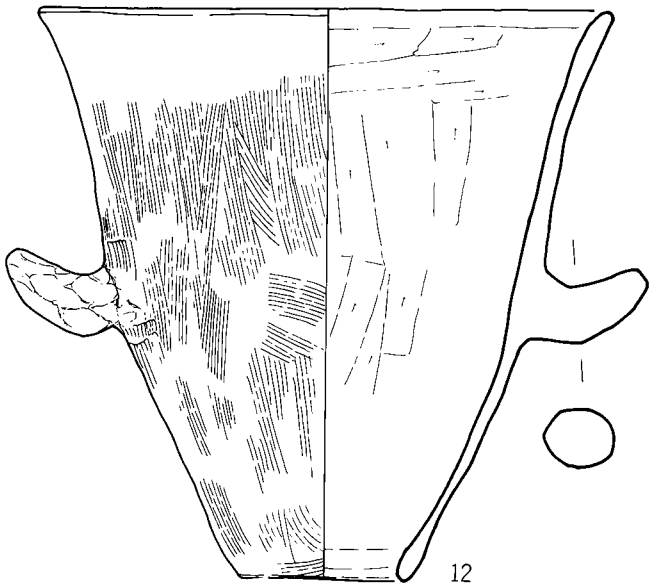


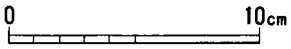
第69図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第70図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）







第71図　67号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）

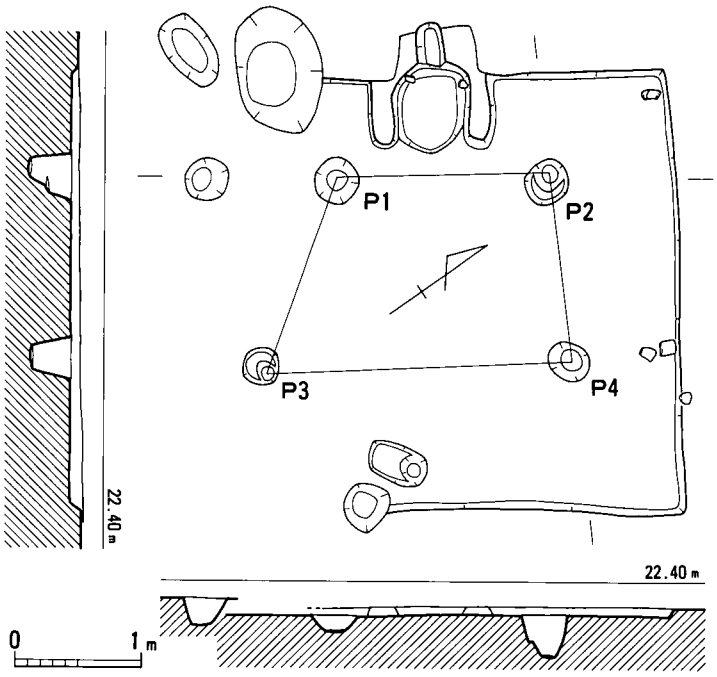
は古墳時代の121号竪穴住居跡に切られる。住居跡の南壁は削平されており不明。南北3.5m以上、東西3.45mの長方形プランを呈し、北西辺の中央部にカマドを有す。主柱穴はP1～P4の4本で、台形に配置される。深さは30～35cm。P1～P2間1.68m、P2～P4間1.5m、P1～P3間1.62m、P3～P4間2.44mを測る。

カマド（図版28　第73図）カマドは比較的良好な状態で残り、住居跡より35cm突出した幅70cmの掘りかた内に築かれる。本体は壁より15cm延び、煙道を敷設する。袖部は長さ55～60cm、幅23cmで、黒褐色土で築かれる。焚口幅は50cmあり、袖部先端と同じ位置まで部厚い焼土層（6層）が見られ、火床面となる。この火床面の下層、カマド掘りかたの間には5cmの厚さで黒褐色砂質土を充填する。煙道は長さ35cm、幅25cmで、

カマドとの段さは8㎝である。内部から土師器甑、須恵器坏蓋が出土。

土器（第74図1～3）1は胴部と口縁部の境に段を有す土師器の坏蓋で、天井部はヘラケズリ。外面は漆塗りの痕跡がある。色調は黄褐色。復原口径11.9㎝。2は土師器の甑片。外面は縦方向のハケ調整で黄褐色を呈す。内面は下方向からのヘラケズリで白黄褐色。底径17.2㎝。

3は小型で扁平な須恵器の坏蓋。口唇部は直に立つ。内外面ともナデないしヨコナデ。口径12㎝、器高1.8㎝を測る。



第72図　68号竪穴住居跡実測図（1/60）

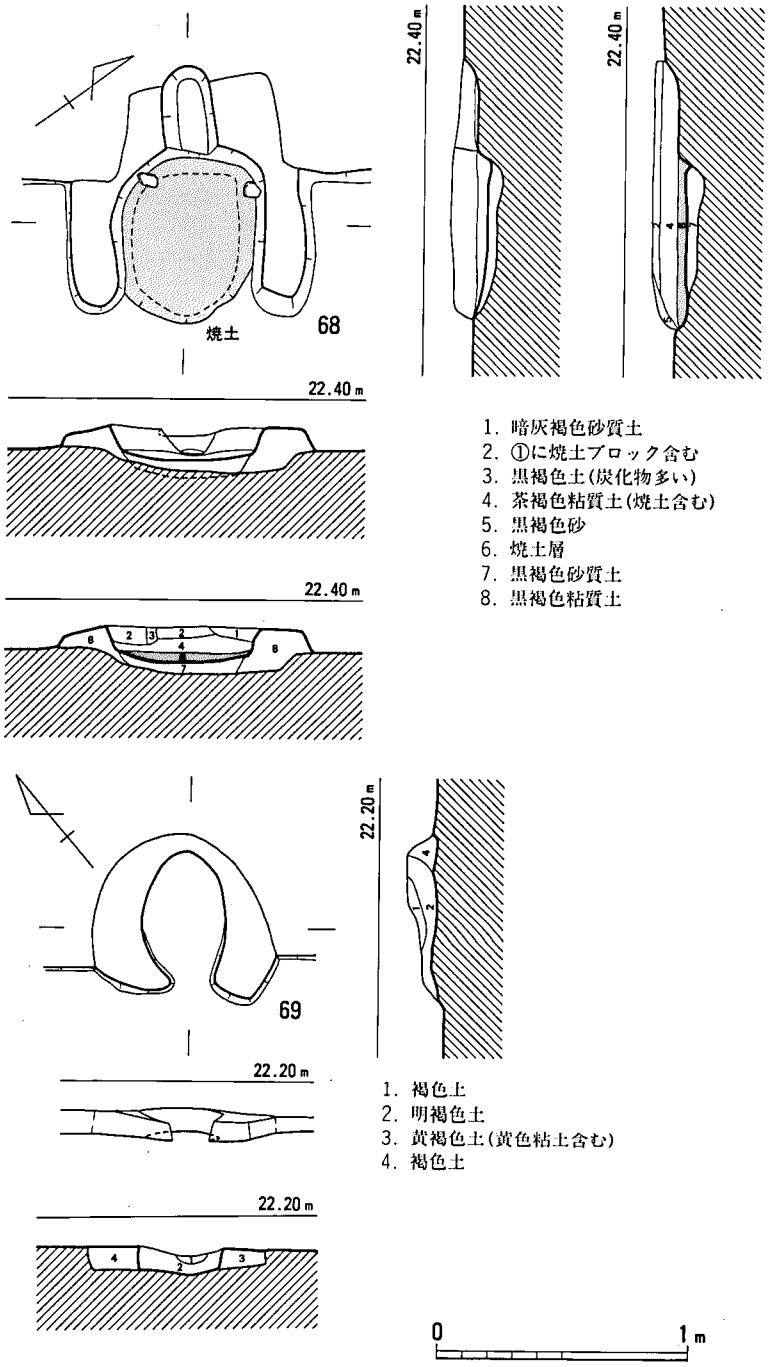
69号竪穴住居跡（図版29　第75図）

P7区に位置し、70・73号竪穴住居跡および弥生時代の33号土坑を切っている。遺存状態は悪く、南半部を失っている。主柱穴の配置状態から平面形は長方形を呈するものと考えられる。北壁長3.34mで、壁高は北壁側で14㎝残る程度である。主柱穴は4本であろうが、P4は未検出である。径30㎝前後で、深さは25㎝前後を測る。柱間間隔はP1～2間2.21m、P1～3間1.58mを測る。埋土中より若干の土器が出土している。

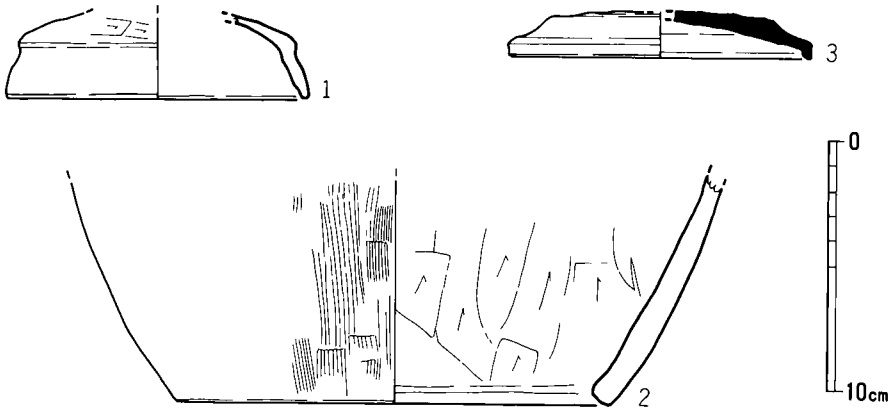
カマド（図版29　第73図）突出型のカマドで、北東壁中央に付設している。カマド形態は馬蹄形を呈し、掘りかた幅71㎝、奥行き47㎝、残高10㎝を測る。壁体は黄色粘土混じりの黄褐色土を盛っているが、焚口幅は15㎝と他のカマドに比して極端に狭い。また、壁体・火床はさほど焼けておらず、支脚も不明。

土器（第76図1～3）1が土師器である。1は大型の甕で、口径は20.0㎝に復原した。口縁部は大きく外反し、口唇部を丸く納めている。

2・3は須恵器である。2は坏蓋の口縁部破片であるが、天井部は低平なものになろう。3は坏身で、立ち上がりは短くやや内傾する。口径は2が13.0㎝、3は11.0㎝に復原した。とも



第73図　68・69号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第74図　68号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

に焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

土製品（第76図４）４は棒状の土製品で、下端部を欠損する。残長3.1cm、径1.2cm。当竪穴住居跡の時期は、６世紀末頃であろう。

70号竪穴住居跡（図版29　第75図）

Ｐ７区に位置する。69号竪穴住居跡に切られ、71～73号竪穴住居跡を切っている。平面形は東西に長い長方形を呈し、北壁長3.98m、東壁長3.25mで、壁高は北壁側で30cm遺存する。４本柱の竪穴住居跡であろうが、Ｐ３は69号竪穴住居跡カマドの下部に位置するものと思われる。径40cm前後で、深さは10cm前後である。柱間間隔はＰ１～２間2.05m、Ｐ２～４間1.42mを測る。埋土中より若干の土器・鉄器が出土している。

カマド（図版30　第78図）突出型のカマドで、北壁中央に付設している。袖部は失うものの煙道部を留めており、遺存状態は割合良好である。掘りかたは逆Ｕ字形を呈し、掘りかた幅60cm、奥行き37cm、残高25cmを測る。掘りかたに緑黄色砂質土を貼り付けて壁体を構築している。壁体の両コーナー部には袖石を抜き取った小ピットがあることから焚口幅は27cmに復原できる。また、奥壁から12cmの位置には10cm足らずの小穴があり、支脚の抜取り痕と考えられる。この三つのピット間が火床になり、壁体ともによく焼けていた。煙道は断面形が長方形を呈し、周囲に暗緑色粘砂を巻いていることから煙道を開削し、煙道掘形に粘砂を貼り、箱形に土止めの板材を埋設したものと想定される。煙道部の長さは80cm、幅16cmで、先端には長径49cmの煙出しのピットが開く。また、煙道基部と煙出しピットとは31cmの比高差を有し、さらに煙出しピット側に傾斜していることから雨水が直接カマド内に流入しないための措置と考えられる。

土器（第79図１～４）１・２は土師器甕で、１は器肉が肥厚することなく外反する。２は口縁部が肥厚し、口唇部は三角形を呈する。口径は１が24.0cm、２は32.2cmに復原した。２の調

整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデにより、頸部内面の削りによる稜は明瞭である。また、口縁部から頸部にかけて煤が遺存している。

3は須恵器の高台付坏身で、口縁端部を欠損する。復原高台径は8.8cmで、内端部で接地する。4は横瓶の破片で、形状は推定復原による。体部上半部がカキ目、下半部はヘラケズリ調整を施している。2・3は8世紀中頃の土器であり、当竪穴住居跡が6世紀末頃の69号竪穴住居跡に切られことから2・3を混入品とみなして6世紀後半頃と考えておきたい。

鉄器（第194図2）2は広根式鏃の先端部破片で、現存長6.1cmを測る。頭部はバチ形に開き、刃部幅2.8cm、厚さ0.4cmである。鏃身は0.6×0.8cmの断面長方形を呈する。他に4×5cm大の鉄滓が出土している。

71号竪穴住居跡（図版29　第75図）

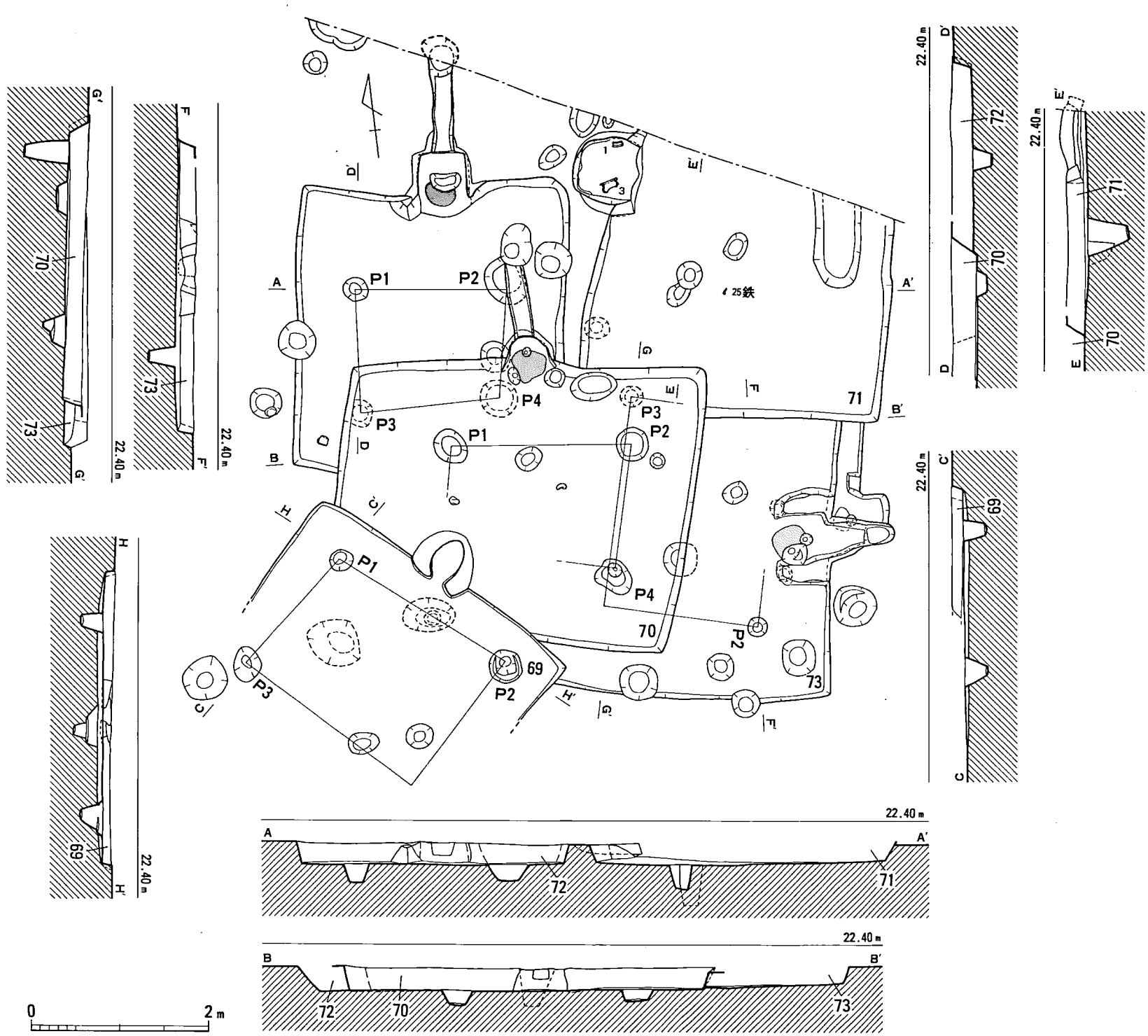
P7区に位置する。70号竪穴住居跡に南西コーナー部を切られ、73号竪穴住居跡の北壁を切っている。また、当竪穴住居跡の北半部は調査区外にある。南壁長は3.45mで、西壁長は2.75mの検出に留まるが、カマドが西壁中央に付設されていたと仮定すると平面形は南北に長い長方形を呈するものと考えられる。床面にはピットが3個存在するが、断面を切ったピットを柱穴とすると2本柱の主柱穴が想定されよう。埋土中から土器と鉄器が出土している。

カマド（図版31　第77図）西壁側に付設される。突出型のカマドで、掘りかた幅98cm、奥行き56cm、残高13cmを測る。遺存状態は悪く、袖部・煙道・支脚は留めていない。掘りかたに茶褐色砂質土を12～18cm程貼付し、壁体を構築している。支脚の抜き取り穴がみられないことから支脚は土製品ないしは土器を使用していたものと思われる。カマド内からは土器が出土している。

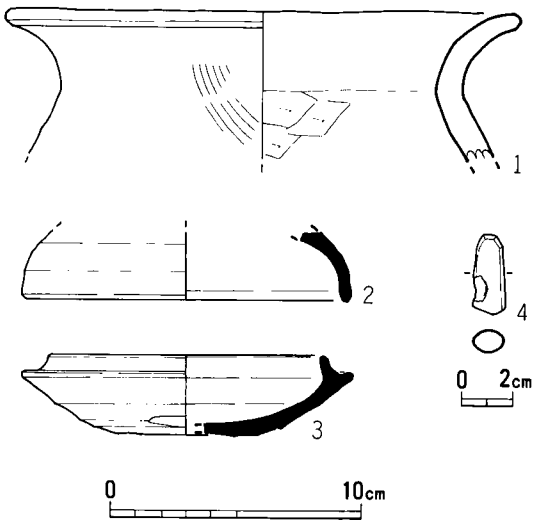
土器（第79図1～6）1～3は土師器大甕で、復原口径は26cm前後。口縁部は鉤状に屈曲し、器肉はやや肥厚する。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。1・3はカマド内の出土である。4は小型の甕で、口径は11.4cmに復原した。口縁部は肥厚し、頸部内面のヘラケズリによる稜は明瞭である。

5は須恵器の高台付坏身で、口縁部を欠く。低めの高台を体部の屈曲部寄りに貼付しており、復原高台径は8.0cmを測る。6は体部上位の破片であるが、甕になろう。体部中央のやや上位に上下にヘラ描き沈線を巡らし、その間に櫛描き波状文を施している。1～3の甕は7世紀後半代の特徴を示すが、70号竪穴住居跡に切られることから6世紀中～後半頃と考えておきたい。

鉄器（第194図25）25は鉄釘で、長さ6.6cmを測る。身をL字形に折り曲げ、頭部としている。銹膨れが著しいが、頭部幅1.0cm、厚さ0.5cm程になろう。



第75図　69～73号竪穴住居跡実測図（1/60）

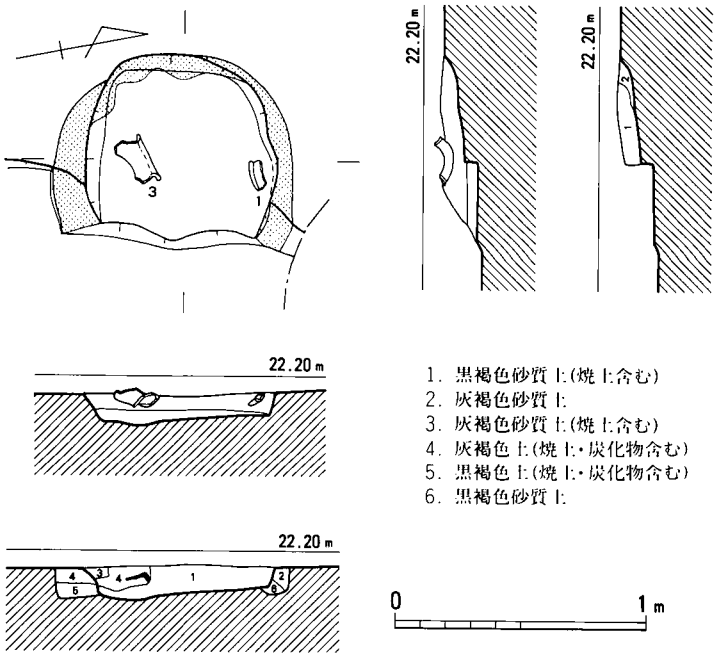


第76図　69号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

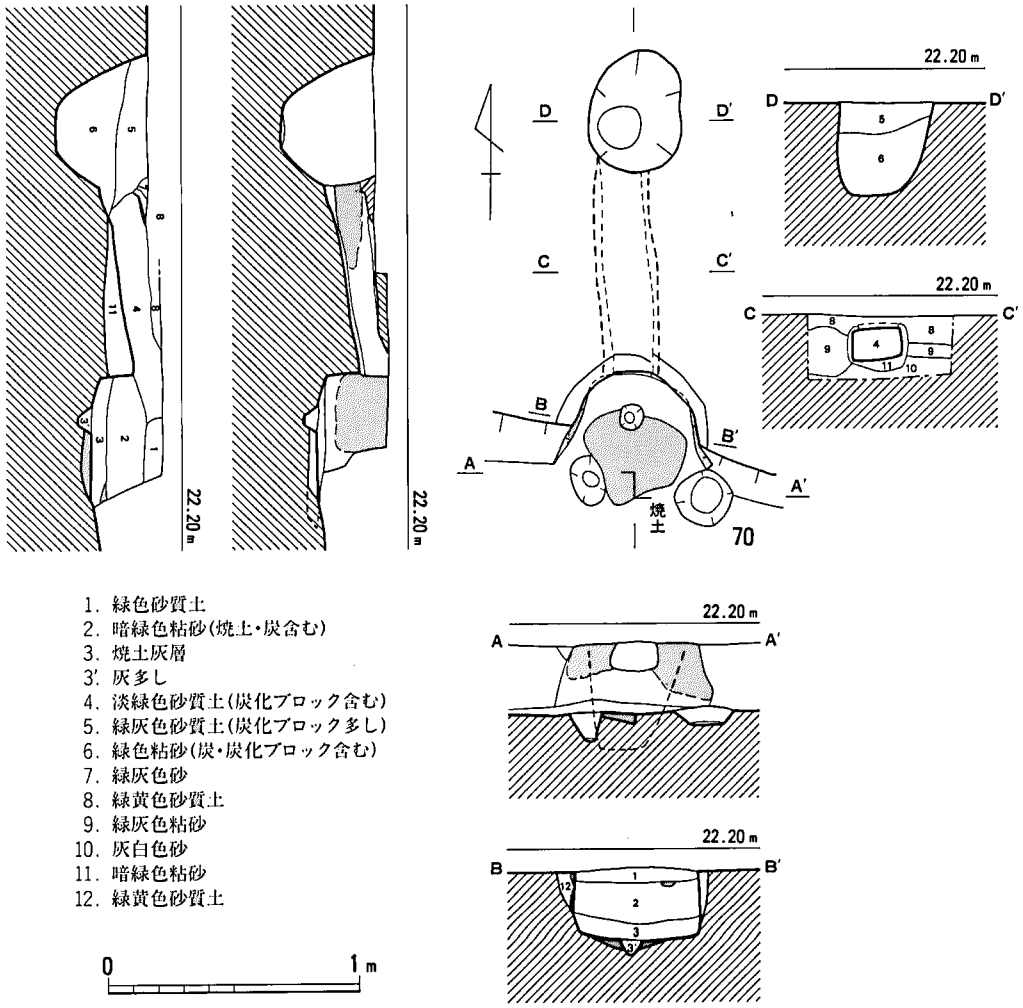
72号竪穴住居跡（図版29　第75図）

Ｐ７区に位置し、70号竪穴住居跡に南辺部を切られる。北壁長3.02m、西壁長3.18mで、壁高は北壁側で22cmを測る。平面形は南北に長い長方形を呈する。主柱穴はＰ１～４の４本で、Ｐ２は70号竪穴住居跡の煙道下部から、Ｐ３・４は同竪穴住居跡張り床下部の検出である。柱穴は径30～55cm前後、深さ10～20cm前後の規模である。柱間間隔はＰ１～２間1.74m、Ｐ２～４間1.37m、Ｐ１～３間1.40m、Ｐ３～４間1.61mを測り、主柱穴を結んだ線は不整方形を呈する。

カマド（図版31　第80図）突出型のカマドで、北壁中央に付設している。比較的遺存状態の良好なカマドで、煙道部および袖部の一部を留めている。掘りかたは方形を呈し、掘りかた幅56cm、奥行き52cm、残高27cmを測る。掘りかたに緑黄色砂質土を貼付して壁体を構築している。右袖は残存長24cm・基部幅19cm・残存高22cmで、左袖は残存長27cm・基部幅35cm・残存高20cmを測る。カマド床面中央には35×19cmの楕円形状の穴があり、支脚の石を抜き取った痕とみられ、その前面が火床となる。火床面



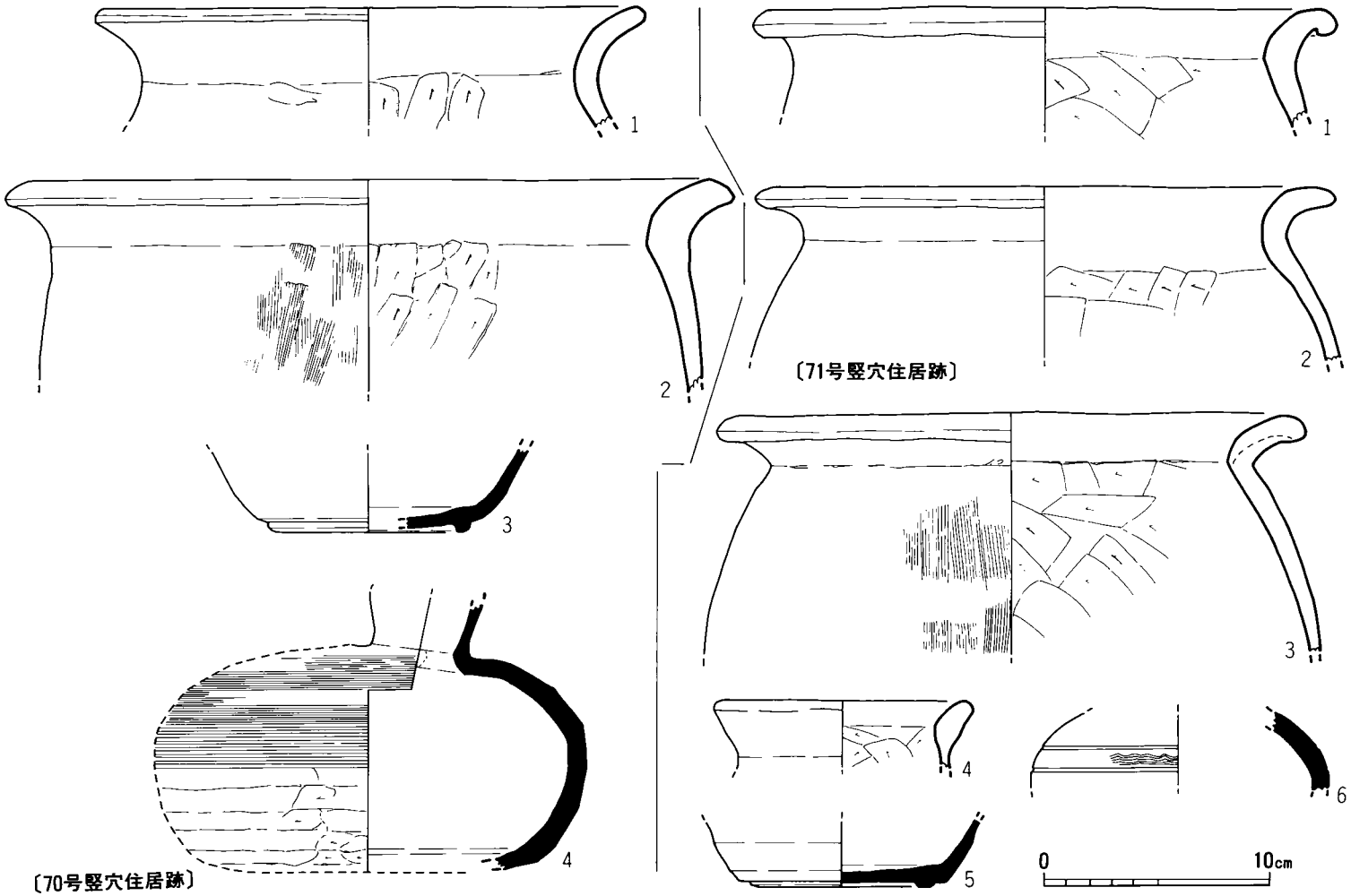
第77図　71号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



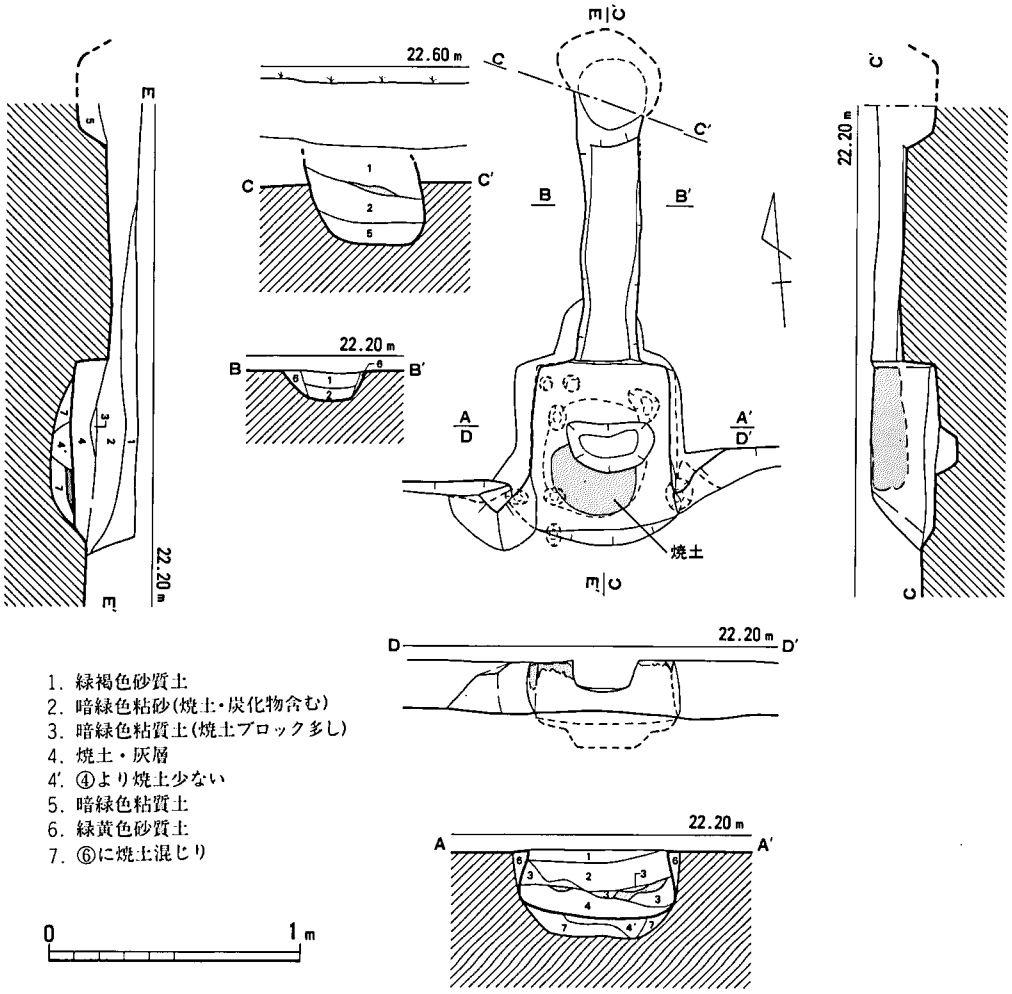
第78図　70号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

の下層には８cm程の焼土混じりの層があり、作り直しが考えられる。また、袖部・火床面の下層には10cm足らずの小穴があるが、カマド構築に伴うものなのかは判らなかった。煙道は長さ86cm、中央幅21cm、残高10cmで、先端には長径47cmの煙出し穴を有する。煙道の底面はほぼ水平で、煙道基部と煙出し穴の底面との比高差は14cmを測る。また、煙道の下端ラインは乱れており、トンネル方式により穿ったものと思われる。

土器（第83図１・２）１は土師器甕で、口縁部は直立気味に短く外反する。復原口径13.6cmで、肩部の器肉は厚い。カマド内から出土した。２は須恵器甕の口縁部小片で、ヘラ描き沈線を２条施している。また、沈線から上位はカキ目の後にヘラ先で斜線文を入れている。当竪穴



第79図　70・71号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



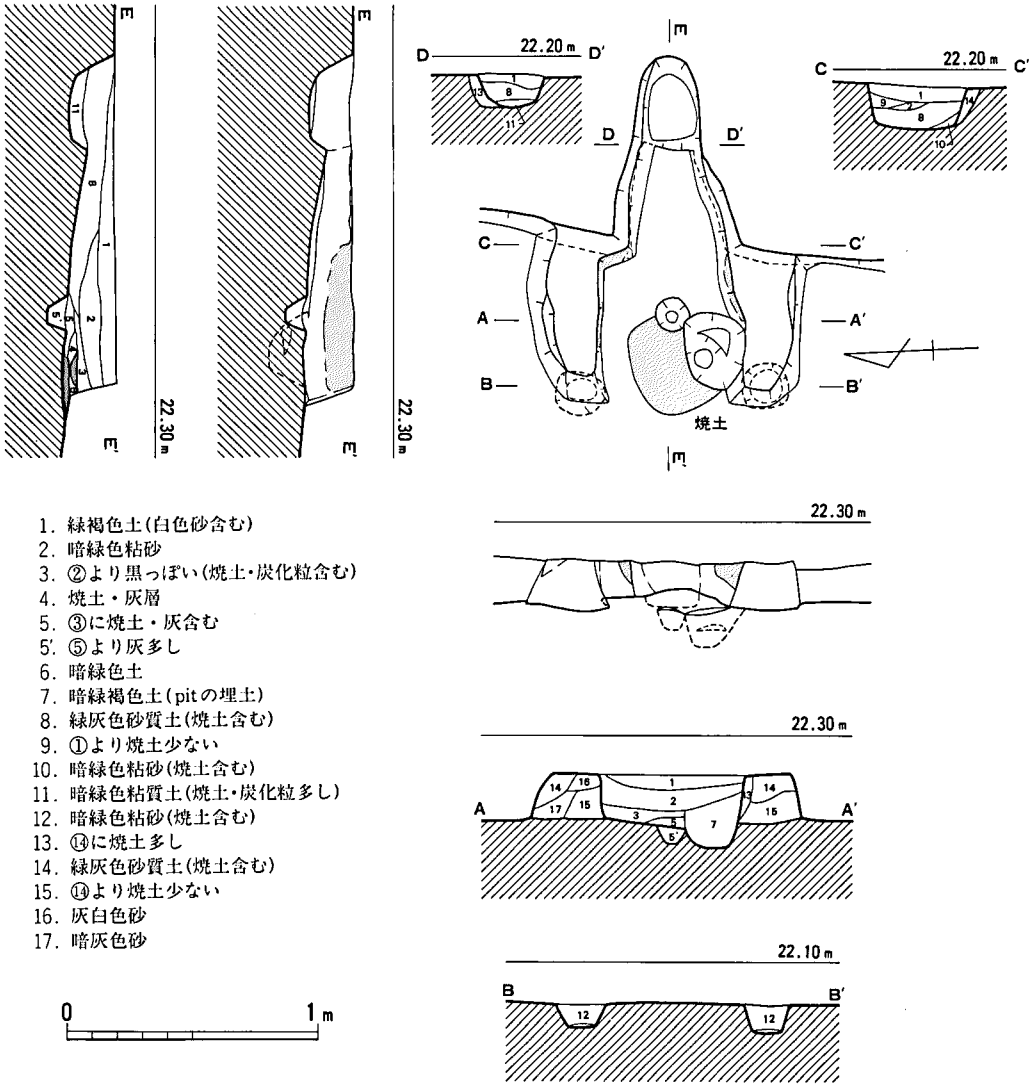
第80図　72号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

住居跡も70号竪穴住居跡に切られることから6世紀中～後半頃であろう。

73号竪穴住居跡（図版29　第75図）

P7区に位置する。69～71号竪穴住居跡に切られるため東～南壁にかけて遺存する程度である。東壁長3.10m、南壁長3.15mを留めるが、西壁が71号竪穴住居跡内で納まることから平面形は南北方向に長い長方形を呈するものと思われる。主柱穴は4本柱の竪穴住居跡と考えられるが、P1・4は未検出となった。埋土中およびカマド内から土器が出土している。

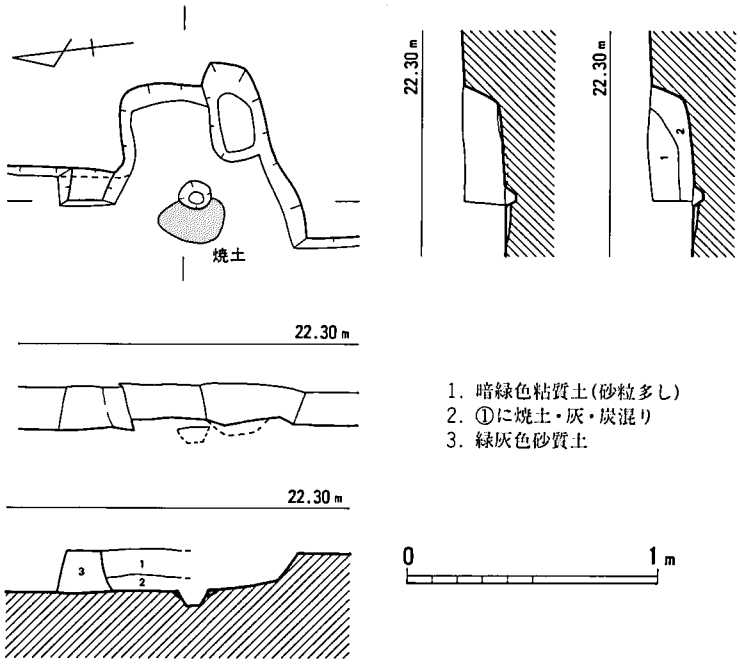
カマド（図版32　第81・82図）東壁側に付設しており、2基重複する。作り付け型の新しい方をAカマドとし、古い方をBカマドとする。Aカマドは割合遺存状態の良好なカマドで、



第81図　73号竪穴住居跡カマドA実測図（1/30）

袖部・煙道部を留めている。右袖は残存長62cm・基部幅35cm・残存高19cmで、左袖は残存長68cm・基部幅29cm・残存高20cmを測る。袖部先端下層からは径20cm程のピットを検出しており、本来袖石を立てていたものと考えられる。また、カマド床面中央には小ピットがあり、支脚の石を抜き取った痕で、その前面が火床である。煙道は長さ42cm、基部幅40cmで、先端には煙出しの穴を設けているが、煙道底面は火床側に傾斜している。壁体内面から煙道部にかけてはよく焼けていた。

Bカマドは左袖の一部を留める程度であり、遺存状態は芳しくなかった。当カマドは47号竪



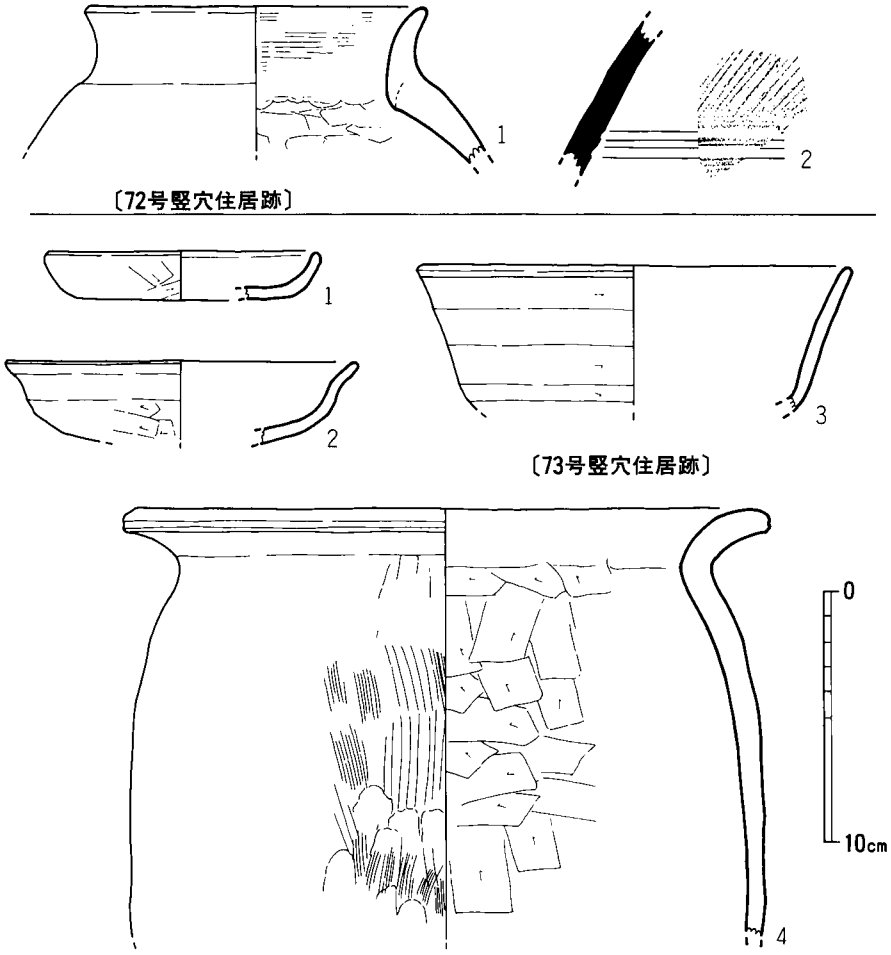
第82図　73号竪穴住居跡カマドB実測図（1/30）

穴住居跡カマド同様、左袖側が住居壁に直接粘質土を貼付した作り付け型をなすのに対し、右袖側は突出型を呈するという特異な形態のものである。左袖は残存長15cm・基部幅28cm・残存高17cmを測る。カマド床面中央には径12cmの小ピットがあり、支脚としていた河原石を抜き去った痕と思われる。小ピットの前面が火床で、よく焼けていた。

土器（第83図1～4）1・2は土師器皿で、1の口縁部は内湾するが、2は「S」字形に屈曲する。口径は1が11.0cm、2は14.0cmに復原した。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。1は貼り床下層の出土である。3は深めの土師器坏で、復原口径17.2cmを測る。体部は回転ナデにより、須恵器の技法を用いている。4は復原口径25.6cmの大型品で、口縁部は「く」字形に屈曲する。肩部に張りが無く、長胴を呈するものと思われる。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。また、内外面には煤が遺存している。当竪穴住居跡出土の遺物も8世紀代の形態を呈するが、69～71号竪穴住居跡の3軒に切られることから一応6世紀中頃としておく。

74号竪穴住居跡（図版32　第84図）

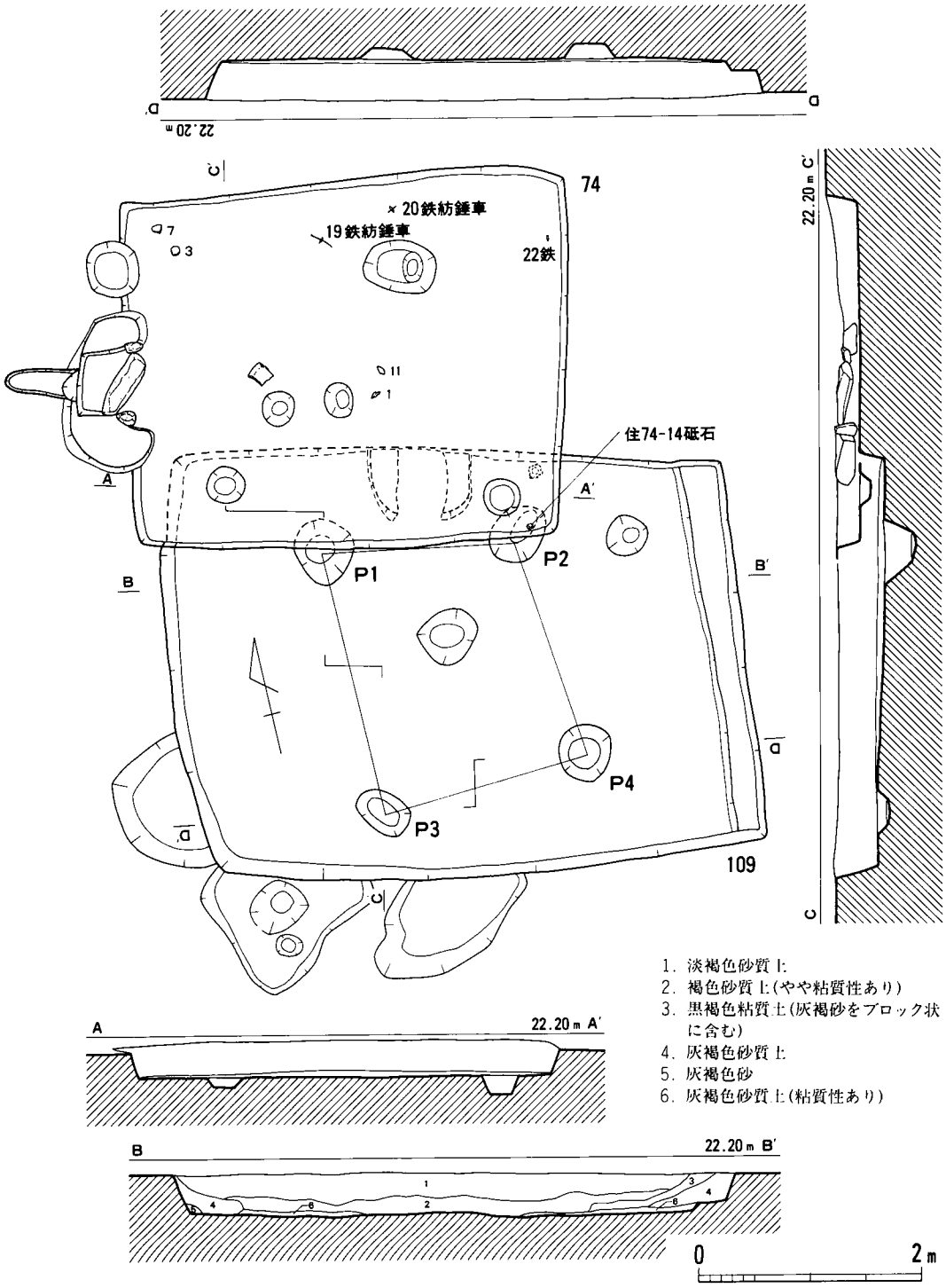
74号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのO7区に位置し、古墳時代後期の109号竪穴住居跡を切る奈良時代の住居跡である。東4mには69～74号竪穴住居跡6軒が密集し、北西5mには古墳時代の75号竪穴住居跡、南西5mにはやはり古墳時代の111・112号竪穴住居跡が近接する。平面プランは本遺跡にあっては最も小さい4.0×3.4mの長方形を呈し、長軸線上の西壁に突出するかたちでカマドが作られる。カマドの突出は、面積の狭い居住空間を有効に使用するためであろう。壁高は最高で25cm程度。床面において5つのピットを検出したが、明確に主柱穴と認定できるものは確認できなかった。住居跡の南東隅と南西隅には主柱穴的な柱穴が見



第83図　72・73号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

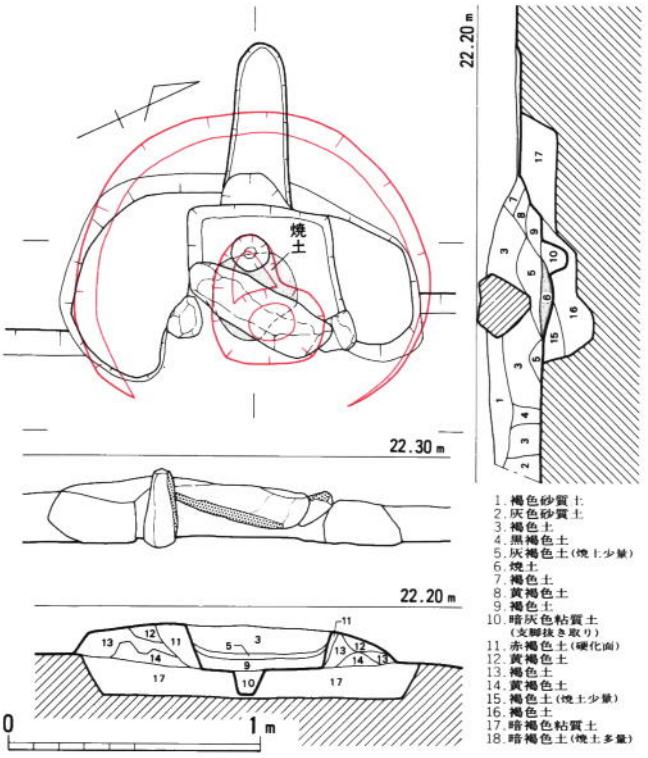
られるが、北壁にはそれに対応しそうな柱穴は検出されず、またこの２つの柱穴についてもかなり浅くて、主柱穴として耐えられるかどうか疑わしい。遺物の出土はパンケース１箱弱で、大きく復原できる土器はほとんどない。ただし、床面からは第194図19・20・22の鉄器や第189図14の砥石が出土した。図示した土器は11点で、床面からは１・３・７・11が、カマドからは４が、その他は埋土から出土した。このほかにも、第194図16の鉄器が埋土から出土している。

カマド（図版33　第85図）カマドの規模は142×135cmで、煙突部が約50cmほど伸びる。構造的にはまず140×120cmの範囲で円形状に大きく掘り込んでおいて、その中に暗褐色粘質土を敷いてから袖等を作り上げていく方法が執られている。袖の幅は北側が35cm、南側が45cmと広く、内部は50cmほどの正方形に形成される。焚き口とほぼ同じレベルの火床は35×30cmの範囲で広がり、その西端部では支脚の抜き取り痕が確認された。火床の下位からは、その上部で焼土を



第84図　74・109号竪穴住居跡実測図（1/60）

少量含むピットが検出されたが、これがカマドにとってどのような役割を果たすのか確認できなかった。架口は崩落の状態で検出されたが、本来は焚き口の両脇に自然石を各1つ立て、その上に横長い自然石を据えていたと考えられる。このことは、これら3つのいずれの石においても第85図に図示したように、1面のみ加熱により赤褐色に変色していたことからも推察される。図版33（2）は焚き口の石組を、復原のため据え直したものである。カマド内部からは第86図4が出土した程度で、遺物はほとんど出土しなかった。



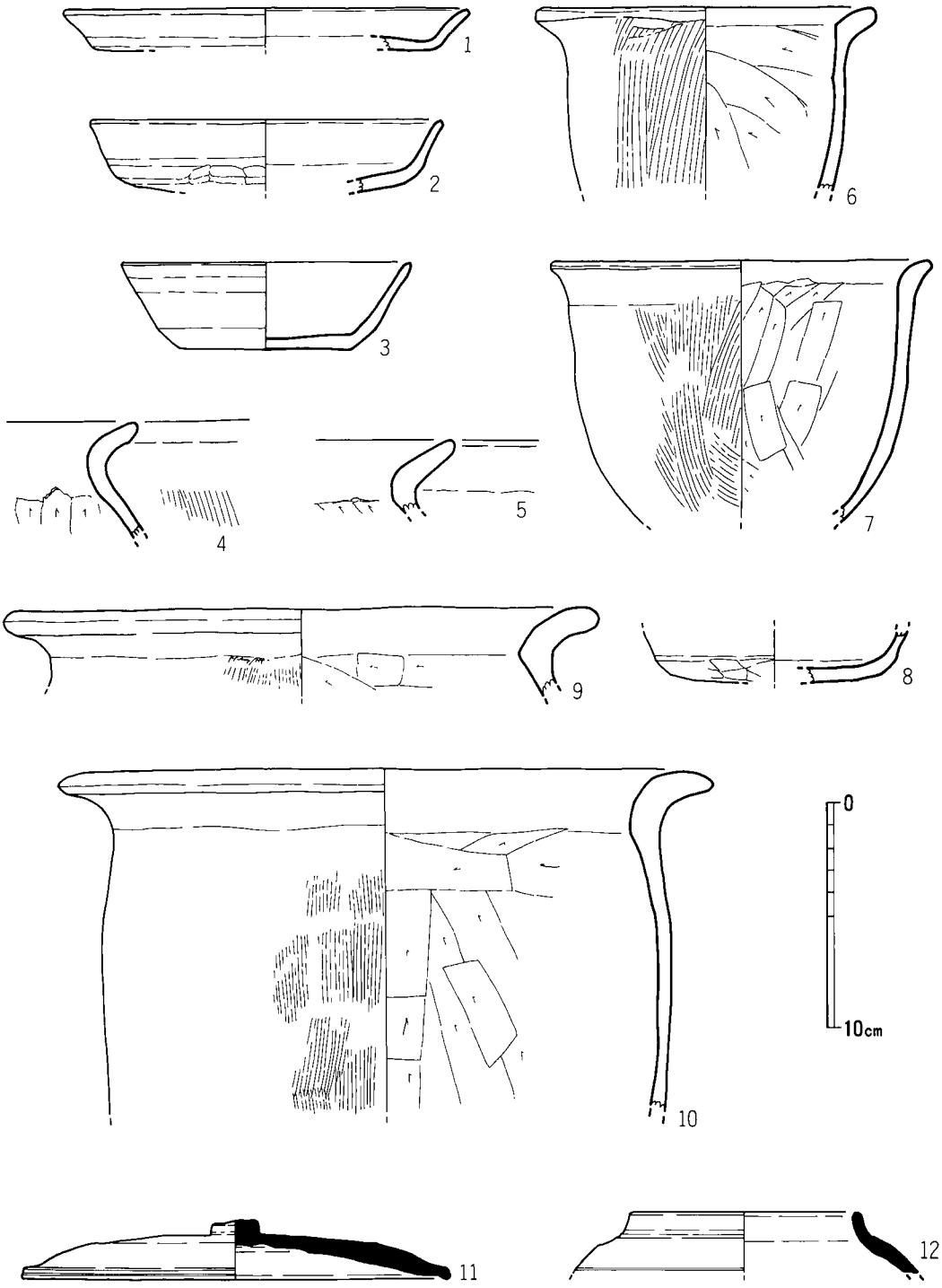
第85図　74号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

土器（第86図1～12）1は復原口径19cmの皿、2は復原口径16cmの坏、3も復原口径13cmの坏で、いずれも底部にヘラケズリが施される。また、2・3の底部外面には、煤状の炭化物が付着する。4・5は甕の口縁部破片。6は復原口径15cm、7は復原口径17cmの小型の甕で、いずれも外面は二次加熱によって変色する。8は小型甕の底部であろう。9は復原口径26cmの甕。10は復原口径29cmの甕で、外面には炭化物が広く付着する。

11は復原口径19cmの須恵器坏蓋で、摩滅が著しく器面調整不明。12は復原口径10cmの小型の須恵器短頸壺で、肩の部分に細い沈線文が1本施される。

石器（第189図14）本住居跡の南東隅床面から出土した粘板岩製の砥石。本来は細長い形態であった砥石の端部に相当し、実際に砥石として使用されているのは2面しか観察されない。

鉄器（第194図16・19～24）16は手鎌で、6.4cmの遺存状態である。最大幅2.2cm、背の厚さ3mmで、刃部は4.5cmまで残る。端部を折り曲げて袋状としている。背部から1cmの幅で刃部と平行して木質部が遺存している。19・20は紡錘車で、19は軸部現存長11.6cm、軸部径4mm、円盤部径4.1cmを測る。20は軸部現存長5.2cm、軸部径3mm、円盤部径3.5cmと19に比してやや小振りである。21～24は棒状の鉄製品で、現存長は21が3.7cm、22・23は3.2cm、24は2.4cmを測る。断面の形状が丸みを帯びることから紡錘車の軸部になろう。



第86図　74号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

75号竪穴住居跡（図版34　第87図）

調査区の中央部北端に位置（O６区）し、北側のコーナーは調査区域外となる。南北5.3m、東西5.25mとほぼ正方形プランの住居として検出したが、北側に位置するカマドからすると北側の辺は１ｍほど短い可能性もある。Ｐ１～Ｐ３が主柱穴で、深さ40～60㎝。Ｐ１～Ｐ２間1.8m、Ｐ１～Ｐ３間2.85mを測る。床面より土師器坏･坏身･甕、須恵器坏蓋･坏身等が出土。６世紀後半。

カマド（図版34　第88図）一部が調査区域外にかかり、遺存度も良くない。１ｍほどの円形の掘りかた内に30×40㎝の火床面と支脚の抜き跡が残る。土師器坏身（４）と甕（５）が出土。

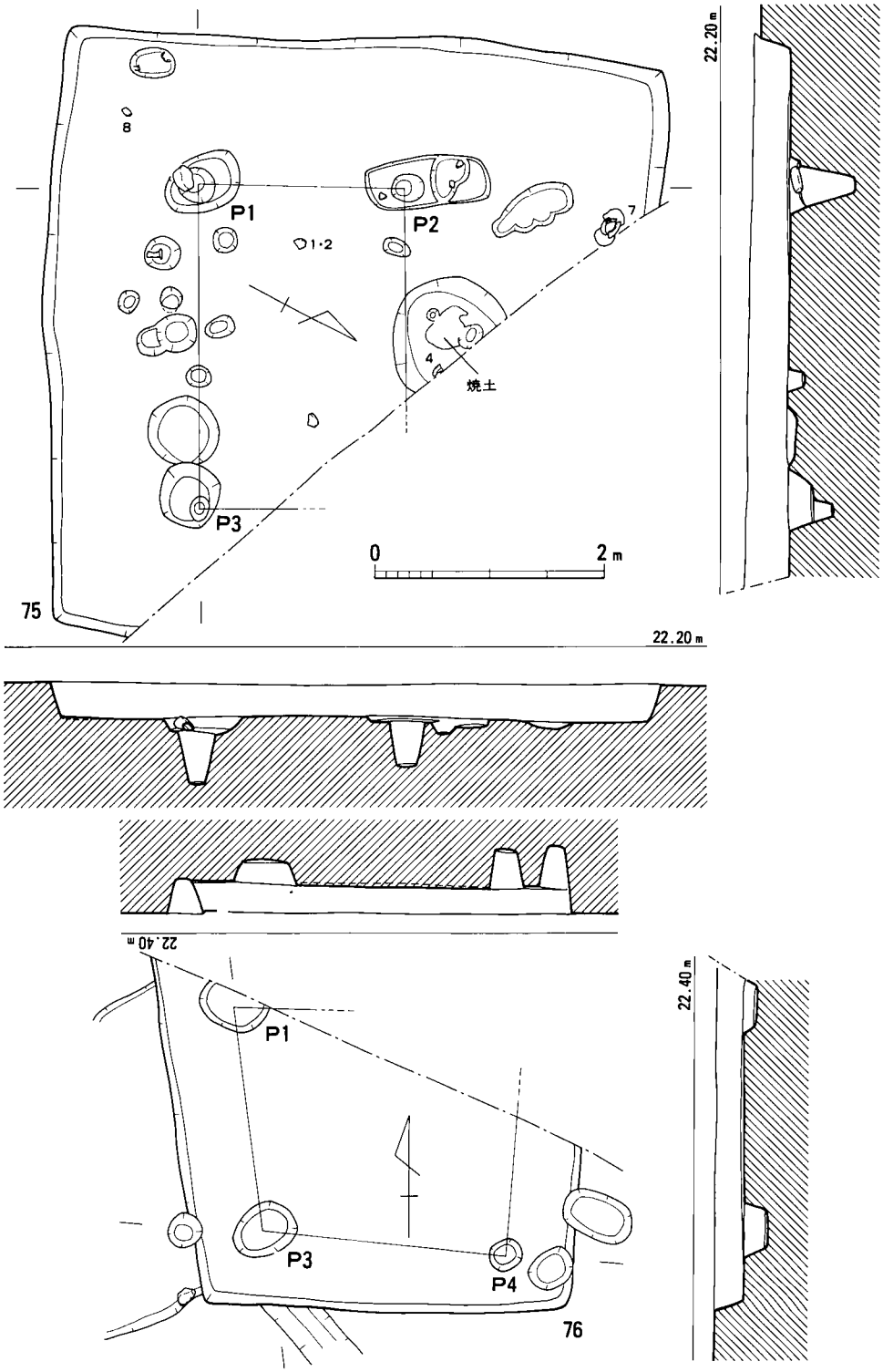
土器（第89図１～12）１～７は土師器。１・２の坏はセットで出土し、１は天井部と口縁部の境に軽い段を有す。口縁部はやや外開きにそのまま立ち上がる。２は丸みのある底部から偏球状の胴部を有し、１と同様に軽い段を持ち、やや内傾した口縁部となる。胴部外面下半はヘラケズリ。両者とも色調は白橙褐色で、底部には黒斑が残る。１の復原口径14.5㎝、器高4.6㎝、２は口径12.2㎝、器高4.45㎝で、１の口径が２に比べると大きすぎるきらいがあるが、１は小さな口縁部破片からの復原実測であり計測の誤差であろう。３はＰ１を切る上層の柱穴より出土した坏身。口径12.6㎝。４はカマド内出土の坏身。底部から直線的に外方に広がる。口径13.7㎝。５・６は小型の甕で、両者とも口縁部と胴部の境に明瞭な稜を持たない。内面は頸部以下がヘラケズリ。５の口径15㎝、６は16.8㎝。７は大型の甕。球形の胴部から強く屈曲し、肥厚させない口縁部となる。外面の胴部上半は横ないし斜め方向の、下半は縦方向の密なハケ調整。内面頸部以下はヘラケズリ。口径16.7㎝。

８～12は須恵器。８～10は坏蓋で、８の天井部はやや丸く、９は偏平である。いずれも天井部は回転ヘラケズリであるが、８の頂部は未調整である。８は口径13.9㎝、９は口径14.4㎝、器高3.6㎝、10は口径14.6㎝。11・12は坏身。11は内傾するがやや長めに立ち上がる受け部を有す。12は部厚な蓋受けで短い立ち上がりを持つ。底部には当て具痕が残る。口径は11が14㎝、12が13.3㎝。

76号竪穴住居跡（第87図）

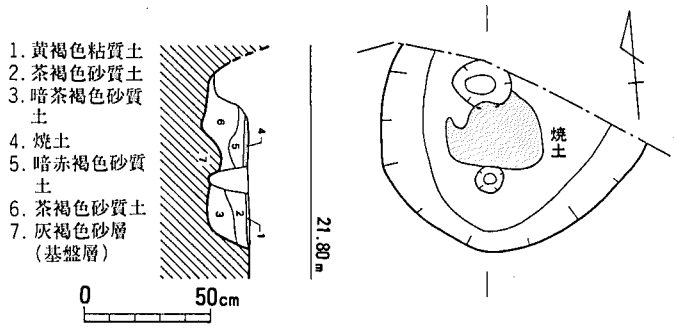
調査区の中央部北端で、75号竪穴住居跡の西側８ｍに位置（Ｎ６区）する。住居跡の半分は調査区域外となる。東西3.5m、南北３＋αｍで、深さ0.25mを測る。カマドは調査区内には無く、北壁に設置されていたと考えられる。Ｐ１・３・４は主柱穴で、Ｐ１～Ｐ３間2.0m、Ｐ３～Ｐ４間2.1mである。埋土より土師器、須恵器が若干出土した。

土器（第90図１～７）１～３は土師器坏身で、底部を欠損する。１は底部に比べて厚みのある口縁部を有す。３は丸みのある坏である。１の口径12.3㎝、２は12.8㎝、３は12㎝。４・５は甕。４は頸部に厚く、口縁部は90°近くに屈曲する。口縁部内面にはハケ調整を施す。口径15.2㎝。５は胴部から大きく外反する口縁部を有す。口縁部外面は縦方向の荒いハケ調整、内



第87図　75・76号竪穴住居跡実測図（1/60）

面の頸部以下は斜め方向のヘラケズリ。口径18cm。6は高坏。低い脚部に対して深みのある坏部を持つ。坏部は胴部下半で反転し、外弯しながら外反する。脚は大きく「ハ」の字状に広がる。調整等は磨滅して不明。口径14.4cm、坏部の深さ4.8cm、脚部径11.8cm、器高8.4cm。



第88図　75号竪穴住居跡下層カマド実測図（1/30）

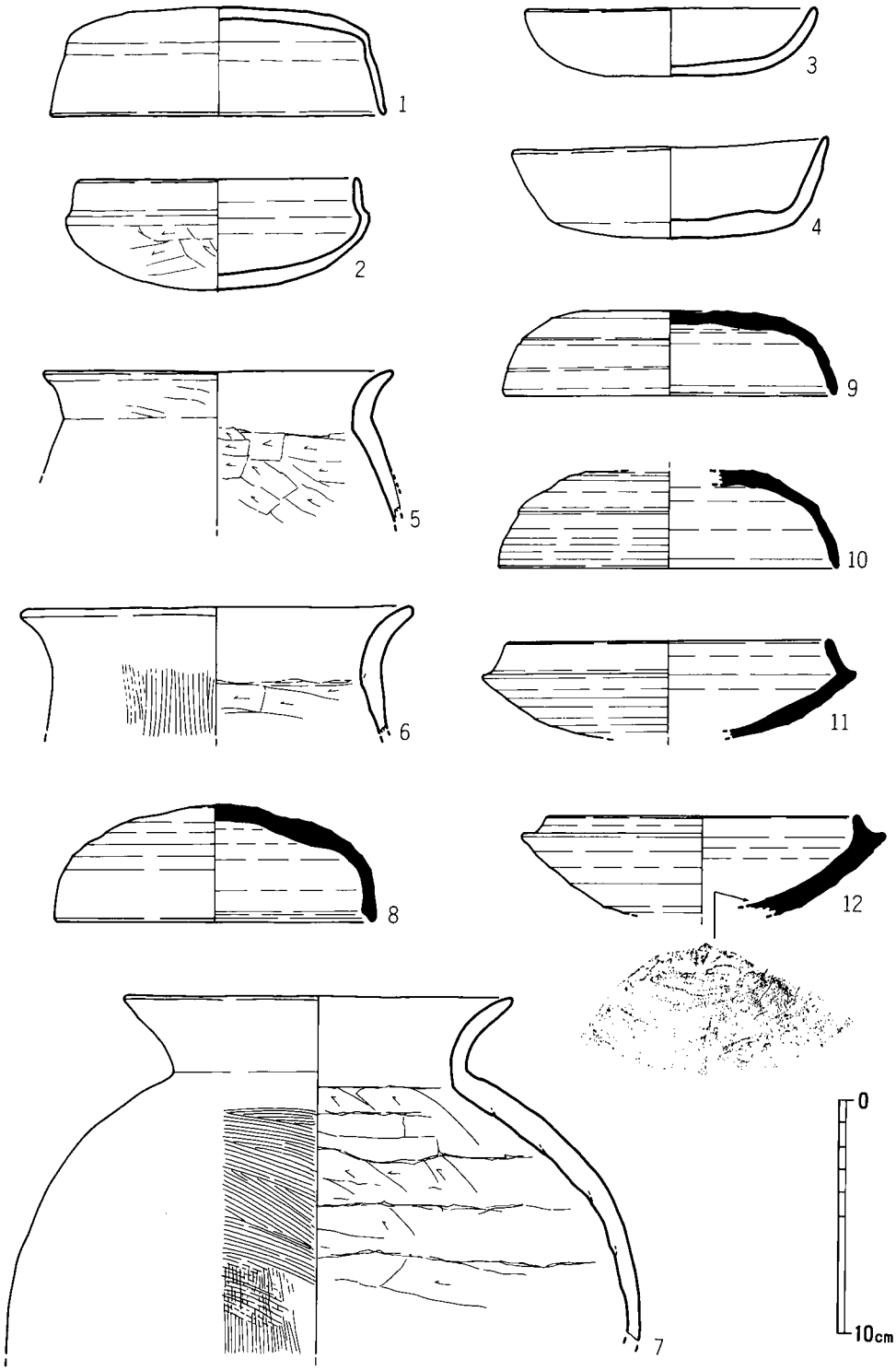
7は須恵器坏身。蓋受けの立ち上がりは短い。底部は回転ヘラケズリ。口径11.6cm。

77号竪穴住居跡（図版35　第91図）

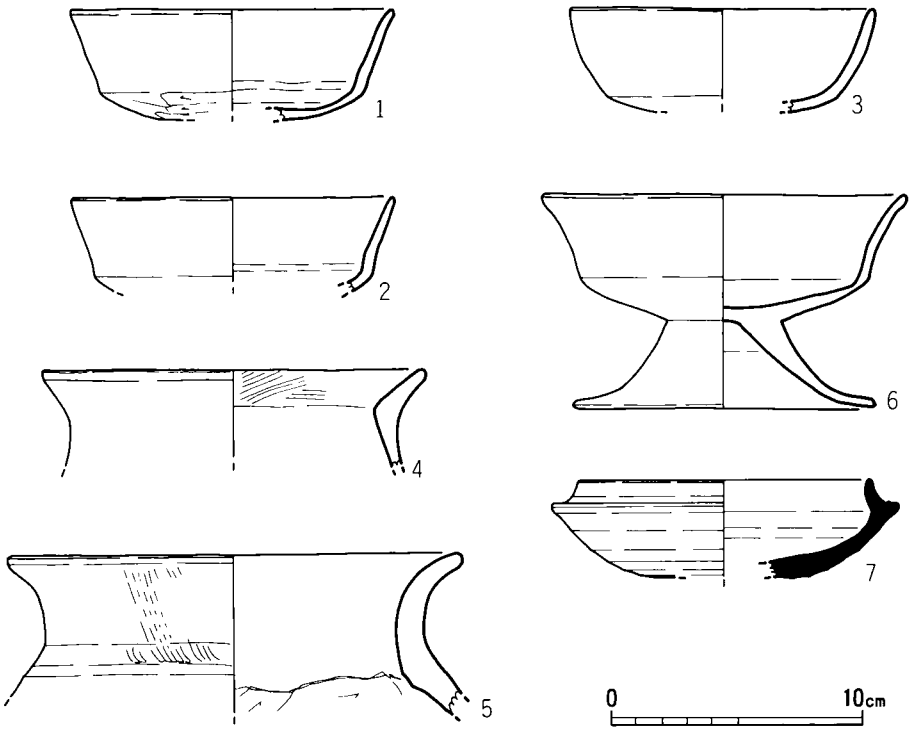
L-M5区に位置し、弥生時代の100号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸を東西方向に取る。北壁長3.65m、東壁長3.80m、西壁長3.02mで、壁高は北壁側で20cmの遺存状態である。主柱穴はP1～4の4本で、径20～40m前後、深さは30cm前後である。柱間間隔はP1～2間1.81m、P2～4間1.93m、P1～3間1.82m、P3～4間1.77mを測り、主柱穴を結んだ線は不整方形を呈する。また、東壁中央には長さ1.10mの楕円形の穴がある。埋土中および床面からは多くの土器が出土している。また、臼玉（第189図3）も埋土からの出土。

カマド（図版35　第92図）作り付け型のカマドで、北壁中央に付設している。割合遺存状態の良好なカマドで、煙道部の立ち上がりを留めていた。右袖は残存長75cm・基部幅35cm・残存高10cmで、左袖は残存長65cm・基部幅28cm・残存高11cmを測る。当カマドは袖部先端に石を立てないもので、黄褐色砂質土で壁体を構築している。支脚には長さ31cmの河原石を立てているが、土層縦断面を観察すると火床面を作ると同時に埋めており、その下層には掘り込みと焼土層がみられることから作り直しを行っていることが判る。煙道は立ち上がり部を留める程度であるが、幅23cm、奥行き5cm程遺存していた。

土器（第93・94図1～16）1～11が土師器である。1～6は坏で、口縁部は体部の屈曲部から直立気味に開くもの（1）と外反して開くもの（2～5）と内傾するもの（6）とがある。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。4は器高4.5cm、復原口径13.4cmで、6は器高4.3cm、口径12.6cmを測る。7は手捏ね風の椀で、短い口縁部がつく。外面ハケ目調整で、内面には指頭圧痕がみられる。8～11は口径14～18cm程の甕で、口縁部はよく締まった頸部から大きく開く。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリを主体とし、8の体部外面にはヘラ状工具による擦過痕がみられる。9・11は二次加熱を受



第89図　75号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第90図　76号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

けて赤変し、外面には煤が遺存している。11は器高34.9cm、口径17.7cmを測る。

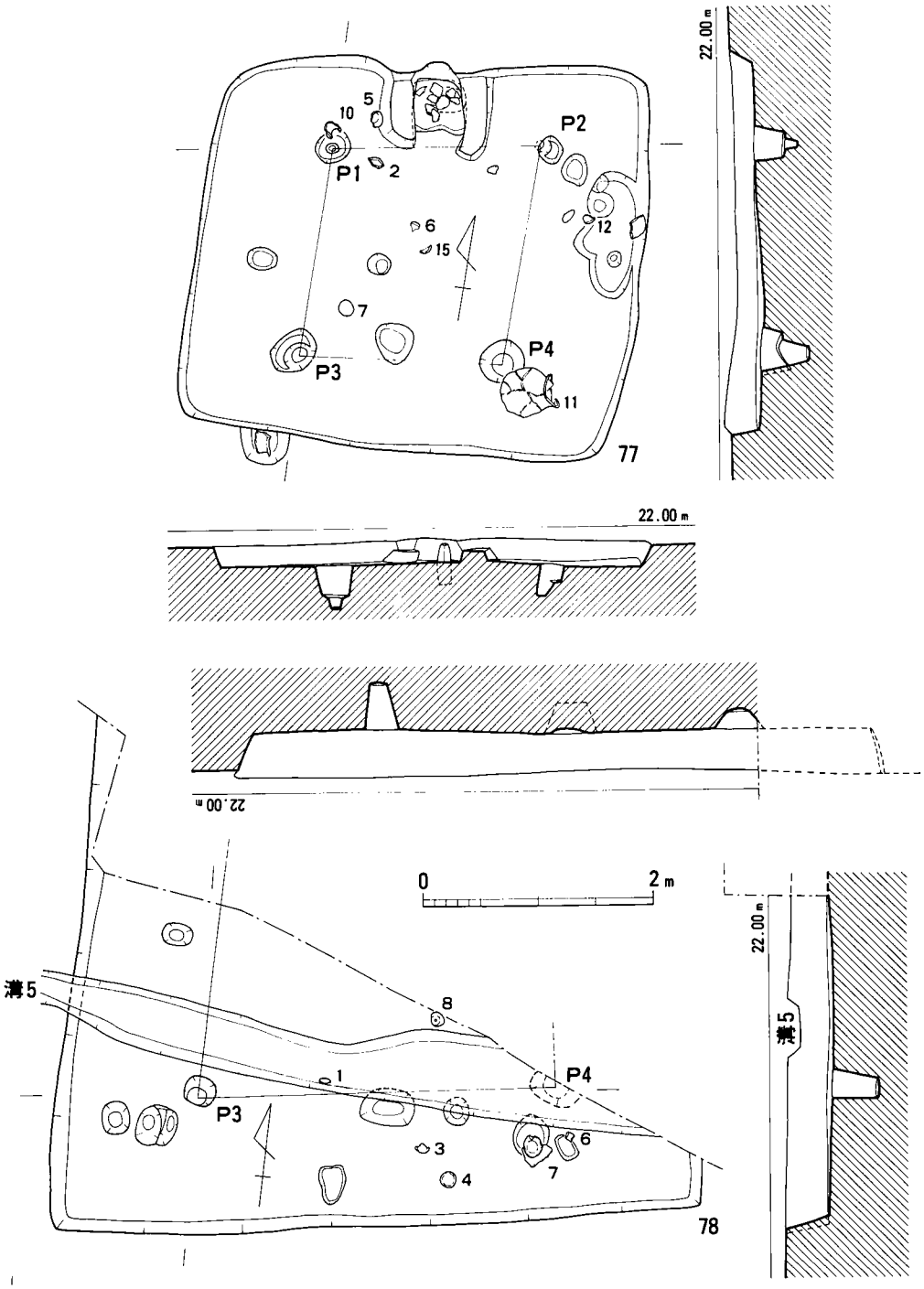
12～16は須恵器である。12・13は坏蓋で、天井部はドーム状を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。12は器高4.6cm、復原口径13.6cmを測る。14・15は坏身で、立ち上がりは短く内傾する。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ調整による。また、15の口唇部は打ち欠いている。14は器高3.8cmで、口径は12.2cmに復原した。16は体部との境にヘラ描き沈線を２条施していることから無蓋高坏の坏部になろう。口径は11.0cmに復原した。色調は灰色ないし青灰色を呈し、焼成はいずれも堅緻である。当竪穴住居跡の時期は、６世紀末頃であろう。

石製品（第189図３）明灰褐色を呈する滑石製の臼玉。厚さ３㎜、径６㎜、孔径1.5㎜。

鉄器（第194図27）27は方形の板状製品で、一辺3.6cm×3.6cm、厚さ0.15cmと非常に薄い。用途は不明。

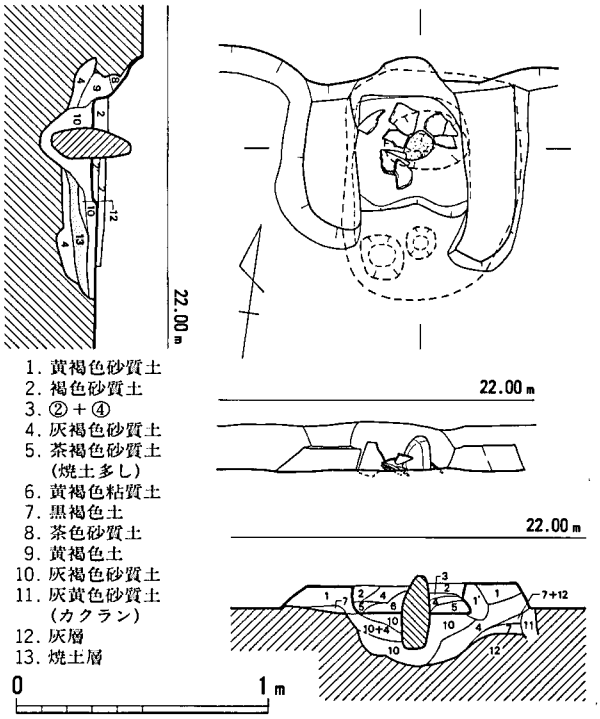
78号竪穴住居跡（図版36　第91図）

Ｌ５区に位置し、５号溝に切られ弥生時代の96号竪穴住居跡を切っている。南壁長5.62mで、東壁は4.5m分検出した。壁高は西壁側で40cmを測る。南半部を残す程度で、大半が調査区外



第91図　77・78号竪穴住居跡実測図（1/60）

にあるため詳細は不明だが大型住居の部類に属する。P3・4が主柱穴であるが、深さ40cmとしっかりしている。なお、柱間間隔は3.13mを測る。カマドは調査した範囲では検出できなかったことから北壁ないしは東壁に付設していたものと推測される。埋土中および床面から土器が出土している。



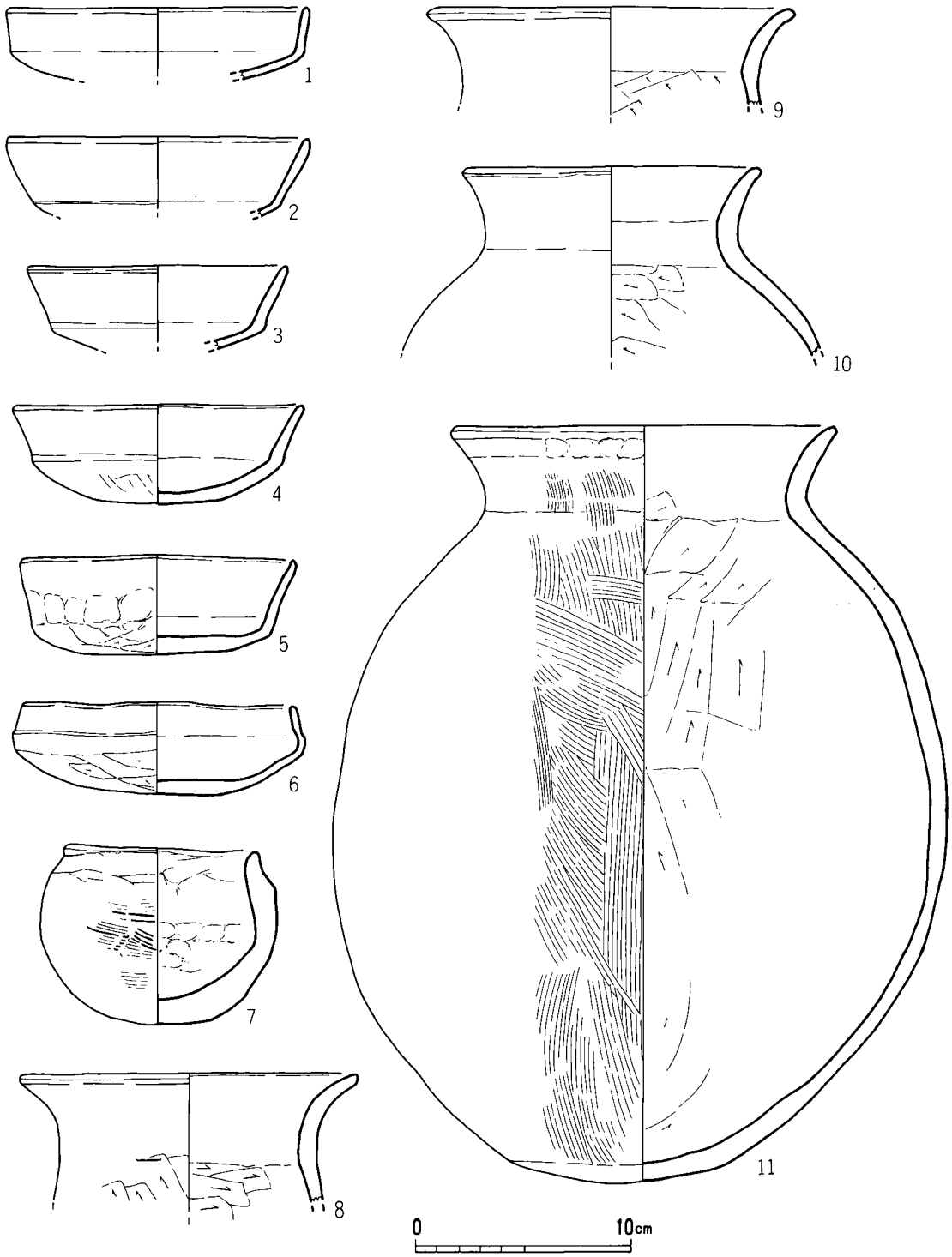
第92図　77号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

土器（第94・95図1～13）1～7が土師器である。1～4は坏で、2の口縁部は大きく外反する。2は内面に細かいミガキを施しており、胎土も精良な作りの土器である。3・4は口縁部が内傾するもの。器高は3が4.3cm、4は4.5cmで、口径は3が11.8cm、4は12.2cmに復原した。調整はともに口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。5・6は口径14.0cmの小型品で、口縁端部を細く仕上げている。7は口径20.6cmの中型品。口縁部は頸部から緩やかに外反する。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリを主体とし、6・7の頸部内面には横方向のハケ目がみられる。

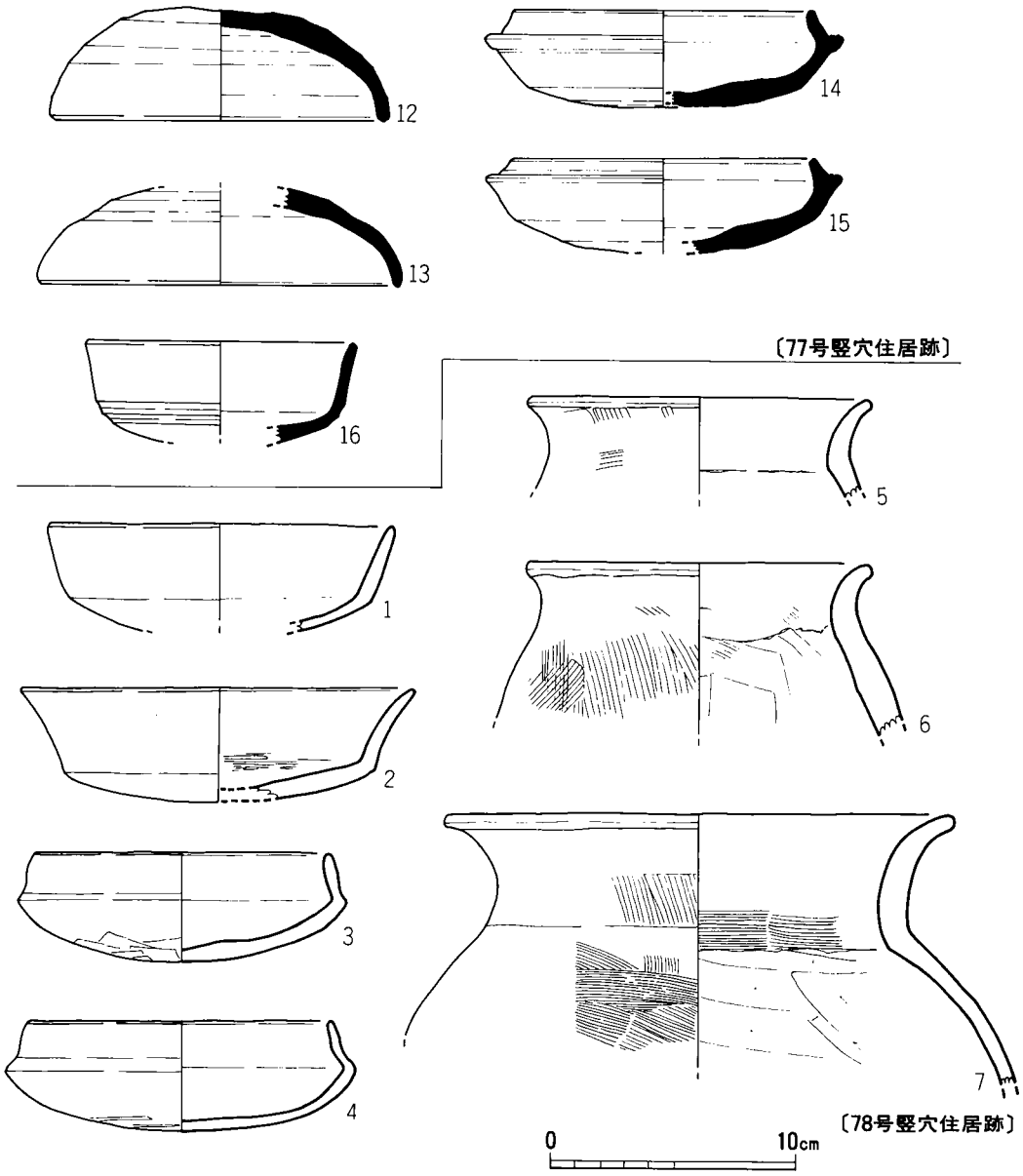
8～10は須恵器の坏蓋で、天井部はドーム状を呈する。9は口唇部に段を有し、口縁部と体部との境にヘラ描き沈線を巡らしている。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面回転ナデ調整により、8・9の内天井部には当て具痕がみられる。器高は8が4.4cm、9は4.7cmで、口径は8が13.4cm、9は14.4cmに復原した。11～13は坏身で、立ち上がりはやや大きく内傾する。調整は口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。また、12の口唇部は打ち欠いている。色調は灰色ないしは青灰色を呈し、焼成はいずれも堅緻である。当竪穴住居跡の時期は9・13の土器から6世紀中～後半であろう。

80号竪穴住居跡（図版37　第96図）

N-O8区に位置し、南半部は調査区外に伸びる。北壁長4.95mで、東壁長は4.40mまで検出したが、竪穴部内でP3が検出されていないので東壁は5.5m程になるか。壁高は東壁側で20cmの遺存状態である。柱穴はP1・2を検出したが、住居壁側に寄っている。径30～40cm、



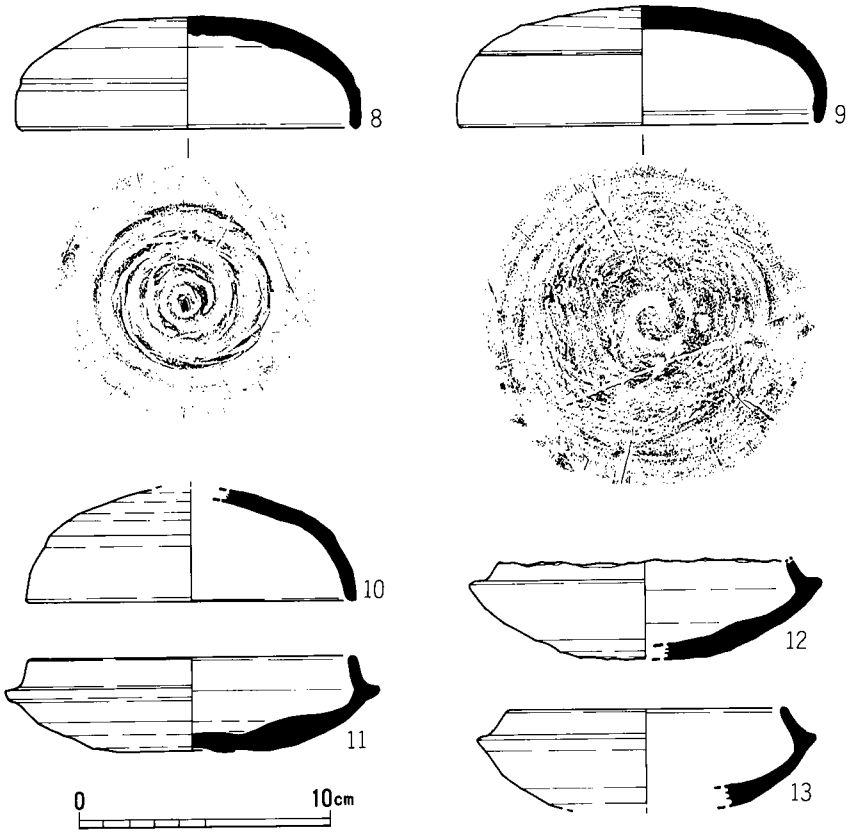
第93図　77号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第94図　77・78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

深さはＰ１が12cmで、Ｐ２は23cmであった。柱間間隔は4.13mを測る。埋土中およびカマド内から土器が出土している。

カマド（図版37　第97図）作り付け型のカマドで、北壁中央に付設している。割合遺存状態の良好なカマドで、袖部・袖石を留めていた。右袖は長さ89cm・基部幅48cm・残存高13cmで、

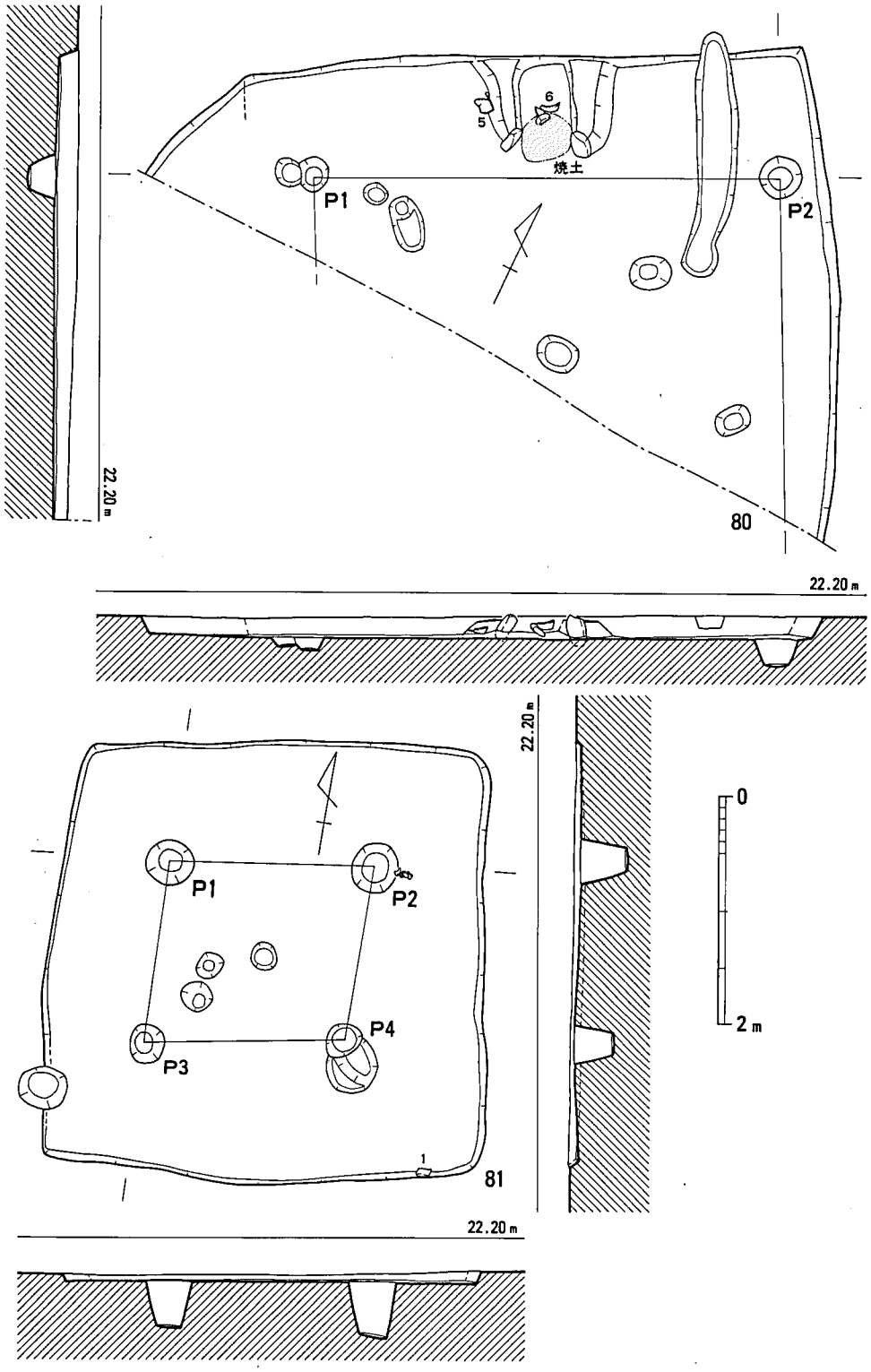


第95図　78号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

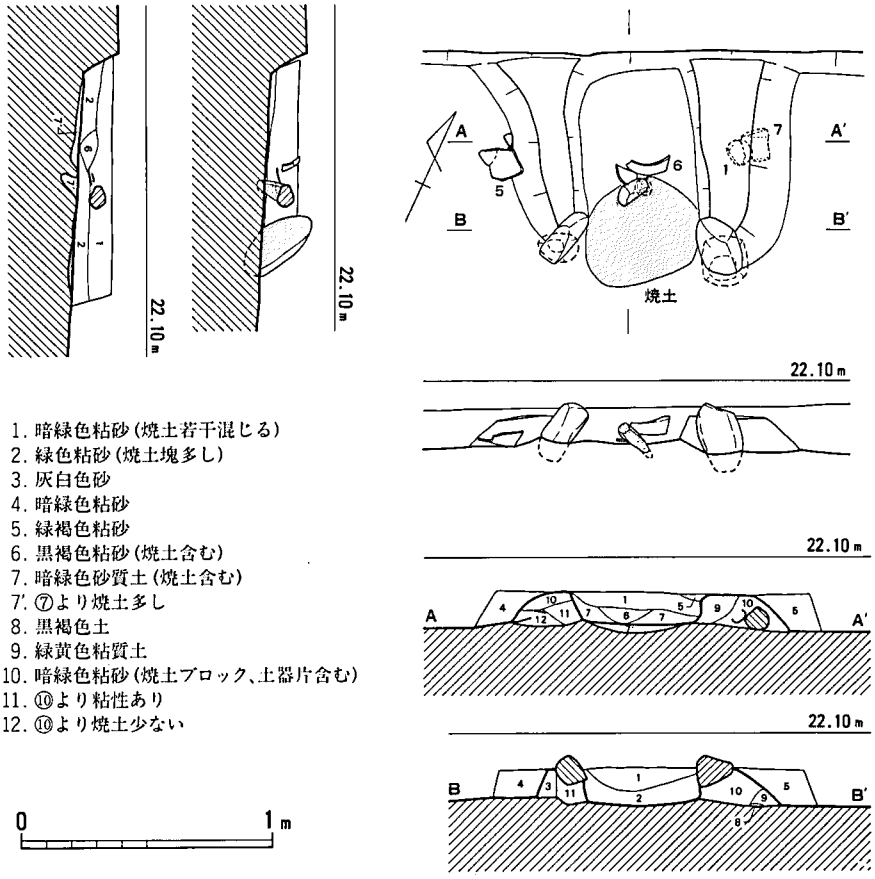
左袖は長さ84cm・基部幅48cm・残存高11cmを測る。カマド先端には長さ25cm程の河原石を立てており、側面は加熱により黒化していた。支脚には長さ17cmの河原石を立てているが、奥壁から43cmと他のカマドに比して離れている。カマド内からは土師器が出土している。

土器（第98図１～８）１～７は土師器。１・２は椀で、底部を欠くが丸底を呈するものと思われる。１は内外面とも細かいヘラ磨きを施しており、内外面には黒漆を塗布している。３は手捏ねの椀で、器肉は厚く底部は1.7cmを測る。外面は面取り風のヘラケズリによる。３は器高5.5cm、口径9.6cm。４は小型の甕で、復原口径13.4cm。５・６は復原口径16cm程の中型品。口頸部は４～６とも「S」字形に緩やかに外反し、端部を細く仕上げている。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。また、６の体部下半にはヘラケズリがみられる。７は土製支脚で、上部を欠損する。底面は平らで、器面は指押さえによる。

８は須恵器の坏身で、立ち上がりは直立気味である。底部を欠くが、器高は4.5cm程になろう。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈する。当竪穴住居跡の時期は、６世紀後半頃であろう。



第96図　80・81号竪穴住居跡実測図（1/60）

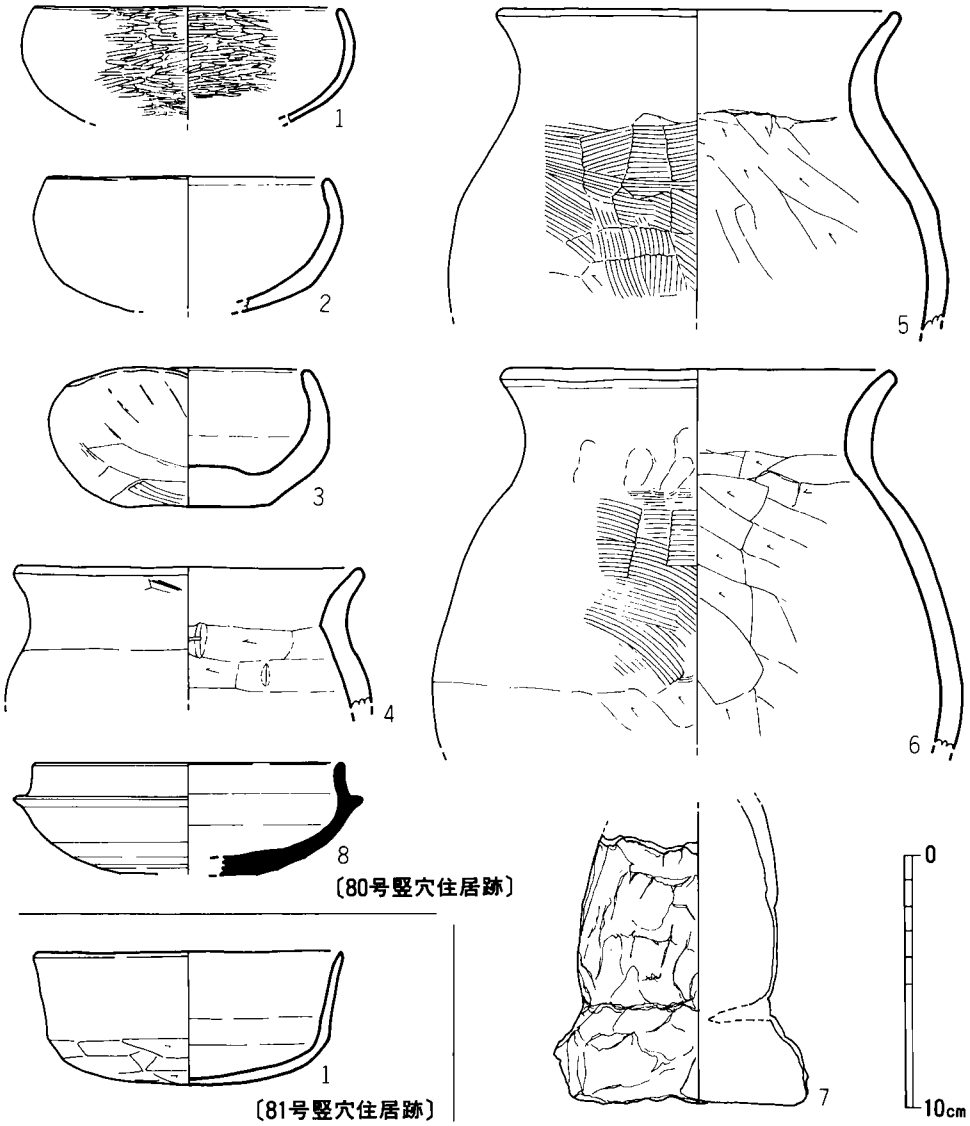


第97図　80号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

81号竪穴住居跡（図版36　第96図）

M-N 8 区に位置し、弥生時代の83・84号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長3.42m、西壁長3.64mで、壁高は北壁側で11cmと削平が著しい。主柱穴はＰ1～4の4本で、径30～40cm前後、深さは35～45cm前後である。柱間間隔はＰ1～2間1.82m、Ｐ2～4間1.53m、Ｐ1～3間1.60m、Ｐ3～4間1.78mを測り、主柱穴を結んだ線は不整方形を呈する。カマドは残骸さえも検出されていないため何れの壁面に付設されたものか不明。埋土中から土器が出土している。

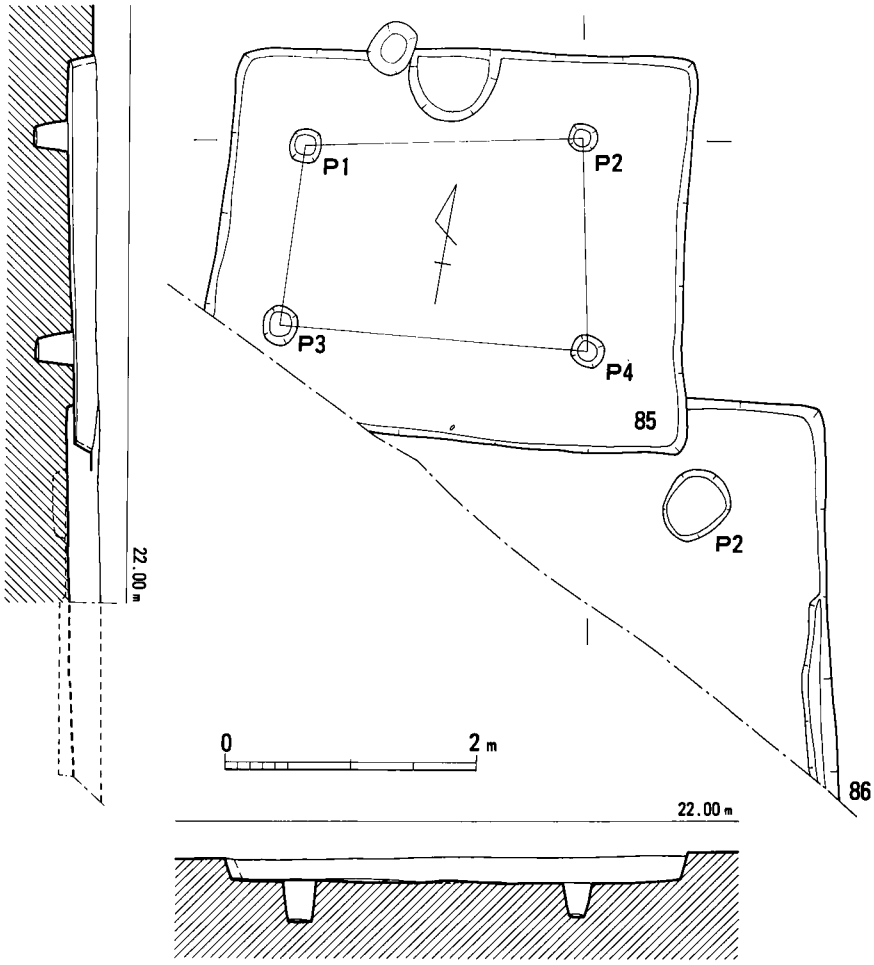
土器（第98図1）1は土師器の坏で、器高は5.1cmと深めである。口径は12.2cmに復原した。薄手の作りで、口唇部はシャープである。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。当住居跡の時期は概ね6世紀後半～末頃であろう。



第98図　80・81号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

85号竪穴住居跡（図版38 第99図）

Ｌ７区に位置し、86号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸を東西方向に取る。北壁長3.63m、東壁長3.09mで、壁高は北壁側で20cmの遺存状態である。主柱穴はＰ１～４の４本で、径0.25m前後、深さは0.30m前後である。柱間間隔はＰ１～２間2.21m、Ｐ２～４間1.70m、Ｐ１～３間1.44m、Ｐ３～４間2.46mを測り、主柱穴を結んだ線は不整方形を呈する。なお、北壁中央には浅い落ち込みがあり、ここにカマドを付設していたものと思わ

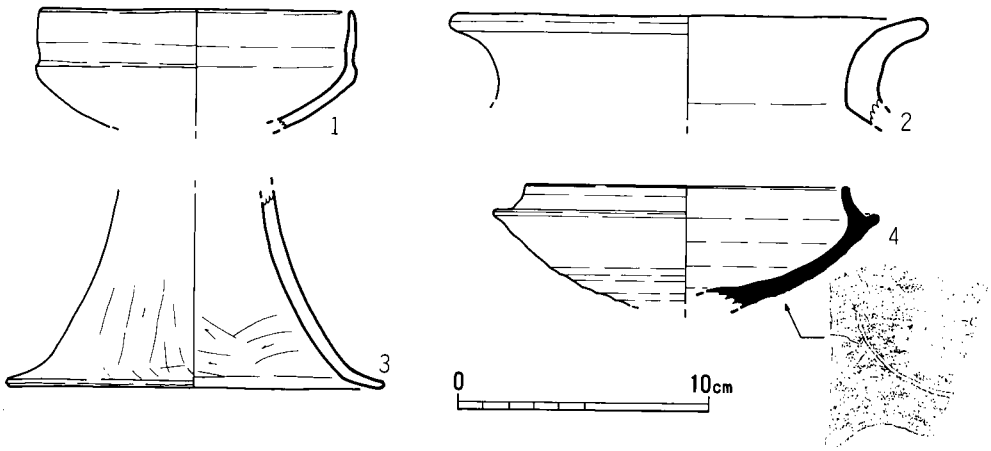


第99図　85・86号竪穴住居跡実測図（1/60）

れる。埋土中からは若干の土器が出土している。

土器（第100図１～４）１～３は土師器。１は坏で、口縁部は体部の屈曲部から直立する。薄手の精良な作りの土器で、口唇部はシャープである。口径は12.4cmに復原した。２は復原口径が19.0cmの中型の甕で、口縁部は大きく外反する。３は高坏の脚部破片で、裾部の張り出しは弱い。内外面ともヘラケズリにより、外面には赤色顔料を塗布している。復原裾部径は15.0cm。

４は須恵器の坏身で、立ち上がりは短く内傾する。やや深めの器形で、口径は12.8cmに復原した。口縁部ヨコナデ、内外面回転ナデ調整による。また、外底部にはヘラ記号を付している。当竪穴住居跡の時期は６世紀後半頃であろう。



第100図　85号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

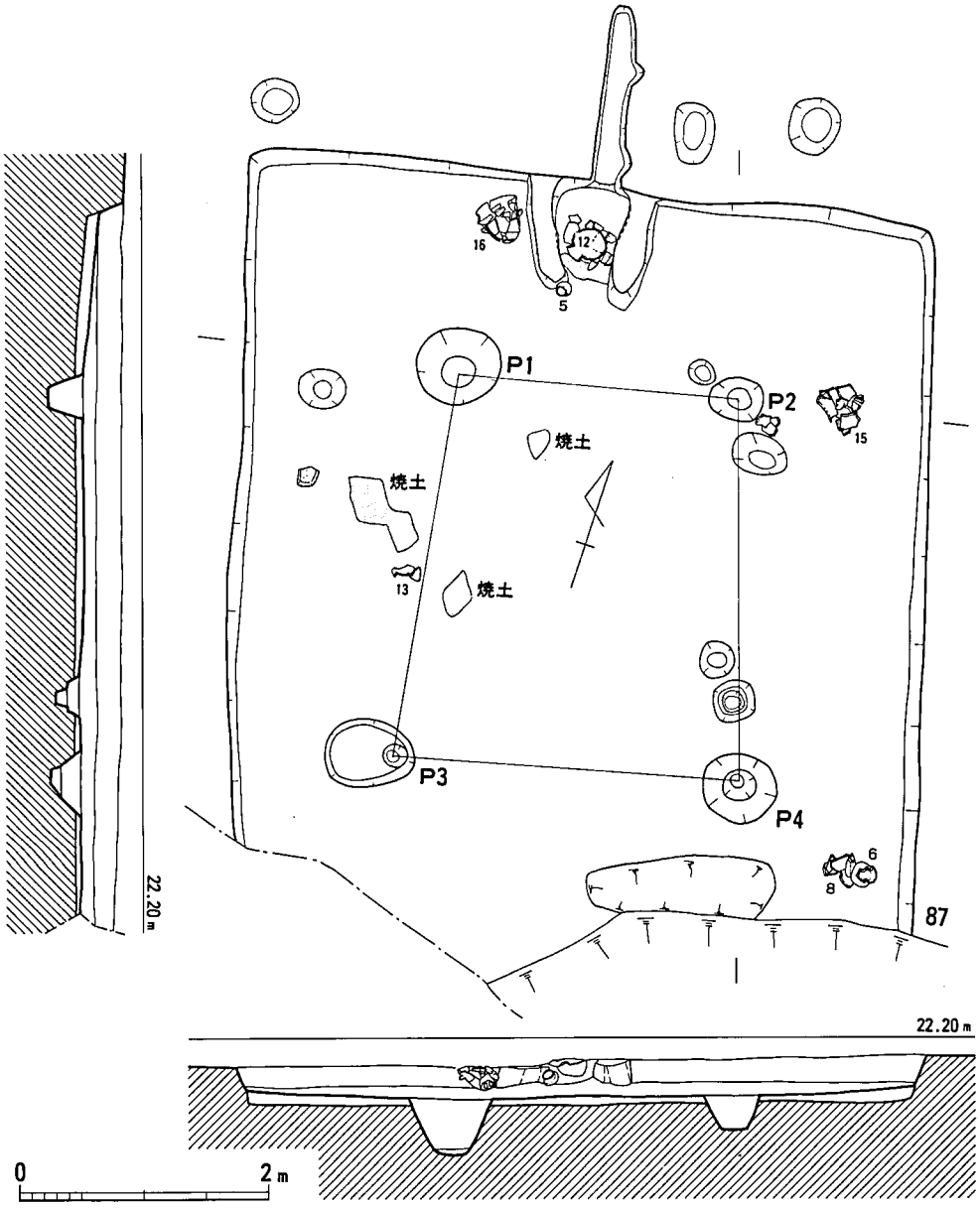
86号竪穴住居跡（図版86　第99図）

L７－８区に位置し、85号竪穴住居跡に北壁を切られる。また、大半が調査区外にあるため規模・柱穴・カマドなど詳細は不明。東壁は3.12m分検出した。東壁側には径57cmのＰ２があり、主柱穴と考えられる。

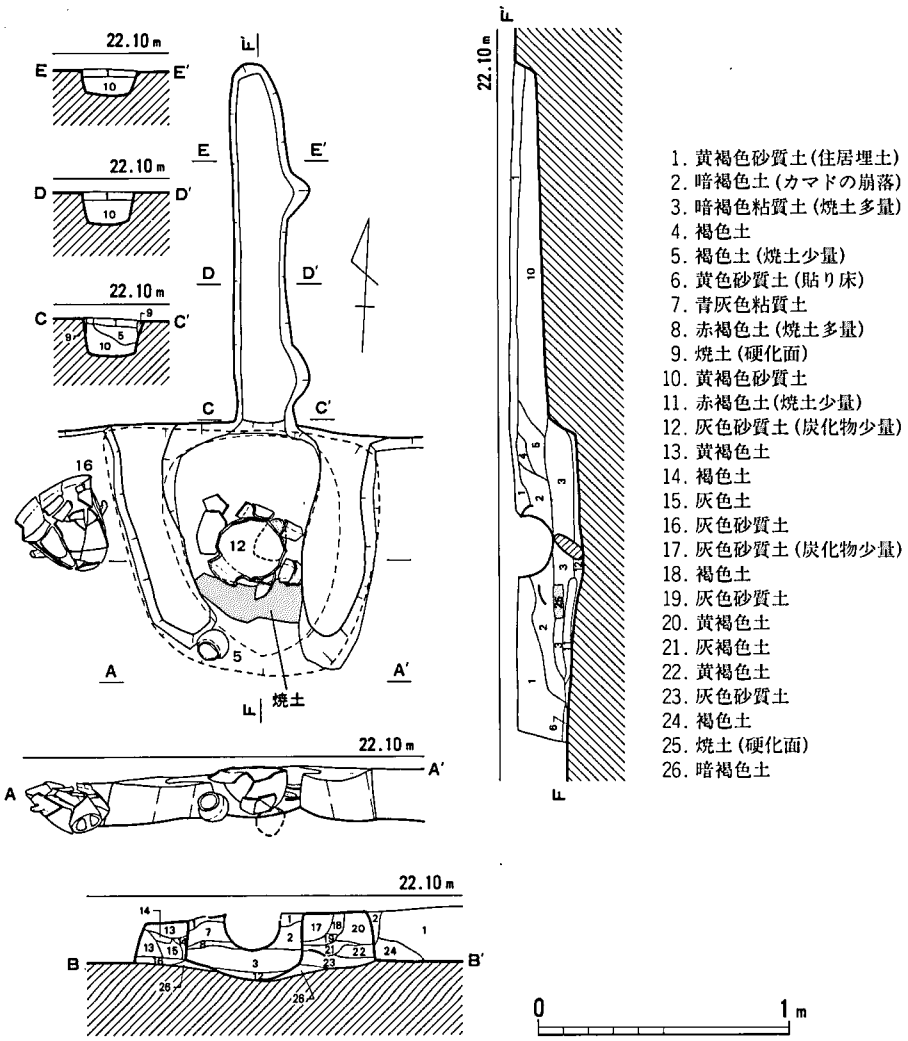
87号竪穴住居跡（図版38　第101図）

87号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのO-P８－９区に位置し、弥生時代の91号竪穴住居跡を大きく切るが、南壁は現在の用水路に削平される。東１ｍには古墳時代の108号竪穴住居跡と、北西４ｍにはやはり古墳時代の111・112号竪穴住居跡と近接するが、いずれとも切り合い関係にはない。平面プランは長方形で、東西方向は5.6mで、南北方向については南壁が現代の用水路に削平されるため現状では6.3mまでしか測れないが、主柱穴との位置関係等からこれ以上にはわずかにしか伸びないであろう。壁高は最高で23cmを測り、床面全体には厚さ５cm程度の黄褐色土混じりの暗褐色砂質土が貼り床として認められた。４本の主柱穴は位置的には問題ないが、サイズは径35～70cm、深さ25～45cmとやや幅がある。遺物はパンケース２箱程度とやや多く、床面からも比較的大きな破片が纏まって出土したが、完形土器はカマド内部やカマドの西側に近接した一群に限られる。本住居跡の中央部西寄りには、床面から焼土が集中して出土した。土器は16点を図示したが、このうち貼り床内からは２が、床面からは６・８・13・15・16が、カマドからは４・５・７・12がそれぞれに出土した。他は埋土からの出土である。

カマド（図版43　第102図）北壁中央部に作られたカマドは、まず119×95cmの範囲で深さ10cmほどが掘り込まれ、その後黄褐色や灰褐色の砂質土で袖を築きあげている。火床となる焼土は焚き口付近だけにしか残っておらず、カマド中央部では認められなかった。また、自然石の



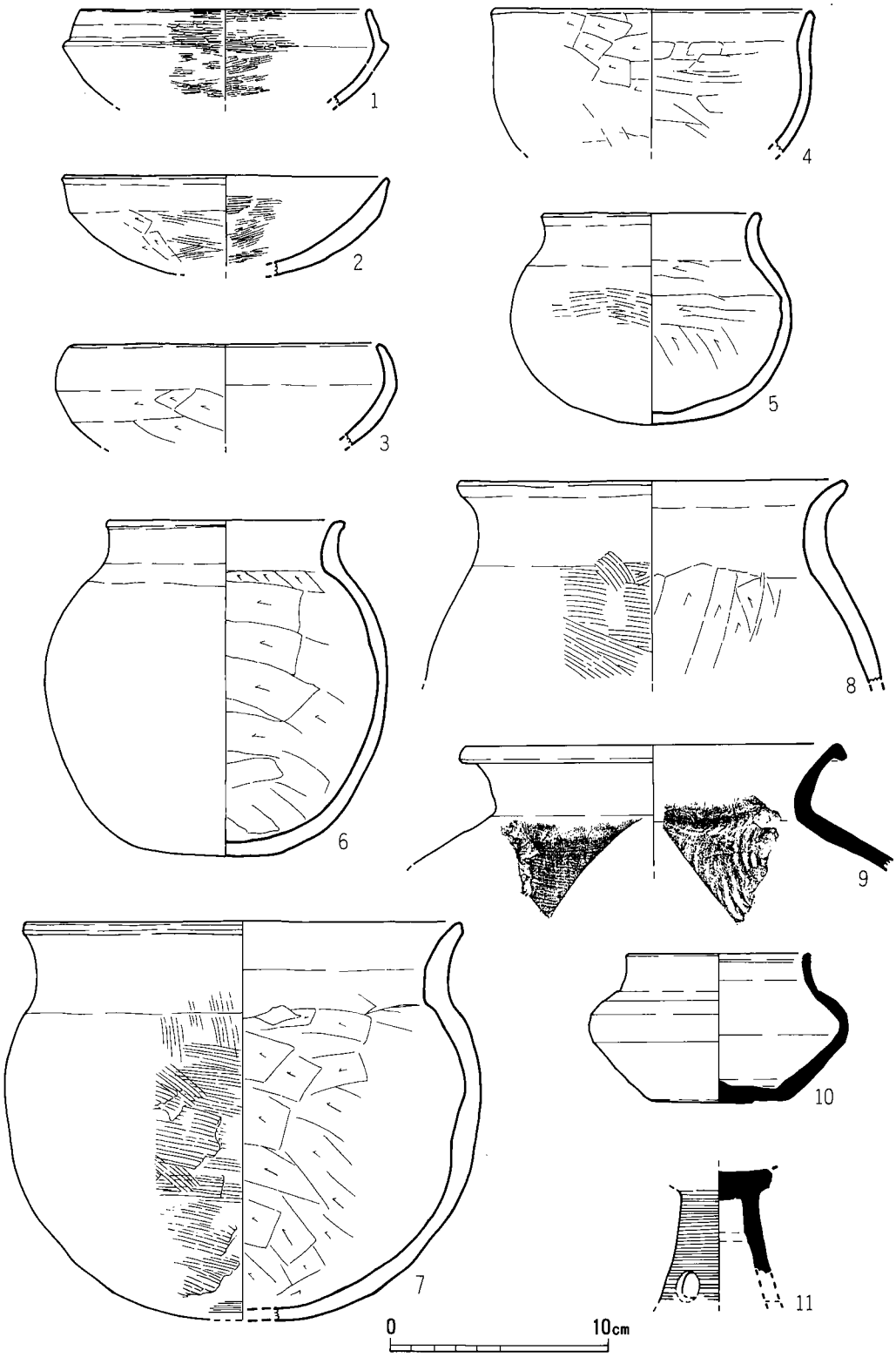
第101図 87号竪穴住居跡実測図（1/60）



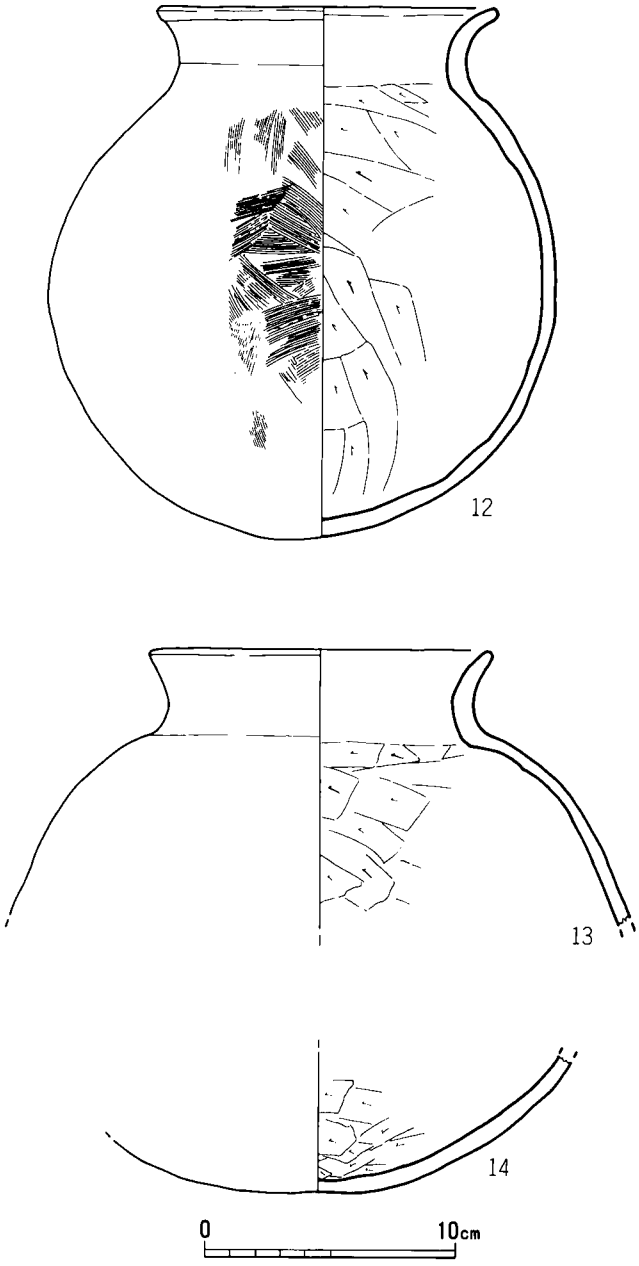
第102図 87号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

支脚は倒れ、その上に残存率３／４程度の甕が横転した状態で出土したものの、甑は破片さえもなかった。甑はほぼ完形に復原できるものが２個体、１つはカマド西袖に近接して、もう１つは本住居跡北西隅の床面から出土した。したがって、これらの状況から、カマド廃絶時にカマド内部を何等かの意図で扱ったものと考えられるが、焚き口横に完形の小型鉢（第103図５）が置かれているだけで、他に祭祀的な要素は窺えなかった。煙道は長さ147cm、幅22cm、深さ15cmで、カマドから中央部付近までは側面が赤く焼けており、またカマドから離れるにつれて、すなわち煙出口に向けて徐々に浅く細くなる。

土器（第103～105図１～16）１は復原口径13cmの坏で、内外面ともに細かい研磨が施される。２の坏は復原口径15cmで、内面は丁寧に研磨が施されるが、外面はケズリ後にハケである。３



第103図　87号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第104図　87号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）

は復原口径14cmの椀。4は復原口径14cmの小型鉢。5はカマドの焚き口に置かれた完形の小型鉢で、口径9.9cm、器高9.5cmを測る。6は復原口径11cm、器高15cmの小型鉢で、二次加熱による変色は認められないが、煤の付着がわずかに見られる。外面の調整はナデ。7は復原口径20cm、器高18cmの鉢で、全体に二次加熱による変色が見られる。8は復原口径18cmの甕。12は復原口径18cm、器高28cmの甕で、外面は二次加熱による変色が、底部の設置面には擦痕が見られる。13は復原口径18cmの甕で、14の底部とは同一個体である。遺存状態は悪く、外面は摩滅により器面調整不明。15はほぼ完形に復原できる甑で、口径は30.6cm、底径は11.6cm、器高23.5cmを測るが、二次加熱による変色は見られない。16もほぼ完形に復原できる甑で、口径は36.2cm、底径は10.3cm、器高28.95cmを測る。底部は丸底に2孔を有するタイプのもので、外面全体は二次加熱による変色が観察される。

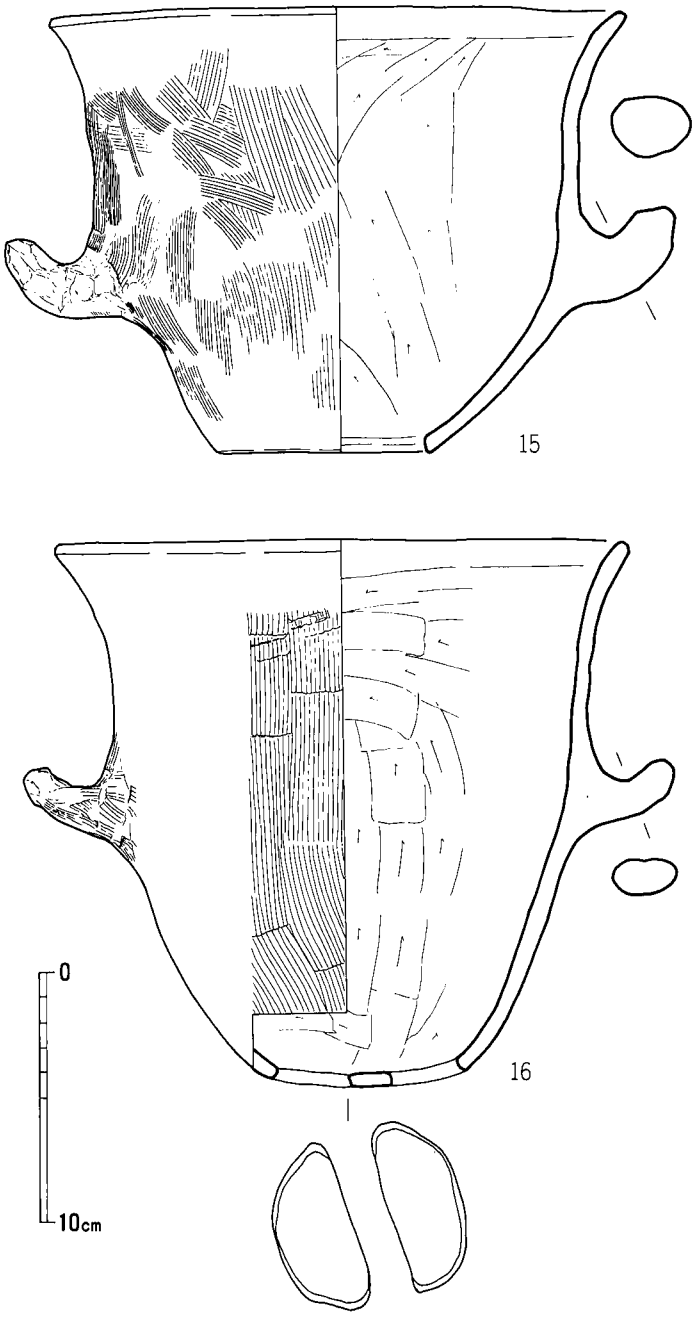
9は須恵器甕で、復原口

径は18cm。遺存状態は悪いが、外面にはカキ目が、内面には青海波の当て具圧痕が残る。10は復原口径８cm、器高７cmの須恵器小型短頸壺で、胴部の最大腹径部のみヘラケズリが施され、他はナデだけで底部も未調整。口縁部内面に細い沈線文が１本施される。全体的に灰被り。11は須恵器高坏脚部上半で、外面にはカキ目が施される。円形の透かしは３方向。

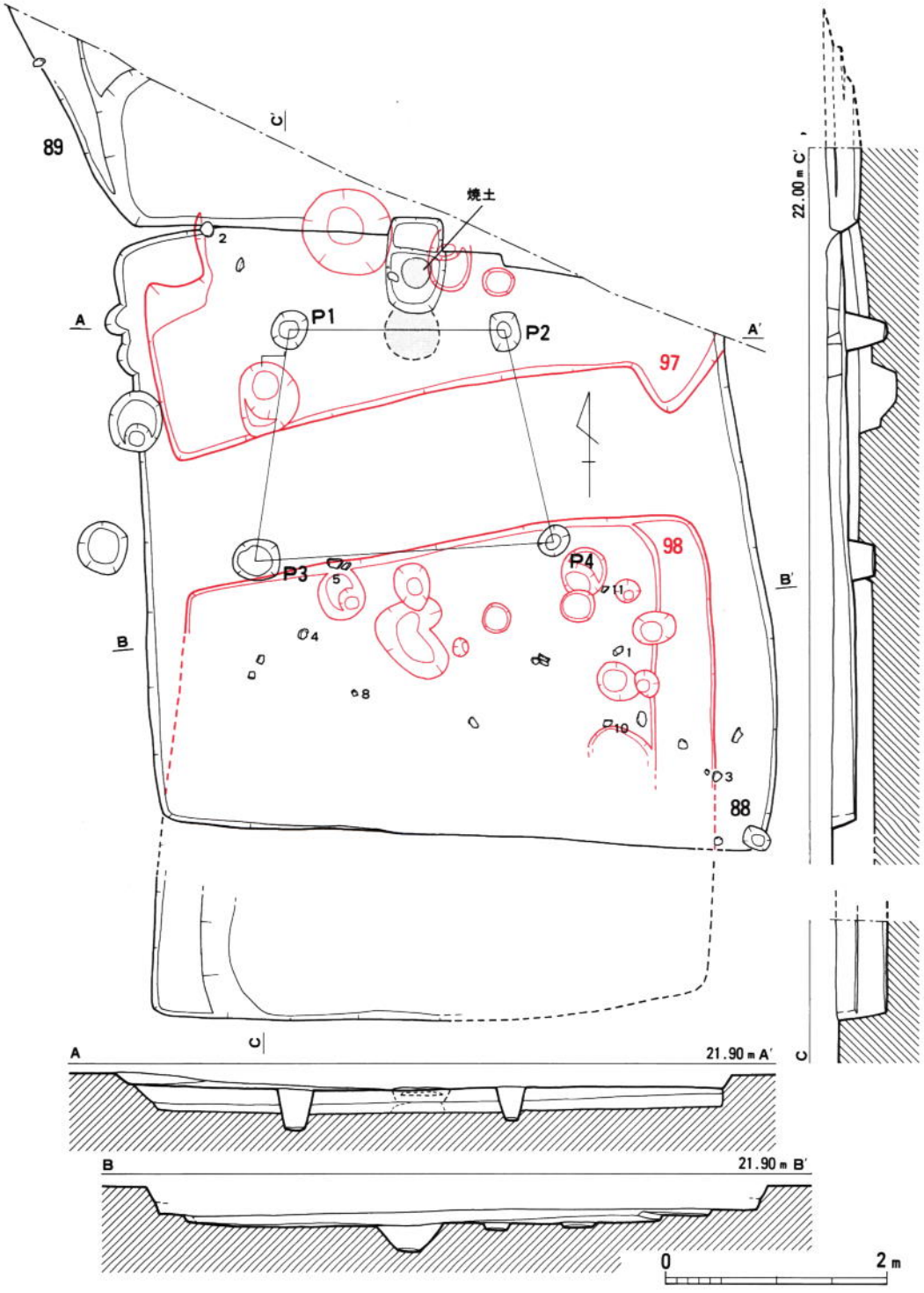
88号竪穴住居跡

（図版39　第106図）

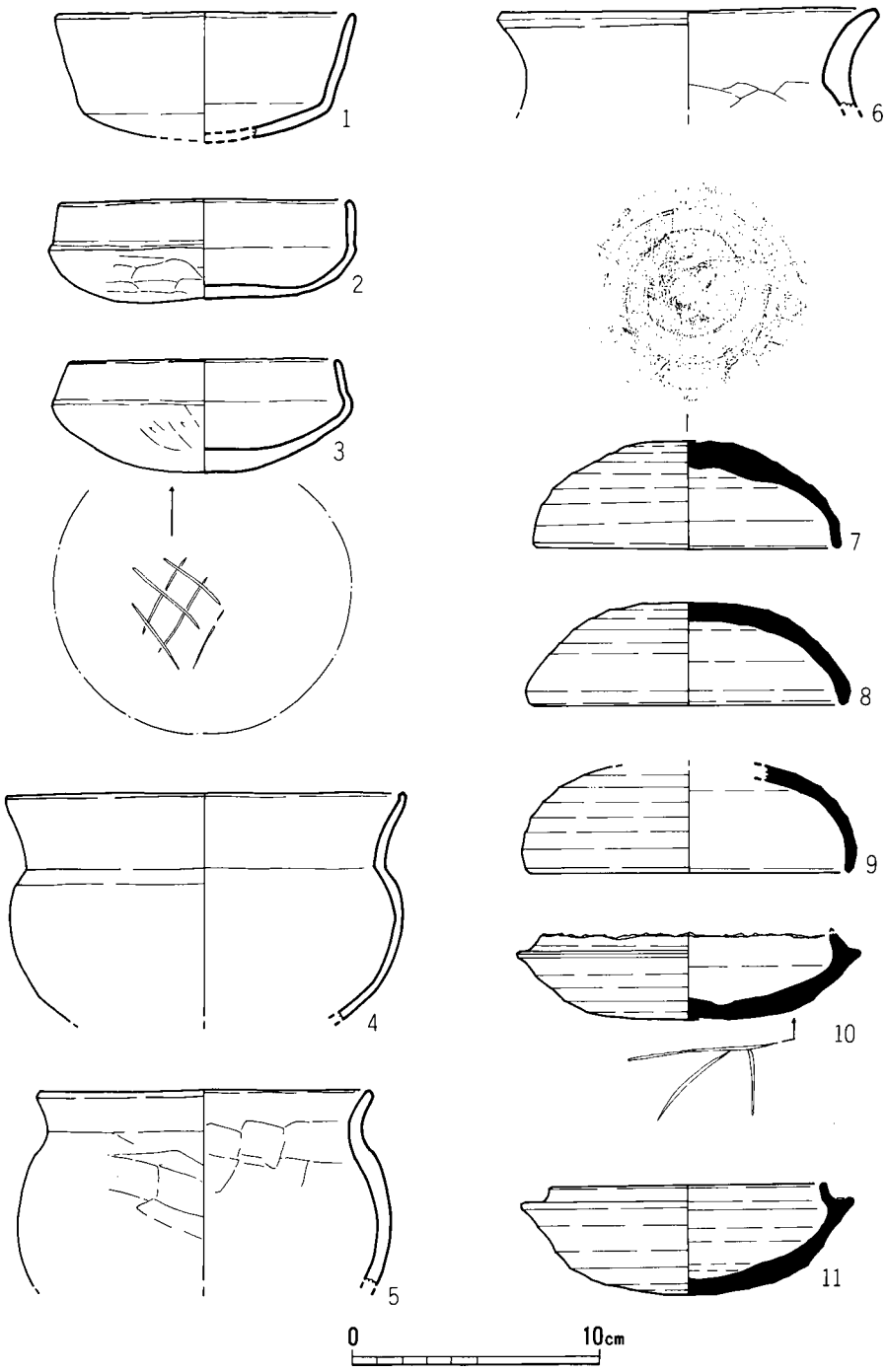
Ｍ５－６区に位置し、89・97・98号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、西壁長5.14m、南壁長5.32mで、壁高は東壁側で12cmと削平が著しい。Ｐ１～４を主柱穴とみなしたが、Ｐ３・４が中央に寄っていることから位置的に疑問が残る。柱穴の規模は径25～43cm前後、深さ35cm前後である。柱間間隔はＰ１～２間1.95



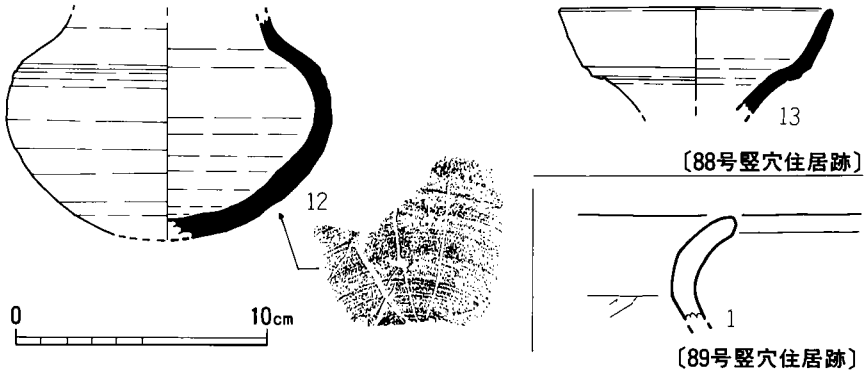
第105図　87号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）



第106図　88・89・97・98号竪穴住居跡実測図（1/60）



第107図　88号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



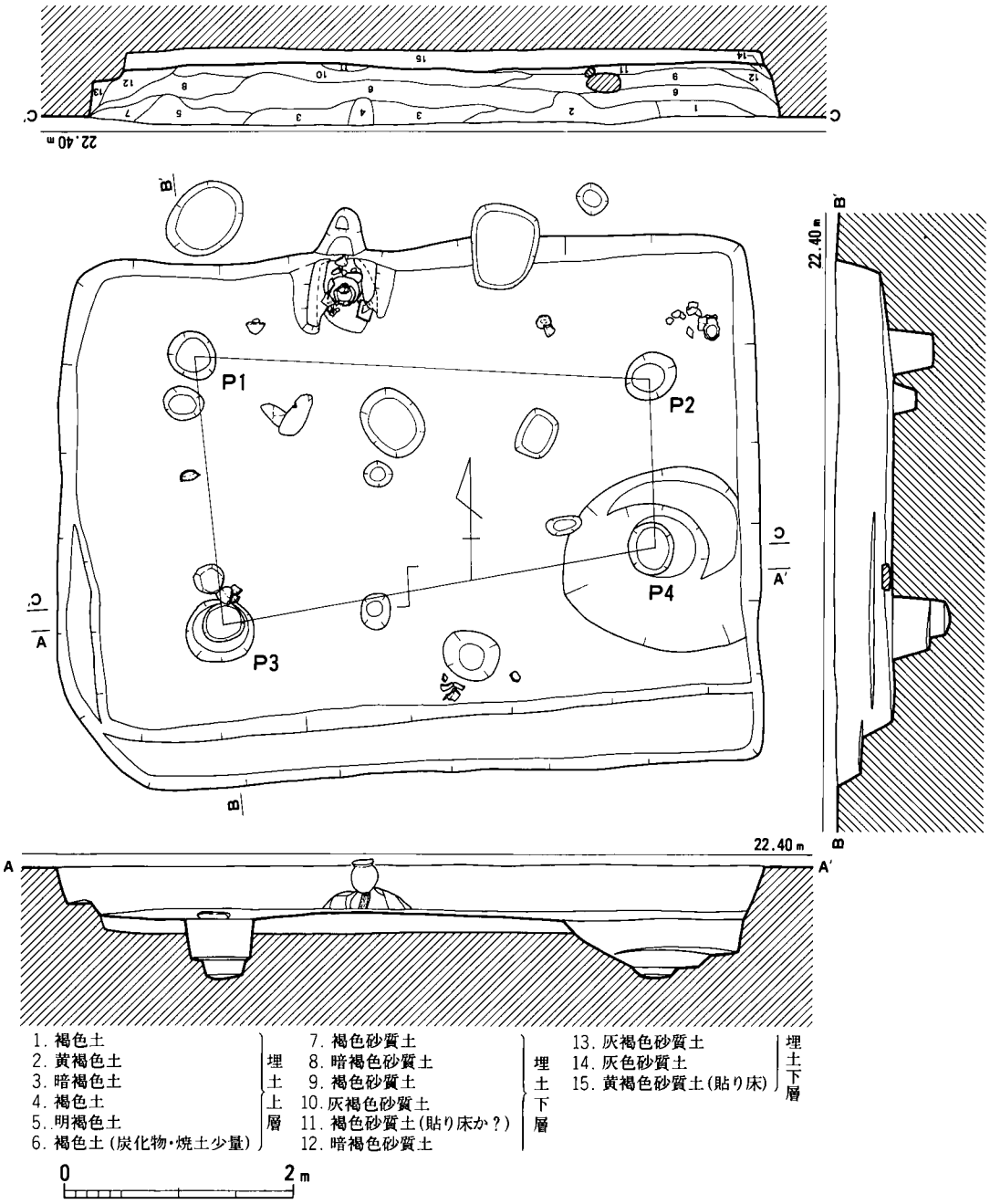
第108図　88・89号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

m、P２～４間1.96m、P１～３間2.12m、P３～４間2.71mを測り、主柱穴を結んだ線は台形を呈する。埋土中および床面からは割合多くの土器が出土している。

カマド　突出型のカマドで、北壁の中央に付設している。カマドの遺存状態は悪く、袖部・煙道を留めていない。壁体は２段に掘り込まれ、下段中央に径25cm程の火床面がある。壁体の長さ87cm、幅53cmで、床面から15cm掘り下げている。支脚は不明であるが、河原石の抜き取り穴がみられないことから小型甕もしくは土製支脚を使用していたものであろう。

土器（第107・108図１～13）１～６は土師器である。１～３は坏で、口縁部は体部の屈曲部から外反して開くもの（１）と直立気味のもの（２）と内湾するもの（３）とがある。１は深めの器形で、底部を欠くが器高5.3cm、口径12.0cmに復原した。２は完形品で、器高4.1cm、口径11.8cm。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。また、３の外底面には斜格子のヘラ記号？を付している。４・５は鉢で、４は器肉が薄くシャープな作り。５は肉厚で、雑な作りである。口径は４が16.0cm、５は13.6cmに復原した。６は口径15.2cmの小型甕で、口縁部は緩やかに外反する。頸部内面のヘラケズリによる稜は明瞭である。

７～13は須恵器である。７～９は坏蓋で、天井部はドーム状を呈する。８の口唇部は肉厚で、端部は丸く納めている。器高は７が4.2cm、８は4.1cmで、口径は７が12.3cm、８は12.8cmに復原した。７の外天井部には格子目状のヘラ記号がみられる。10・11は坏身で、口縁部は短く内傾する。また、10は口唇部を打ち欠いており、外底部には３本沈線文のヘラ記号を付している。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。12は短頸壷で、口縁端部を欠く。残高8.8cm、復原胴径12.8cmを測る。調整は口頸部回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。肩部にはヘラ描き沈線が２条巡る。また、胴下半部にはヘラ記号を付している。13は甕の口縁部破片で、口径は5.8cmに復原した。口縁部は内湾気味で、頸部はかなりすぼまる感がある。当竪穴住居跡の時期は６世紀末頃であろう。



第109図　90号竪穴住居跡実測図（1/60）

89号竪穴住居跡（図版39　第106図）

Ｍ５区に位置し、88号竪穴住居跡に南壁を切られる。また、大半が調査区外にあるため詳細は不明。南壁側に土坑状の掘り込みがあり、西壁にはテラスがつくことから竪穴住居跡とするよりは土坑或いは竪穴とした方が妥当であろう。

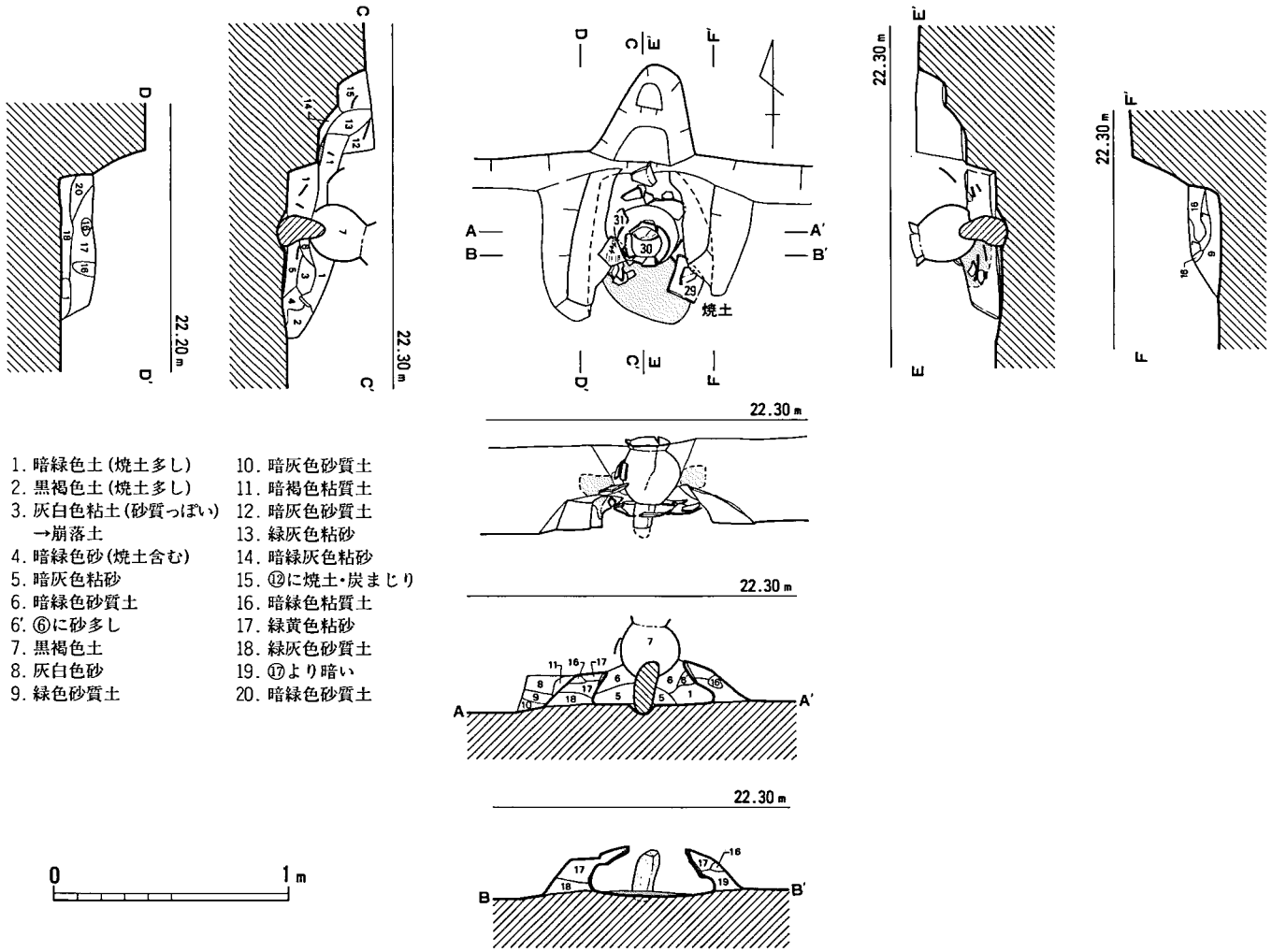
土器（第108図１）

１は土師器甕の口縁部小片で、頸部から緩やかに外反する。器面調整は口縁部にヨコナデ、内面にはヘラケズリが施される。口縁部の形状は６世紀後半代の所産と思われる。

90号竪穴住居跡（図版40　第109図）

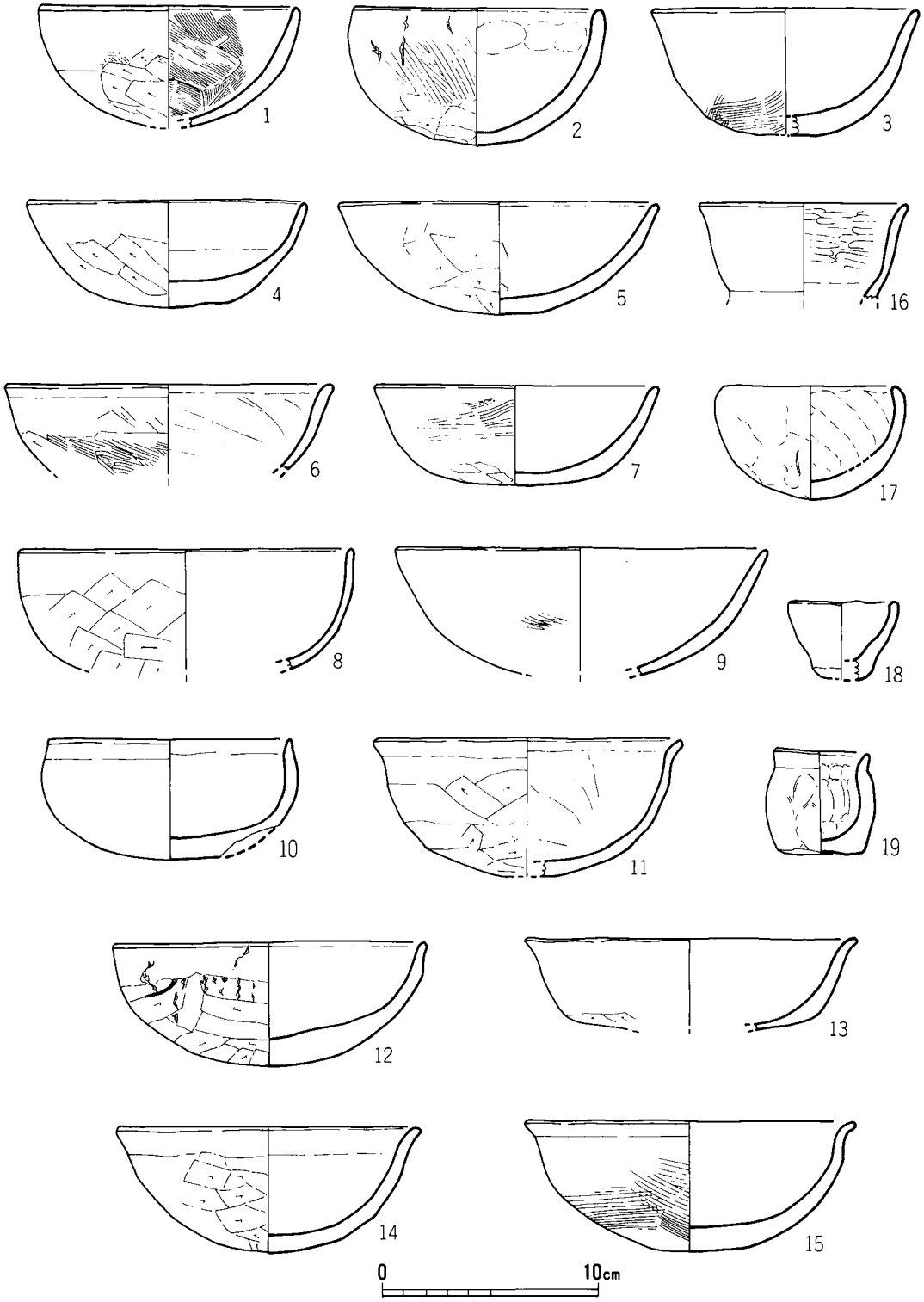
90号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が少ない調査区の東側Ｒ８区に位置し、南14ｍに古墳時代の67号竪穴住居跡が、西13ｍにはやはり古墳時代の108号竪穴住居跡がやや近接する程度で、他に古墳時代の遺構はほとんどない。平面プランは6.2×4.6ｍの長方形で、壁高は最高で45㎝を測り、遺構自体の遺存状態は本遺跡において最も良好な部類である。南壁全部と西壁の南側半分では、幅30～40㎝の地山を削り出したテラスが作出されるが、その目的を調査時点で確認することはできなかった。４つの主柱穴については、南東隅のものだけかなり大きな掘りかたであったが、他の３つについてはいずれも径40～50㎝、深さ45～50㎝に纏まっている。土層断面図にも図示したように、床面全体には黄褐色の砂質土が厚さ12～15㎝でほぼ均等に敷かれており、これが貼り床になる。第１～14層までに分層した埋土は基本的には自然堆積であるが、第１～６層は主に褐色土から、第７～14層は砂質土からなり、大きく上層と下層に分かれる。したがって、調査時においてもこれに従い遺物の取り上げを分けて行なったが、年代差を確認することはできなかった。遺物はパンケース２箱弱であるが、大部分は土師器ばかりで、極くわずかの須恵器も小破片ばかりで図示できるものがなかった。土師器については坏と高坏が圧倒的に多く、その他の土器ではカマド中から纏まった出土を見た。出土遺物から判断する限りでは５世紀代に属するもので、本遺跡の古墳時代の遺構では最も古いものの一つである。遺物は31点を図示したが、埋土上層からは１・３・４・７・８・10～14・16～21・24・28が、埋土下層からは９・26・27が、床面からは２・６・15・22・25・29・31が、貼り床からは５が、カマドからは23・30がそれぞれ出土した。年代的には５世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

カマド（図版41　第110図）作り付け型のカマドで、北壁のやや西側に付設している。遺存状態は極めて良好で、両袖部・煙道を留めている。右袖は残存長53㎝・基部幅34㎝・残存高18㎝で、左袖は残存長63㎝・基部幅27㎝・残存高20㎝を測る。架口部は欠落するものの袖の立ち上がりを留めており、壁面には袖として貼付した緑黄色粘砂が遺存していることからカマド本来の高さは40㎝程になるものと思われる。煙道は長さ41㎝、基部幅45㎝で、２段に掘り込まれている。支脚には長さ22㎝の河原石を立てており、その前面が火床面となる。また、支脚の上には甕が使用時の状態で遺存しているが、何らかの理由により放棄されたものであろう。

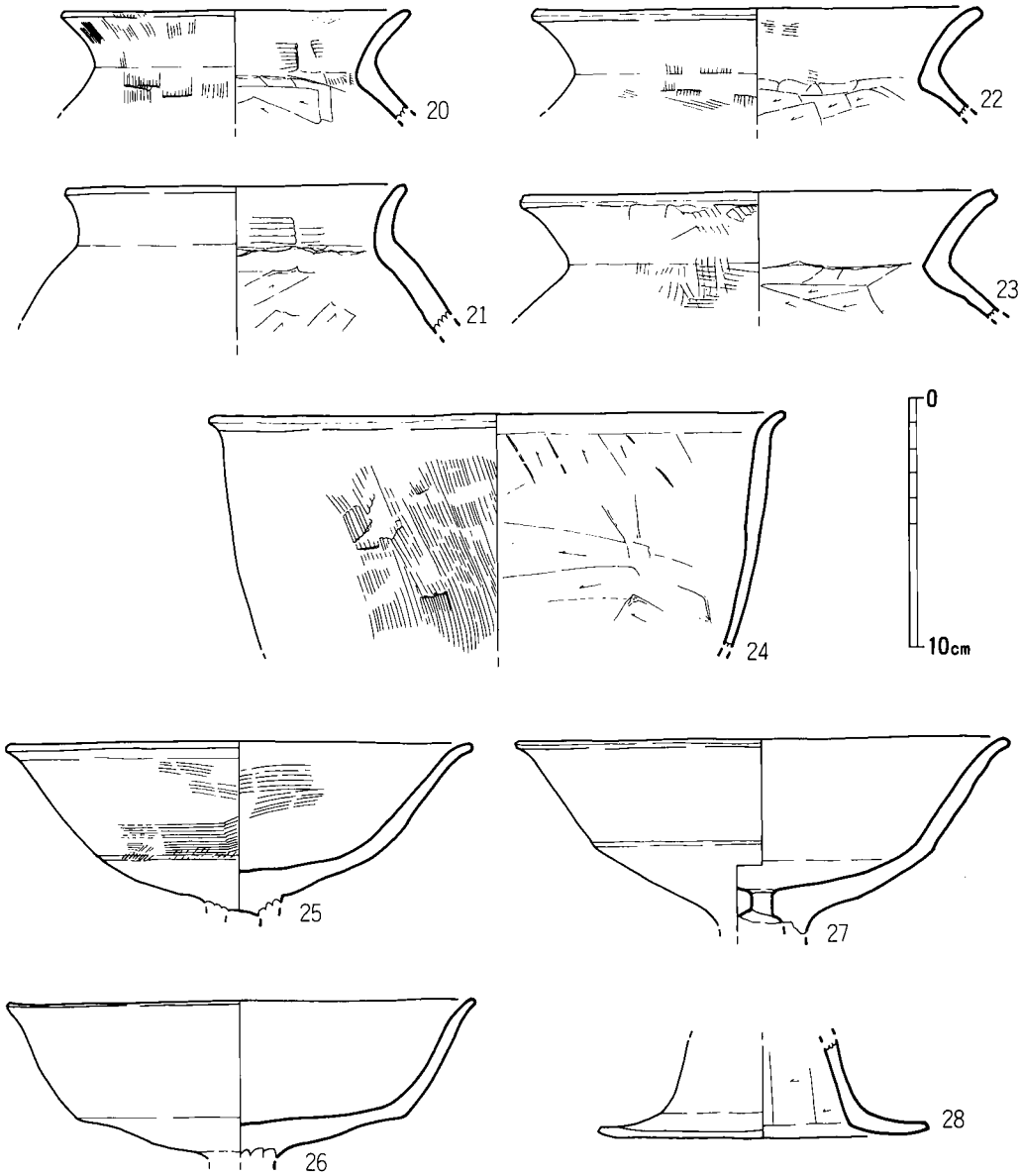


1. 暗緑色土(焼土多し)
2. 黒褐色土(焼土多し)
3. 灰白色粘土(砂質っぽい)
→崩落土
4. 暗緑色砂(焼土含む)
5. 暗灰色粘砂
6. 暗緑色砂質土
6'. ⑥に砂多し
7. 黒褐色土
8. 灰白色砂
9. 緑色砂質土
10. 暗灰色砂質土
11. 暗褐色粘質土
12. 暗灰色砂質土
13. 緑灰色粘砂
14. 暗緑灰色粘砂
15. ⑫に焼土・炭まじり
16. 暗緑色粘質土
17. 緑黄色粘砂
18. 緑灰色砂質土
19. ⑰より暗い
20. 暗緑色砂質土

第110図 90号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

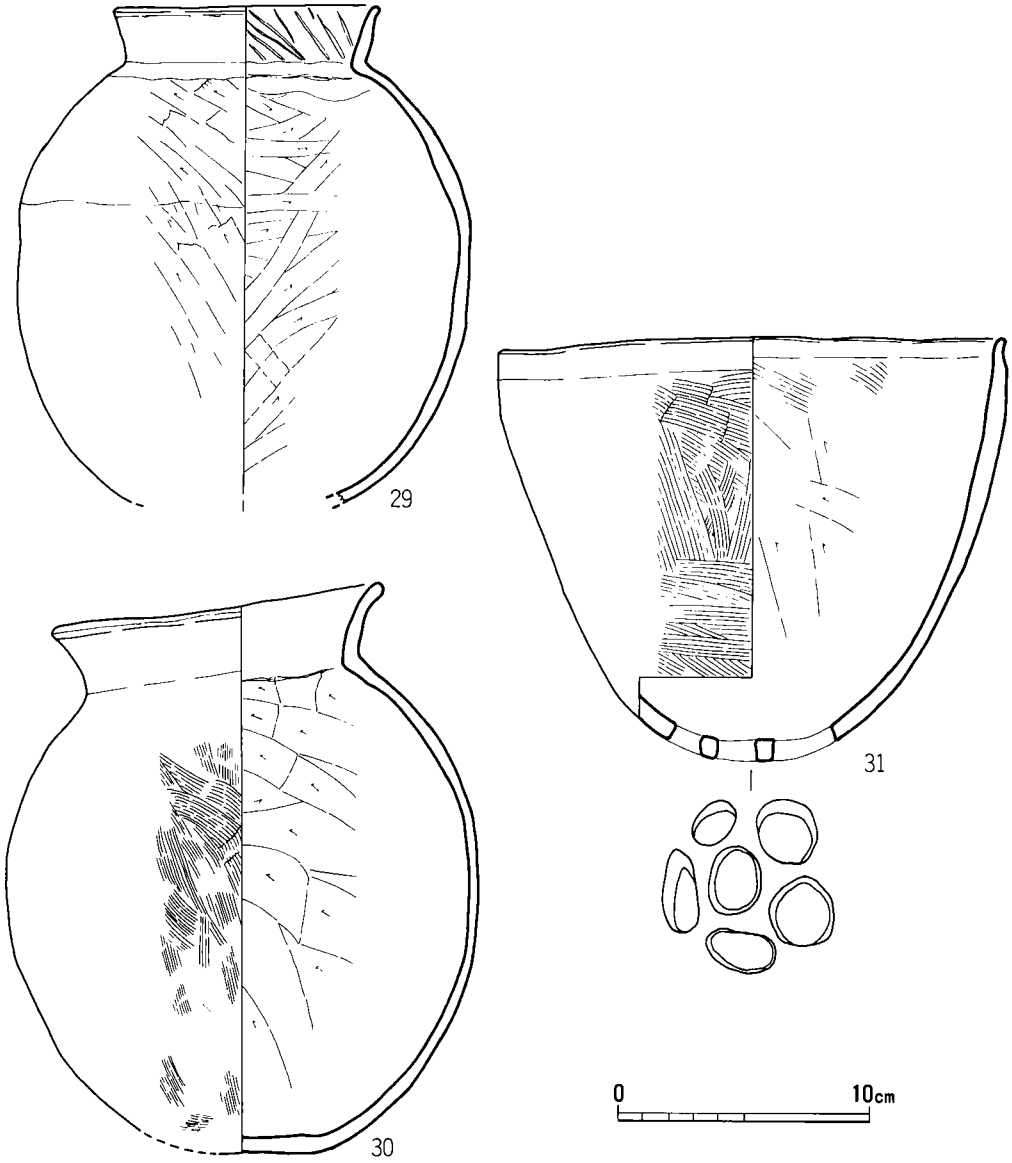


第111図　90号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第112図　90号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）

土器（第111～113図１～31）１～15の坏は口縁部が直線的に立ち上がるタイプ（１～12）と、口縁部がわずかに外反するタイプ（13～15）とに分かれるが、口径は12～15cm、器高は５～６cmの範囲にほぼ収まる。外面の器面調整はケズリ、内面はナデが一般的であるが、稀にハケが施されるものもある。９については摩滅により器面調整不明。16は坩の口縁部であろうか。17



第113図　90号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）

～19はいずれも手捏ね土器で、復原口径は17が9㎝、18が5㎝、19が4㎝になる。20～23の甕は、外面全体および内面の口縁部の器面調整がハケ、内面の胴部はケズリであるが、21の外面だけはナデが施される。復原口径は20・21が14㎝、22・23が19㎝を測る。24はおそらく復原口径23㎝の甑になろうが、二次加熱による変色は認められない。高坏25～27のうち、25は復原口径19㎝で器面調整はハケ、26は20㎝でナデ、27は19㎝で摩滅により器面調整不明。28は高坏の脚部で、全体に摩滅が著しいが、内面にはケズリが窺える。29は復原口径14㎝の甕で、内外面ともにケズリが著しい。口縁部には二次加熱による赤褐色の変色が窺え、外面全体に煤が付着する。30は口径17.5㎝、器高30.2㎝のほぼ完形に復原できる甕で、口縁部は内外面ともにナデられる。胴部下半は二次加熱により変色しており、また底部の設置面は擦痕が著しい。31は口径26.8㎝、器高22.4㎝のほぼ完形に復原できる甑で、把手はなく、丸底には6孔を有する。

97号竪穴住居跡（図版39　第106図）

Ｍ5区に位置し、88号竪穴住居跡の床面下層より検出した。北壁は89号竪穴住居跡に切られ、南壁付近を残す程度であるため詳細は不明。南壁は5.0ｍの検出に留まり、壁高は10㎝の残り具合であった。一部遺存している西壁には方形の張り出しがある。検出部内では主柱穴に該当する穴は検出できなかった。Ｐ1内からは手鎌が出土している。

土器（第114図1）1は須恵器坏身で、立ち上がりはやや内傾する。残高4.3㎝、復原口径11.6㎝を測る。調整は口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。当竪穴住居跡の時期は6世紀末であろう。

鉄器（第194図13）13は手鎌の完存品で、刃部は外反する。長さ10.3㎝、幅2.0㎝、背部の厚さ0.2㎝を測る。両端部を1㎝程折り曲げ、背に木質の柄を挿入している。

98号竪穴住居跡（図版39　第106図）

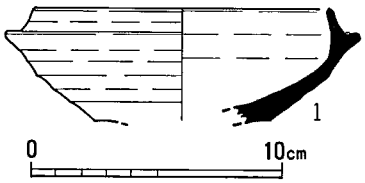
Ｍ6区に位置し、88号竪穴住居跡に切られる。一次調査では完掘しておらず、南西コーナー部は二次調査での検出であり、一部未掘部分が残ってしまった。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、北壁長4.62ｍ、西壁長3.73ｍで、壁高は西壁側で18㎝を測る。また、西壁側には高さ5㎝程の低いテラスを有する。当竪穴住居跡も積極的に主柱穴とし得る柱穴がみあたらない。床面から手鎌が2点出土している。

鉄器（第194図14・15）14・15は手鎌の完存品である。14は長さ7.4㎝、幅1.7㎝、背部の厚さ0.2㎝で、刃部はやや外反している。15は長さ6.5㎝、幅1.9㎝、背部の厚さ0.2㎝で、刃部は直線的である。14・15とも両端部を折り曲げているが、柄の木質は遺存していない。

101号竪穴住居跡（第115図）

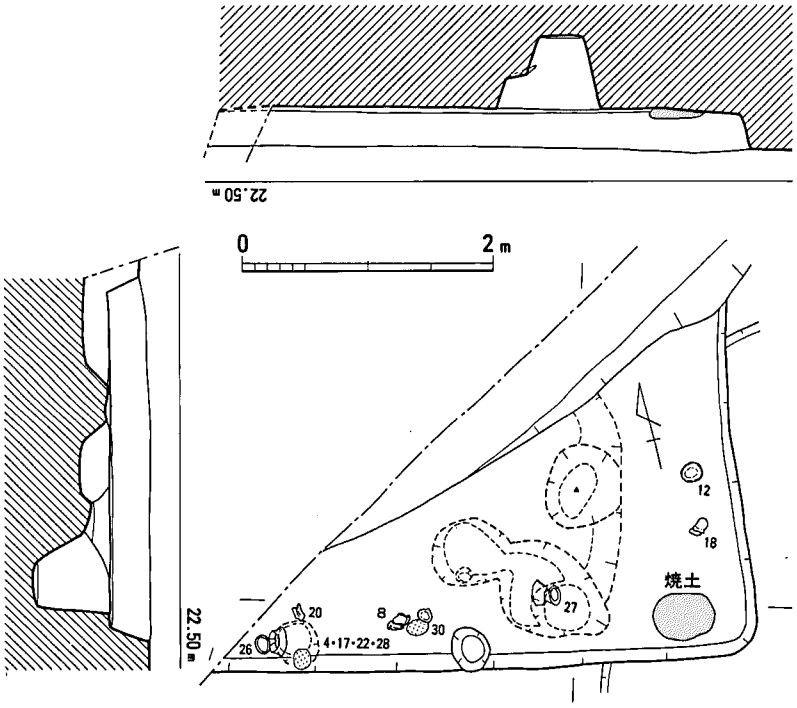
Ｖ8区に位置する。弥生時代の102号竪穴住居跡を切り、12号溝に切られる。東壁長2.82ｍ、

南壁長4.25mの検出に留まり、南東コーナー付近を残す程度であるため詳細は不明。柱穴は▲印を付した穴と考えられる。また、コーナー部には焼土の塊がみられるが、カマドに伴うものではなく、検出した範囲内においてカマドは見あたらない。北壁もしくは西壁側に付設していたものであろう。埋土中からは割合多くの土器が出土している。年代的には5世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

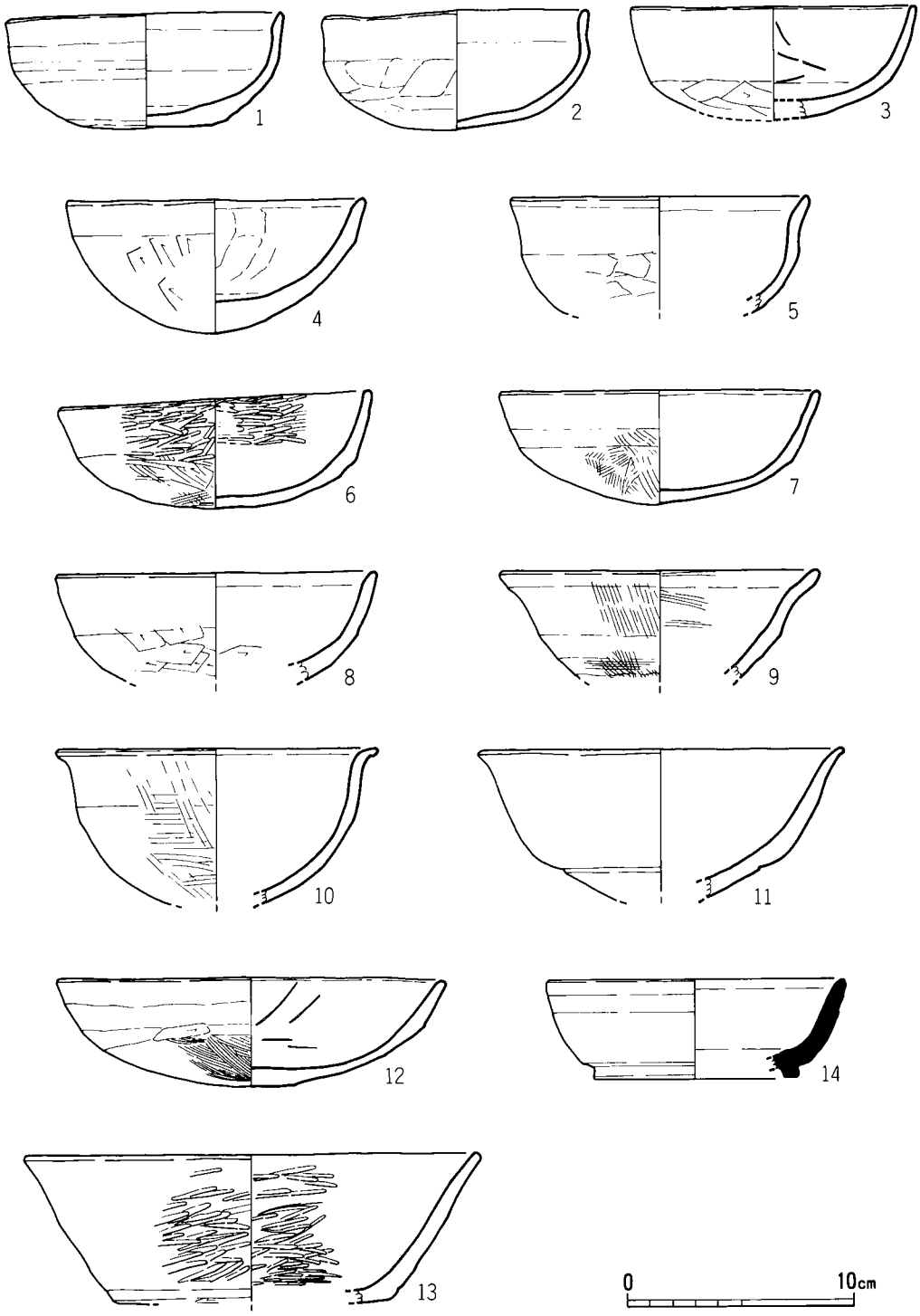


第114図　97号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

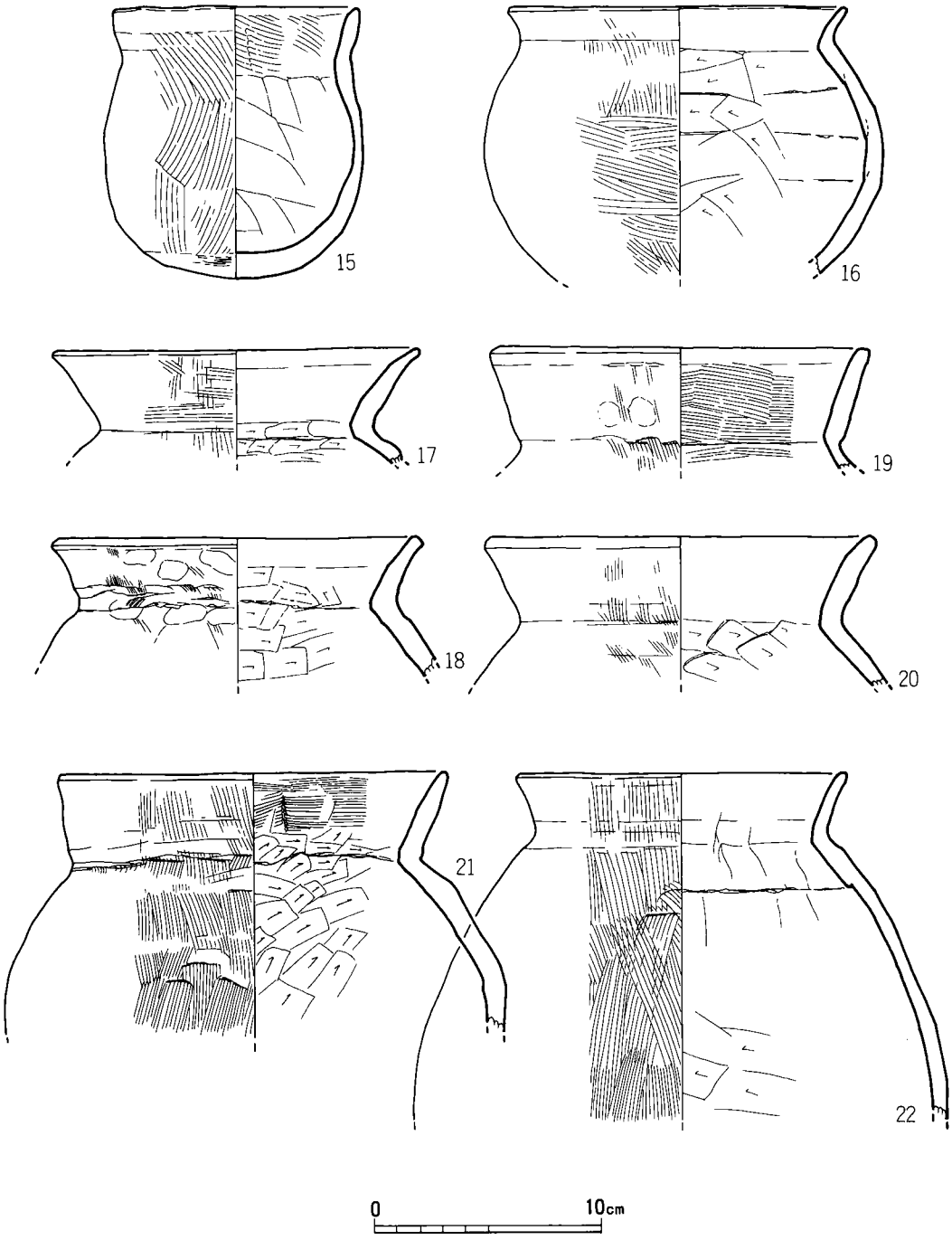
土器（第116～119図1～31）1～3、6～9、12・13は土師器坏身。1は口唇部付近で内面を薄くし、底部は平底。口径12.1cm、器高5cm。2は口縁部上部で軽い段を有す。胴部外面はヘラケズリで、口縁部はナデ。口径11.6cm、器高5.2cm。1・2は上層出土。3は胴部中央に稜線を有す。底部付近にヘラケズリを施す。口径12.4cm。6・7は胴部から内弯したまま口縁部に到る器形。6の内外面上位は細かいヘラミガキを、外面の胴部以下は斜め方向のハケ調整後にナデ。内面から外面にかけて黒斑が残る。口径13.7cm、器高4.5～5.2cm。7は外面の胴部下半はハケ調整。口径14cm、器高49cm。8は唇部付近で外反する。胴部下半はヘラケズリ。口径14cm。9は口縁部が屈曲し、ラッパ状に広がる器形で、外面は縦、内面上位は横方向のハケ



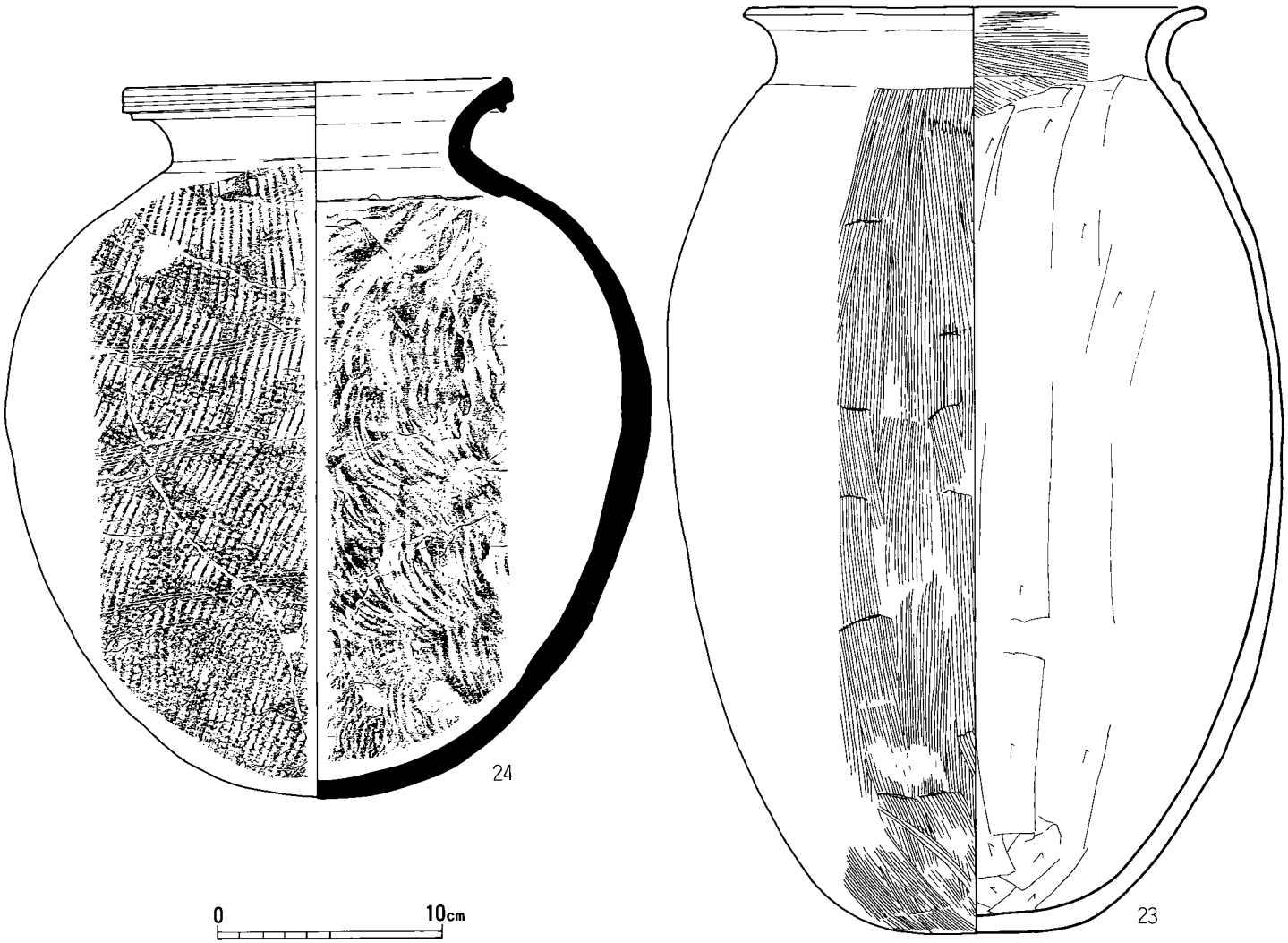
第115図　101号竪穴住居跡実測図（1/60）



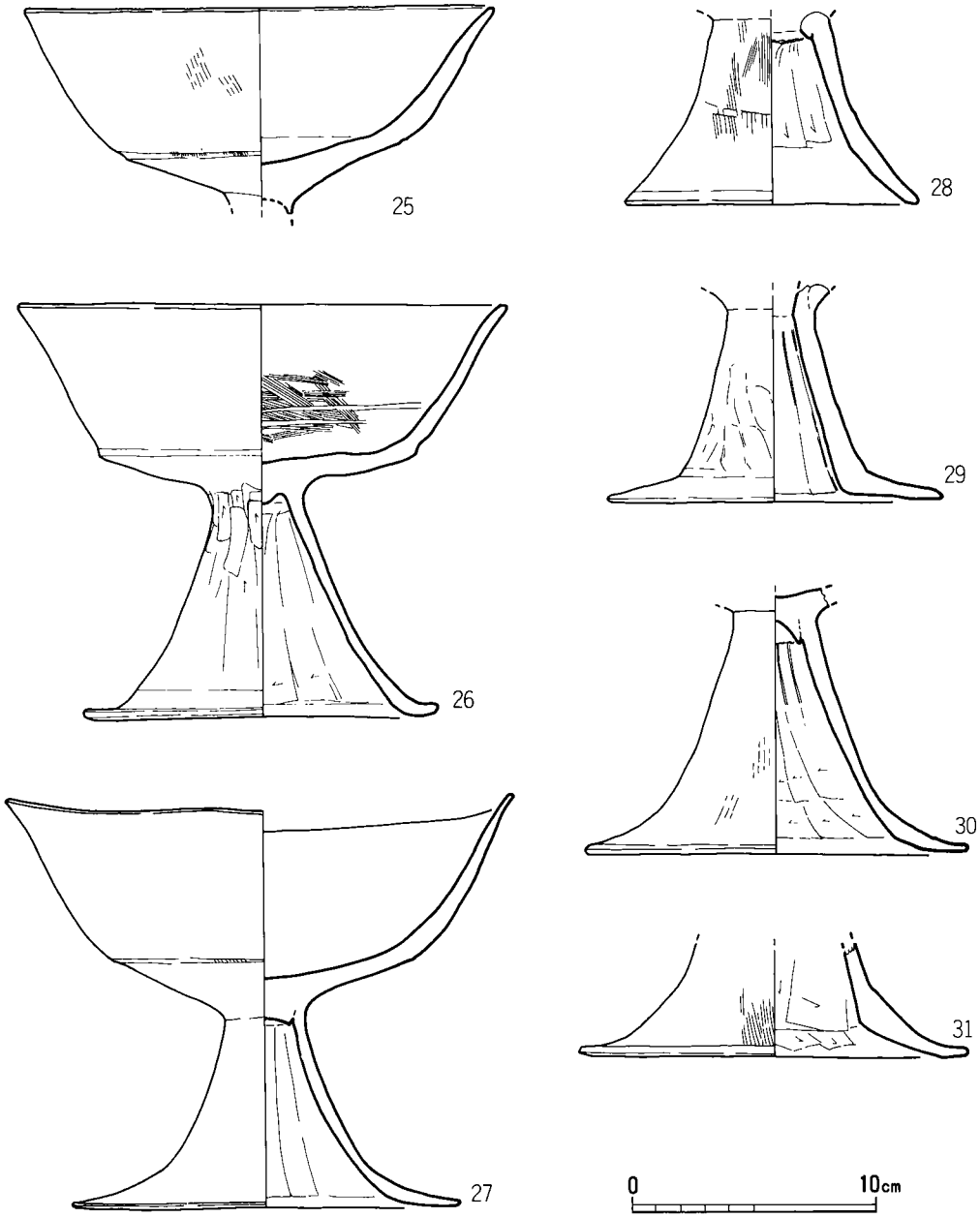
第116図　101号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第117図　101号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）



第118図　101号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）



第119図　101号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/3）

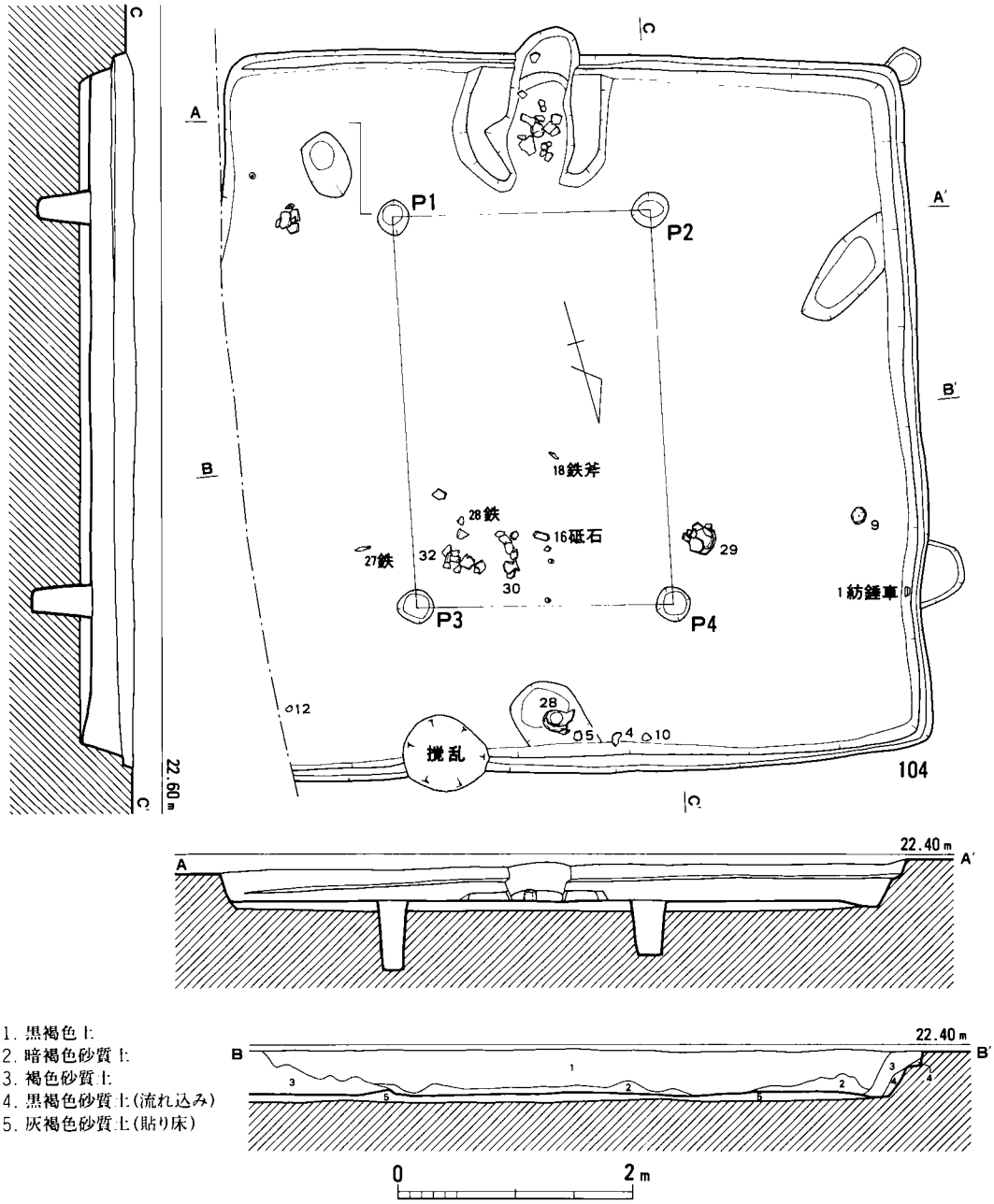
調整。口径14cm。12は器高に対して口径の大きい坏で、胴部下半を極端に薄く仕上げる。外面はハケ調整。口径17cm、器高4.7cm。13は平坦な底部から直線的に外方に開く器形で、内外面とも横方向のヘラミガキを施す。口径19cm。15～23、25～31は土師器。15は小型丸底壺。頸部はあまりすぼまらず、胴部の張りも少ない。また、口縁部も若干開く程度である。外面の頸部から底部にかけては粗い縦方向のハケ。口縁部の内面は斜めのハケで、それ以下はヘラケズリを施す。口径10.8cm、器高11.9cm。16は壺で、短い「く」の字状口縁部から球形状の胴部を有す。外面は口縁部から胴部上半にかけて縦方向のハケ、以下は横ないし斜めのハケ。内面の頸部以下はヘラケズリを施す。全面に二次的な加熱を受け、煤が付着する。口径14.9cm、胴部中央の最大径17.6cm。17から23は甕。17・18・21・22のように口縁部が強く屈曲する器形と外方に広がる器形（19・22）がある。基本的に外面の調整は縦方向のハケだが、18は指頭圧痕が残る。内面も頸部以下にヘラケズリを施す。19・21の口縁部内面には横方向のハケ調整。口径は17が16cm、18は16.2cm、19は16.6cm、20は17cm、21は17cm、22は14.4cmを測る。23は完形に復原できる資料で、口縁部上半を水平に近くおり曲げた長胴の甕である。外面の頸部以下は細かな縦方向のハケ調整を全面に施す。また、口縁部内面は横方向のハケ、頸部以下は底部からのヘラケズリを施す。胎土には比較的多くの砂粒を含む。色調は内外面とも橙褐色を呈し、口径25cm、器高40.7cmを測る。25～31は高坏。坏部は深みがあり、外方に広がりながら立ち上がり、口唇部付近でさらに外反する。26は坏部底と胴部の間に稜が入る。25の外面はハケが、26の内面はハケ調整後螺旋状沈線が見られる。脚部は28を除いて端部付近で折りかえり、内面はヘラケズリを施す。25は口径19.2cm、坏部の深さ6.2cm。26は丹塗りの痕跡が残り、外面は二次加熱を受けている。口径20cm、脚径14.4cm、器高16.8cm。27は口径20.6cm、脚径15.6cm、器高15.3～16.8cm。28の脚径12cm、29は13.7cm、30は15.6cm、31は16cmを測る。

14は須恵器の高台付坏身。坏部はわずかに内弯し、短く、やや外に開く高台を持つ。内外面ともヨコナデ。口径13cm、器高4.3cm。24は須恵器壺。肥厚させた頸部から直角近くに反転させる口縁部を有す。胴部は長球状を呈す。外面頸部以下は格子目のタタキ、内面は青海波の当て具圧痕で、口縁部は回転ナデ調整を施す。口径17cm、器高31cmを測る。上層出土。

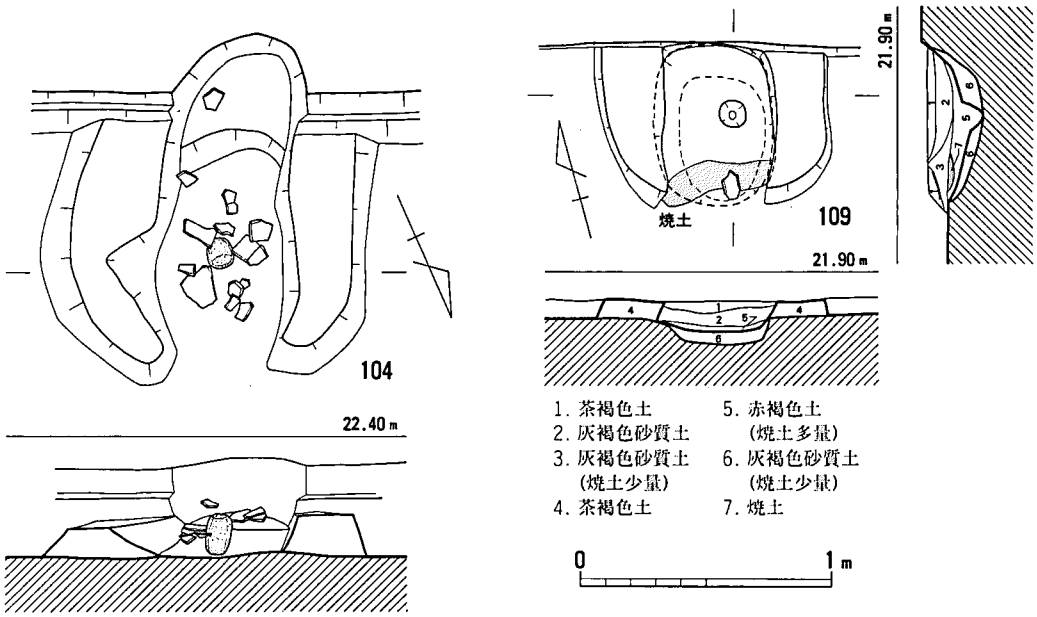
鉄器（第194図４・７）４は身の幅と刃部の幅が変わらない鑿頭式の鉄鏃で、現存長5.8cmを測る。７は鉄矛で、現存長10.3cmを測る。先端部から３cmまでが刃部で、断面形は長方形を呈する。それ以下が丸く折り曲げ袋部としており、径1.5cmを測る。

104号竪穴住居跡（図版42　第120図）

104号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が最も少ない調査区東端部V11-12区に位置し、近接する同時期の遺構としては西３mの６号掘立柱建物跡ぐらいである。東壁は調査区外にあるものの、平面プランとしては6.2×6.0mのほぼ正方形に近い形態になる。本遺跡の古墳時代以降の竪穴住居跡では、カマドがほとんど北壁か西壁に設置されているが、本住居跡では唯一南壁に



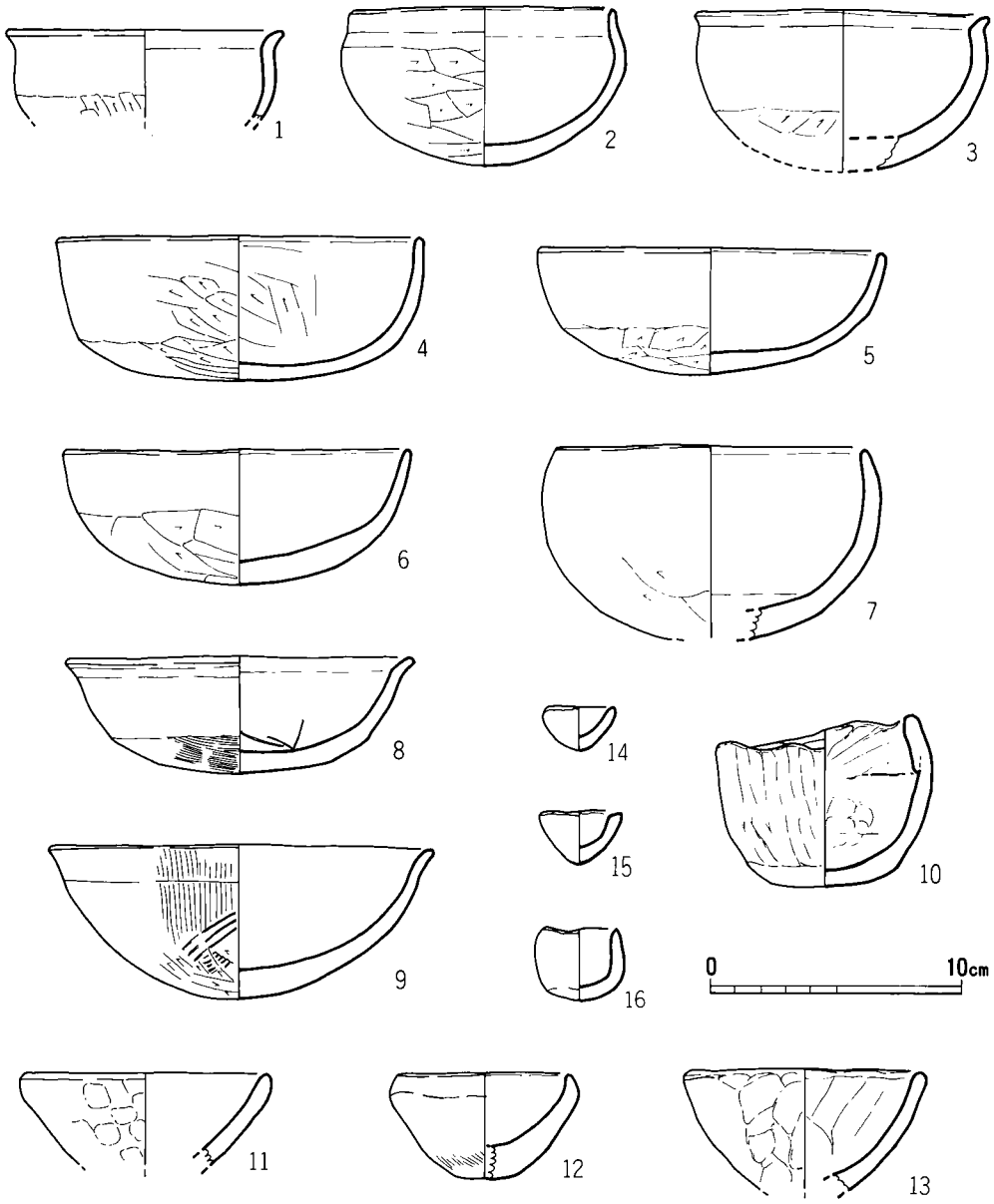
第120図　104号竪穴住居跡実測図（1/60）



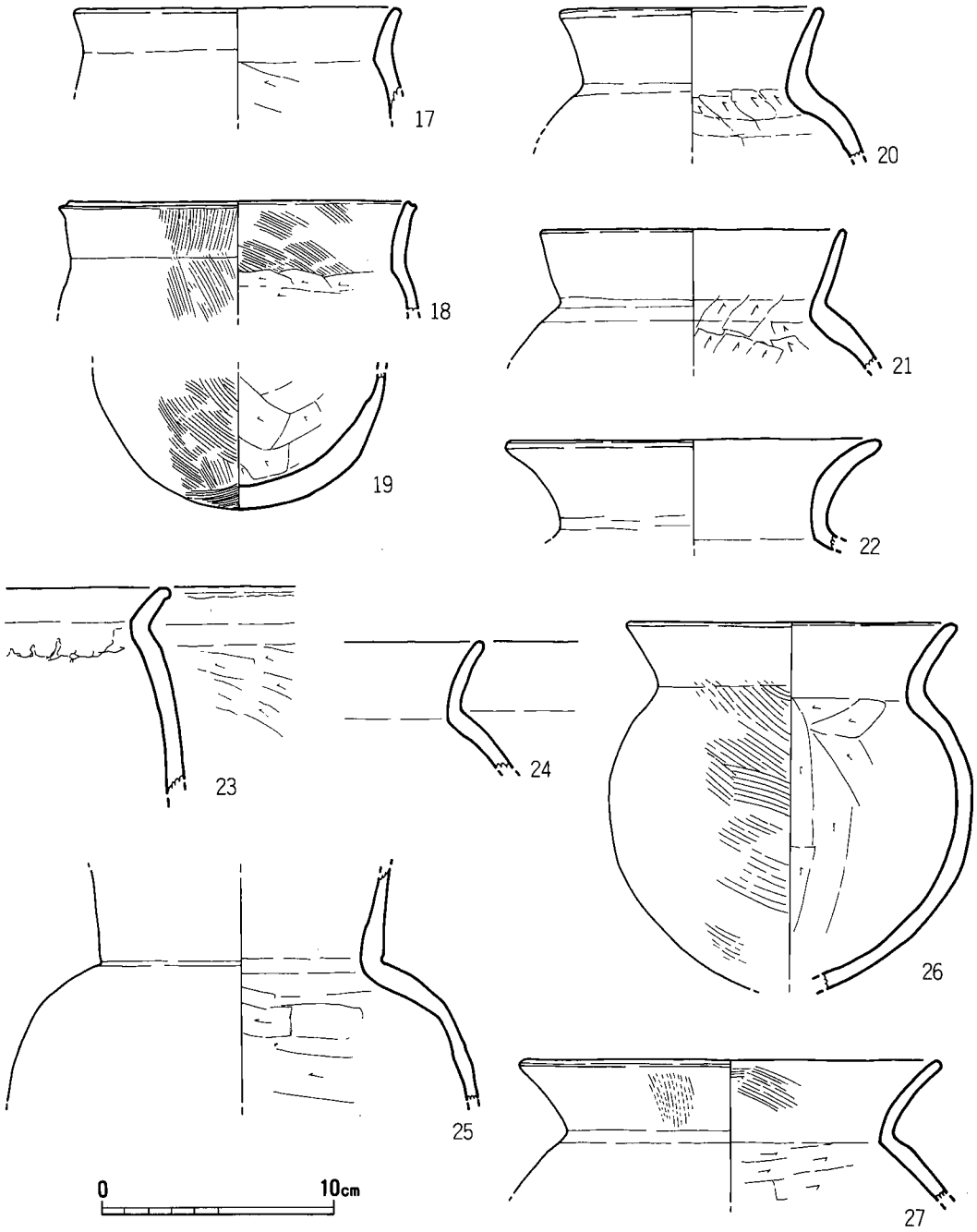
第121図　104・109号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

設置されているのが特徴的。また、壁のほぼ全体に、床面から約20cmで幅10cmほどの地山削り出しによるテラスが巡ることが、注目すべき特徴である。ただし、土層断面図からもわかるように、このテラスに壁（板壁）のようなものが設置された痕跡は窺えなかった。4つの主柱穴の径はいずれも25cm程度と小さいが、深さは50cmとかなり深い。床面には厚さ8cmほどの灰褐色砂質土（第5層）が全体に均等に敷かれており、これが貼り床になる。埋土の堆積状況から判断して、本住居跡の埋没が自然堆積であったことがわかる。遺物はパンケース4箱と本遺跡にあってはかなり多いが、その大部分は第1層とした黒褐色土に包含されていたものである。床面からは手捏ね土器やミニチュア土器も出土したが、カマド自体では祭祀的行為が行なわれた痕跡がない。鉄器（第194図20～22）や砥石（第189図16）もやはり床面から出土した。土器は床面からは1～6・9・10・12・16・18～24・27～32・34が、その他は埋土からの出土である。

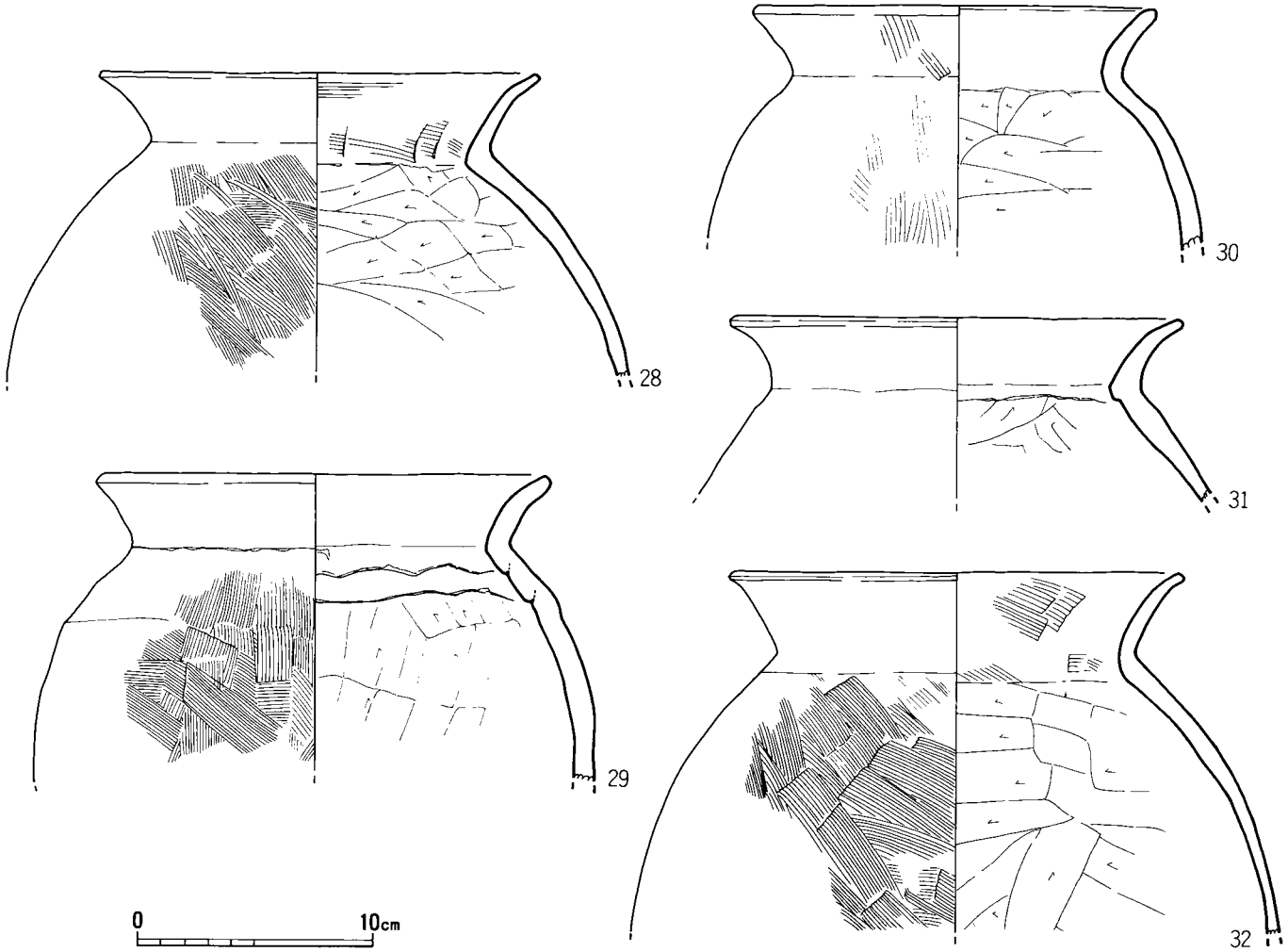
カマド（図版42　第121図）先述したように、カマドは本遺跡にあって唯一南壁の中央部に作られている。その範囲は130×100cmで、煙道部分が30cmほど突出する。自然石の支脚はその位置から、据えられたままの状態であったと考えられるが、このカマド内部では明瞭な火床を確認することはできなかった。また、埋土も焼土を少量含んだ暗褐色土がカマド内全体に広がっており、土器も甕もしくは甑の胴部の小破片ばかりが出土することから、廃絶時点でカマド内部がかなり扱われたことが推察される。ただし、その行為については、手捏ね土器やミニチュア土器がカマドではなく本住居跡の床面から出土していることから、一般的に見られるカ



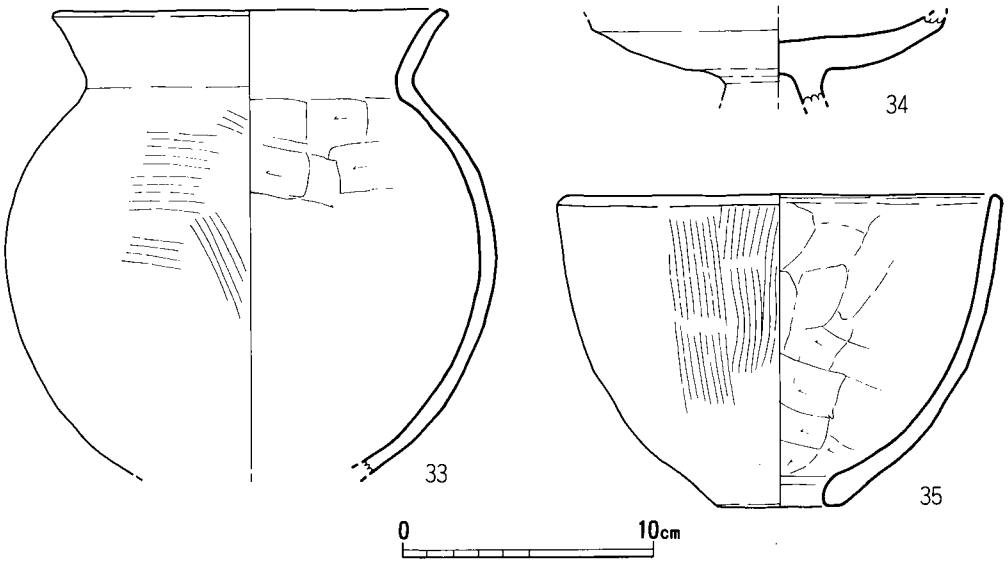
第122図　104号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第123図　104号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）



第124図　104号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）



第125図　104号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/3）

マドの祭祀的なものであったとは考えられない。須恵器の出土は極くわずかで、そでも小破片ばかりであったことから、ここでは図示しなかった。なお、坏や甕の特徴から、年代的には5世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

土器（第122～125図1～35）1～9の坏は、サイズからは口径10cmで器高6cmの深みのある小型と、口径13cmで器高5cmの浅い中型と、口径15cmで器高8cmの大型に分かれるが、口縁部形態では直線的に舌状に立ち上がるものと、わずかに外反するものとに分かれる。器面調整はおよそ外面がケズリ、内面がナデであるが、まれにハケを施すものもある。10は完形品で口径8.0cm、器高6.7cmを測るミニチュアで、全体的に指頭圧痕が著しいが、内面には粘土の接合痕が残る。11～16はいずれも手捏ね土器で、内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残る。ただし、12の外面にはハケが痕跡的に窺える。11～13のように口径10cm弱で口縁部が大きく開くタイプと、14～16のように口径3cm程度の極く小さいタイプとに分かれる。17～33の甕は、口径13～15cmの小型（17～27）と18～19cm程度の大型（28～33）に分かれる。器面調整はほとんどの場合、外面と内面の口縁部はハケで、内面の胴部はケズリになる。器面調整が図化されていないものはナデではなく、摩滅により器面調整が不明なためである。18と19は同一個体。二次加熱の痕跡を窺えるものは少なく、確実なのは22だけ。29については外面に炭化物の付着が見られ、内面の頸部直下には接合痕が粘土2本分だけ明瞭に残る。34は高坏の坏部と脚部の接合部で、器面調整はナデ。35は復原口径18cm、器高16cmの小型の甑で把手はない。外面はハケ、内面はケズリが施され、外面については全体的に二次加熱により変色する。

石器（第189図16）床面中央部から出土した頁岩製品の砥石で、実際に使用されているのは

図の左側面だけで、摩滅の状況から使用の度合はそれほどではない。右側面と下側は欠損しており、残存長は11.0㎝。

石製品（第189図９）石材不明の軽い石製円盤。前面に研磨痕が窺えるが、側面は一定の回転によると考えられる研磨痕がある。最大径4.7㎝、厚さ1.7㎝。

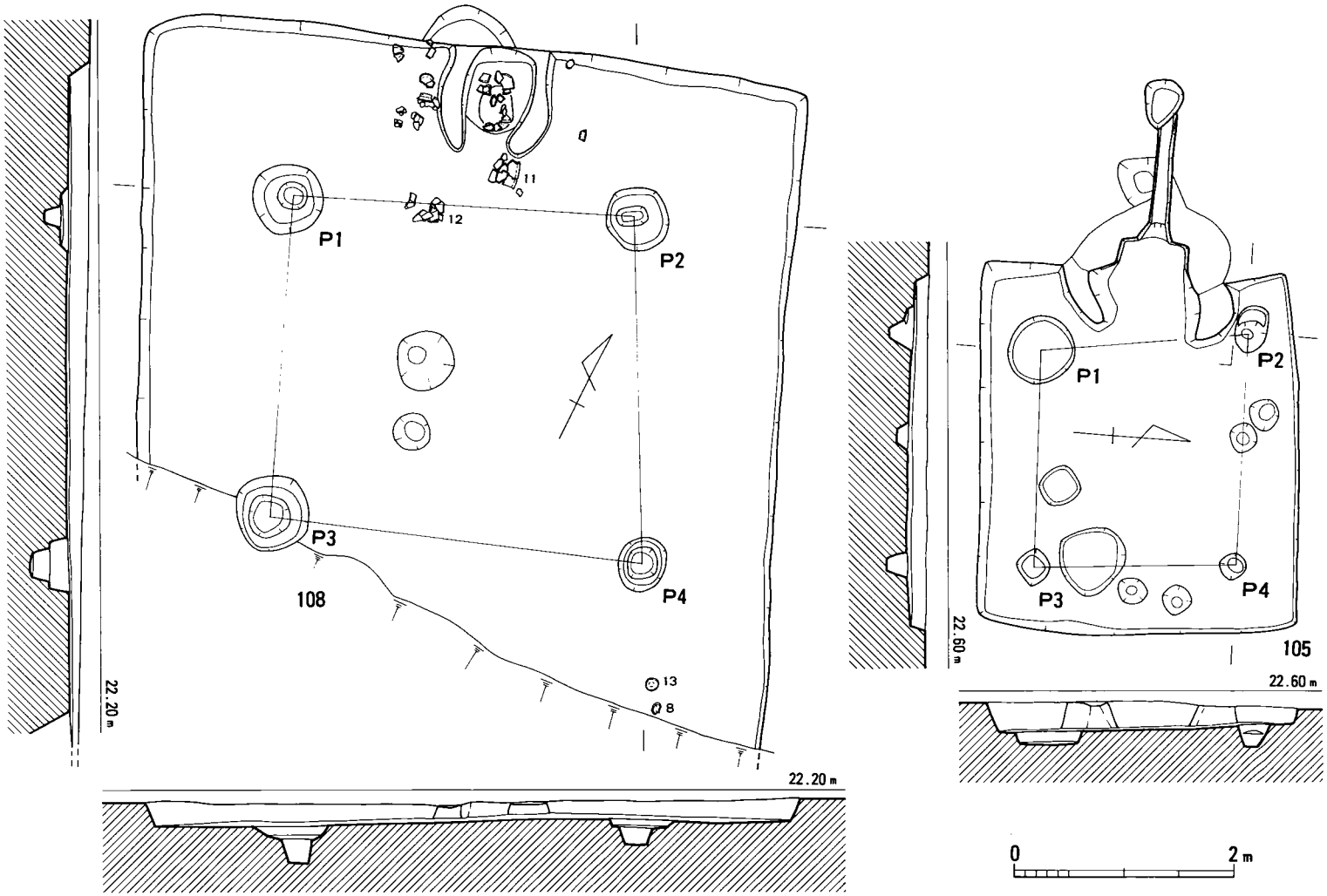
鉄器（第194図18・28・29）18は小型の袋状鉄斧であるが、銹化が著しく現形を留めていない。現存長7.0㎝、袋部幅2.7㎝を測る。刃部を欠損し、刃部幅は不明。28は三角形状を呈し、現存長3.5㎝、最大幅1.9㎝、厚さ0.3㎝を測る。側円には刃部は認められず、用途不明品。29は半円形を呈し、径3.0㎝、厚さ0.3㎝を測る。当製品にも側円に刃部は認められない。径が３㎝と小さいものの紡錘車の円盤部になるものか。

105号竪穴住居跡（図版43　第126図）

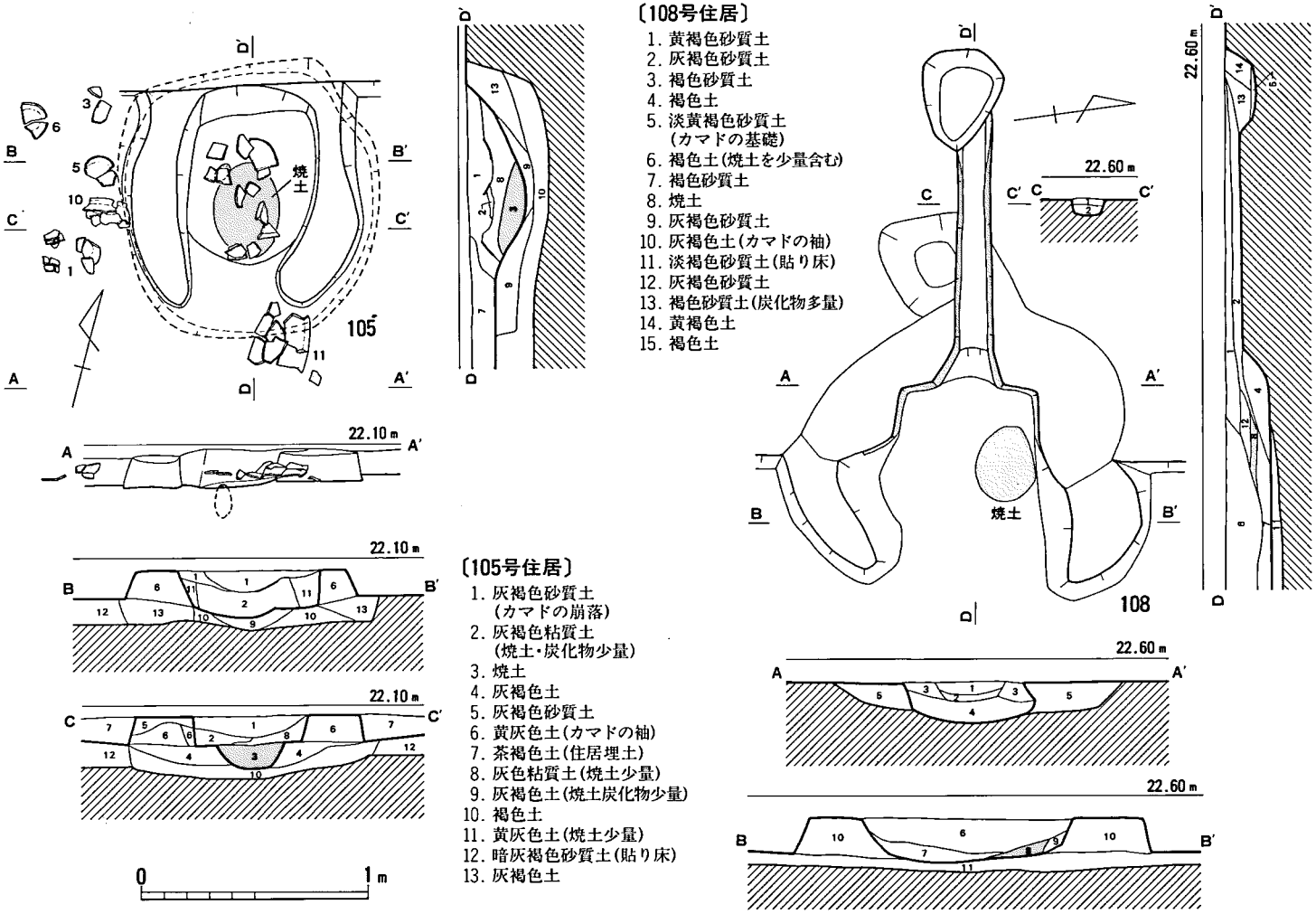
105号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が少ない調査区東端部T-U10区に位置し、同じ古墳時代の遺構としては東７ｍの118号竪穴住居跡ぐらいしかない。平面プランは3.3×2.8ｍの小型の長方形を呈し、壁高は最高で20㎝。カマドは西壁に設置されるが、住居内の空間を有効に利用するため突出している。４つの主柱穴もカマドと同様に有効な空間利用のため、住居跡の隅にかなり寄っている。南西隅の主柱穴だけは径60㎝、深さ12㎝と浅くて大きいが、他の３つは径25㎝、深さ25㎝と深くて小さい。床面全体には厚さ５㎝ほどの淡褐色砂質土が敷かれており、これが貼り床になる。カマドもこの貼り床の上に設置される。遺物はポリ袋１枚とかなり少なく、また小破片ばかりで３点しか図示できなかった。図示した３点はいずれも埋土からの出土で、床面から出土した遺物も極く少量の小破片である。本住居跡については、平面プランやサイズ、カマドの構造などから74号竪穴住居跡との類似点が多く、また出土遺物から判断してもおそらくは奈良時代に属するものと考えられる。

カマド（図版43　第127図）本カマドを作るに当たっては、まず140×60㎝ほどの突出部を作り出し、そこに淡黄褐色砂質土を埋め込んで基礎として、次に貼り床の上に灰褐色土によって袖を作る。カマド内部の奥は方形に形作られ、緩やかに傾斜して幅15㎝、長さ120㎝の煙道へと続くが、これらの焼成による赤褐色の硬化は著しい。火床と考えられる31×26×３㎝の焼土はかなり右袖に寄っており、本来の火床というよりもその一部（残存）と考えられる。煙道の先端には40×30×15㎝のピットがあり、土層断面の観察や炭化物が含まれる埋土の状況からこの煙道に伴うものであろう。カマドの内部には遺物も支脚もなく、また火床の残存状況からみても、廃絶時に内部のものがほとんど取り出されたと考えられる。なお、カマド内から2.5×４㎝大の鉄滓が１点出土している。

土器（第128図１～３）いずれも甕の口縁部である。１は内面の頸部下にわずかにケズリが窺えるが、他の器面調整はナデ。２は復原口径14㎝で、二次加熱が著しくて器面が剥落しており、内面の頸部下のケズリしか器面調整を観察できない。３は復原口径22㎝で、摩滅が著しい、



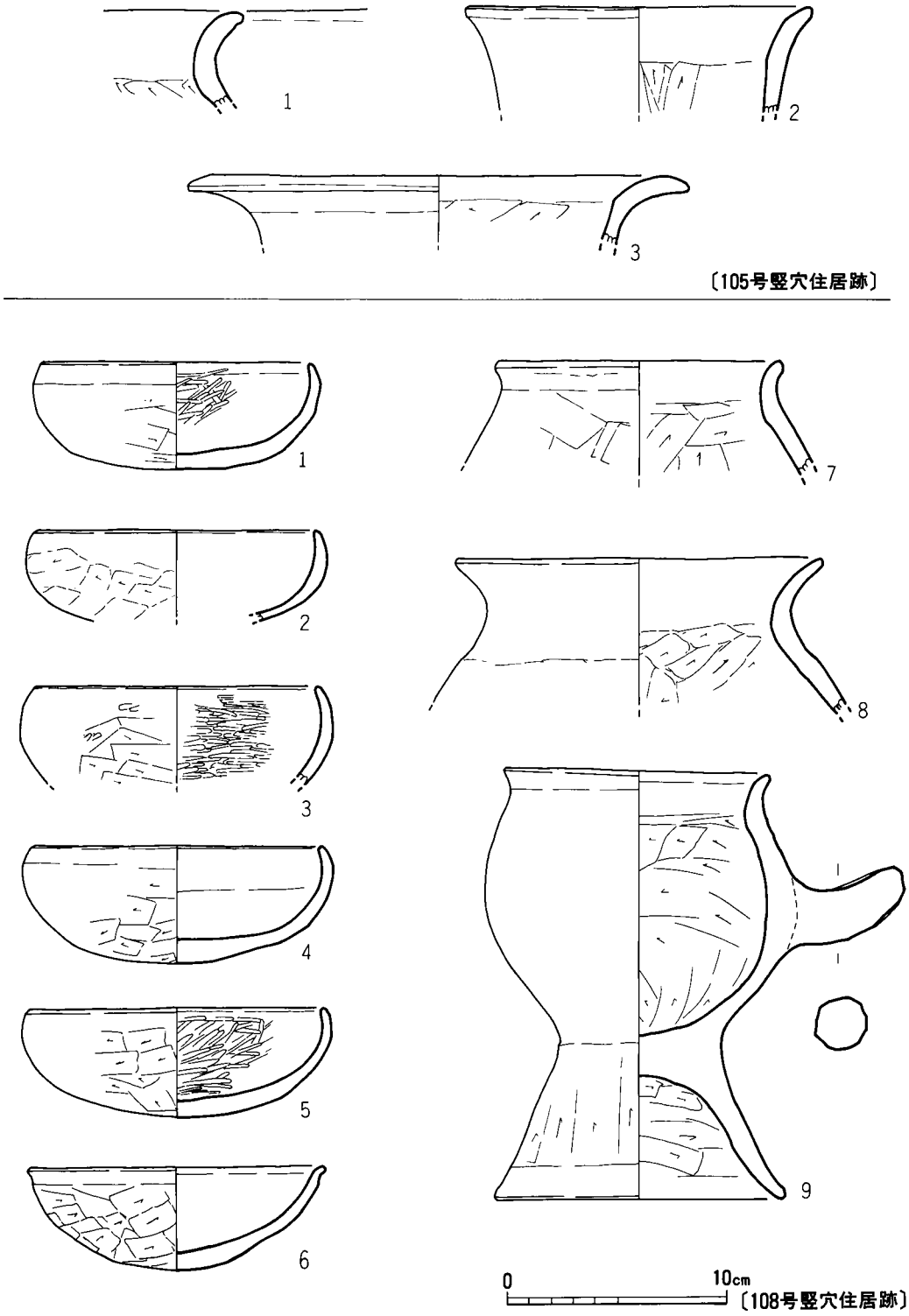
第126図　105・108号竪穴住居跡実測図（1/60）



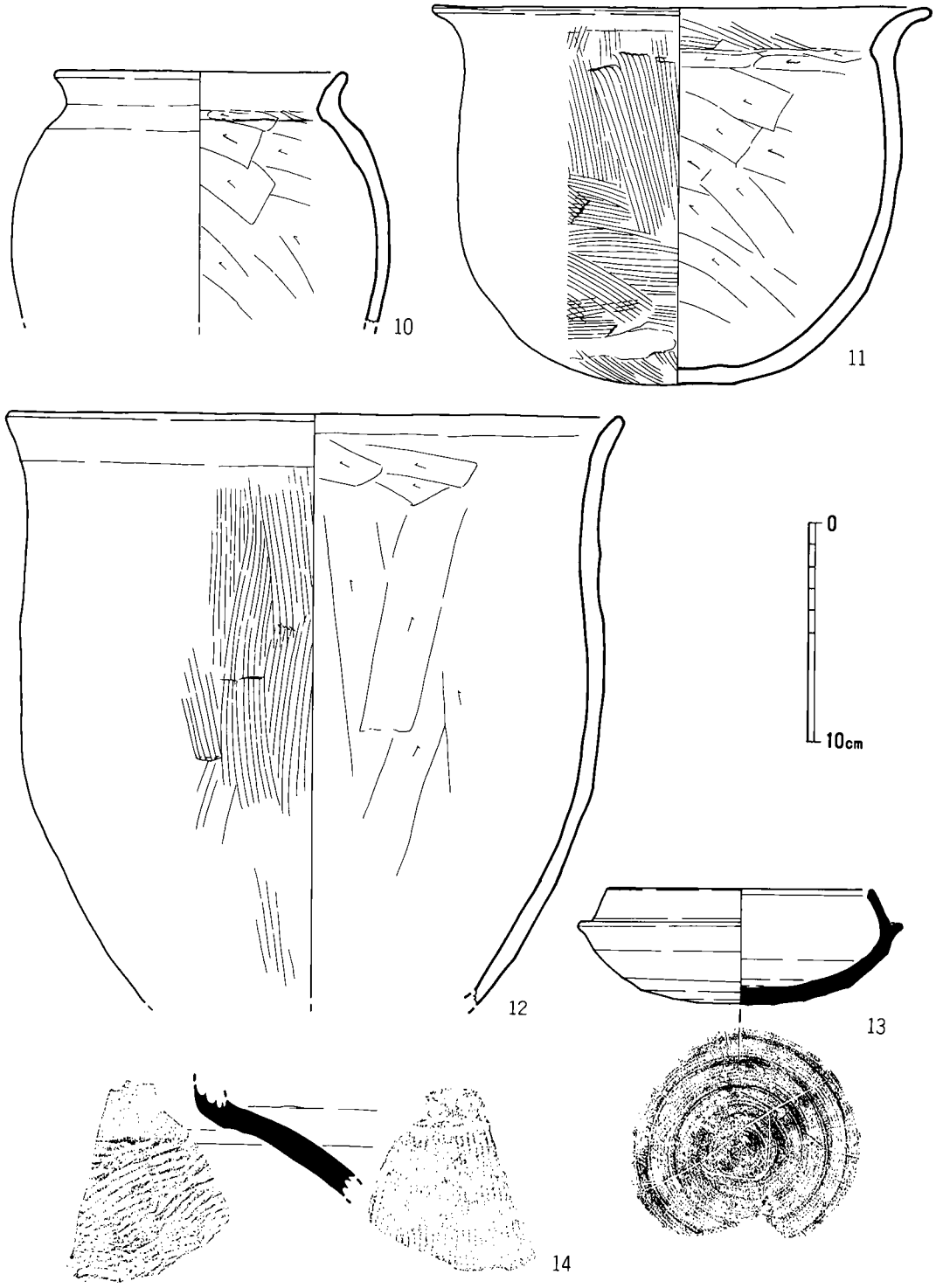
〔108号住居〕
1. 黄褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土
3. 褐色砂質土
4. 褐色土
5. 淡黄褐色砂質土
(カマドの基礎)
6. 褐色土(焼土を少量含む)
7. 褐色砂質土
8. 焼土
9. 灰褐色砂質土
10. 灰褐色土(カマドの袖)
11. 淡褐色砂質土(貼り床)
12. 灰褐色砂質土
13. 褐色砂質土(炭化物多量)
14. 黄褐色土
15. 褐色土

〔105号住居〕
1. 灰褐色砂質土
(カマドの崩落)
2. 灰褐色粘質土
(焼土・炭化物少量)
3. 焼土
4. 灰褐色土
5. 灰褐色砂質土
6. 黄灰色土(カマドの袖)
7. 茶褐色土(住居埋土)
8. 灰色粘質土(焼土少量)
9. 灰褐色土(焼土炭化物少量)
10. 褐色土
11. 黄灰色土(焼土少量)
12. 暗灰褐色砂質土(貼り床)
13. 灰褐色土

第127図　105・108号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第128図　105・108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第129図　108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

内面のケズリだけ痕跡的に窺える。

108号竪穴住居跡（図版44　第126図）

108号竪穴住居跡は調査区中央部の東端P–Q８区に位置し、北５ｍには69～73号竪穴住居跡群、西１ｍには87号竪穴住居跡、南６ｍには66号竪穴住居跡というように、古墳時代の竪穴住居跡が比較的密集する地区である。南壁のすべてが現代の用水路によって削平されて残っていないため正確な規模はわからない。現状では東西に5.8m、南北は6.0mまで測れるが、主柱穴との位置関係からそれほど大きく削平されているようでもないので、平面プランは正方形に近いものであったと推測される。壁高は最高で20cmほどしかなく遺存状態は悪い。それでも暗灰褐色砂質土の貼り床が、ほぼ全面に敷かれていることを確認できた。４つの主柱穴はいずれも２段掘りされており、径は50～65cm、深さは25～45cmになる。遺物はパンケース２箱弱で、カマド周辺から纏まって出土した。14点を図示したが埋土からの出土は14のみ。カマド内部からはおそらくは甕か甑の胴部破片ばかりで、図示できるものはなかった。８・12・13は床面から、11はカマドの焚き口から、他はすべてカマド左袖の横から集中して出土した。

カマド（図版44　第127図）カマドの設置にあたっては、まず貼り床をも切るように120×110×15cmの掘り込みが行なわれ、そこに褐色土（第10層）を詰めて基礎とし、さらにその上に灰褐色土（第４・９層）を敷く。それから黄灰色土で袖を作る。火床は40×33cmの範囲でカマドのほぼ中央部にあるが、自然石の支脚はやや西側に寄っている。先述したように、カマド内部からはおそらくは甕か甑の胴部破片しかなく、むしろカマドの焚き口やカマド左袖の横から集中して出土した。廃絶時にカマド内部の土器が取り出された感はあるが、焚き口や袖の横からは完形あるいはそれに近く復原できる土器が纏まっており、これがどのような行為の結果なのか興味の持たれるところである。

土器（第128・129図１～14）１～６はいずれも口径あるいは復原口径が12～13cm、器高が４～５cmとかなり規格性の高い坏である。特に１～５については、口縁形態や器面調整まで一致している。器面調整は外面がケズリ、内面がミガキで、口縁部だけ横方向にナデられる。２・４については内面のミガキが摩滅により極くわずかにしか観察できない。７は復原口径13cm、８は16cmの甕で、内外面ともに胴部についてはケズリが施される。９はほぼ完形に復原できた脚台付きの小型鉢で、１方向にだけ把手が付く。口径12.0cm、器高19.2cm、脚部裾径13.1cmを測る。鉢部の外面はナデ、内面はケズリが施され、脚部については内外面ともにケズリである。外面についてはほぼ全体に、二次加熱による変色が窺える。この９もカマド左袖のすぐ横から出土したが、発掘時点では床面からやや浮いている感じがあったので、図化せずに取り上げてしまった。10は復原口径13cmの甕で、内面には炭化物が付着する。11はほぼ完形に復原できる鉢で、口径22.4cm、器高17.1cmを測る。底部にはハケ後にナデられており、また設置面には擦痕が著しい。12は復原口径28cmの甕で、胴部下半の摩滅が著しい。

13は復原口径12cm、器高5cmの須恵器坏身で、底部外面には1本の直線文に逆「V」字を組み合わせたヘラ記号が施される。14は須恵器甕の頸部から胴部にかけての破片で、外面には平行タタキが、内面には青海波の当て具圧痕が見られる。

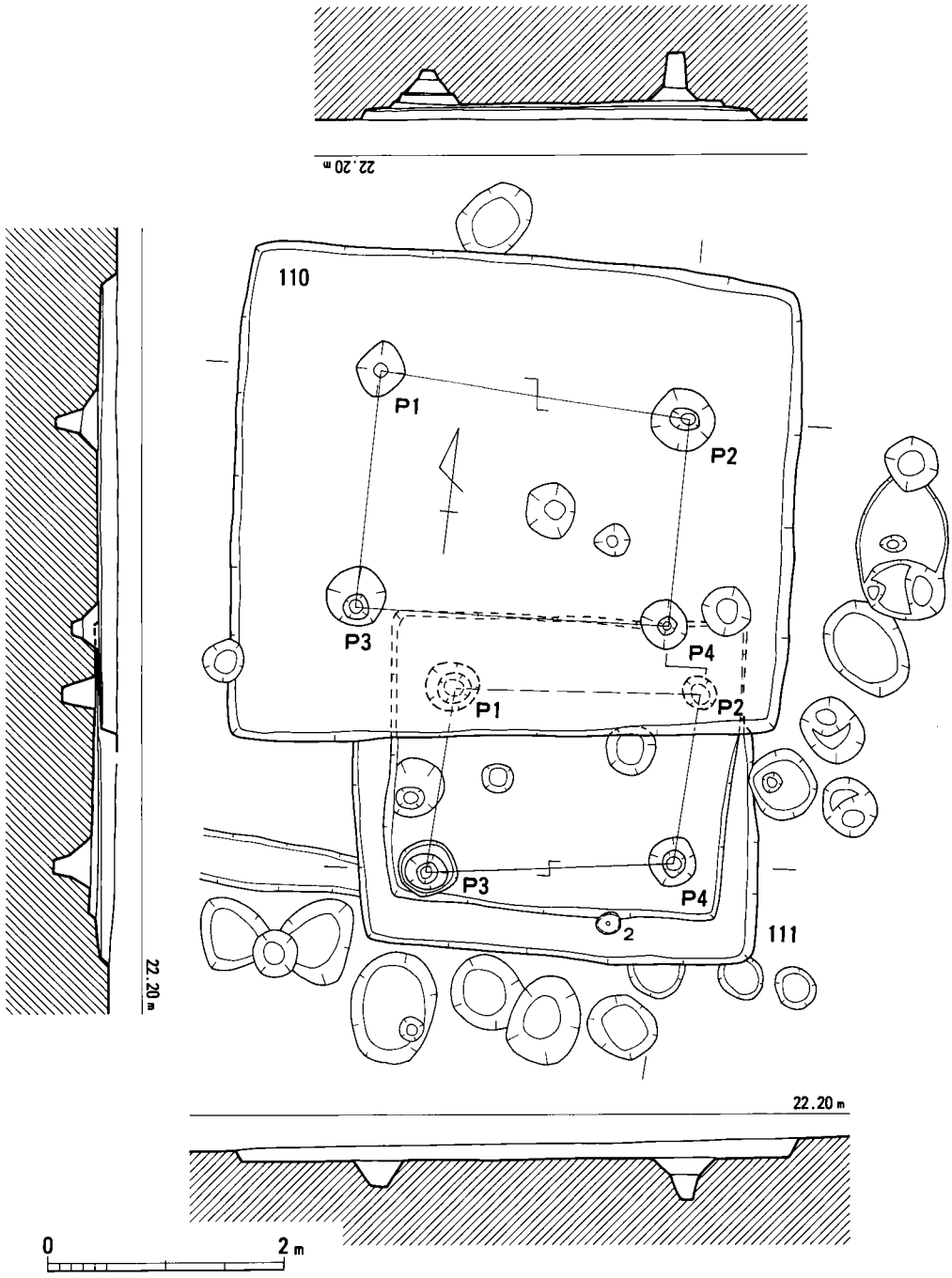
109号竪穴住居跡（図版45　第84図）

109号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのO-P7区に位置し、奈良時代の74号竪穴住居跡にカマドを含めた北西隅が大きく削平される。この地区は古墳時代の竪穴住居跡が特に密集した地区で、東3mには69～73号竪穴住居跡群が、西3mや南西2mには112号竪穴住居跡や110・111号竪穴住居跡が近接する。平面プランは5.2×3.8mの長方形を呈し、壁高は最高で40cmを測る。本遺跡においては比較的遺存状態の良好な竪穴住居跡なので、北西隅を74号竪穴住居跡に切られても床面までは到達しておらず、正確な規模や平面プランを知ることができる。平面プランは長方形としたが、実際には北西-南東の対角線がやや長い平行四辺形になる。これは4つの主柱穴の位置関係に対応している。この主柱穴については、径はいずれも50cm程度に統一されるが、深さは10～25cmとバラツキが大きい。東壁には床面から15cmほどのところに幅20～30cmのテラスが地山の削り出しによって作出されるが、その目的や機能については調査時点で確認できなかった。土層断面図でも図示しているように、貼り床と考えられる灰褐色砂質土（厚さ3cm）は床面の壁際で確認されたが、床面の中央部では確認されずに、埋土が直接床面に接した状態であった。本住居廃絶時に、中央部の貼り床を除去するような行為が行なわれたと考えるべきであろうか。遺物の出土は少なく、大きめのポリ袋1枚程度で、ほとんど埋土からの出土である。図示した5点もすべて埋土出土であるが、5の須恵器皿については、おそらくは本住居跡を切る74号竪穴住居跡に本来は所属するものであったと考えられるが、調査時の取り上げミスで今回は本住居跡出土遺物として取扱った。

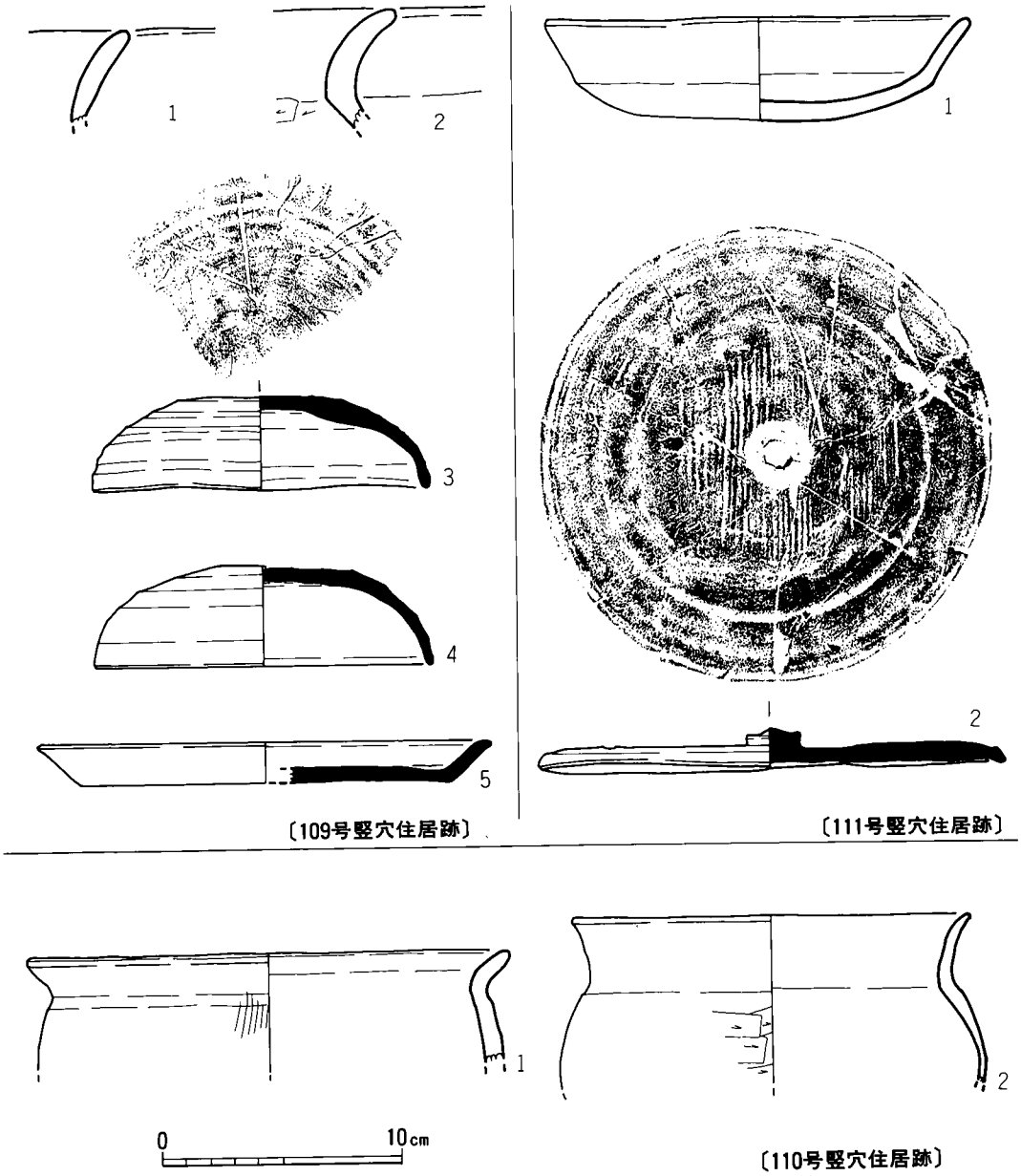
カマド（図版45　第121図）カマドは北壁中央部やや西寄りに作られるが、この部分は74号竪穴住居跡の削平によって大きく削られているところであり、遺存状況は必ずしも良くない。第121図で図示した破線の部分は、このカマドの基礎とするために掘り込まれたものではなく、袖部との切り合い関係や、この部分の埋土には全体的かつ比較的多量に焼土を含むということを考慮すれば、使用時にカマド内部の掃除を行なった結果に生じた掘り込みと考えられよう。火床となる焼土の広がりは焚き口部にわずかに確認できただけで、支脚の抜き取り痕やカマド内部から遺物がわずかにしか出土しないという事実から、カマド廃絶時に内部がかなり大きく清掃されたものと考えられる。

土器（第131図1～5）1・2は土師器甕の口縁部で、器面調整はいずれもナデだが、2の内面頸部以下にはケズリがわずかに窺える。

3は復原口径14cmの須恵器坏蓋で、外面には「V」字のヘラ記号が施される。4も復原口径14cmの須恵器坏蓋。5は復原口径19cmの須恵器皿で、底部にはヘラケズリの後にナデが施され



第130図　110・111号竪穴住居跡実測図（1/60）



第131図　109～111号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

る。おそらくは本住居跡を切る74号住居跡のものであろう。

110号竪穴住居跡（図版46　第130図）

110号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのＯ７－８区に位置し、112号竪穴住居跡の南東隅の一部や111号竪穴住居跡の北側半分を大きく削平する。この地区は古墳時代以降の竪穴住居跡が比較的密集しており、北西３ｍには109号竪穴住居跡、南東２ｍには87号竪穴住居跡、南西３ｍには80号竪穴住居跡が近接する。平面プランは4.3×3.8mの正方形に近い長方形であるが、東壁がやや短くて台形的なプランになる。径40～50cm、深さ30～40cmの４つの主柱穴のも、この平面プランに対応するような位置関係にある。壁高は最高で15cm程度で、そのためかカマドは痕跡さえもまったく確認できなかった。全体に暗褐色土が埋土となっており、確実に貼り床と認識できる痕跡はなかった。遺物はポリ袋１枚程度と少なく、この暗褐色の埋土に含まれる。

土器（第131図１・２）１は復原口径20cmの甕で、摩滅が著しく外面にわずかにハケが窺える。全体的に二次加熱を受けて変色している。２も復原口径26cmの甕でやはり摩滅が著しが、外面にはケズリが施されているようである。

111号竪穴住居跡（図版46　第130図）

111号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのＯ８区に位置し、110号竪穴住居跡によって北側半分が大きく削平される。この地区は古墳時代以降の竪穴住居跡が比較的密集しており、北西３ｍには109号竪穴住居跡、南東２ｍには87号竪穴住居跡、南西３ｍには80号竪穴住居跡が近接する。恐らく当初の平面プランは3.4×3.4mの正方形であったと考えられるが、110号住居跡による削平部分については１段掘り下げられた部分しか遺存しておらず、南北方向には現状では3.0mまでしか測れない。話は前後するが、本住居跡は当初は3.4×3.4m程度の正方形に掘り込まれ、さらに床面の中央部のみ2.7m程度の正方形の範囲で深さ４～５cmほどがもう１段ほど掘り下げられたものと考えられる。この部分の埋土は灰褐色砂質土であっただけに、おそらくは貼り床的機能を期待しての行為であったと推察される。４つの主柱穴はこの１段掘り下げられた部分の四隅に作られており、径35～45cm、深さ30cmの統一される。遺物はポリ袋１枚程度と110号住居跡と同様に少なかったが、第131図の完形須恵器坏蓋が南壁付近の床面に貼り付くように出土した。なお、本住居跡でもカマドについてはその痕跡すら確認することができなかった。また、埋土中から刀子が２点出土している（第194図８・９）。

土器（第131図１・２）１は復原口径18cmの土師器坏身であるが、摩滅が著しく器面調整は不明。２は口径19.3cm、器高1.7cmの須恵器坏蓋で、外面には平行タタキが窺えるが、内面は丁寧になでられている。

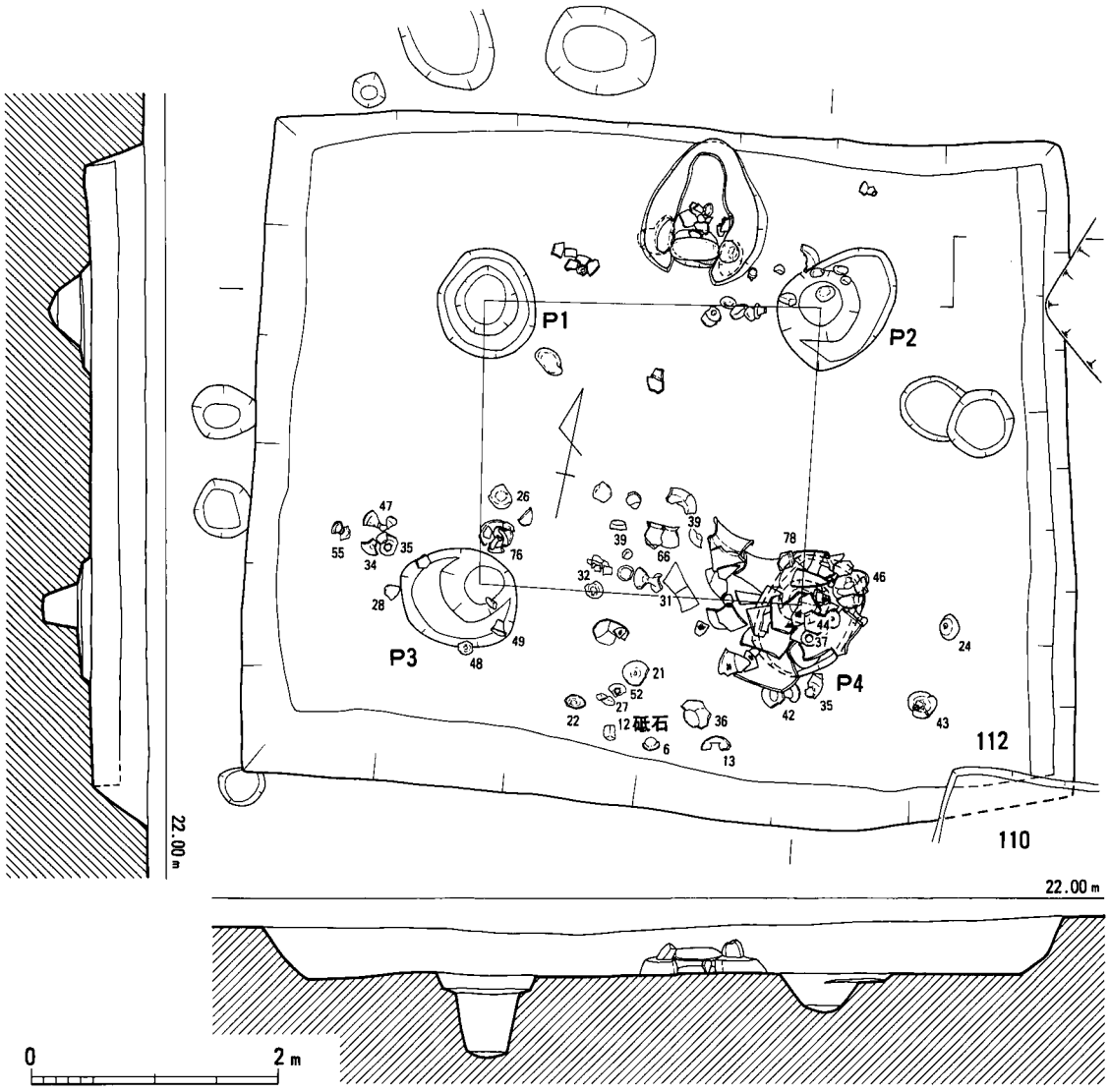
鉄器（第194図８・９）８・９は刀子である。８は鋒を欠損し、現存長7.4cmを測る。刃部は

茎幅と変わらないくらい非常に使い込まれている。茎部長2.3㎝、幅0.7㎝で、柄の木質は遺存していない。9は関部付近を欠損するが、同一個体として実測した。推定長10㎝程であろうか。刃部幅は1.3㎝、背の厚さ0.3㎝で、茎部の幅は1.0㎝、厚さ0.4㎝を測る。

112号竪穴住居跡（図版47・48　第132図）

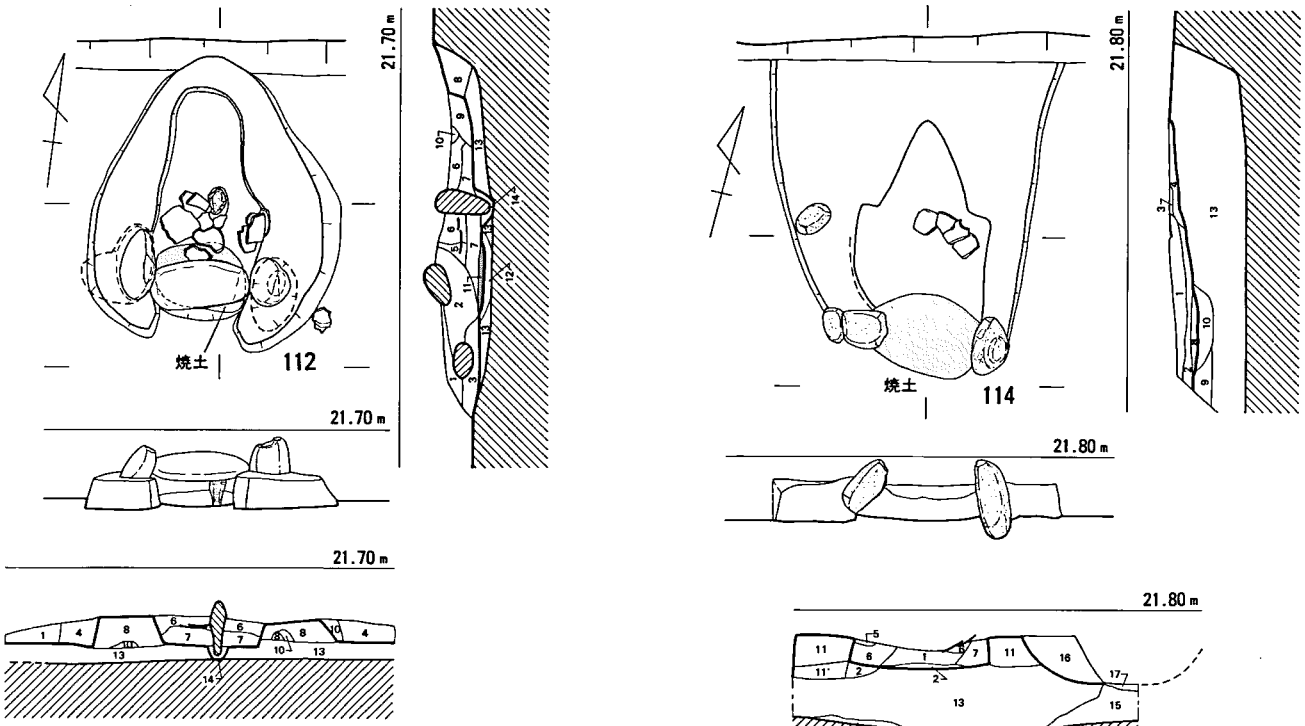
112号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのN-O8区に位置し、110号竪穴住居跡によって南東隅がわずかに削平される。この地区は古墳時代以降の竪穴住居跡が比較的密集しており、北東5mには74・109号竪穴住居跡、北西2mには114号竪穴住居跡が近接する。平面プランは6.6×5.7mの長方形を呈し、壁高は最高で40㎝を測る。住居跡の規模としては本遺跡において最も大きく、遺構としての遺存状態も良好なほうである。壁の傾斜角度は約60度で、普通ほぼ垂直に立ち上がる竪穴住居の壁としては、かなり傾いた感じを覚える。中でも東壁については床面から20㎝のところで一度屈曲するが、その機能や用途については調査の中で確認できなかった。床面には厚さ8㎝程度の貼り床（灰褐色砂質土）がほぼ全面に敷かれており、カマドもその上に作られる。4つの主柱穴はいずれも検出段階での掘りかたが径70～100㎝とかなり大きかったが、15㎝ほど掘り下げたところで2段掘りになる径30～40㎝の掘りかたが現れた。深さについては40～70㎝とやや幅がある。遺物の出土は極めて多くパンケース11箱にも及んだが、注目すべきは土師器高坏の多さである。第132図にも図示したように、本住居跡の中央部南側の床面から20㎝ほど浮いた埋土中より、多量の高坏と完全に完形に復原できた須恵器大甕1個体分が集中的に出土した。これら高坏については最低でも30個体以上出土したが、そのうち2個体だけ完全な形であったが、他はすべて坏部と脚部がはずされて、あるいははずれており、しかも倒位もまちまちであたかも投棄されたような状態であった。住居廃絶後の埋没の初期段階であったことや、さらには完形の須恵器大甕が投棄された状態であったことをも考慮するなら、本住居跡廃絶後の祭祀的行為の結果と考えるのが妥当であろう。なお、床面からの遺物の出土はほとんどなく、カマドと同様に廃絶時点でかなり清掃されたものと考えられる。年代的には5世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

カマド（図版49　第133図）カマドは北壁中央部でもやや東寄りに設置され、貼り床となる灰褐色砂質土の上に作られる。カマドの規模は120×100㎝でやや縦長になる。カマドの袖の先端部には焚き口を形成した2つの自然石が立ったままの状態で検出されたが、いずれも掘りかたが確認できたことから、ある程度袖を作った後にその袖を掘り込んで石を据え立てたものと考えられる。この袖石の上に乗っていたと見られる石、すなわち焚き口の天井部に当たる石はカマド内部に落ちた状態で出土した。支脚となる細長い自然石は立ったままの状態で、そこから焚き口へ向けて70×50㎝の範囲で火床となる焼土の広がりが検出された。出土した2個体分の甕の胴部破片、ほとんど接合しなかったため図示はしていない。このほかに第134図3・5の坏が出土。



第132図　112号竪穴住居跡実測図（1/60）

土器（第134～142図１～78）先述したように、出土遺物の大部分は埋土からのもので、床面やカマドからの出土で図示できたものはほとんどない。１～17の坏は口径が13～16cm、器高５～７cmにほぼ収まる。口縁部形態は多くは直線的になるが、端部がわずかに外反するものも少量見られる。器面調整も外面は底部を中心にケズリ、内面はなでが主流であるが、ハケやミガキが見られるものもわずかではあるが窺える。16の底部外面には「×」のヘラ記号が施される。18～20は手捏ね土器であるが、いずれも埋土からの出土。12・13は外面全体が二次加熱により

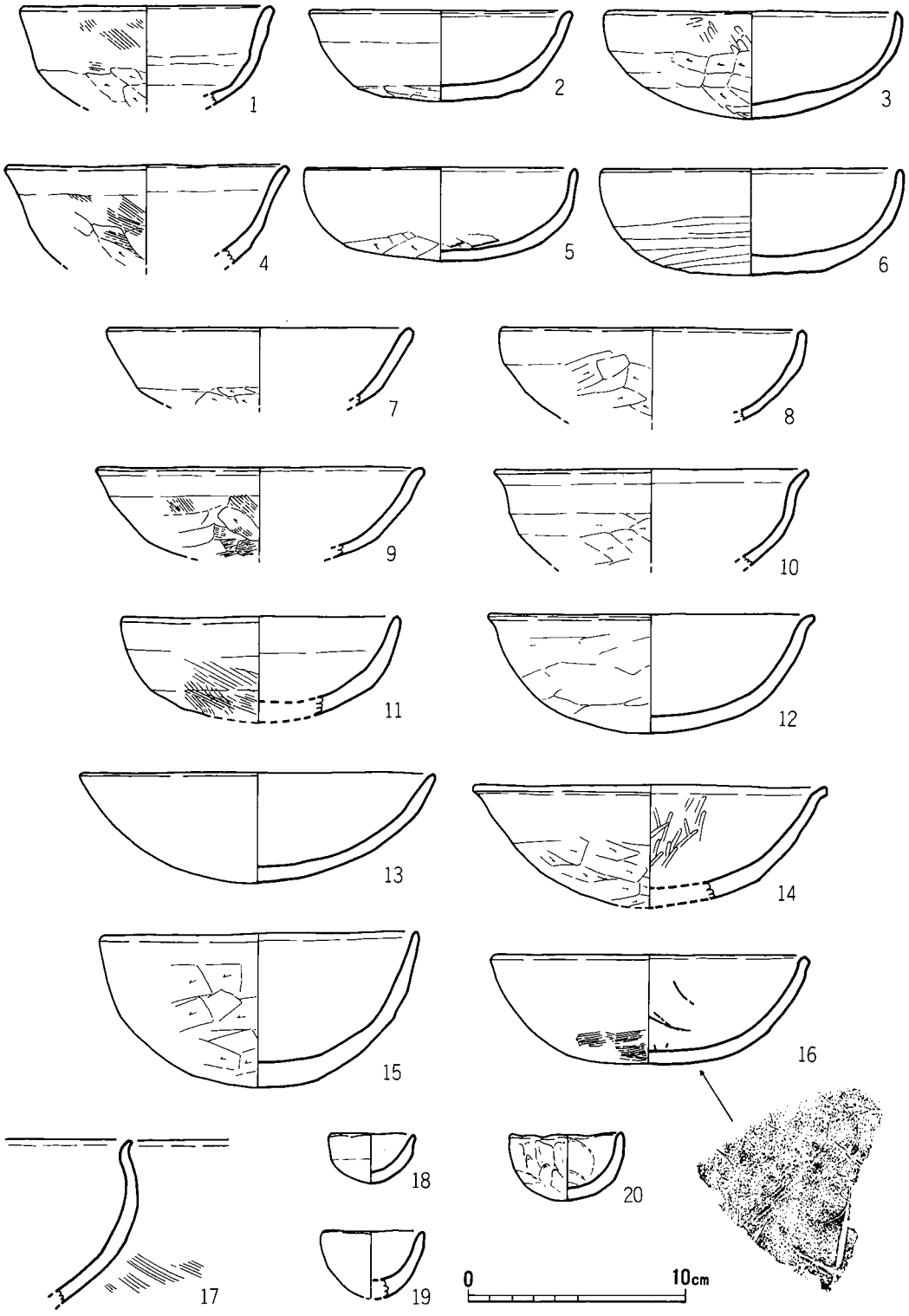


1. 茶褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 暗黄褐色粘質土
5. 灰褐色土
6. 灰褐色土(焼土少量)
7. 赤褐色土(焼土多量)
8. 褐色土
9. 黄褐色砂質土
10. 褐色粘質土
11. 焼土
12. 赤褐色土(焼土多量)
13. 灰褐色砂質土(貼り床)
14. 暗褐色土

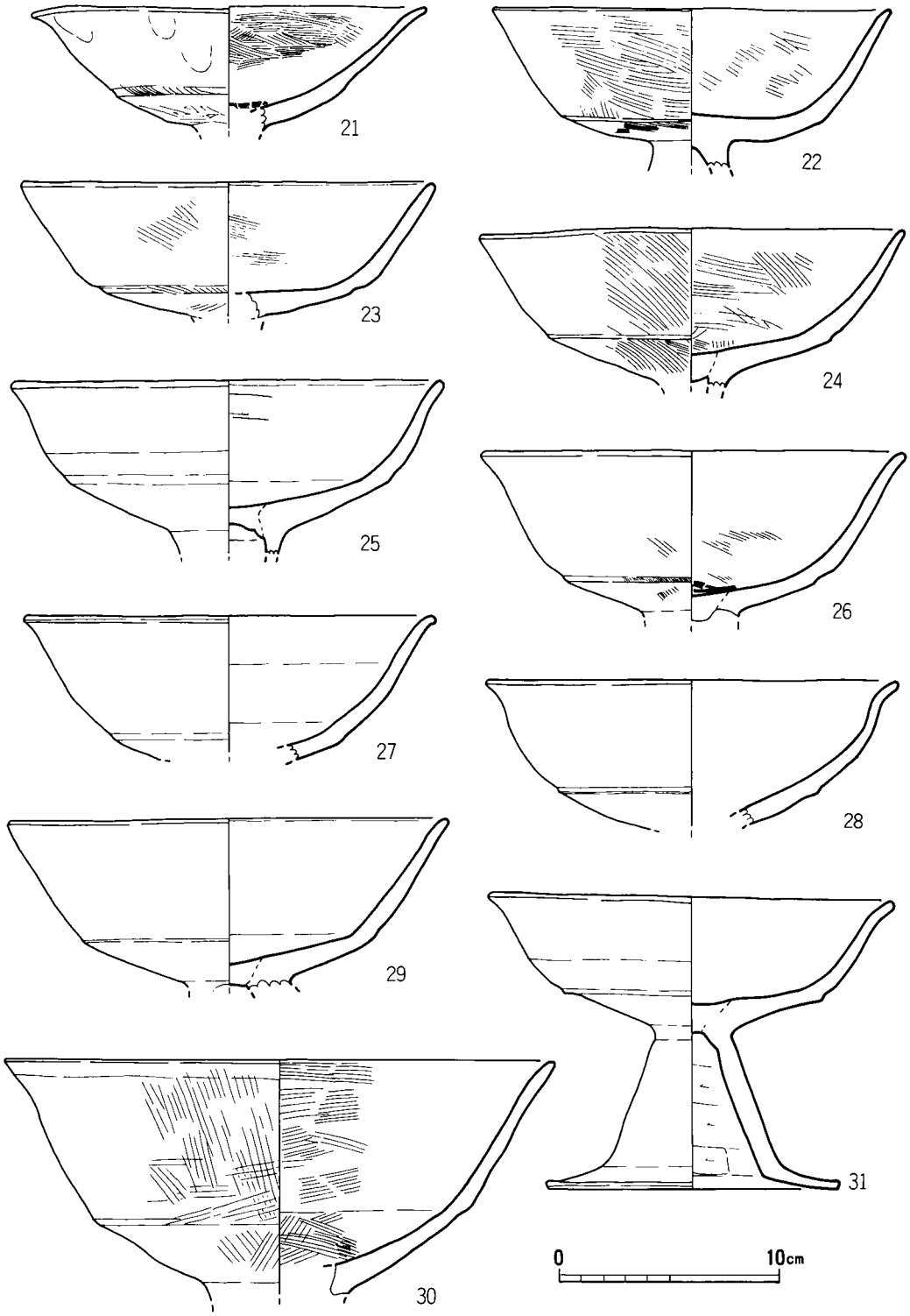
1. 褐色土(住居埋土)
2. 褐色土(焼土・炭化物少量)
3. 褐色砂質土
4. 褐色土
5. 黒褐色土(炭化物少量)
6. 褐色土
7. 茶褐色土
8. 焼土
9. 灰褐色土
10. 灰褐色土
11. 黄褐色土
12. 褐色土(炭化物少量)
13. 黒褐色土(本住居落ち込み)
14. 褐色砂質土(貼り床)
15. 黄褐色土(貼り床)
16. 褐色土
17. 褐色砂質土

0 1m

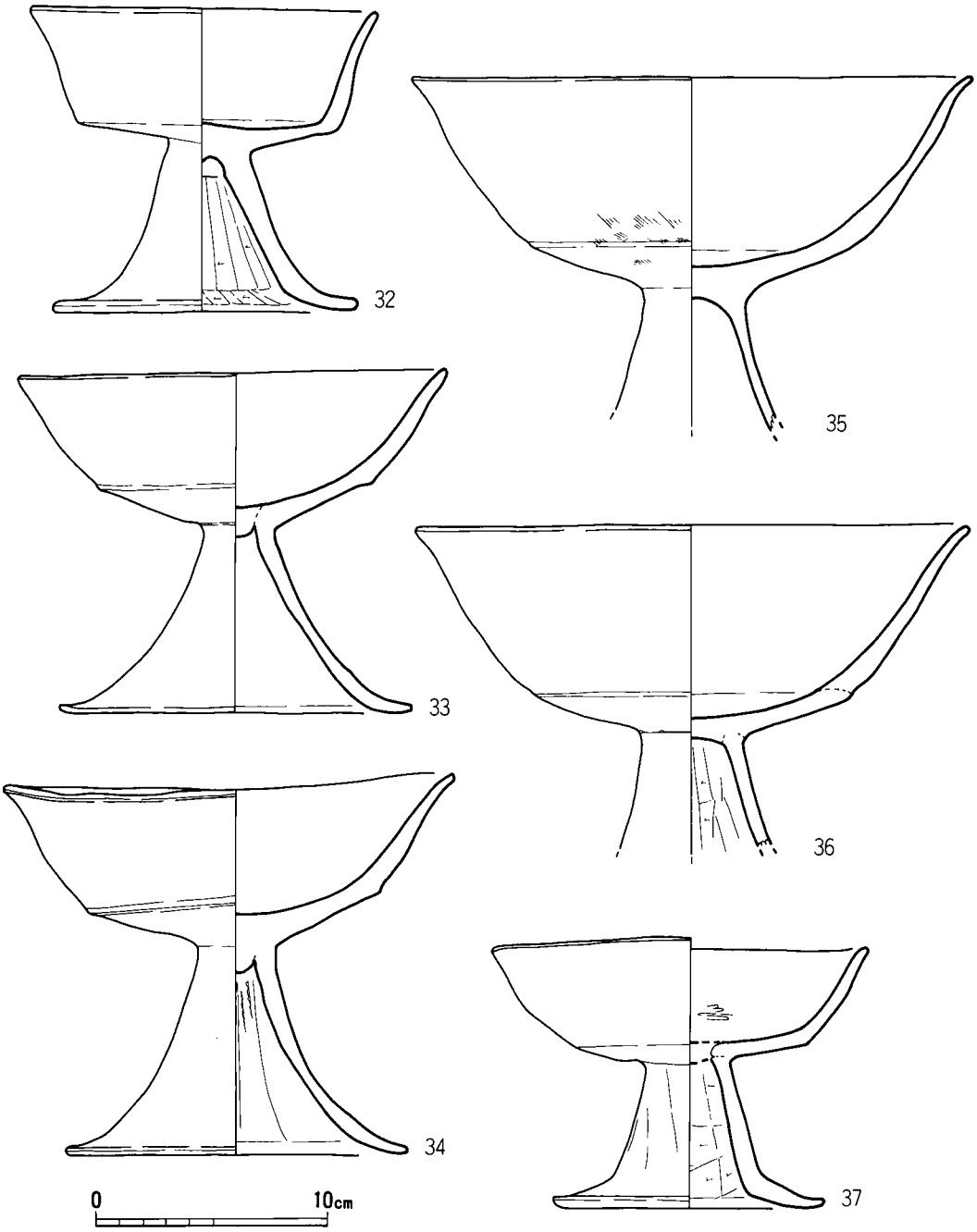
第133図　112・114号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



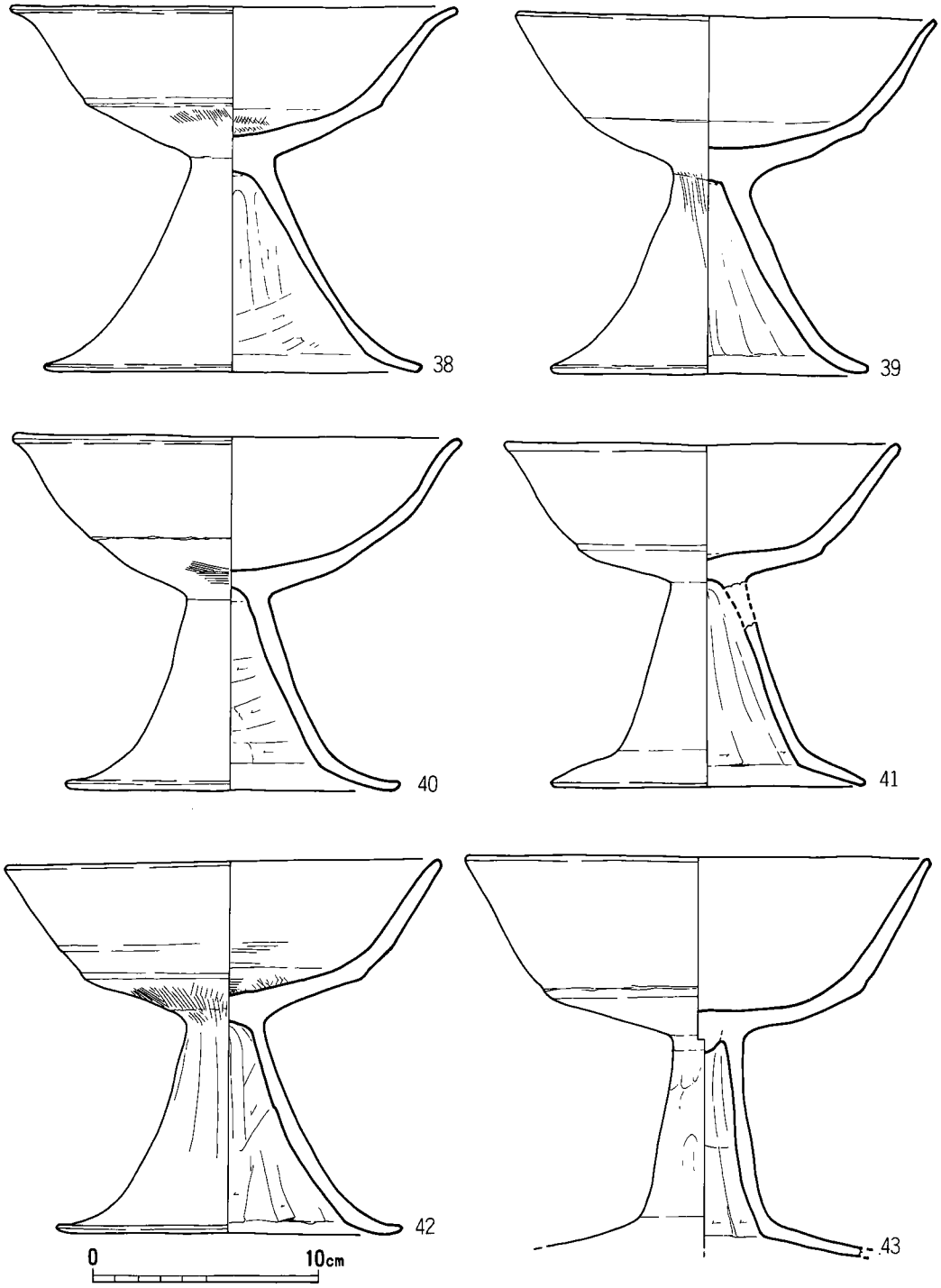
第134図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



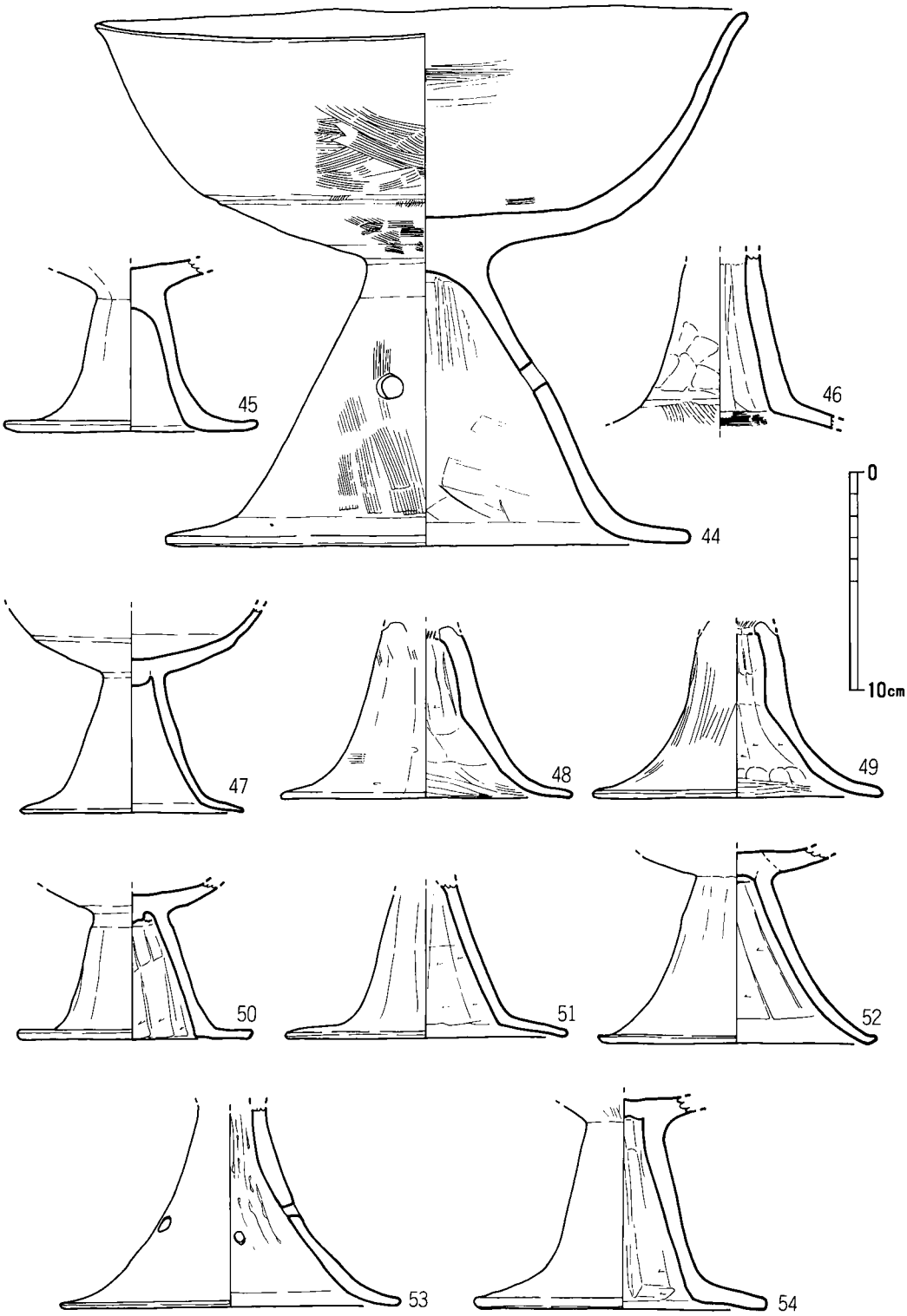
第135図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）



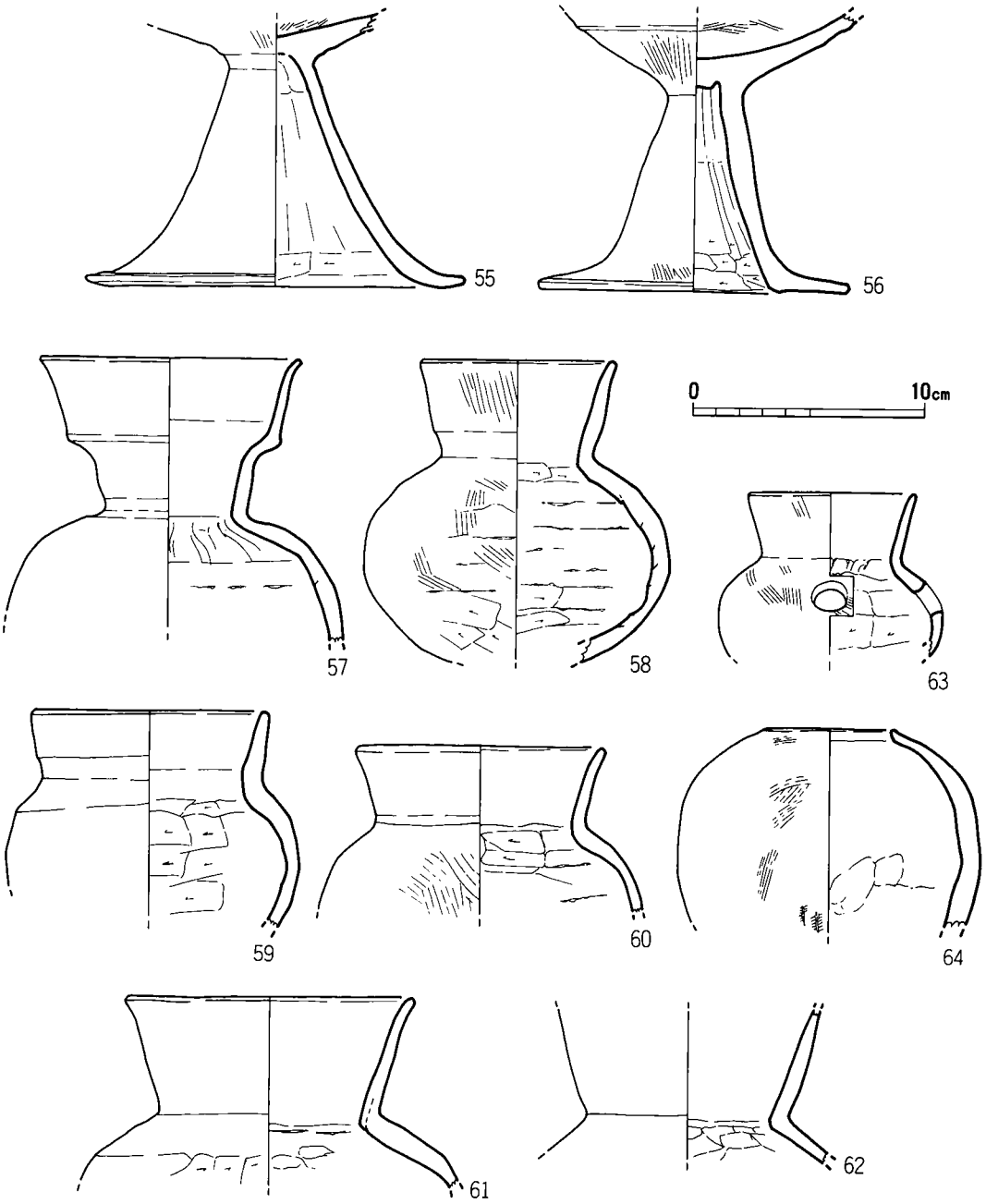
第136図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.3（1/3）



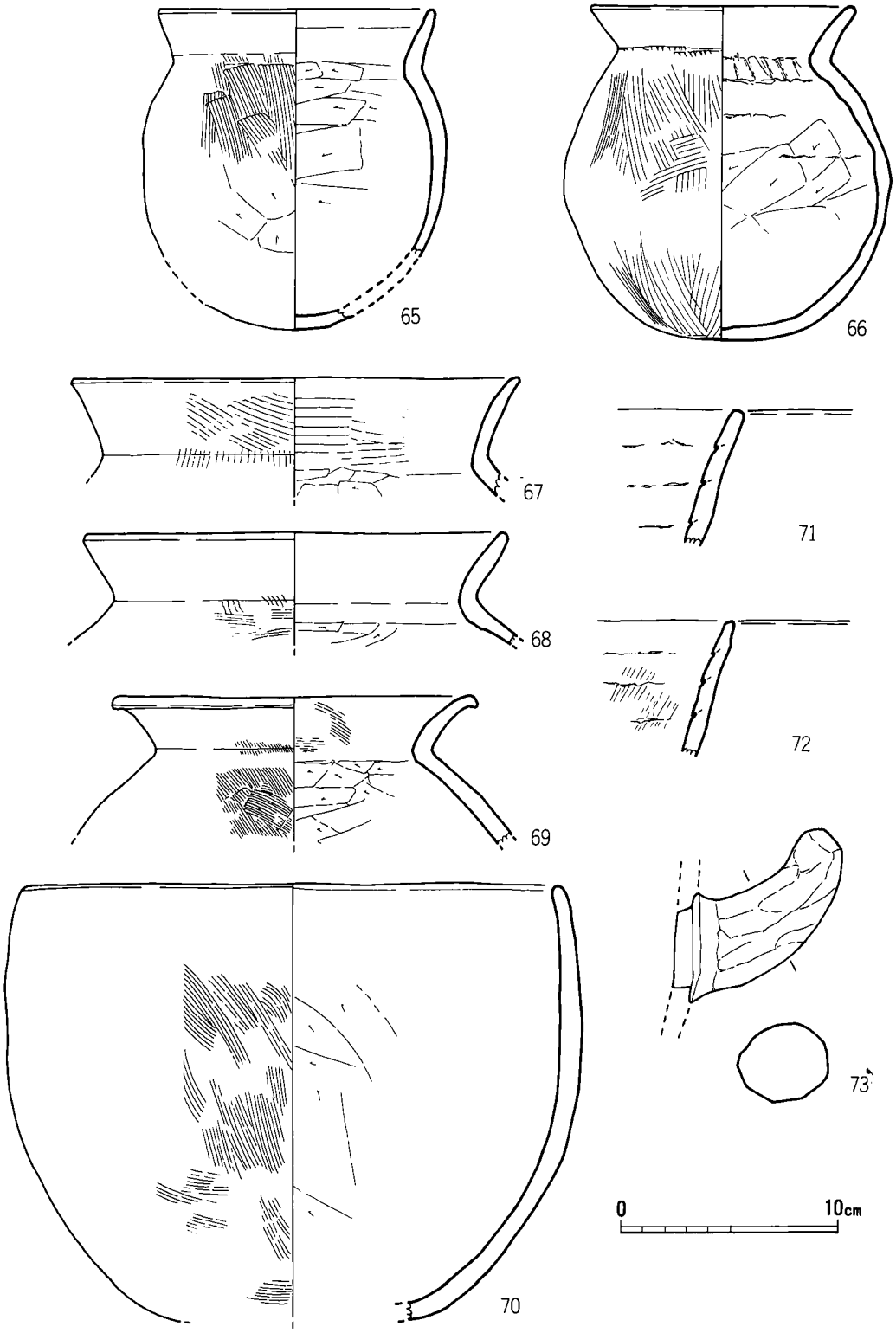
第137図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.4（1/3）



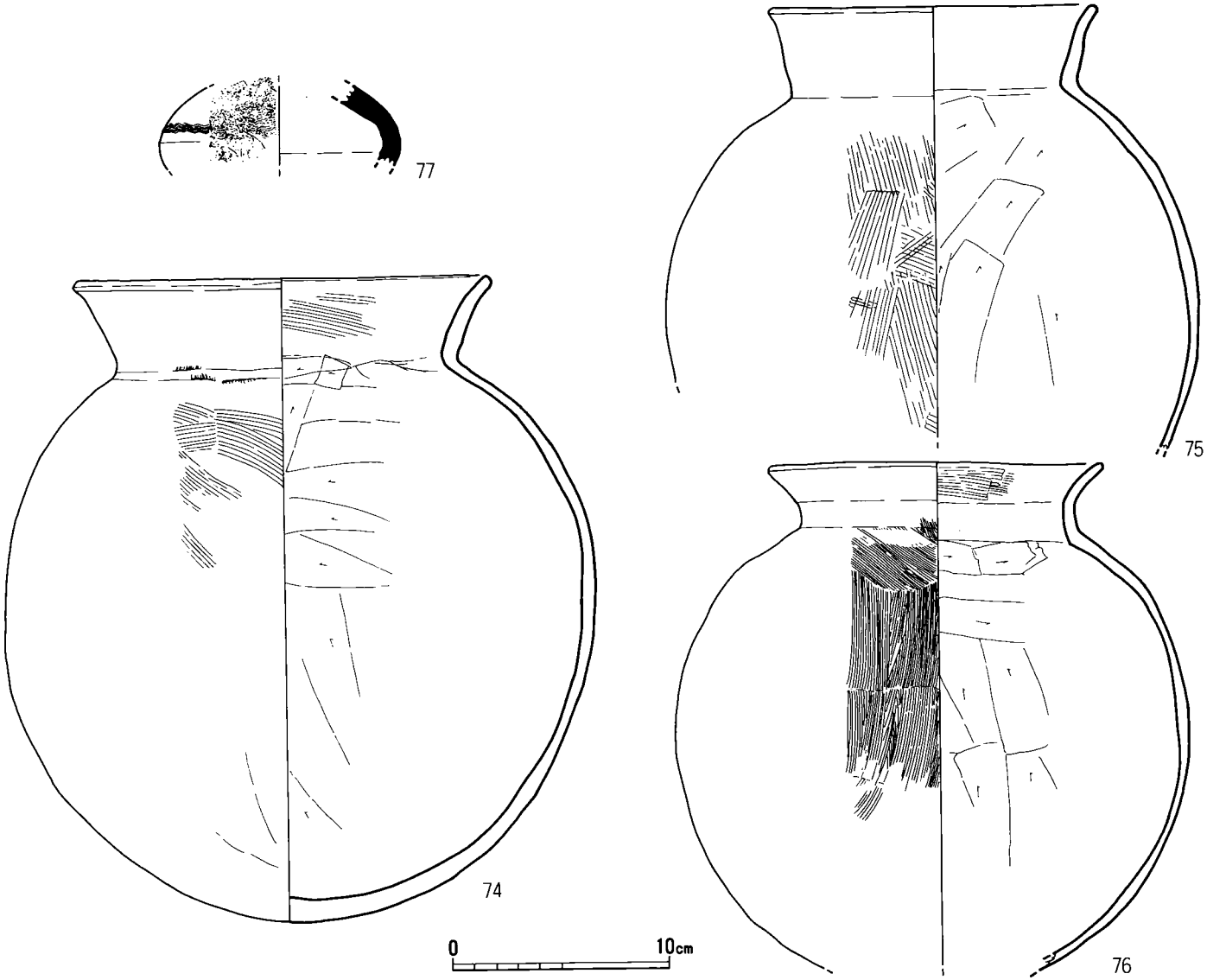
第138図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.5（1/3）



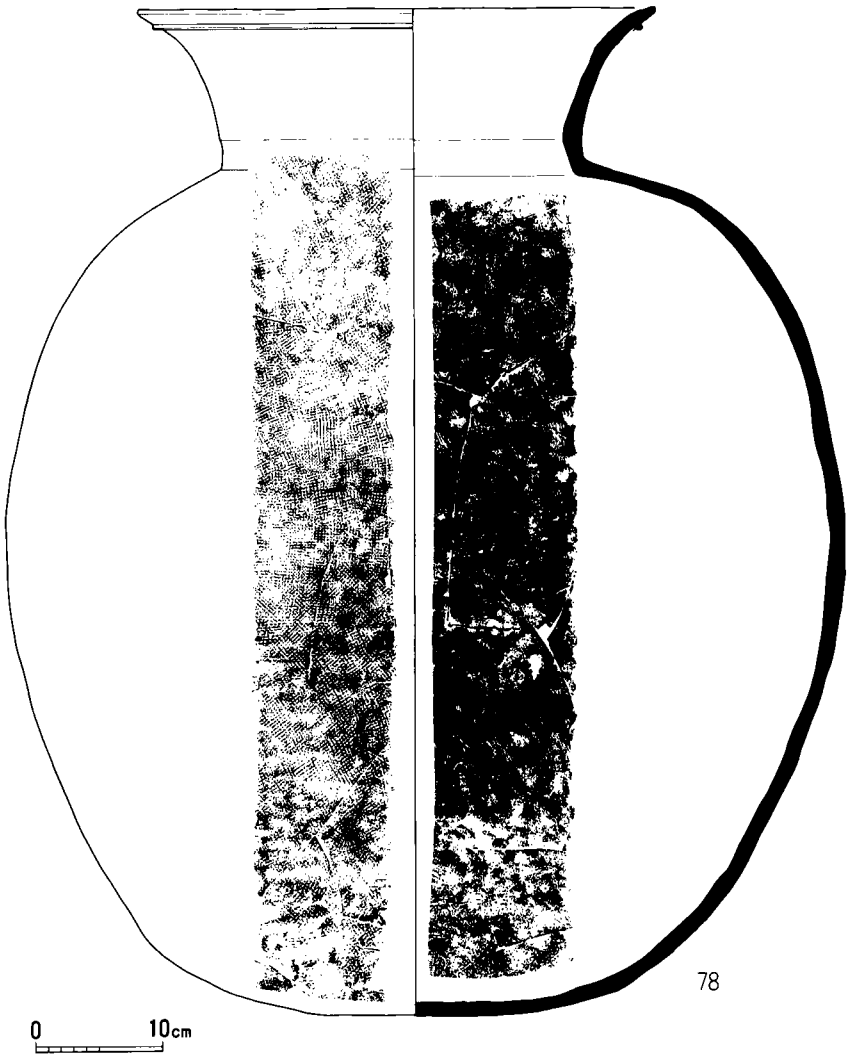
第139図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.6（1/3）



第140図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.7（1/3）



第141図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.8（1/3）



第142図　112号竪穴住居跡出土土器実測図.9（1/6）

赤褐色に変色する。高坏は35個体を図示したが、当初から完形であったのがわずかに2個体、坏部と脚部が別個に出土したが接合できたものは9個体しかなかった。その他の24個体分については坏部と脚部を別々に図示したが、これは両者が接合しなかったからであって、胎土や色調から判断する限りでは同一個体らしきものも数個体あった。完形もしくは完形近くまで復原できた例を見ると、口径15cm、脚部裾径13cm、器高12cmの小型の一群（32・37）、口径20cm、脚部裾径15cm、器高20cmの中型の一群（33・34・38～43）、口径30cm、脚部裾径23cm、器高25cmの大型の一群（32・37）に分かれるが、主体は中型の一群である。小型では坏部の屈曲がかなりシャープなのが特徴。しかし、この屈曲部で段を作ったりすることはない。中型の場合の

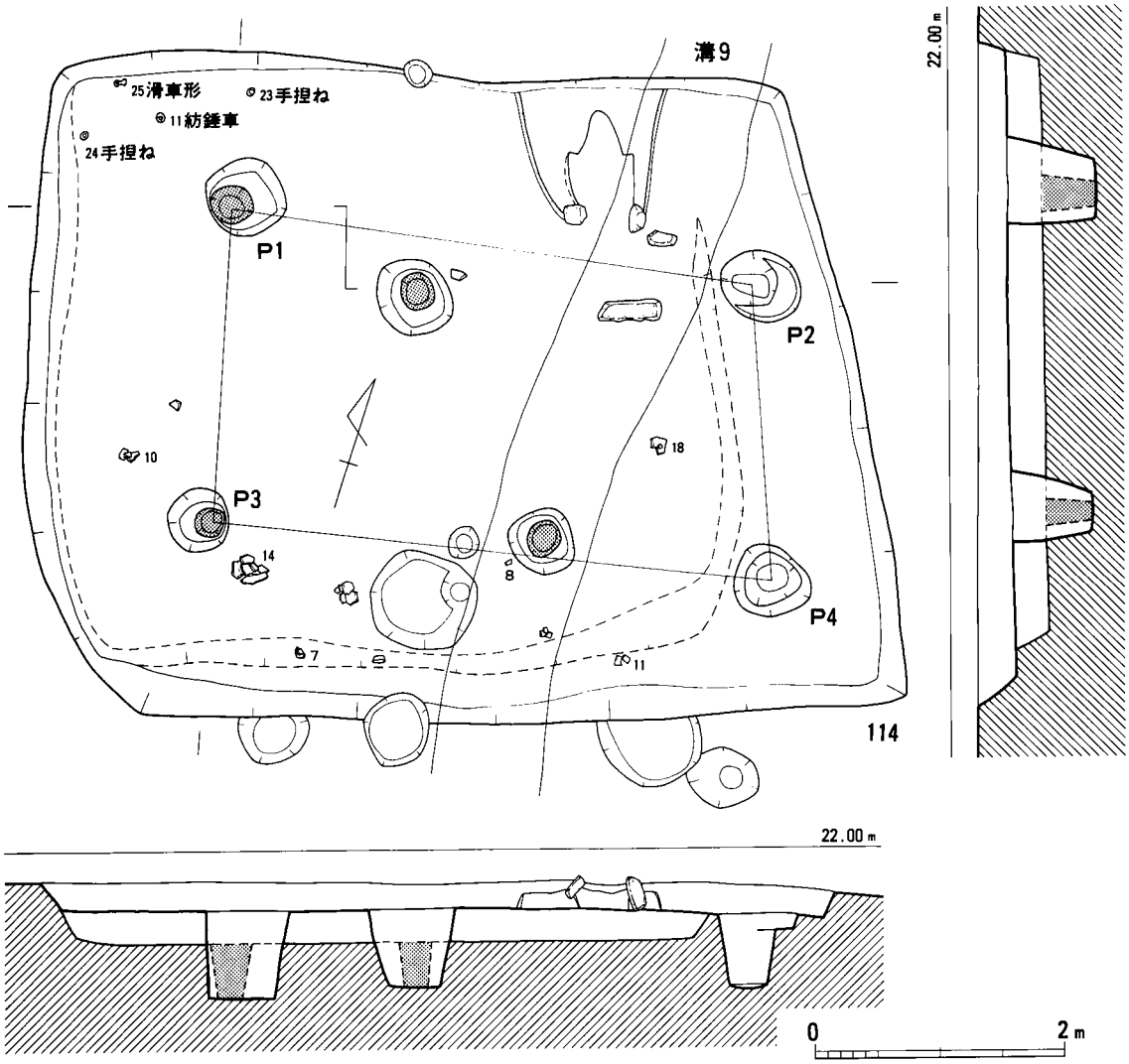
坏部の屈曲部では段が作られ、中には沈線文が施されたようなものもある。脚部に透かしが穿たれるのは大型の44以外に中型の43で見られるが、いずれもその位置関係から3方向になる。器面の遺存状態は全体的に悪く調整が観察できるものは少ないが、坏部では内外面ともハケがわずかに窺える。おそらくはその後にミガキが施されていたであろうが、実際に確認できるものはほとんどない。脚部については内外面ともにケズリで、裾の先端部付近ではハケが施されることもある。57は復原口径11cmの小型の二重口縁壺である。摩滅により器面調整は不明だが、胴部内面には接合痕が残る。58・61・62は坩で、58については復原口径8cm、復原器高15cm程度になる。外面はケズリ後にハケが施される。59・60は小型の鉢になろうか。復原口径はいずれも10cm程度。63は復原口径7cmの坩で、外面の器面調整はハケ、内面はケズリで、この内面の頸部にはしぼり痕が見える。64は復原口径6cmの小型の無頸壺で、外面はハケ、内面にはナデが施される。65～69・74～76は甕で、いずれも器面調整は外面がハケ、内面がケズリである。65・66については復原口径12cmの小型になる。74はほぼ関係に復原でき、口径19.1cm、器高29.5cmを測り、胴部下半には炭化物が比較的多く付着する。70は復原口径25cmの鉢で、口縁部を中心に二次加熱による変色が見られる。71・72は甑の口縁部で、いずれも内面に接合痕が明瞭に残る。73は甑の把手であるが、甑本体の接合部分からそのまま外れている。

77は復原最大腹径11cmの須恵器瓶の胴部で、中央部やや上位に櫛描きの波状文が施される。78は完形の須恵器大甕で、口径41.2cm、頸部径28.6cm、最大腹径66.3cm、器高80.0cmを測る。口縁部から頸部にかけては内外面ともにナデ、胴部については外面が格子目のタタキが丁寧に施される。胴部内面については、全体的に青海波の当て具圧痕を丁寧にナデ消している。

石器（第190図12）第189図12は淡白灰色を呈する頁岩もしくは長石石英斑岩のような石材の砥石で、本来は細長い形態の一端に当たる。断面四角形の4面はいずれも砥石面として使用されているが、図示した4面は左から線条痕、細かい研磨痕、中間的な研磨痕、粗い研磨痕に分かれ、用途に応じた面の使い分けが見られる。

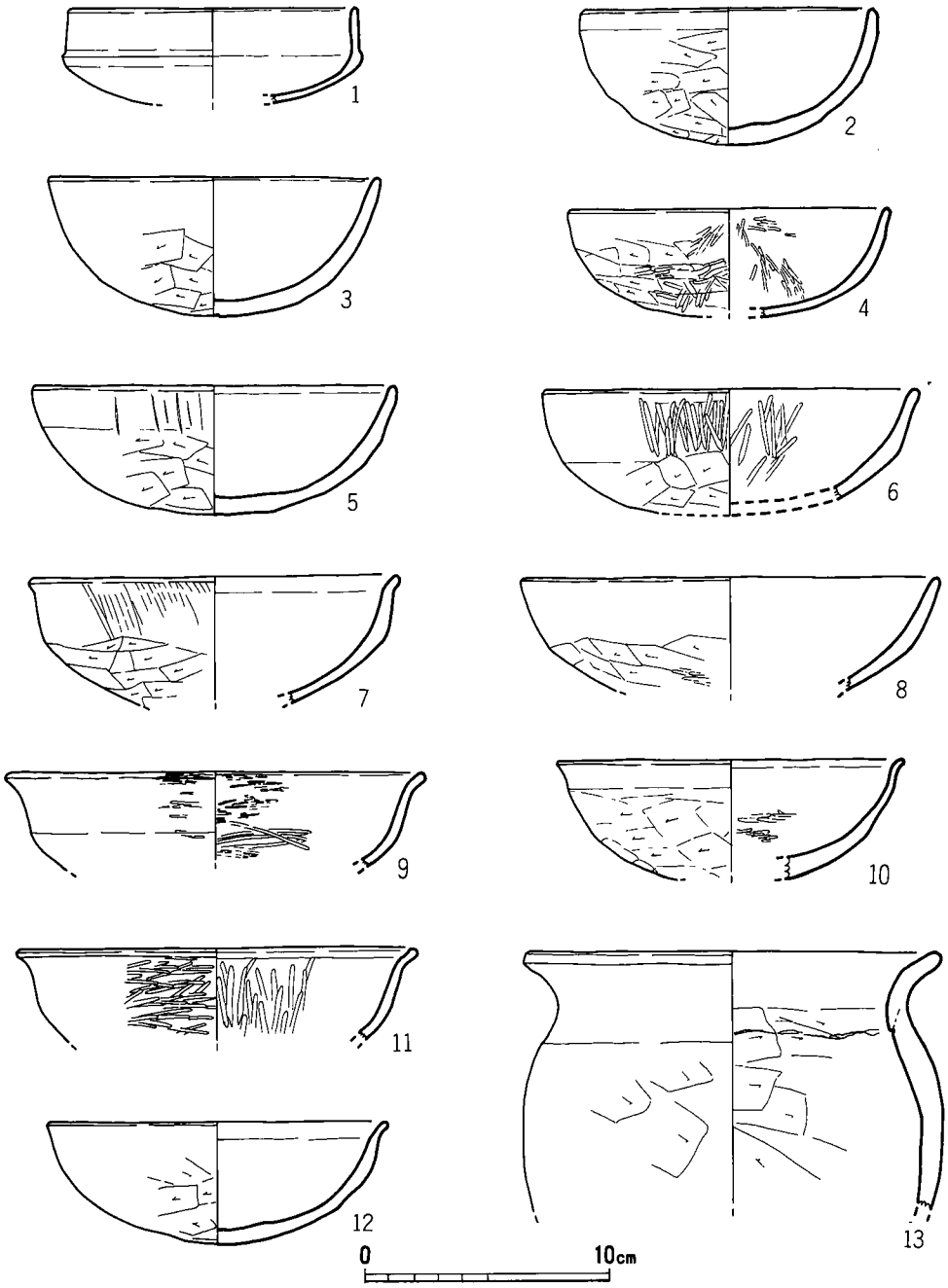
114号竪穴住居跡（図版50　第143図）

114号竪穴住居跡は調査区中央部やや東寄りのN6－7区に位置し、9号溝が本住居跡中央部東寄りを貫流する。この地区は古墳時代以降の竪穴住居跡が比較的密集しており、北東2mには75号竪穴住居跡、北西2mには76号竪穴住居跡、南東2mには112号竪穴住居跡が近接する。平面プランは6.7×5.1mの長方形で、壁高は最高で20cm程度。調査ではカマドの設置状況や遺物の出土状態から、この遺構検出面から約20cmほど下げたところを床面と認定した。しかし、この時点で検出できた主柱穴は地山が顔を除かせた部分である東端の2本だけで、西側2本の主柱穴は検出できなかった。本住居跡の床面の西側5／6には黒褐色砂質土からなる深さ30cmほどの大きな落ち込みが広がっており、ここを掘り下げてようやく残り2本の主柱穴を検出することができた。この落ち込みについては性格が判然としないが、平面プラン的に見た場

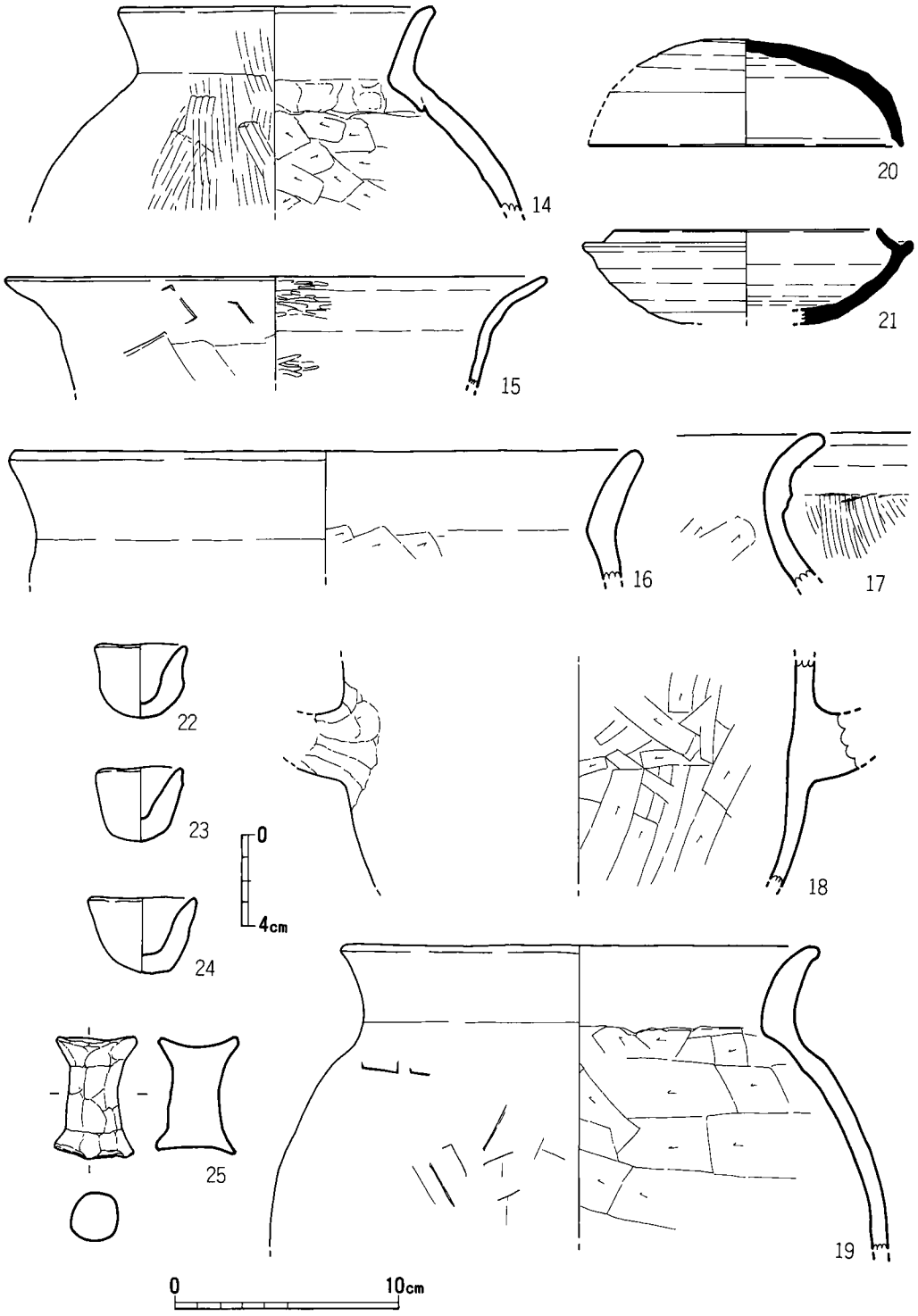


第143図　114号竪穴住居跡実測図（1/60）

合ほぼ正方形を呈するので、当初の本住居跡の掘りかたであったと考えられる。それが何等かの理由で東側に拡張されることになり、深く掘りすぎた分を黒褐色砂質土で意図的に埋めて床面を形成したものと推定される。４つの主柱穴は一見アンバランスな位置関係にあるようだが、南東側にやや歪んだ住居跡自体の平面プランやカマドの設置位置を考慮するなら、それなりに配慮された結果と見られる。径は50～60cmで深さは70cmと規模的には４本とも大きく、このうち北西隅や南西隅の２つの主柱穴では、径25cmの柱痕が確認できた。柱痕が確認できた柱穴はほかにも２つあるが、いずれも主柱穴になるものではないだけに、どのような性格の柱穴なのかが問題となる。あるいは、当初の住居跡と見られる正方形プランの深い掘りかたが実は住居



第144図　114号竪穴住居跡出土土器実測図.1（1/3）



第145図　114号竪穴住居跡出土土器実測図.2（1/3）

として機能していた時期があり、その時の主柱穴かとも考えたが、北東部にあるはずのもう一つの主柱穴はカマドを除去しても確認できなかったので、この考え方を追認するには根拠がいささか不十分である。遺物はパンケース1箱程度であるが、床面からの出土はそれほど多くはない。しかし、本住居跡の北西隅からは手捏ね土器や滑車形土製品や滑石製紡錘車が集中的に出土しており、祭祀的な行為の痕跡と見ることができる。床面から出土した土器は第144・145図2・4・7～11・14・18で、カマドからは19が出土。

カマド（図版50　第133図）カマドは北壁のかなり東寄りに設置されており、検出時点では焚き口を形成する石組の天井部が、焚き口の手前70cmほどの床面にあった。カマド廃絶時に外されたものと考えられる。カマド自体は床面に広がる大きな掘り込みを埋めた黒褐色土の上に作られ壁に接しているが、焚き口や焼成部は壁からかなり離れて作られているのが特徴。火床は焚き口に接した部分に広がり、自然石による支脚はこのカマドを検出した時の袖の上で出土した。カマド内部からは第145図19の甕が出土しただけである。以上のような状況から、本カマドは廃絶時に意図的に壊されたものと考えられる。

土器（第144・145図）1は復原口径12cmの坏であるが、摩滅により器面調整不明。2～12の坏はおよそ外面の器面調整がケズリ後にミガキ、内面はミガキである。本来は多くの場合ミガキが最終調整となるが、摩滅による器面の剥落などにより、ケズリだけが観察されるようである。13は復原口径17cmの甕で、器面調整は内外面ともにケズリ。14は復原口径14cmの甕で、外面はハケ、内面はケズリが施される。15は復原口径24cmになるが、土のような器形になるのか判然としない。19は復原口径21cmの甕上半部で、カマドからの出土ではあるが二次加熱による変色は窺えない。18は甑の把手周辺の胴部で、外面はナデが施される。22～24は口径4～5cm、器高3cmの手捏ね土器である。

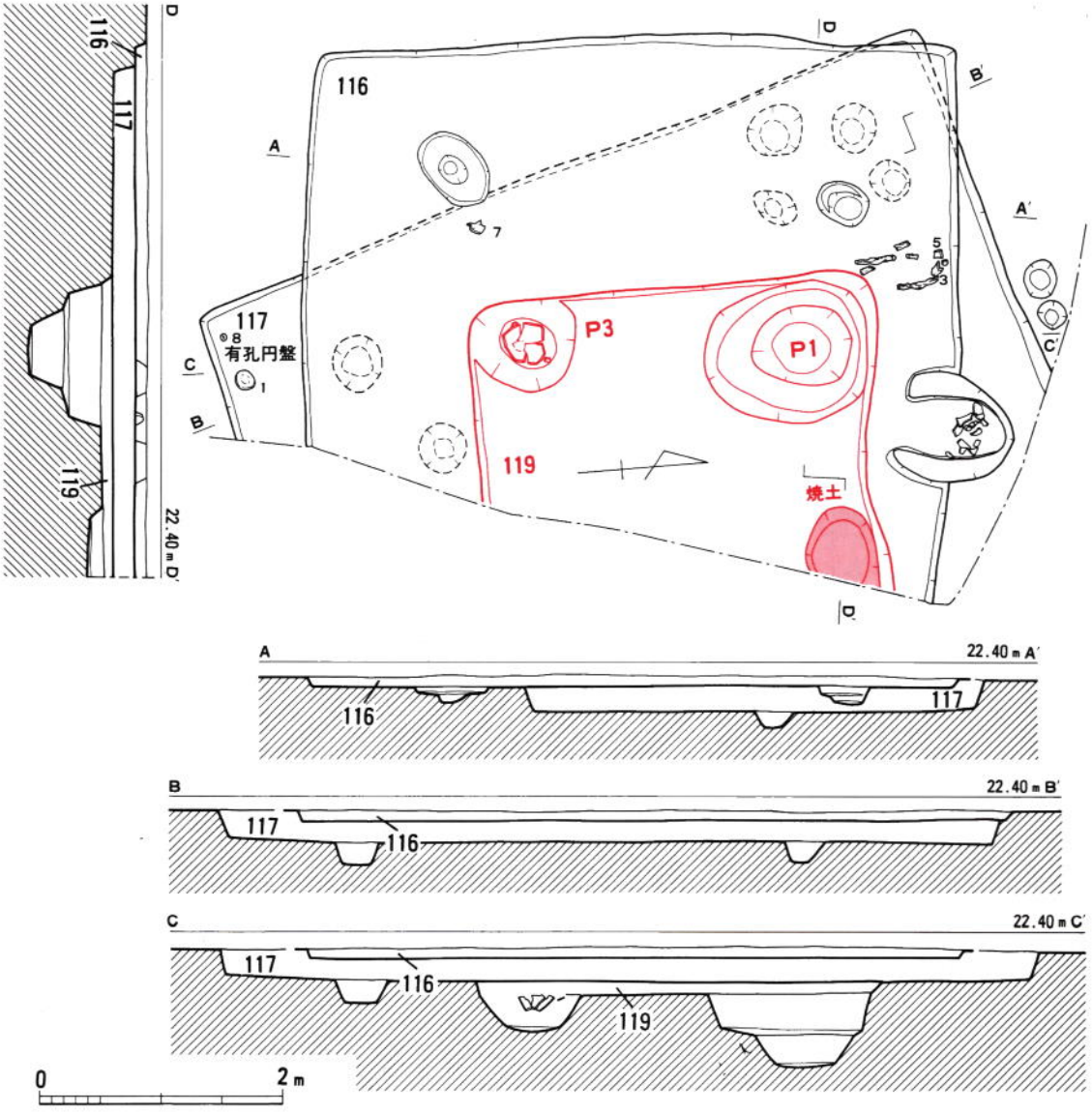
20は復原口径14cmの須恵器坏蓋、21は復原口径12cmの須恵器坏身である。

土製品（第145図25）滑車形の土製品で、長軸に5.1cm、中央部径2.1cmを測る。全体に指頭圧痕が明瞭に残る。

石製品（第189図11）第189図11は蛇紋岩のようにも見えるがおそらくは滑石製の紡錘車で、径5.4cm、厚さ1.3cm、中央孔の径は上部が10mm、下部が8mmを測る。下部の縁は全体的に摩耗が著しく、また刃毀れ的な微細剥離も多い。

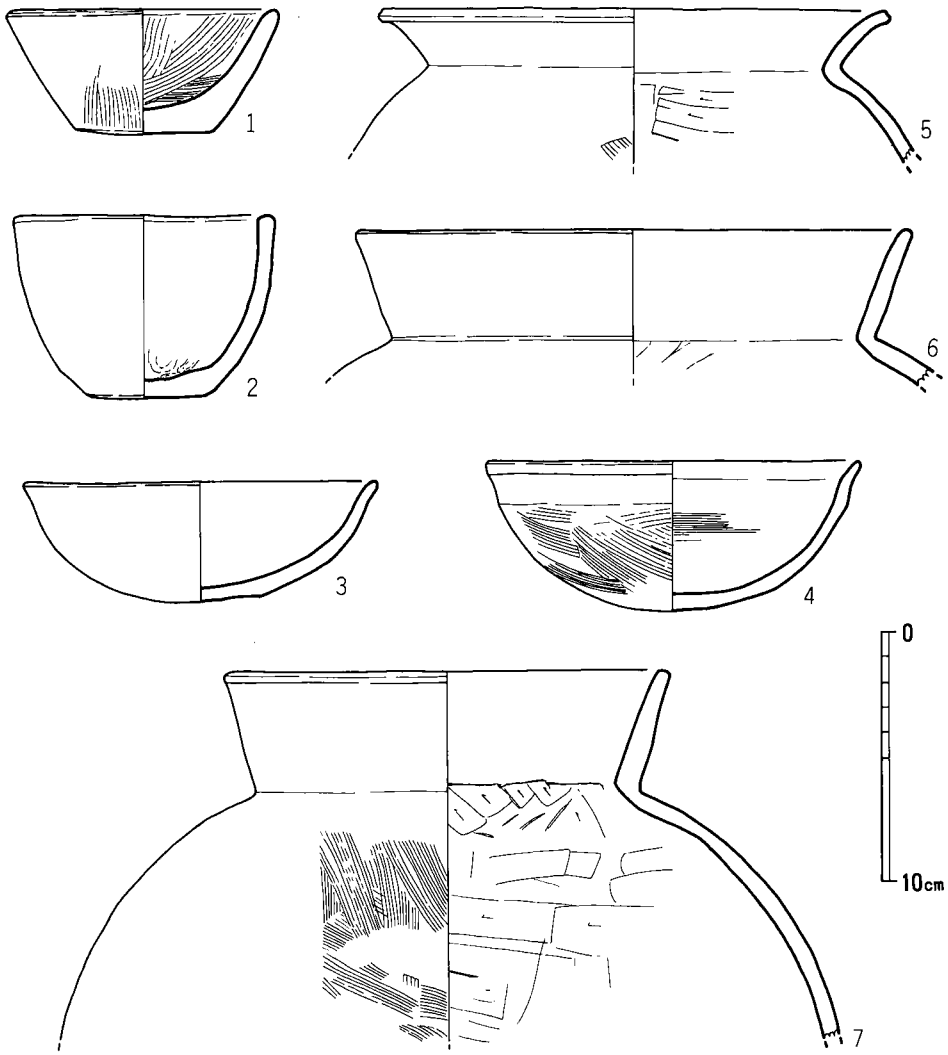
116号竪穴住居跡（図版51・52　第146図）

116号竪穴住居跡は古墳時代の遺構密度が低い調査区東端部Ⅴ9-10区に位置し、117・119号竪穴住居跡を大きく切りながら、本住居跡自体も東側1／3が調査区外に延びる。近接する古墳時代の遺構としては、北7mに101・102号竪穴住居跡が、西2mには7号掘立柱建物跡が、南西2mには118号竪穴住居跡が、南13mには104号竪穴住居跡がある。本住居跡の規模としては南北方向には5.4mが測れるが、東西方向については東側1／3が調査区外にあるため最高



第146図　116・117・119号竪穴住居跡実測図（1/60）

で4.6mまでしか測れない。したがって、平面プランが正方形になるのか長方形になるのか判然としないが、主柱穴やカマドの位置関係から判断すれば、おそらくはやや東西方向に長い長方形を呈していたと考えられる。壁高は最高で12cmほどしかなく、遺構の遺存状態自体は必ずしも良好ではない。したがって、埋土と言えるものはわずかにしかなく、検出段階で大部分は床面が剥き出しの状態であったことがカマドの土層断面図からも判断できる。主柱穴は北西部と南西部のものが２つ検出されたが、深さはいずれも15cm程度とかなり浅い。遺物はパンケー

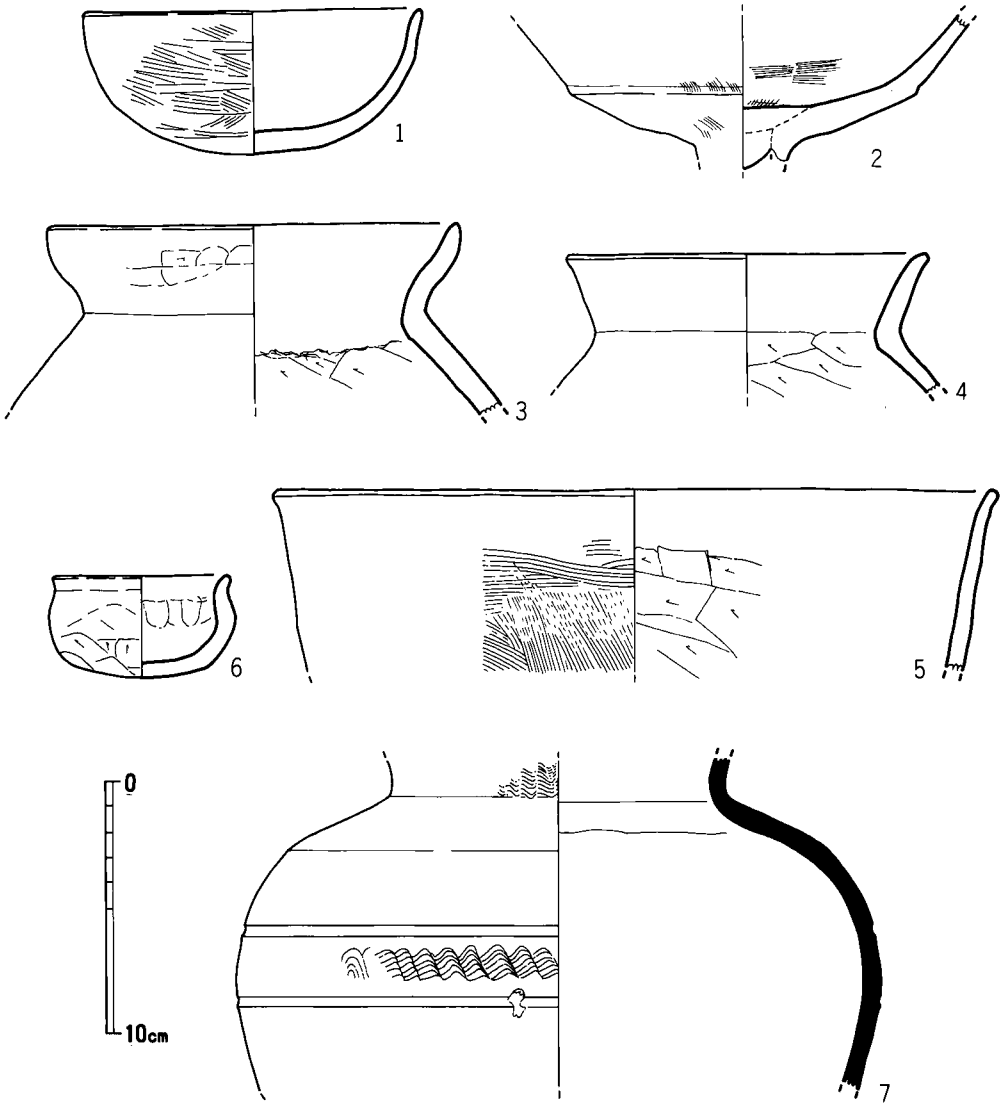


第147図　116号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

ス１箱弱で、図示した土器７点のうち床面からの出土は１・２・５、カマドからの出土は４・６・７である。年代的には５世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

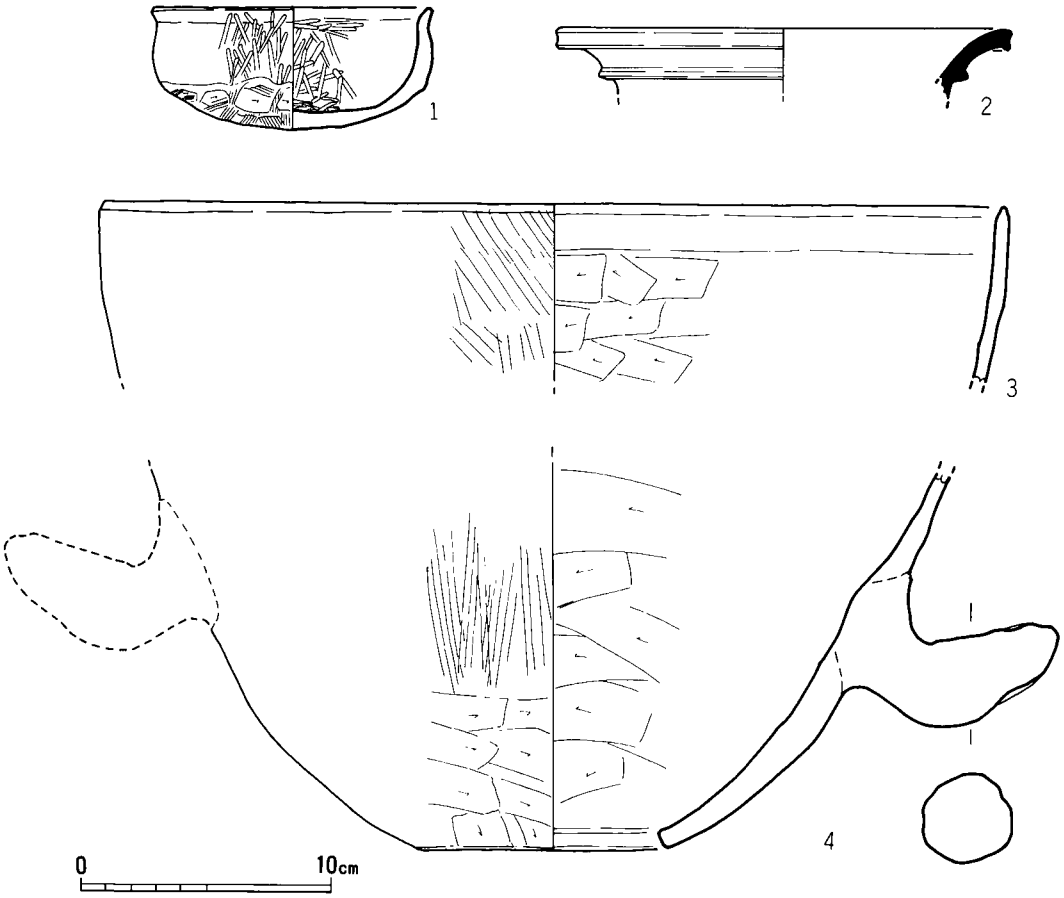
カマド（図版51）カマドは北壁の中央部に設置されるが、全体のほぼ１／２が住居跡の外へ突出するように作られている。この部分はまず95×95cmの範囲で15cmほど掘り下げられ、そこに褐色砂質土を埋め込んで基礎とした上で、黄褐色土によって袖を作っている。火床や支脚は焚き口からかなり遠いのが特徴的である。支脚の周辺から土器が纏まって出土したは、甕と坏で甑はない。

土器（第147図１～７）１は復原口径11cm、器高５cmのミニチュアの鉢で、器面調整は内外



第148図　117号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

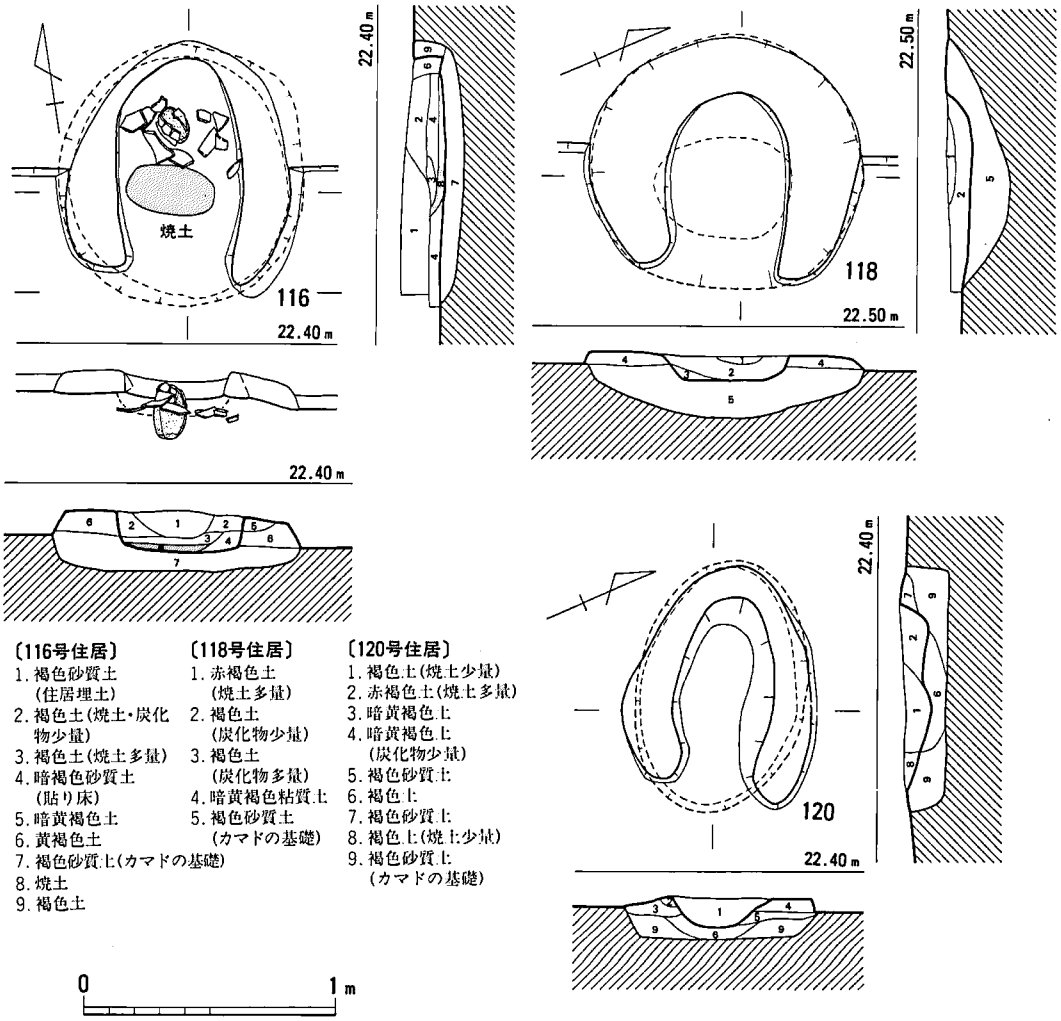
面ともにハケ。2も復原口径10cm、器高7cmのミニチュアの鉢で、内外面ともにナデ。3は復原口径3cm、4は15cmの坏で、3は摩滅により器面調整不明。4は内外面ともにナデ。5～7の復原口径は順に19cm、22cm、18cmを測る。5・6については摩滅により外面の器面調整は不明だが、7の外面にはハケが、内面にはケズリが施され、口縁部から頸部にかけてはナデられる。



第149図　119号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

117号竪穴住居跡（図版52　第146図）

117号竪穴住居跡は古墳時代の遺構密度が低い調査区東端部Ｖ９-10区に位置し、119号竪穴住居跡を大きく切るが、116号竪穴住居跡には逆に大きく切られる。近接する古墳時代の遺構としては、北７ｍに101・102号竪穴住居跡が、西２ｍには７号掘立柱建物跡が、南西２ｍには118号竪穴住居跡が、南13mには104号竪穴住居跡がある。本住居跡も東側のほぼ１／２が調査区外に出るため、南北方向については6.4mが測れるが、東西方向については最高で4.5mまでしか測れない。したがって、カマドも検出できなかったことから、平面プランが正方形になるのか長方形になるのか判然としない。壁高は最高で30cmになるが、116号住居跡に大きく切られるためにこの数値が得られるのは北壁と南壁の極く一部しかない。確実に貼り床と言える面を確認できないままに地山に至ってしまったが、ここまで掘り下げなければ主柱穴は見つけられなかった。床面の北西部からは80×60cmの範囲で炭化材や炭化物の広がりが比較的大きな土



第150図　116・118・120号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

器片と纏まって出土したが、その性格については不明。主柱穴は北西部と南西部の２つが検出されたが、他の２つは調査区外にあると見られる。検出された主柱穴については径40cm、深さ25cmと比較的小さい。カマドはおそらく北壁に設置されたと推定されるが、焼土や掘りかた等の痕跡さえも確認できなかった。遺物はパンケース１箱弱と少なく、第148図のうち床面からの出土は１～３・５・７である。年代的には５世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

土器（第148図１～７）１は復原口径13cm、器高５cmの坏で、器面調整は外面がハケ、内面がナデである。２は高坏の坏部で、屈曲部には緩やかではあるが段がつく。この屈曲部の周辺にだけ内外面ともにハケが施される。３は復原口径16cm、４は14cmの甕で、外面についてはいずれも摩滅により器面調整が不明である。５は復原口径28cmの甑で、口縁部は内外面ともにナ

デられるが、胴部では外面にハケが、内面にはケズリが施される。6は復原口径7㎝のミニチュアの鉢で、外面の底部にはケズリがわずかに窺える。

7は復原最大腹径25㎝の須恵器甕で、胴部には2本の沈線文とその間に櫛描きの波状文が、頸部には波状文だけが施される。器面調整については、外面胴部下半にヘラケズリが見られるが、他は回転ナデでタタキの痕跡は窺えない。

石製品（第190図8）径2.1㎝、厚さ3㎜の蛇紋岩製の有孔円盤で、中央部には4㎜の距離をおいて径1.5㎜の貫通孔が2つ穿たれる。全体的に研磨され、側面には7～8㎜単位の面が作られる。

118号竪穴住居跡（図版53　第151図）

118号竪穴住居跡は古墳時代の遺構密度が低い調査区東端部T-U10区に位置し、近接する同じ古墳時代の遺構としては北東2ｍに116・117・119号竪穴住居跡が、北1ｍに7号掘立柱建物跡が、西6ｍには105号竪穴住居跡が、南東11ｍには104号竪穴住居跡がある。本住居跡自体は南東部1／3ほどが大きく調査区外に広がるが、平面プランについては3.6×2.8ｍの比較的小さな長方形を呈するということがわかる。壁高は著しい削平により最高で4㎝しかなく、ほとんど床面が剥き出しの状態であったため、遺物の出土は土師器の小破片が数点出土しただけで、図示できるものはなかった。主柱穴は径30㎝、深さ15～25㎝のものが3つ検出されたが、限られた床面積の中で有効な空間利用をするためにいずれもかなり隅に作られている。

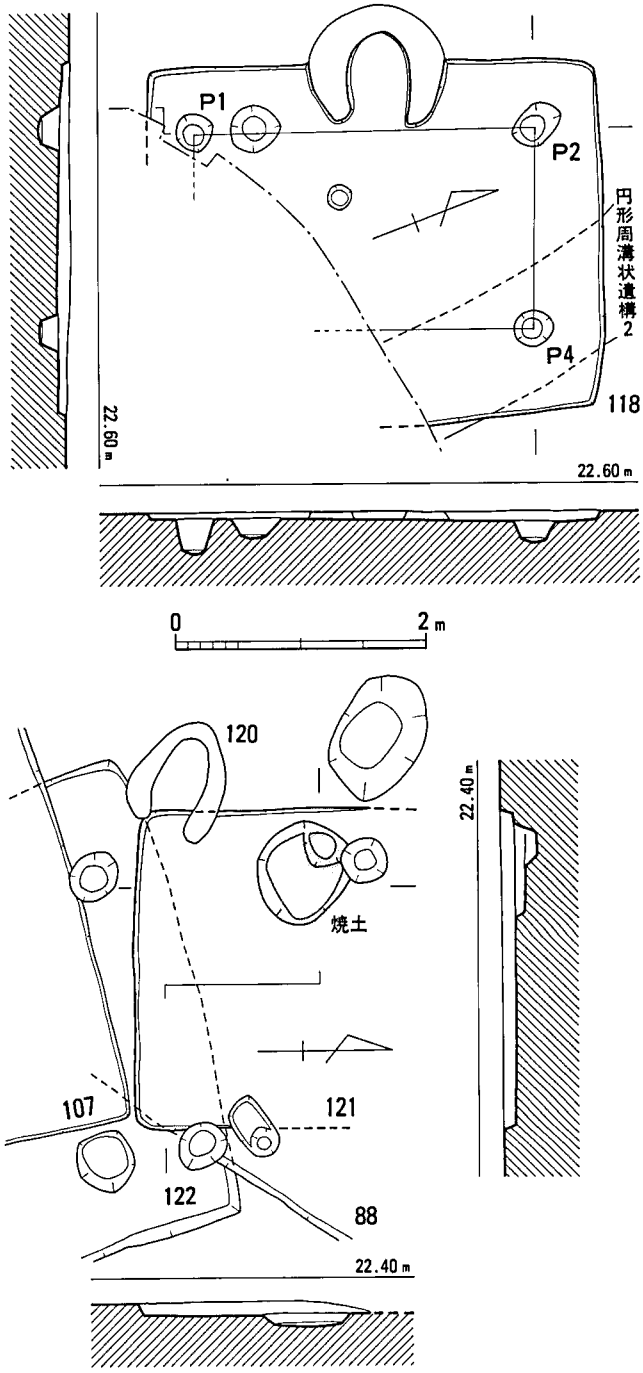
カマド（第150図）カマドは西壁の中央部に設置されるは、その1／2は本住居跡の外に突出する。設置に際しては、まず112×104×22㎝の断面ボウル状の掘り込みを行ない、褐色砂質土を詰めてこれを基礎とする。袖もわずかに残るが、やはり削平が著しく火床や支脚は認められなかった。

119号竪穴住居跡（図版52　第146図）

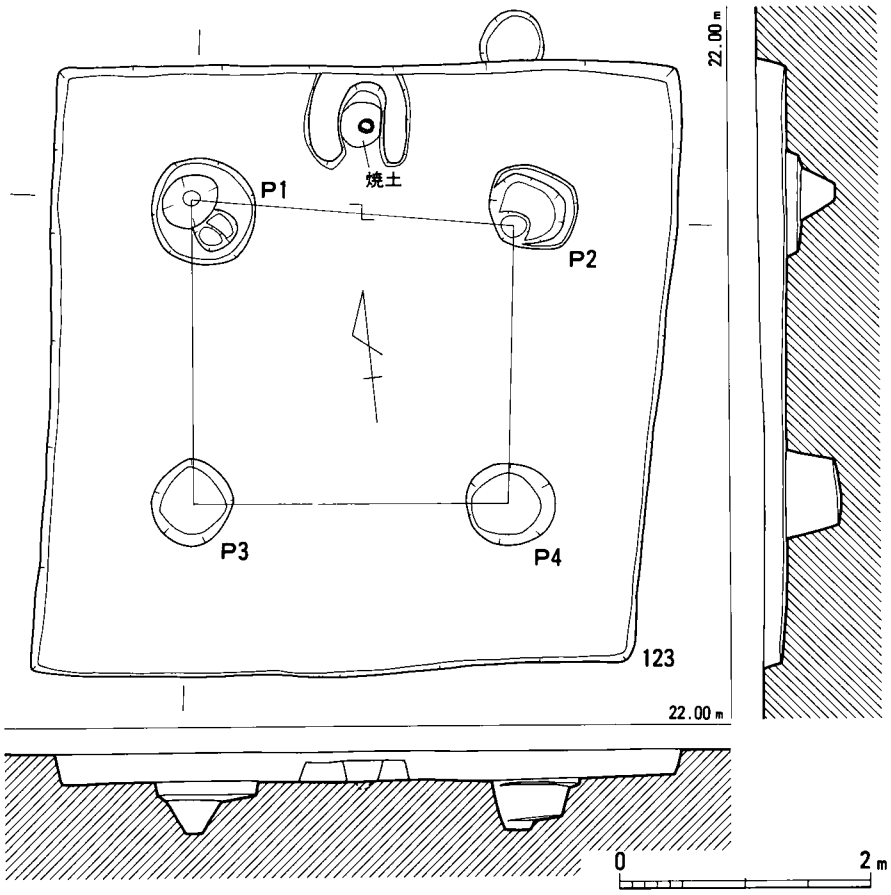
119号竪穴住居跡は古墳時代の遺構密度が低い調査区東端部Ｖ9-10区に位置し、116・117号竪穴住居跡に全体が大きく切られる。近接する古墳時代の遺構としては、北7ｍに101・102号竪穴住居跡が、西2ｍには7号掘立柱建物跡が、南西2ｍには118号竪穴住居跡が、南13ｍには104号竪穴住居跡がある。本住居跡も東側のほぼ1／3が調査区外に出るため、南北方向については3.3ｍが測れるが、東西方向については最高で2.5ｍまでしか測れない。しかし、カマドの痕跡が検出できたことから、平面プランが長方形になることは間違いない。現存する壁高は最高で10㎝しかないが、本住居跡を切った116・117号住居跡の検出面から測れば50㎝ほどになる。主柱穴については、北西隅と南西隅からそれぞれに壁に接すように検出されたが、いずれもかなり大きい。北西隅のものについては深さ60㎝だが掘りかたが異常に大きく、あるいは柱を抜き取る時に大きく掘り込んだものであるかもしれない。南西隅については深さ40㎝で、

底面から20cmほどのところで浮いた状態で、甑（第149図４）の胴部下半から底部にかけてがあたかも据えられるように出土した。この土器は床面から出土した甑の口縁部（第149図３）と接合こそはしないが、明らかに同一個体である。本住居跡の北壁の東端部では、深さ14cmほどの浅い落ち込みが見られたが、埋土に焼土が混じることと、この部分の壁がわずかに突出することから、これがカマドの痕跡という結論に至った。117号住居跡を掘り込む時にも削平されたのであろうが、袖や火床や支脚の痕跡さえも確認できず、カマド廃絶時に取り壊され掃除したものと考えられる。遺物は大きめのポリ袋１枚程度。第149図に図示した４点のうち、１・２は埋土から、３は床面から、４は南西隅の主柱穴からの出土で、５世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

土器（第149図１～４）１は復原口径11cm、器高５cmの坏で、外面の底部にはケズリ後にハケが施されるが、それより上部と内面全体についてはミガキが施される。３は復原口径36cm、４は復原底径11cmの甑で、器面調整は外面の底部付近にケズリが、それより上部はハケが施される。内面はすべてケズリ。器高がどれくらいになるか不明だが、把手がかなり底部に



第151図　118・120・121号竪穴住居跡実測図（1/60）



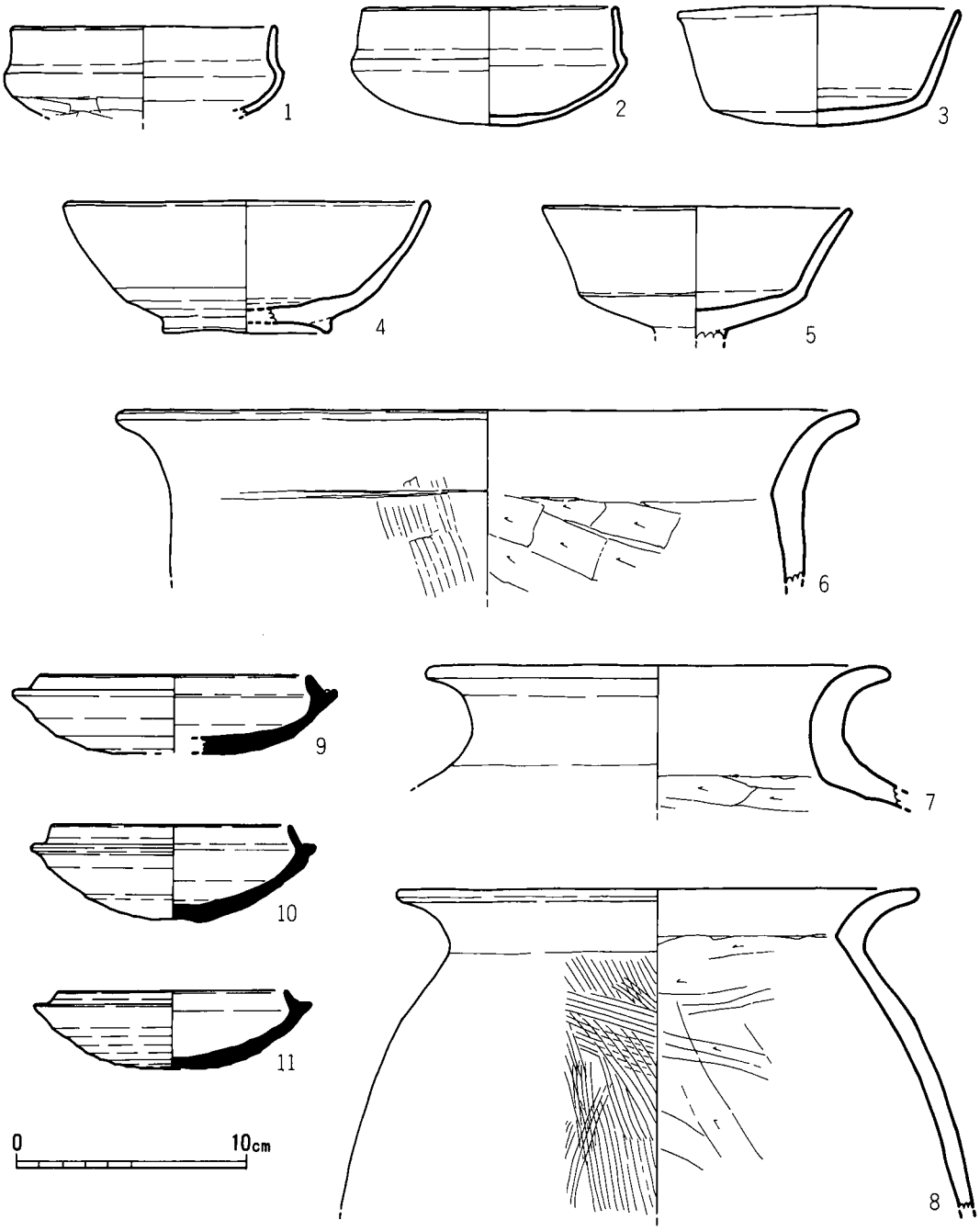
第152図　123号竪穴住居跡実測図（1/60）

近い部分に取り付けられているので、実測図のように25cm程度の高さにしならない寸胴形と考えられる。

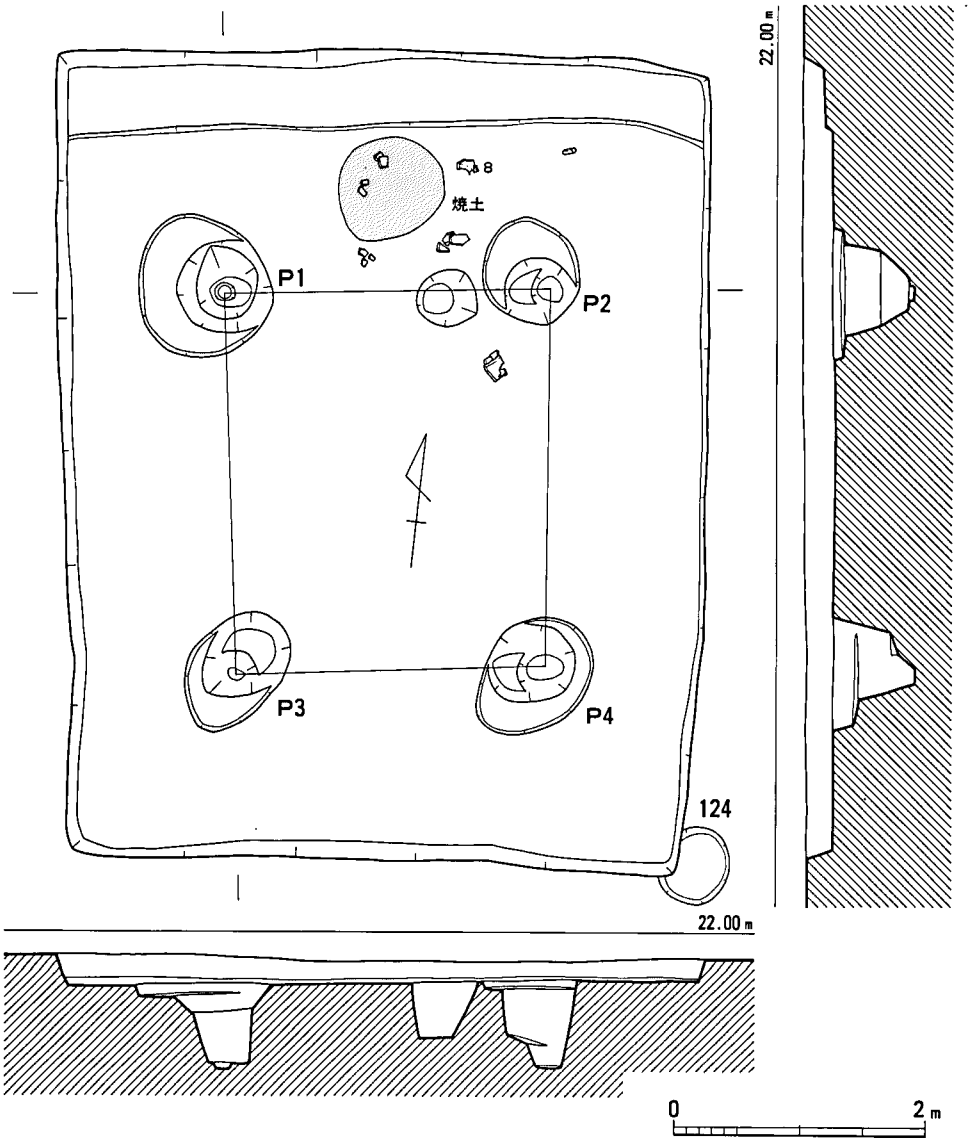
2は復原口径18cmの須恵器甕口縁部で、内外面ともに調整はナデ。

120号竪穴住居跡（図版53　第150・151図）

120号竪穴住居跡は削平によりその大部分が失われ、わずかにカマドだけが検出できた住居跡である。古墳時代の遺構が集中する調査区中央部東寄りのQ7－8区に位置し、121号竪穴住居跡を切る。また、切り合い関係から121号竪穴住居跡が切る68号竪穴住居跡も切っていることになる。東10mには90号竪穴住居跡が、南西6mには108号竪穴住居跡が近接する。カマド自体は焚き口の方位から西壁に設置されていたようである。設置に際しては、まず100×68×9cmの楕円形の掘り込みが行なわれ、これに褐色砂質土や褐色土を詰め込んで基礎としている。



第153図　123号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

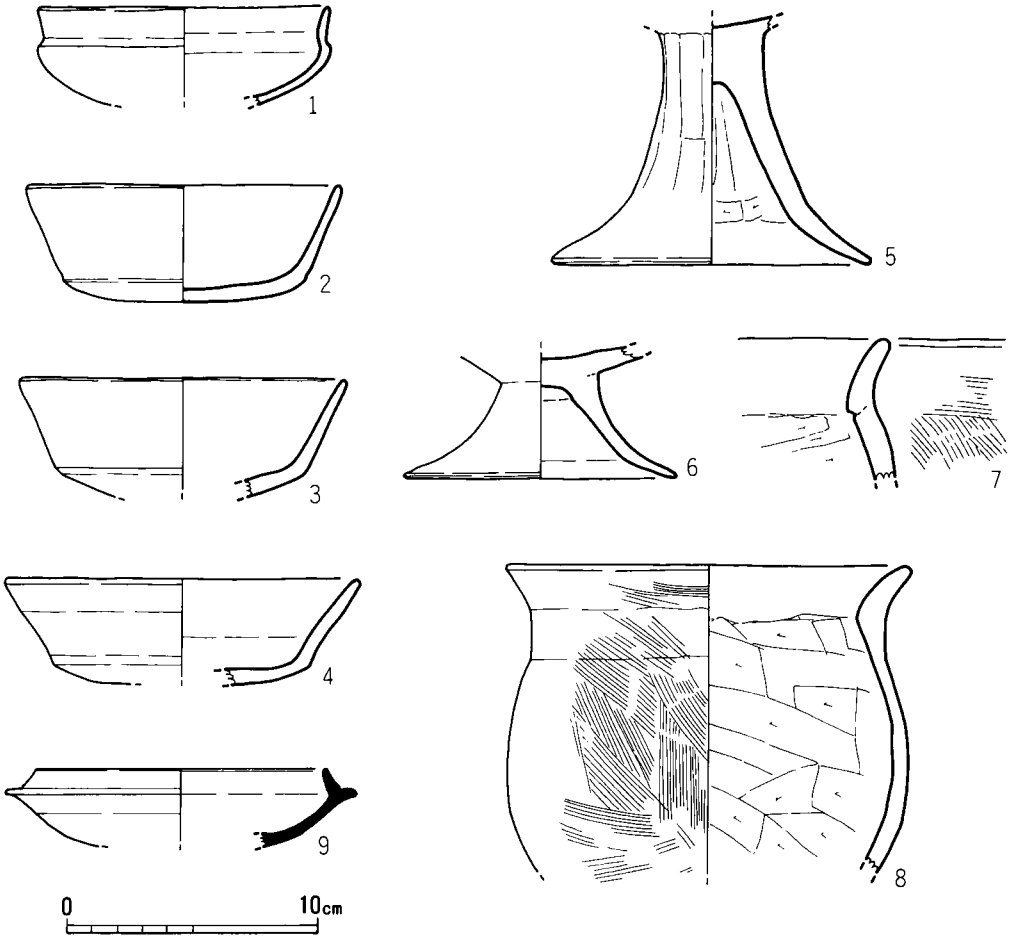


第154図　124号竪穴住居跡実測図（1/60）

内部からは遺物の出土はなく、また支脚や火床も確認できていない。ただ、設置方位が西になるカマドは本遺跡では奈良時代のものに限られるだけに、おそらくはその年代に所属するものと推定される。

121号竪穴住居跡（第151図）

121号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が集中する調査区中央部Q7－8区に位置し、68号竪穴住



第155図　124号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

居跡は切るが、カマドしか遺存しない120号竪穴住居跡に切られる。周辺には東８ｍには90号竪穴住居跡が、南西７ｍには108号竪穴住居跡が近接する。本住居跡も削平が著しく、南壁の周辺がわずかに残るだけであるが、西壁に近接する80×70×６㎝の浅い落ち込みの埋土には焼土が少量含まれており、あるいはこれがカマドの痕跡かと考えられる。そうすると東西方向には2.5mが正確に測れるだけに、カマドが西壁の中央部に設置されていたとするなら南北方向は約2.5mほどであったと推測することができ、ほぼ正方形に近い平面プランであったと考えられる。壁高は最高で10㎝。主柱穴か一つも確認できなかった。

123号竪穴住居跡（図版54　第152図）

123号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が集中する調査区中央部Ｍ６－７区に位置し、他の遺構

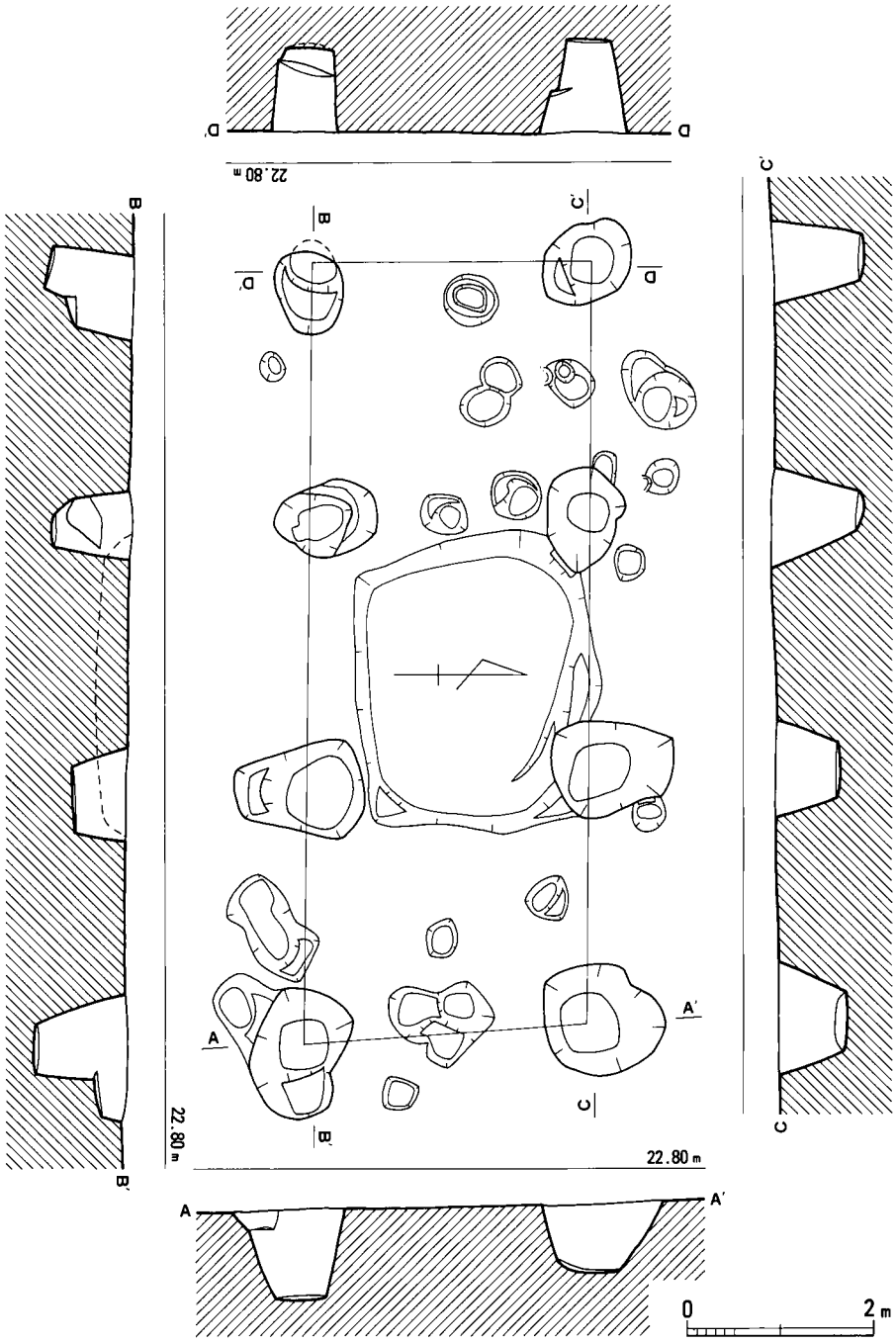
とは切り合い関係を有さない。近接する古墳時代の遺構としては、東６ｍに114号竪穴住居跡が、北４ｍには98号竪穴住居跡が、北西１ｍには124号竪穴住居跡がある。平面プランは4.8×4.8mの正方形で、壁高は最高で24cm。４つの主柱穴はいずれも径60～80cm、深さ40～45cmを測り、わずかに歪んだ平面プランに対応した位置関係をなす。本住居跡では主柱穴以外に床面から柱穴を検出することができず、また貼り床も確認できなかった。北壁中央部に設置されたカマドは、火床となる焼土や若干の遺物（第153図１・８）は検出できたものの、袖は残ってなく支脚も抜き取られた状態であった。遺物はポリ袋１枚程度と少なく埋土からの出土であった。第153図４については本住居跡の検出時点で採集したものであり、おそらくは本住居跡に伴わない。

土器（第153図１～11）１～８は土師器。１・２ともに復原口径11cmの坏で、２の外面には黒斑が窺える。３は口径12.2cm、器高5.1cmで、器面調整は全面ナデ。３は本住居跡に混入したものと考えられるが、復原口径16cm、器高６cmで、高台の径は７cmを測る。５は高坏の坏部で、復原口径は13cm。摩滅により調整不明。６は復原口径32cmの甕で、外面の頸部には沈線文が施されるが、意図的なものではなく、ハケ工具による偶発的なものと考えられる。７は復原口径20cm、８は23cmの甕で、７の外面はナデ調整。

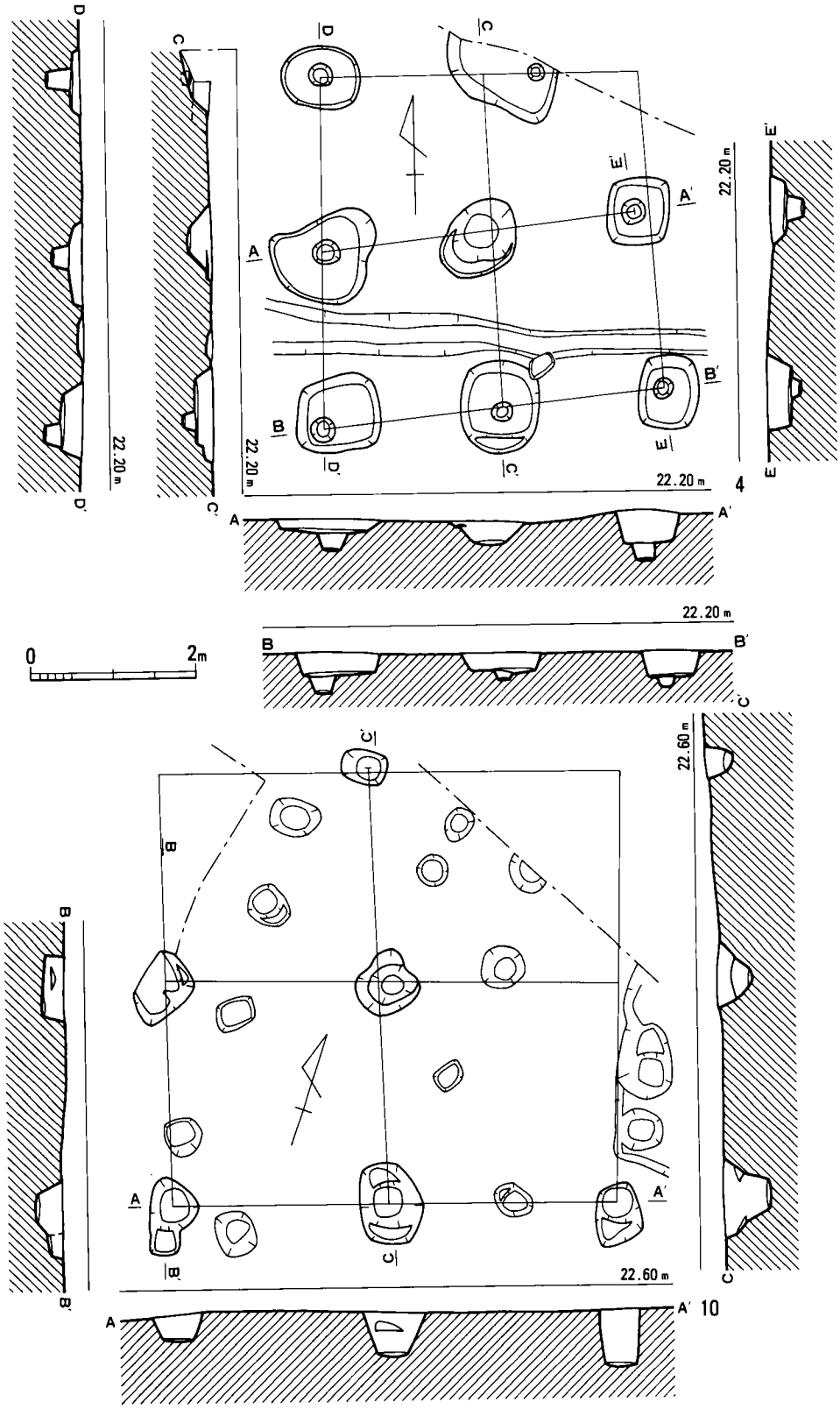
９～11は須恵器の坏身で、復原口径は順に12cm、11cm、10cmを測る。いずれも底部外面には回転ヘラケズリが施される。

124号竪穴住居跡（図版54　第154図）

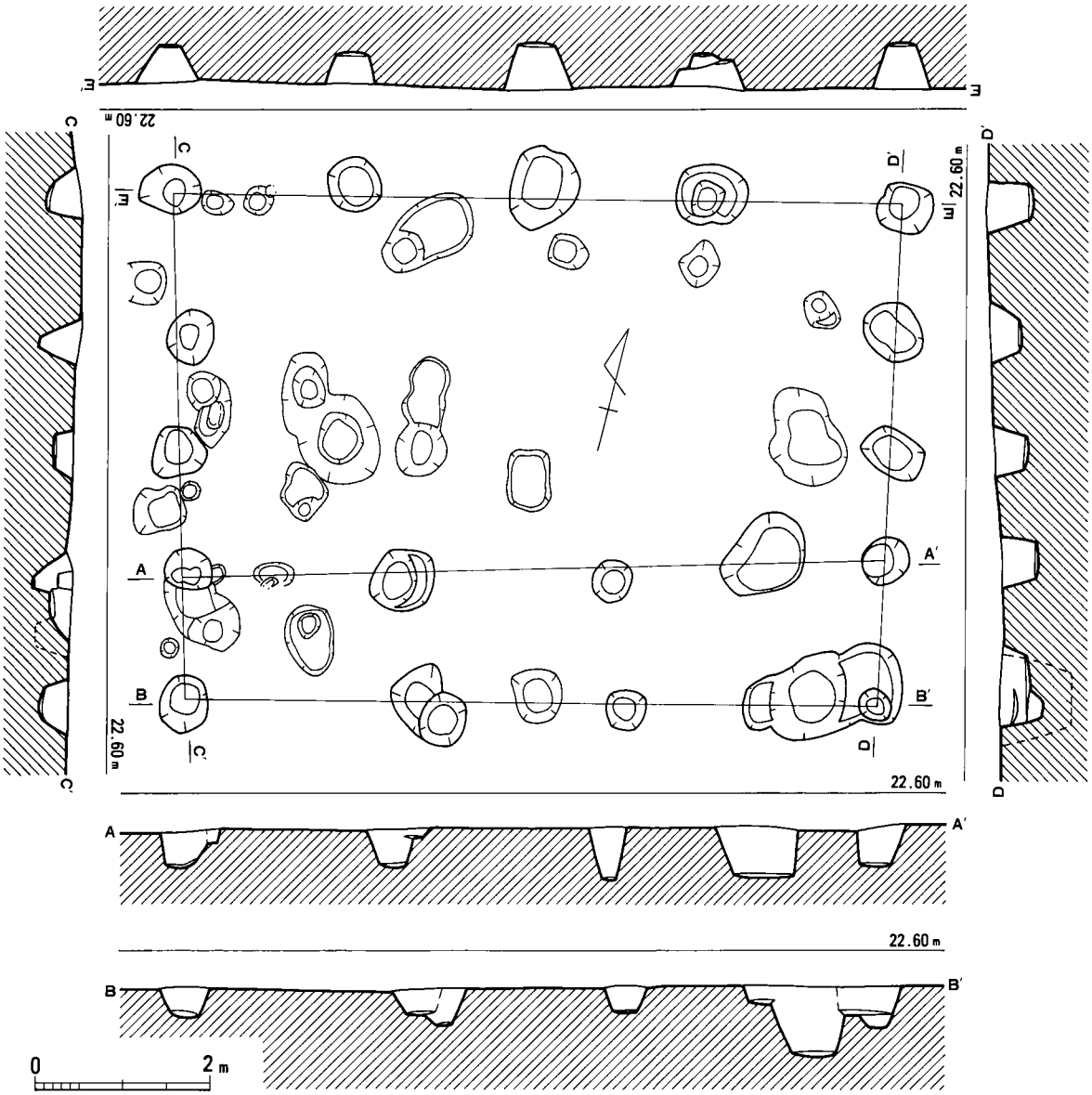
124号竪穴住居跡は古墳時代の遺構が集中する調査区中央部L-M６区に位置し、他の遺構とは切り合い関係を有さない。近接する古墳時代の遺構としては、南東１ｍに123号竪穴住居跡が、東24ｍには88･98号竪穴住居跡が、北１ｍには77号竪穴住居跡が、北西２ｍには54号竪穴住居跡がある。平面プランは6.4×5.1ｍの正方形で、壁高は最高で21cm。北壁には床面から７cmのところに幅40～50cmの地山を削り出したテラスがつくが、この用途は明確でない。４つの主柱穴はいずれも径１ｍ程度で深さ10cmほどの掘りかたを掘り下げた後に、径70cm、深さ50cmにさらに掘り下げる。カマドはすでに破壊されていたのか、袖や支脚などはまったく確認できなかったが、北壁中央部に90×80cmの範囲で焼土が広がっていたため、ここにカマドがあったものと考えられる。ただし、この焼土の広がりは褐色土に混入するような状態であって、火床のように硬化したものではない。また、この北壁には先述したようにテラスが付いているが、このテラスには乗らないような状態で、すなわち壁から60cmほど離れたような状態で焼土が検出されたため、はたしてカマドとテラスとの関係を解明することができなかった。遺物はカマド周辺部から比較的纏まって出土したが、それでも全体でパンケース１箱弱と少なく、また接合資料も少なくて図化できるものは限られた。第155図では９点を図示したが、床面から出土したものは８・９の２点、７がカマドの残存と考えられる焼土の中からの出土で、他は埋土に



第156図　1号掘立柱建物跡実測図（1/80）



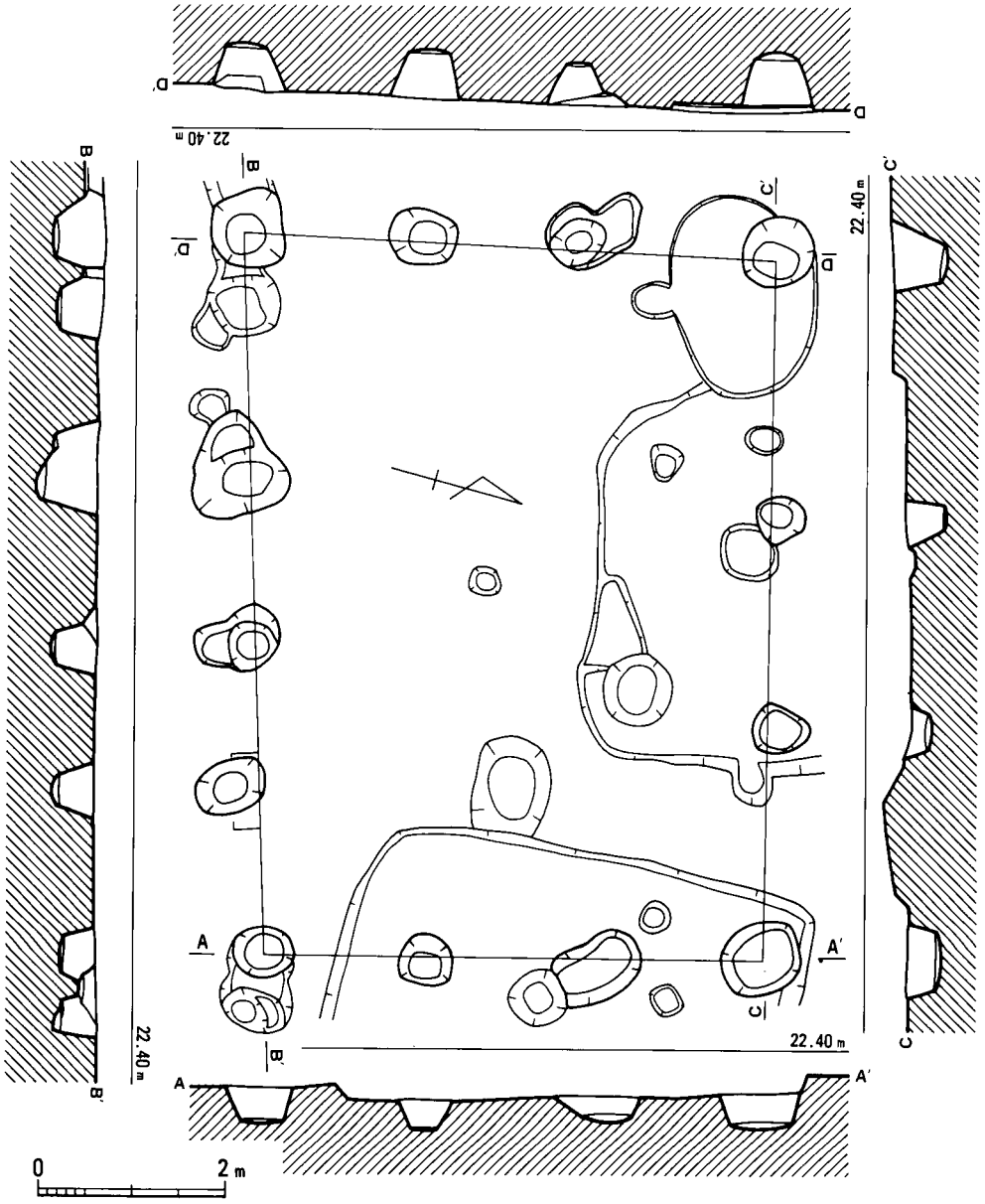
第157図 4・10号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第158図　8号掘立柱建物跡実測図（1/80）

含まれていた。

土器（第155図1～9）1～4は復原口径12～13cmの坏で、いずれも摩滅が著しく器面調整不明。5の高坏脚部は復原裾径が12cmで、内外面ともにケズリ。6も器高の低い高坏脚部になろうが、摩滅により調整不明。7は甕の口縁部で、器面調整は外面がハケ、内面がケズリ。8は復原口径16cmの甕で、器面調整は外面がハケ、内面がケズリで、外面胴下半には二次加熱に



第159図　9号掘立柱建物跡実測図（1/80）

より変色。

9は復原口径12cmの須恵器坏身で、外面には全体に灰被りが見られる。

3．掘立柱建物跡

古墳時代に属する掘立柱建物跡は８棟を確認した。平面プランは正方形と長方形の両方が見られ、いずれも軸線がほぼ真北に向く。

１号掘立柱建物跡（図版55　第156図）

E-F３区に位置し、弥生時代の19号竪穴住居跡と重複する。梁行１間（3.08m）×桁行３間（8.44m）の東西棟の建物跡で、桁行の柱間平均は2.76mである。柱穴は径90～122㎝、深さは75～110㎝を測る。柱穴の掘りかたは不整円形を呈し、テラスを有する柱穴もみられることから柱を掘り上げたことが窺われる。桁行方位はE-1°-Sを示す。

前回、２号建物跡は１号方形竪穴に付随する１×１間の建物跡として報告したが、逆に19号竪穴住居跡が１号建物跡～方形竪穴に付随する施設と考えた場合、１号方形竪穴は２号建物跡に付随する施設と考えられ、１号建物跡同様、１×３間の建物跡になろう。また、身舎が１×３間で、かつ柱間間隔が広いことから弥生時代の可能性がある。

４号掘立柱建物跡（図版55　第157図）

L４－５区に位置し、弥生時代の96号竪穴住居跡は切るが５号溝には切られる。梁行２間（4.13m）×桁行２間（4.25m）の総柱建物跡で、柱間平均は梁行側が1.98m、桁行側が2.15mを測る。柱穴の掘りかたは隅丸方形を呈し、一辺75～101㎝、深さは10～25㎝。また径20㎝程の柱痕を確認。

５号掘立柱建物跡（図版56　第55図）

K５－６区に位置し、古墳時代の55竪穴住居跡の埋土上面で検出した。梁行２間（2.10m）×桁行２間（2.38m）の総柱建物跡で、桁行を南北に取る。梁行の柱間平均は1.05m、桁行の柱間平均は1.2mで、柱穴の掘りかたは円形を呈し、径25～42㎝、深さは40～60㎝の規模である。また、中央の柱穴の深さは30㎝と他の柱穴に比して浅め。

６号掘立柱建物跡（図版56　第160図）

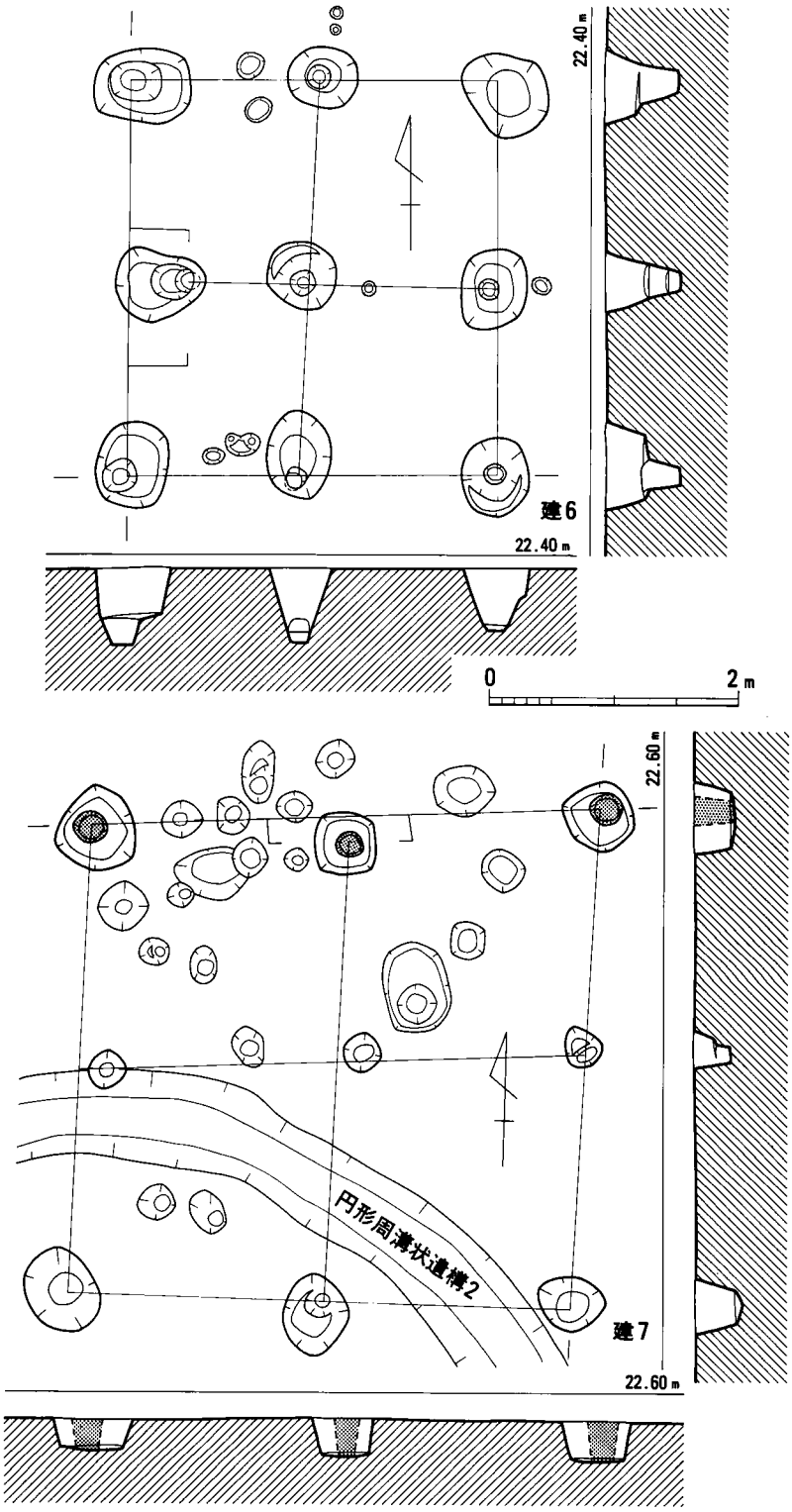
６号掘立柱建物跡は古墳時代以降の遺構が希薄な調査区東端部南寄りU12区に位置し、近接する古墳時代の遺構としては104号竪穴住居跡が東３ｍにあるくらいで、周辺は弥生時代の遺構の密集地である。２×２間の総柱建物で梁行3.2m×桁行3.0mの規模を有し、ほぼ真北に軸線が乗る。柱穴はいずれも径60～70㎝で、深さは50～60㎝になるが、深さ30～40㎝のところで１度段が付く。出土遺物はほとんどなく年代の決め手に欠けるが、構造的に古墳時代以降に

属するものであろう。

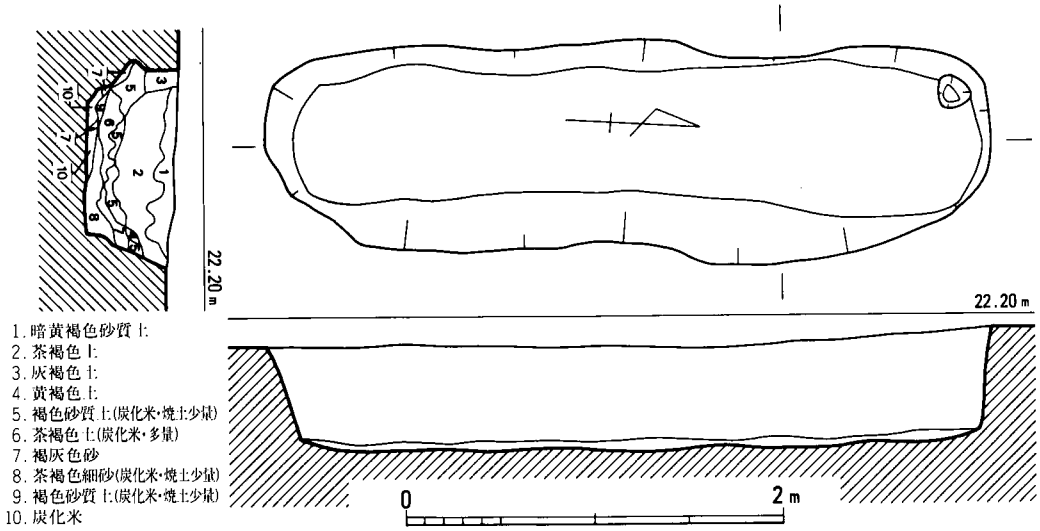
7号掘立柱建物跡

（図版57　第160図）

7号掘立柱建物跡古墳時代以降の遺構が希薄な調査区東端部北寄りU-V 9-10区に位置し、同じ古墳時代の遺構として近接するものには、東2mの116・117・119号竪穴住居跡や、南1mの118号竪穴住居跡や、南東5mには105号竪穴住居跡がある。2×2間の総柱建物で梁行4.1m×桁行3.8mの規模を有し、ほぼ真北に軸線が乗る。柱穴は北側と南側の6つはいずれも径60～70cmであるのに対して、中位の3つは径30cmと小さい。深さはすべて25～30cmと浅く、北側の3つの柱穴については径20cmの柱痕が確認できた。出土遺物はほとんどなく年代の決め手に欠けるが、弥生時代の2号円形周溝状遺構を切っていることと、構造的に古墳時代以降に属しよう。



第160図　6・7号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第161図　32号土坑実測図（1/40）

8号掘立柱建物跡（第158図）

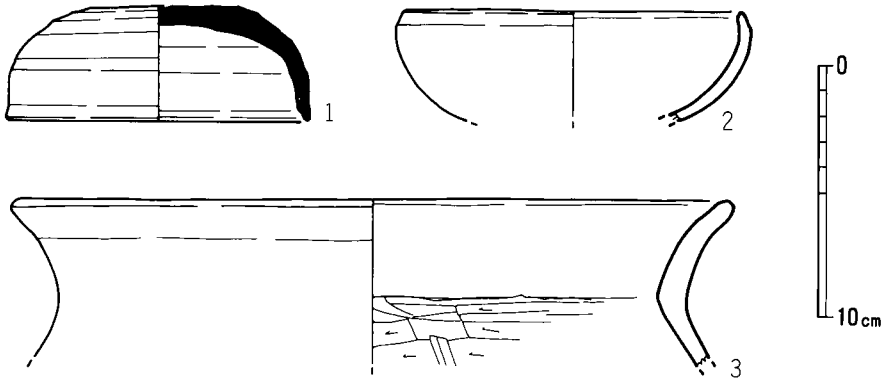
D–E 3－4区に位置する。身舎は3間（4.37m）×4間（8.36m）の東西棟で、南側に廂を設けている。西側梁行の柱間平均は1.45mで、北側桁行の柱間平均は2.08mである。柱穴の掘りかたは円形を呈し、径45～80cm、深さは40～55cmを測る。柱穴内からは土器が出土しているが、実測に耐えない。

9号掘立柱建物跡（第159図）

G 3－4区に位置し、弥生時代の25・28号竪穴住居跡を切っている。梁行は3間（5.64m）であるが、桁行は北側が3間（7.45m）で、南側は4間（7.65m）と変則的な建物跡である。柱間平均は梁行側が1.82mで、桁行は北側が2.48mで、南側は1.91mである。柱穴の掘りかたは円形を呈し、径50～80cm、深さは20～40cmを測る。柱穴内からは土器が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。

10号掘立柱建物跡（第157図）

G 2－3区に位置し、弥生時代の23号竪穴住居跡と重複する。一部柱穴を確認し得ていないが、梁行2間（5.27m）×桁行2間（5.35）の総柱建物跡と考えられる。柱穴の掘りかたは楕円形を呈し、長径55～10cm、深さは25～72cmとばらつきがみられる。また、南側列にはテラスが付くことから柱を抜き取ったものであろう。柱穴内から土器が出土しているが、いずれも小片で図示を割愛した。



第162図　32号土坑出土土器実測図（1/3）

4．土　坑

32号土坑（図版58　第161図）

32号土坑は調査区中央部の東寄りＰ９区に位置し、古墳時代の66号竪穴住居跡を切る。この一帯は古墳時代の遺構が比較的希薄な地区であるが、近接する遺構としては北東６ｍに108号竪穴住居跡が、北西７ｍには87号竪穴住居跡がある。平面プランは3.9×1.1ｍの長軸がほぼ真北に乗る長楕円形で、深さは最高で56㎝を測る。本土坑の下部、すなわち第５・６・８・９層は底面のほぼ全体に広がるが、この埋土の中には炭化米と焼土が含まれており、中でも第６層は純炭化米層といっても良いほど多量の炭化米が含まれていた。したがって、本土坑が貯蔵穴的機能を有していたとも考えられたが、第６層以外の炭化米は部分的に密集することなく比較的均質に包含されていたことから、あるいは流れ込み的な可能性も否定できず、ここでは調査時点で登録した遺構番号「32号土坑」という名称で位置づけることにした。出土遺物は大き目のポリ袋１枚程度で、ここでは３点を図示したが、いずれも炭化米が包含される第５・６・８・９層からの出土あり、中でも１については関係の状態での出土であった。

土器（第162図１～３）２は復原口径14㎝の土師器坏で、摩滅が全体的に著しく調整不明。３は復原口径29㎝の土師器甕の口縁部で、内面の頸部以下にはケズリが施されるが他はナデ。

１は口径12.1㎝、器高4.5㎝の須恵器坏蓋である。外面天井部には回転ヘラケズリが施され、他は内外面ともにナデ。口縁端部の内面には明瞭な稜を有する段が作られる。

5．土壙墓

調査区の西側に８基検出された。７・10号土壙墓は単独で検出されたが、１号～６号土壙墓は調査区の西端に集中する５号～９号住居跡を取り巻く位置どりをする。

1号土壙墓（図版59　第163図）

調査区西端のA-B2区から検出された隅丸長方形プランの土壙墓で、東側小口部が広く、西側小口部には須恵器の坏蓋・坏身がセットで2個体分と坏身3個体、高坏1個体分が副葬されていた。上面はかなり削平されているが、規模は長辺235cm、短辺中央部で67cm、小口部で東側86cm、西側で67cm、深さ中央で6cmを測る。

土器（第166図1～8）副葬された遺物はすべて須恵器である。1・2は宝珠形の鈕が付く身受けの返りを有す坏蓋で、口径は1が10.6cm、2が10.3cm、器高は1が2.95cm、2が3.18cmを測る。調整手法は天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外回転ヨコナデである。3～7はほぼ同形の小型の坏身で、3は1と、4は2とセットをなすものである。5の外底部には2条のヘラ記号が施されている。調整手法は外底部がヘラ起こしのまま、内面ナデ、体部内外は回転ヨコナデ仕上げである。口径は8.65～9.7cm、器高は3.5～4.85cmを測る。8は高坏の坏部の資料で、体部外面には3条の沈線文が巡っている。調整手法は底部外面カキ目、内面ナデ、体部内外回転ヨコナデである。口径8.9～9.8cmで歪む。

2号土壙墓（図版60　第163図）

調査区西端のA-B2区に位置し、1号土壙墓の北側から検出された長楕円形プランの土壙墓で、長辺146cm、短辺中央で47cm、壁高は18cmを測る。出土遺物なし。

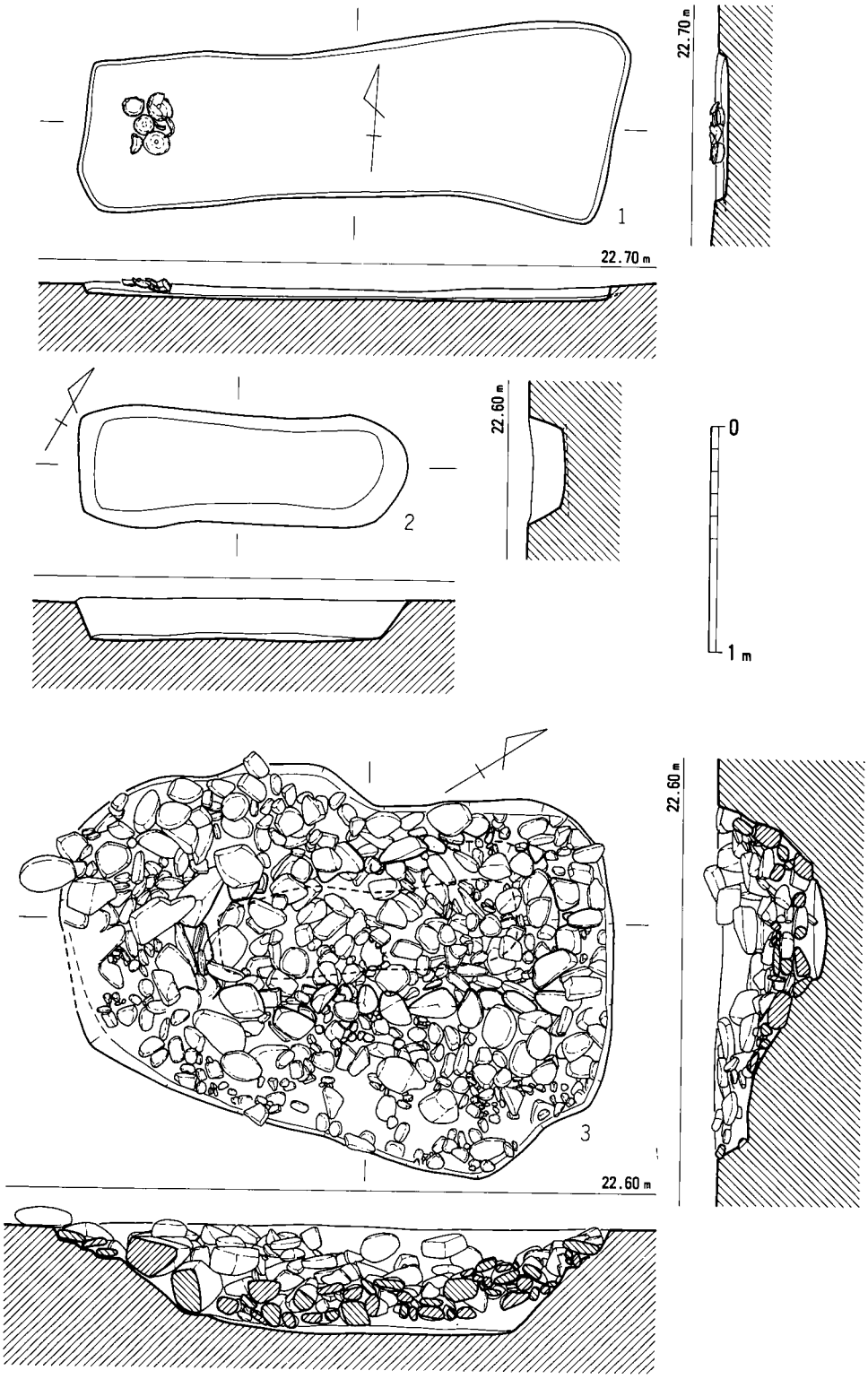
3号土壙墓（図版60　第163図）

調査区西端のD1-2区に位置し、5号竪穴住居跡の北側5mから検出された不整楕円形プランの墓壙内に河原石を集積して長楕円形の槨を作り出した土壙墓で、槨上面の窪み具合からして木蓋が存在した可能性がある。墓壙上面での規模は長辺246cm、短辺160cm、槨内の底面の規模は長辺133cm、短辺36cm、墓壙上面からの深さは46cmを測る。槨内に副葬品等は確認できなかった。

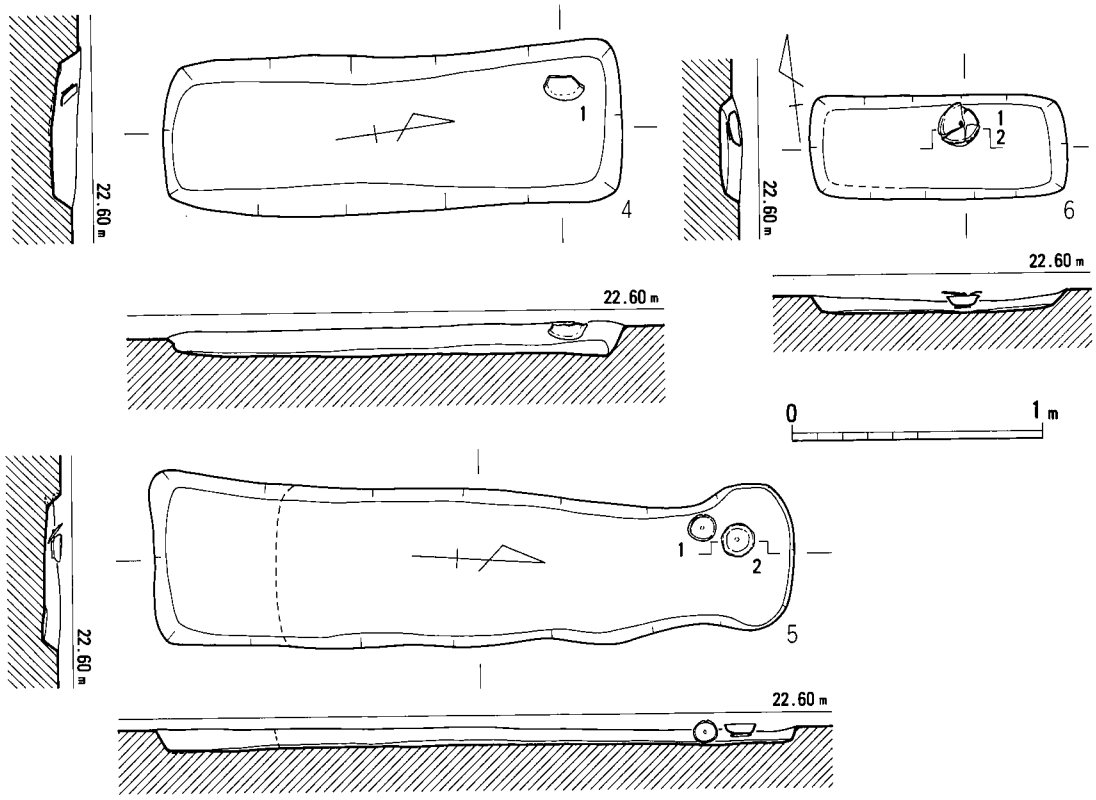
4号土壙墓（図版61　第164図）

調査区西端部のE2区に位置し、8号竪穴住居跡の東4mで検出された。隅丸長方形を呈し、長辺183cm、短辺60～65cmで、北側に幅が広い。深さは18cmを測り、若干北側に下がる。床面は河原石の地山で、凹凸が著しい。土壙墓内の北側西端より黒色土器の椀が浮いた状態で出土した。本来は枕上に供献されていたものであろう。

土器（第166図1）黒色土器の高台付椀。深みのない器形で、口唇部を外側へ広げる。高台は幅広で低く、外に張り出す。外面の器面調整はヘラミガキ。口径15.9cm、器高5.2cm、高台径6.5cmを測る。



第163図　1～3号土壙墓実測図（1/30）



第164図　4～6号土壙墓実測図（1/30）

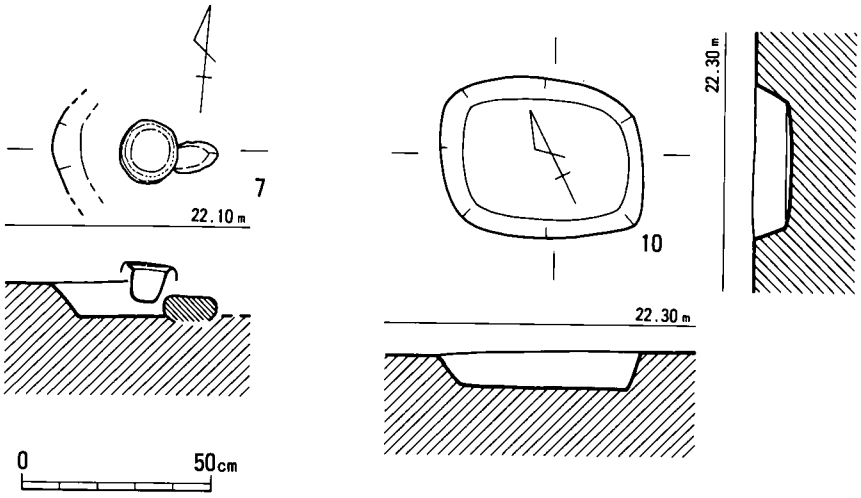
5号土壙墓（図版61　第164図）

調査区西端部のE2区に位置する隅丸長方形を呈す素掘の土壙墓で、南側は柱穴に切られているが、床面の状況から南北の長辺は206cmに復原できる。短辺は南側に広く64cm、北側は50cm、残存する深さは10cmに満たない。北側に須恵器の坏蓋と身がセットで出土したので幅は狭いが北側を頭部として埋葬したのであろう。主軸方位はN-3°-Eを測る。7世紀末。

土器（第166図1・2）1は扁平な摘みを有し、やや深みのある蓋。身受け端部の位置は口縁部と同じである。口径13.9cm。2は外方に短く広がる高台を有す坏身で、坏部は若干屈曲しながら外方に延びる。口径12.7cm、器高4.6cm。

6号土壙墓（図版62　第164図）

調査区西端部のD3区に位置し、6号竪穴住居跡に南接する隅丸長方形の土壙墓。東西103cm、南北40cm、深さ8cmで、床面は東側に若干高い。墓壙の北東側に須恵器の坏蓋と身を副葬する。床面の傾斜および出土遺物からして東枕と考えられる。8世紀前半であろう。



第165図　7・10号土壙墓実測図（1/20）

土器（第166図12・13）12は口縁部端部が直角に屈曲して受け部となる扁平な蓋で、やや厚みの有る摘みを有す。外面中央部までヘラケズリが残る。口径15.3cm、器高2.4cm。2は短く直立する高台を有す坏で、坏部上半は厚みを持ち外方に広がる。口径14.4cm、器高3.7～4.1cm。

7号土壙墓（第165図）

調査区西寄りのＨ５区に単独で検出された。掘りかたはほとんど不明であるが西側のみに円形に近い掘りかたを残し、河原石を敷くように土師器の坏を蓋にした鉢が出土。墓壙内の埋土は黒褐色土。胞衣壺の可能性が強い。

土器（第166図１・２）いずれも土師器で、１は中央部で屈曲してそのまま真直ぐに立ち上がり、口唇部でわずかに内弯する坏を、蓋に転用する。口径15.0cm、器高4.1cm。色調は内外とも茶褐色。２は器高に比べ口の広い鉢で、胴部下半は凹凸が目立つ。上半はわずかに内弯し、肥厚した口縁部は逆「ハ」の字状に広がる。外面の調整は上から下半にかけては縦方向のハケ、内面はヘラケズリ。口径14.3cm、器高10.9cm。なお、両者とも外面に黒斑が見られる。

10号土壙墓（第165図）

調査区西側のＦ４区に単独で検出された、やや幅広で長辺に丸みをもつ小型の土壙墓。東西方向の長辺54cm、短辺43cm、深さ10cmを測る。ほぼ中央に土師器の坏蓋・坏身がセットで出土したが坏蓋は整理途中で他の遺物にまぎれ現在不明である。６世紀末であろう。

土器（第166図１）１は胴部中央で屈曲し、外方に広がる坏身で、内面は丁寧なナデ調整。

口径13.0cm、器高3.85cm、器壁0.6cmを測る。

6．溝

溝は調査区の全区域で16本が確認されたが、いずれも古墳時代以降に属するものである。ここでは遺物を出土した溝を中心に説明を行ないたい。なお、13号溝は欠番である。

1号溝（第167図）

調査区の西側Ｅ２区に位置する南北方向の溝。北側は調査区域外になり、長さ5.1m検出した。２段掘りで、上部の幅は北に狭く1.25m、南側1.9mで、東側にテラス面を有す。西側で幅40～70cm、深さ10cmの流路があり、南流する。古墳時代後期。

2号溝（第167図）

調査区の西側中央部のＦ４区で検出された。矩形を呈し東西7.75m、南端部はトレンチで削平され南北4.5mを測る。溝の内部には10号土壙墓のほかに、多くの柱穴が検出されたが纏まらない。溝は河原石を除去して築かれ、幅25～50cm、深さ10cm内外。溝断面は浅い「U」字状をなす。溝の方向は８・９号掘立柱建物跡と略一致しており建物跡との関連性が強い何らかの遺構に伴う溝であろう。なお、溝底部のレベルは西端より南端が12cm下がる。

3号溝（第167図）

調査区西側のＩ４区に位置し、東北から南西方向への弧状の溝で、古墳時代の31号竪穴住居跡に切られる。長さ4.6m、幅35cm、深さ15cmを測り、南流する。断面は「U」字状を呈し、溝の埋土は黒褐色。

4号溝（第167図）

調査区西側のＨ５区に検出された。古墳時代の38･45号竪穴住居跡に切られる溝で、南北方向の弧状を呈す。長さ6.2m、幅40～60cm、深さ15cmを測り、南流する。溝断面は平坦に近い。

5号溝（第167図）

調査区の西側を東西方向にやや蛇行しながら横断（G-L４－５区）する溝で、すべての遺構を切り、東端は調査区域外に延びる。Ｋ５区で南側に３ｍほど枝分かれする。全長56m、幅40～80cm、深さ10～20cm前後で、溝底は平坦に近い。中央部のＪ５区付近が高く、両端に下がる。埋土は黒褐色土。

土器（第168図１～３）１～３は５号溝でも東端部からの出土。１は手捏ね土器の完形品で、

口径2.0cm、器高1.3cmを測る。2は坏の口縁部で、摩滅により器面調整は不明。端部は外反させることにより、内外面に明瞭な稜ができる。3は復原口径20cmの甕で、全体的に摩滅が著しくて器面調整のわからない部分が多いが、内面の頸部以下ではケズリが痕跡的に窺える。

石製品（第189図4）第189図1深緑色を呈する碧玉製管玉。長さ21mm、太さ3.5mm。第189図4は用途および石材不明の石製品。前面を研磨してこのような形態になっているが、この研磨が製作によるものか、あるいは使用によるものかは不明。

6A号溝（付図）

調査区中央部のやや西側J6区に位置する南北方向の溝。長さ7.6m、幅20cm、深さ7cmを測り、南流する。

6B号溝（付図）

調査区中央部のやや西側J6区に位置する東西方向の溝で、6A号溝の南側を切る。長さ6.3m、幅25cm、深さ10cmを測り、断面は浅い「U」字状を呈す。西流する。

6C号溝（付図）

調査区中央部のやや西側K6区に位置する南北方向の溝。長さ4.8m、幅20～35cm、深さは5cmに満たない。溝底は平坦である。なお、この6A号から6C号の3条の溝は51号竪穴住居跡を取り囲むように配置されている。

7号溝（付図）

調査区中央部のやや西側I6区に検出された南北方向の溝で、弥生時代の63号竪穴住居跡を切る。長さ3.5m、幅60cm、深さ13cmを測り、溝底は平坦。

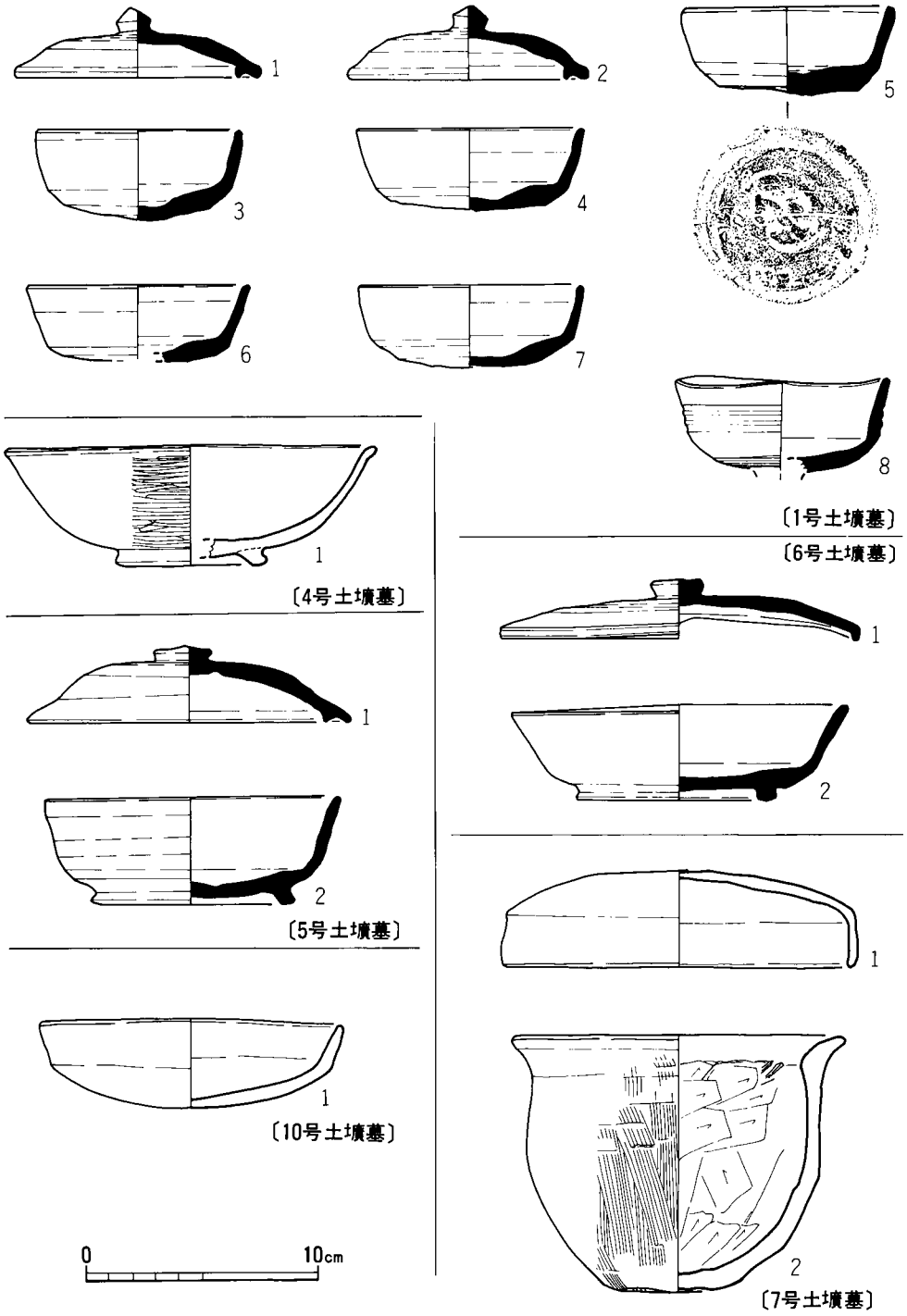
8号溝（第167図）

調査区東側のS10区で検出された東西方向の溝で、弥生時代の18号土坑を切る。長さ4.5m、幅15～30cm、深さ10～15cmを測り、溝底は浅い「U」字状を呈する。東流する。

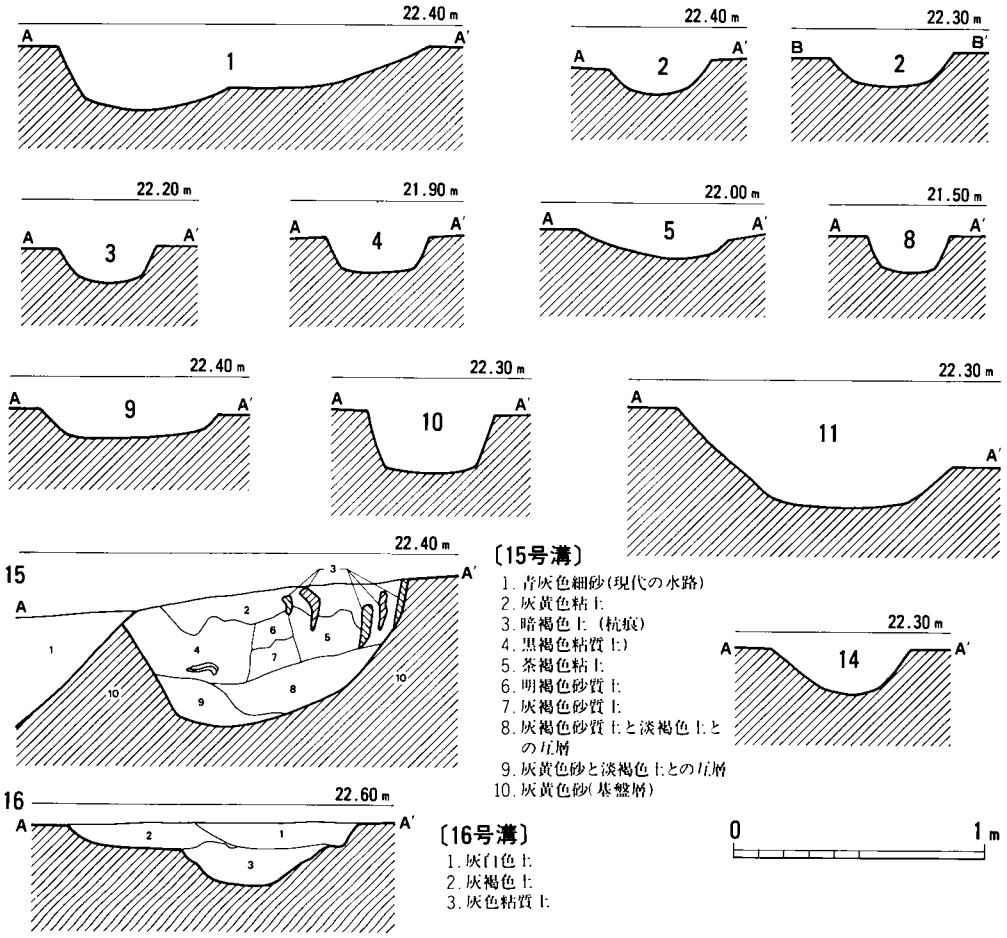
9号溝（第167図）

調査区中央部やや東寄りのN6－8区にかけて南北方向に走る溝で、北側は調査区域外に延びる。古墳時代の114号竪穴住居跡を切り、やはり古墳時代の112号竪穴住居跡や16号溝に切られる。21mを検出し、幅0.7～1.2m、深さ21cm。南流する。

土器（第168図4）復原口径13cmの須恵器坏蓋で、回転ヘラケズリが施された外面天井部にはに、1本のヘラ記号が引かれる。



第166図　1・4～7・10号土壙墓出土土器実測図（1/3）



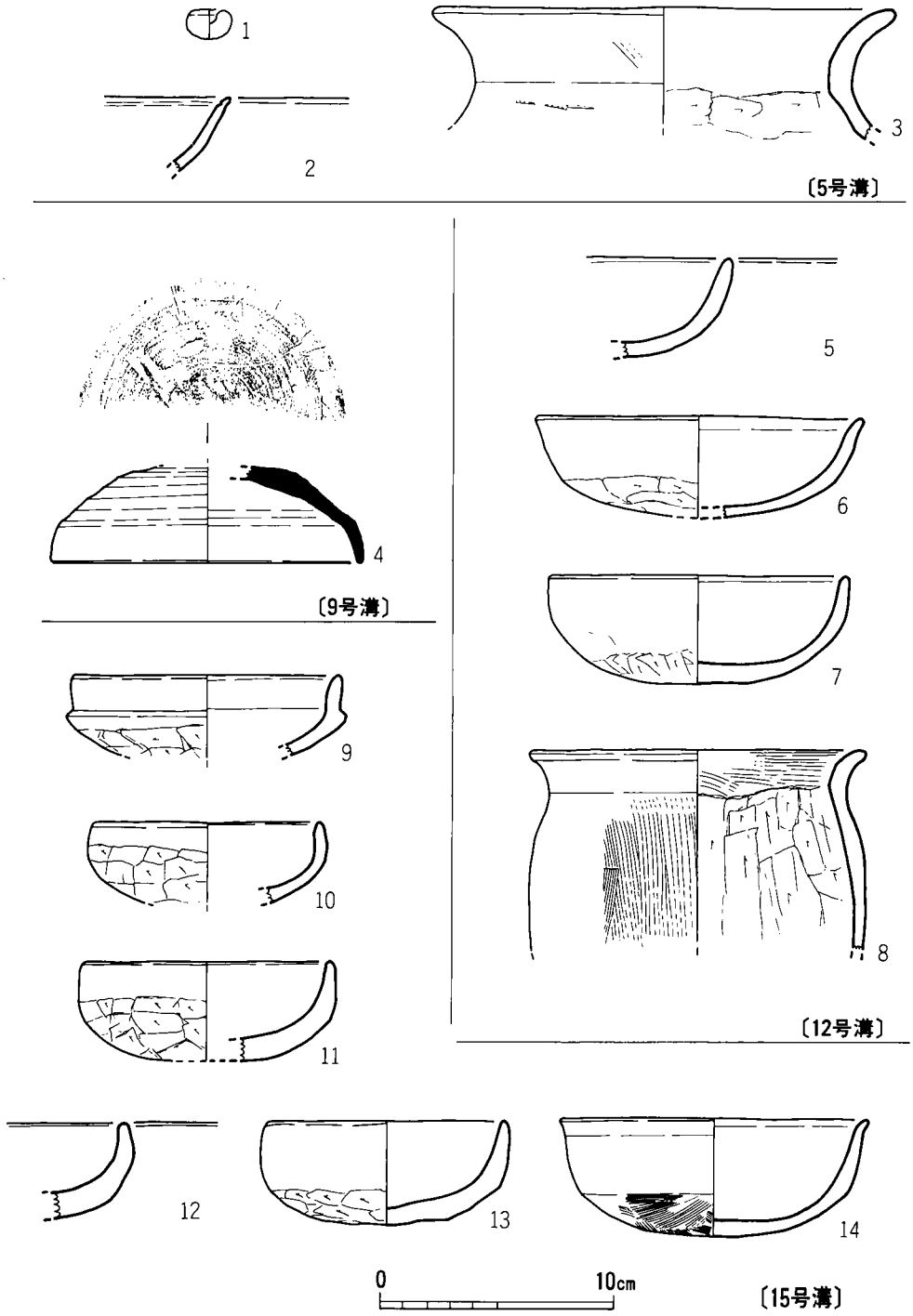
第167図　1～5・8～11・14号溝断面および15・16号溝土層断面実測図（1/30）

10号溝（第167図）

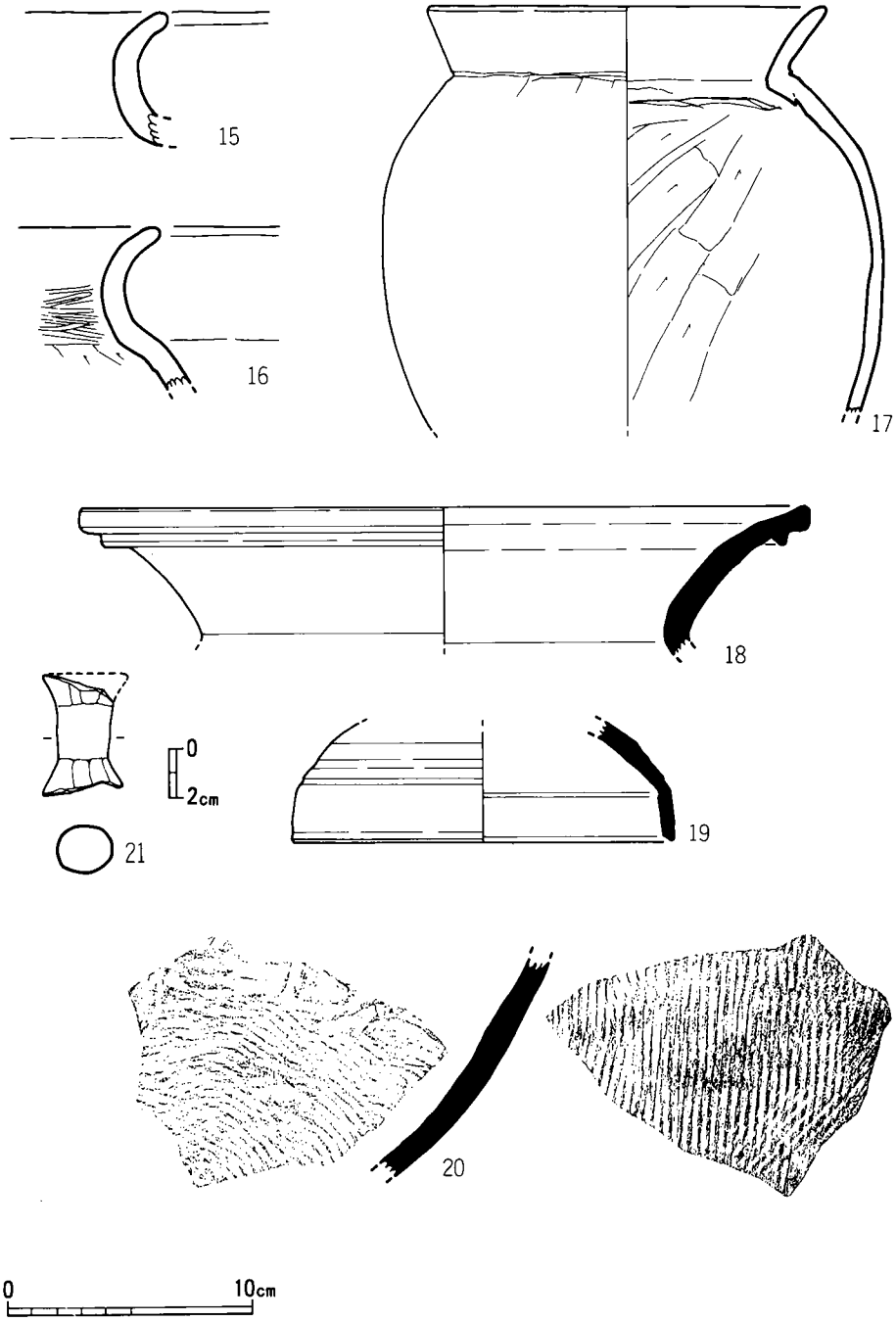
調査区東端部付近のＳ８区からＲ９区にかけて検出された溝で、東側は鍵の手状になり、西側は現代の水路に切られる。全長12m、幅30～58cm、深さ15～25cm。溝底はほぼ平坦で、西流する。

11号溝（第167図）

調査区東端部付近のＴ９区で検出された東西方向の溝。長さ10m、幅0.9m、深さ40～50cm。東流する。東側は調査区域外であるが、Ｗ８区に検出された12号溝と同一。



第168図　5・9・12・15号溝出土土器実測図（1/3）



第169図　15号溝出土土器実測図（1/3　21は1/2）

12号溝（付図）

調査区東端部のＷ８区に検出された溝で、長さ５ｍ、幅1.1ｍを測り、11号溝と同じく東流する。東端は調査区域外に延びる。

土器（第168図５～８）５は坏の口縁部で、器面調整は摩滅により不明。６は復原口径14㎝の坏で、外面の底部にケズリが施される以外はナデ。７は復原口径13㎝の坏で、摩滅により調整不明。８は復原口径14㎝の小型の甕で、外面の胴部と内面の口縁部にはハケが、内面の胴部にはケズリが施される。

14号溝（第167図）

14号溝は調査区東端部のＶ11区に位置し、西側へ緩やかに弧を描くように南北方向に約６ｍに亘って確認した。南端は調査区外へ延びており全容は不明。幅は50～65㎝、深さは最大で24㎝を測る。北端はピットと切り合っていたかもしれないが、底面のレベルが本溝と同一であったため、取りあえず溝の一部として認識した。

15号溝（図版64　第167図）

15号溝は調査区東側のＰ９区からＵ９区に亘って、直線的でほぼ東西方向に現在の用水路に切られながら43ｍ分が検出された。大部分の幅は１～1.2ｍ、深さは60㎝とほぼ均等であるが、検出された西側10ｍ分ほどは幅が２ｍ、深さは20㎝と広く浅くなり、古墳時代の66号竪穴住居跡に切られてそれ以上に西側には延びない。第167図の土層断面図に図示したように、多くの場合南側の壁には杭や板を打ち込んだ痕跡が認められた。また、第８・９層の埋土は淡褐色土と砂質土の互層状になっており、澱むように緩やかではなく、比較的急な流れがこの溝の中にあったことを物語っている。遺物の出土は量的に比較的豊富でパンケース２箱分になるが、破片自体は小さくて全体的に摩滅も著しく、接合できるものも少ない。６世紀前半頃に属する。

土器（第168・169図９～21）９～14の坏のうち、10・11・13は復原口径10㎝で、器面調整は底部外面にハケが施されるが、他はケズリに統一され企画性が高い。９は復原口径11㎝で、全体的に器壁の厚いのが特徴的。14は復原口径13㎝で、底部外面にハケが施されるが、他はナデ。15・16は甕の口縁部で、15は内外面ともにナデ。16の外面はナデで、内面は頸部以上がハケ、以下がケズリ。17は復原口径16㎝の甕で、胴部内面にはケズリが施され、その他は外面を含めて全体的にナデであるが、外面の頸部には工具の当たり痕跡が窺える。

18は復原口径30㎝の須恵器甕口縁部で、内外面ともにナデ。口縁部の突帯文がシャープなのが特徴的。19は復原口径15㎝の須恵器坏蓋で、口縁端部の作りや口縁部と天井部の境部分の内外面に施される沈線文はシャープである。20は須恵器大甕の胴部破片で、外面は平行タタキ、内面には青海波の当て具圧痕が明瞭に残る。

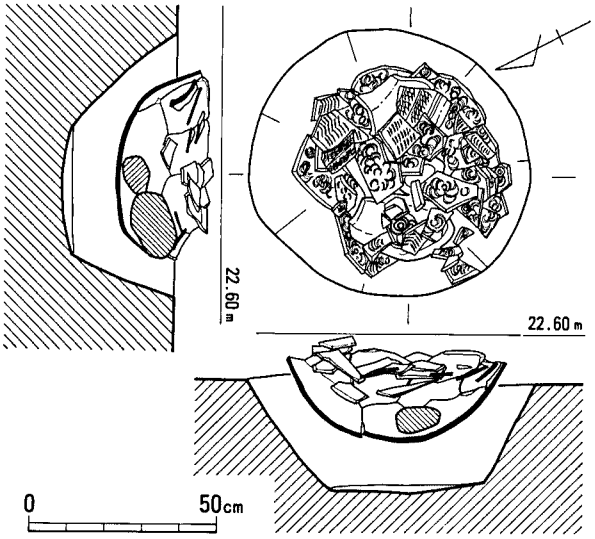
土製品（第169図21）滑車形土製品で端部は一部欠損するが、長さは4.8㎝。横断面は径2.3

×1.9cmの楕円形になる。

6．ピット

1050号ピット（図版63　第170図）

本遺構は須恵器の大甕が掘り込みの中に据えられた状態で出土しており、本来は土坑あるいはそれ以外の名称で遺構番号を付すべきであったが、ここでは便宜的にピットとして扱った。位置的には調査区東端部T9区にあり、半径15mの範囲内では北東8mに105号竪穴住居跡があるだけで、まったくの遺構空白地区である。平面プランは75×70cmの楕円形で、深さは30cmの断面逆台形を呈する。これに底面から15cmほど浮いた状態で須恵器の大甕が据えられており、口縁部と胴部上半2／3が底部へ落ち込んだ状態で出土した。底部付近には自然礫2個があったが、その用途などは不明。出土状況から判断しておそらくは、地面を掘り込みそこに大甕を据えて、水甕的に使用されていたものと考えられる。



第170図　1050号ピット実測図（1/20）

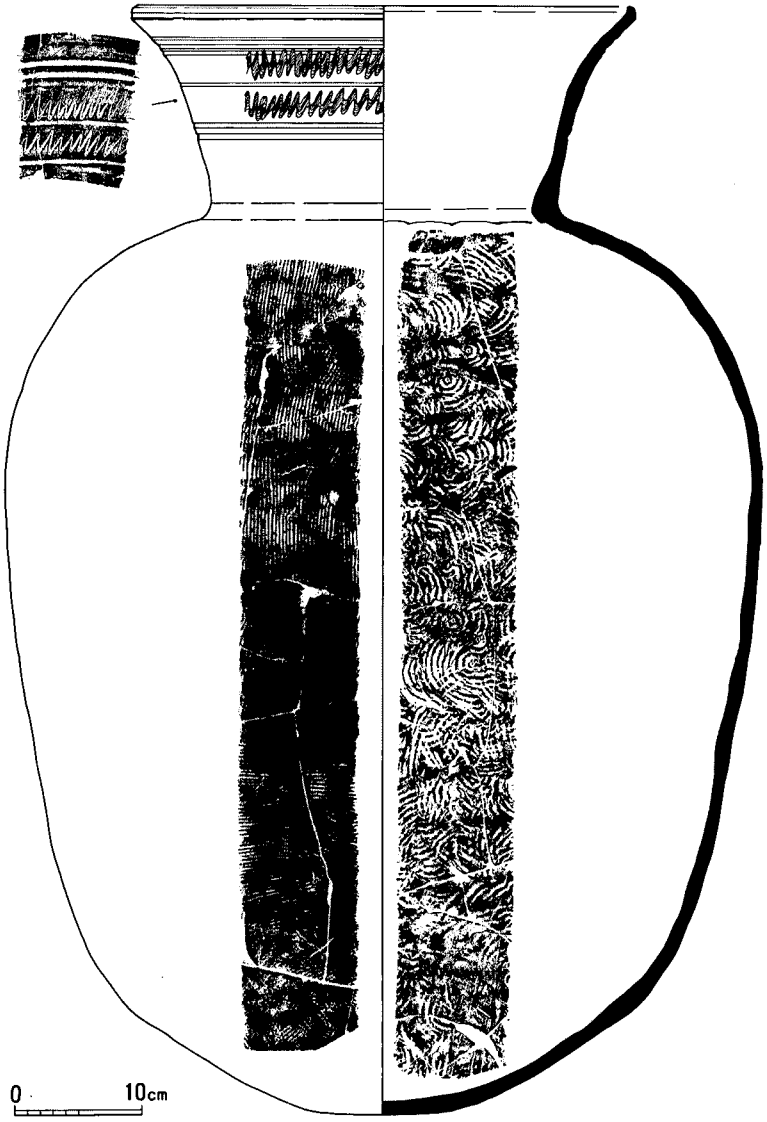
土器（第171図）この須恵器大甕の遺存率は、口縁部が1／6、胴部上半が1／2、胴部下半がほぼ完全で、口縁部から底部まで必ずしもすべてが連続的に接合したものではないが、第171図のように復原・図化することができた。復原口径40cm、復原頸部径27cm、復原最大胴径60cm、復原器高88cmを測る。器面調整として外面には平行タタキが、内面には青海波の当て具圧痕が施される。口縁部と頸部の内面はナデ。その外面にはカキ目が施された後に4本の沈線文が引かれ、上から2番目と3番目の沈線文の間、および3番目と4番目の間には櫛描きの波状文が施される。外面の胴部上半には灰被りが見られ、底部付近には窯で焼成する際に焼き台となった須恵器の破片が付着したままに残る。

8．ピット・包含層の古墳時代以降の土器

ここではピットや包含層など、主に明確な遺構に伴わない古墳時代以降の土器について一括して報告する。（第172～177図1～80）

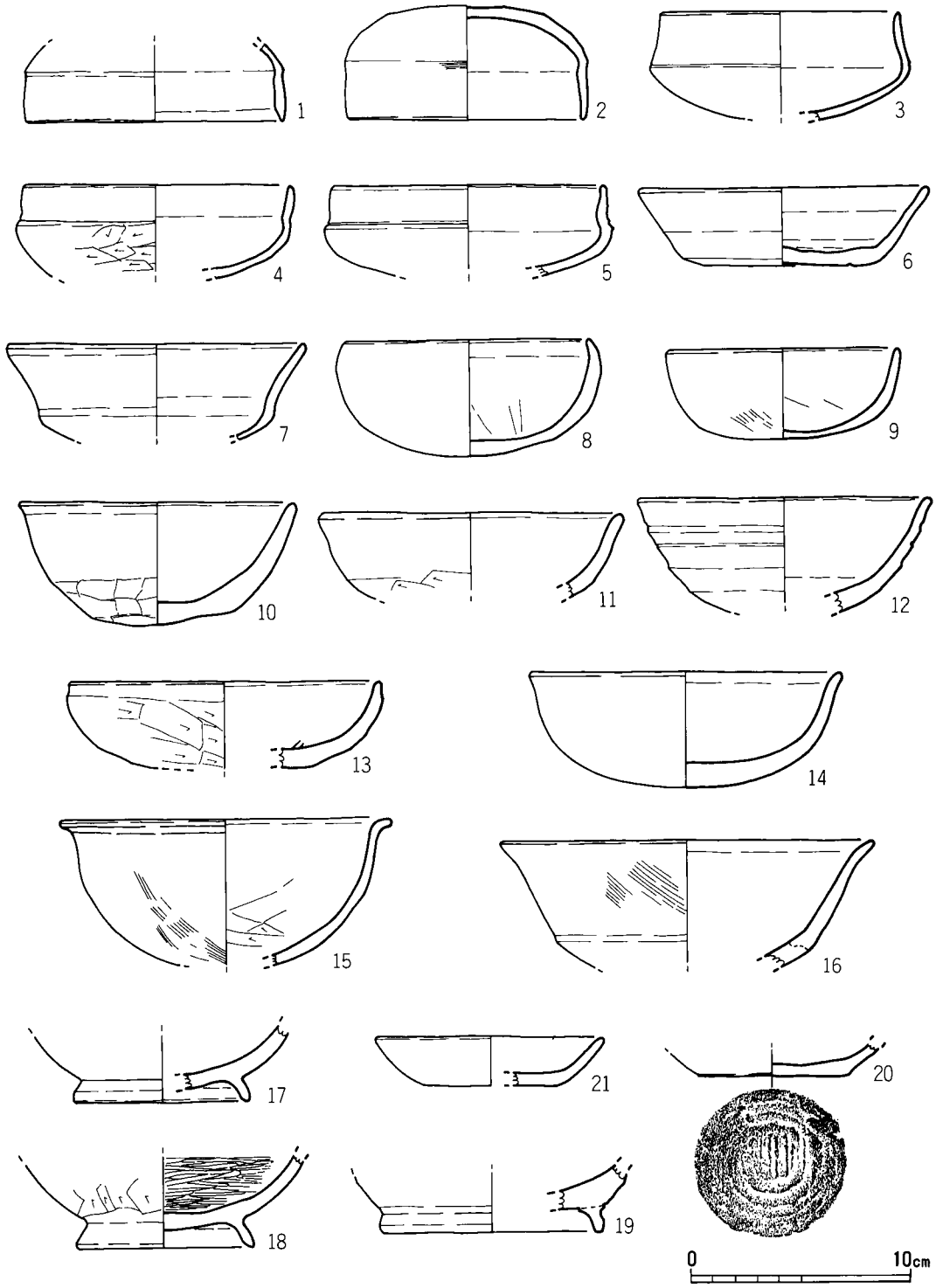
［土師器］（第172～176図1～59）

坏（第172図1～20）1～5は須恵器の器形を模倣した坏で、復原口径10～12cmのもの。全

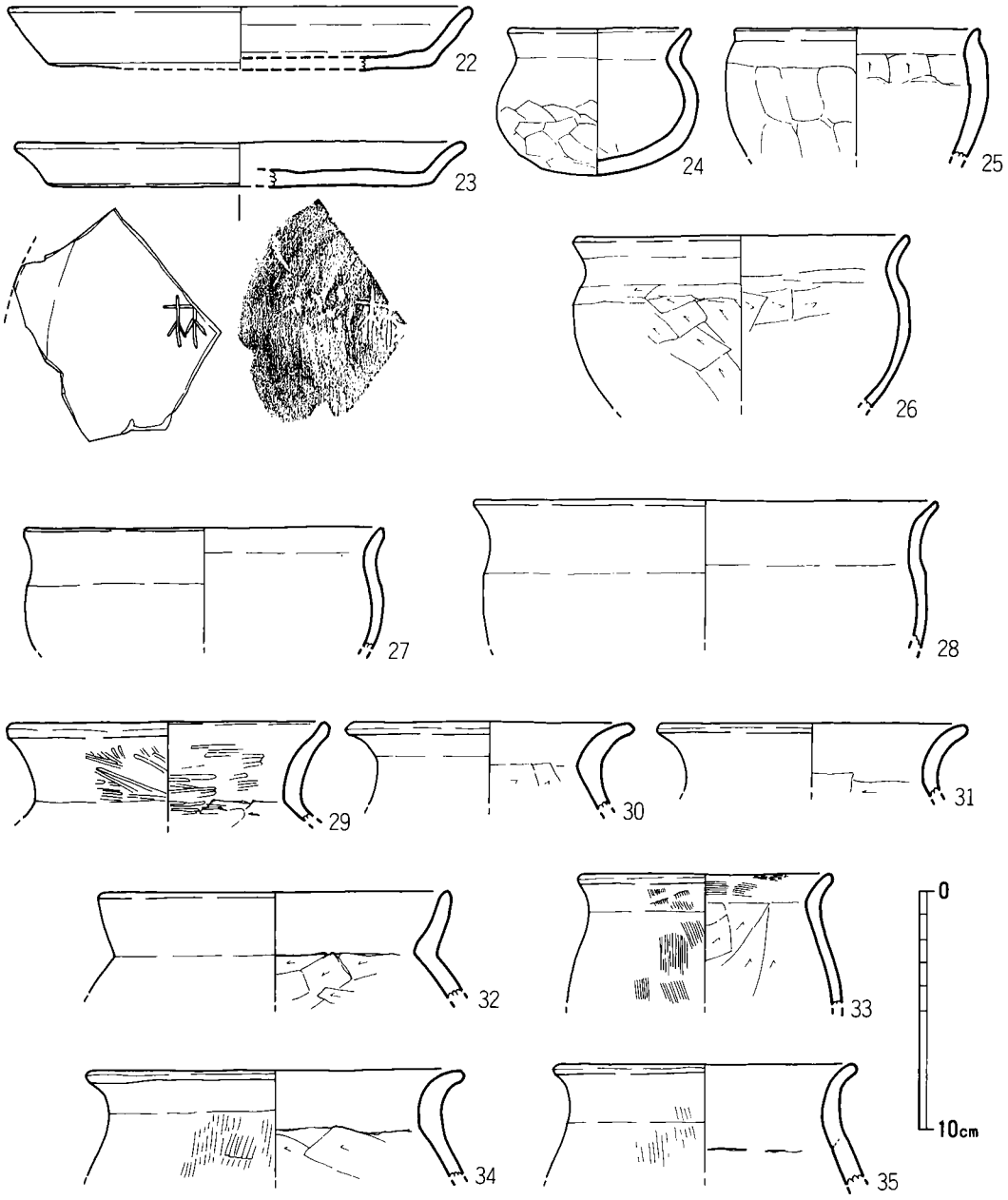


第171図　1050号ピット出土土器実測図（1/6）

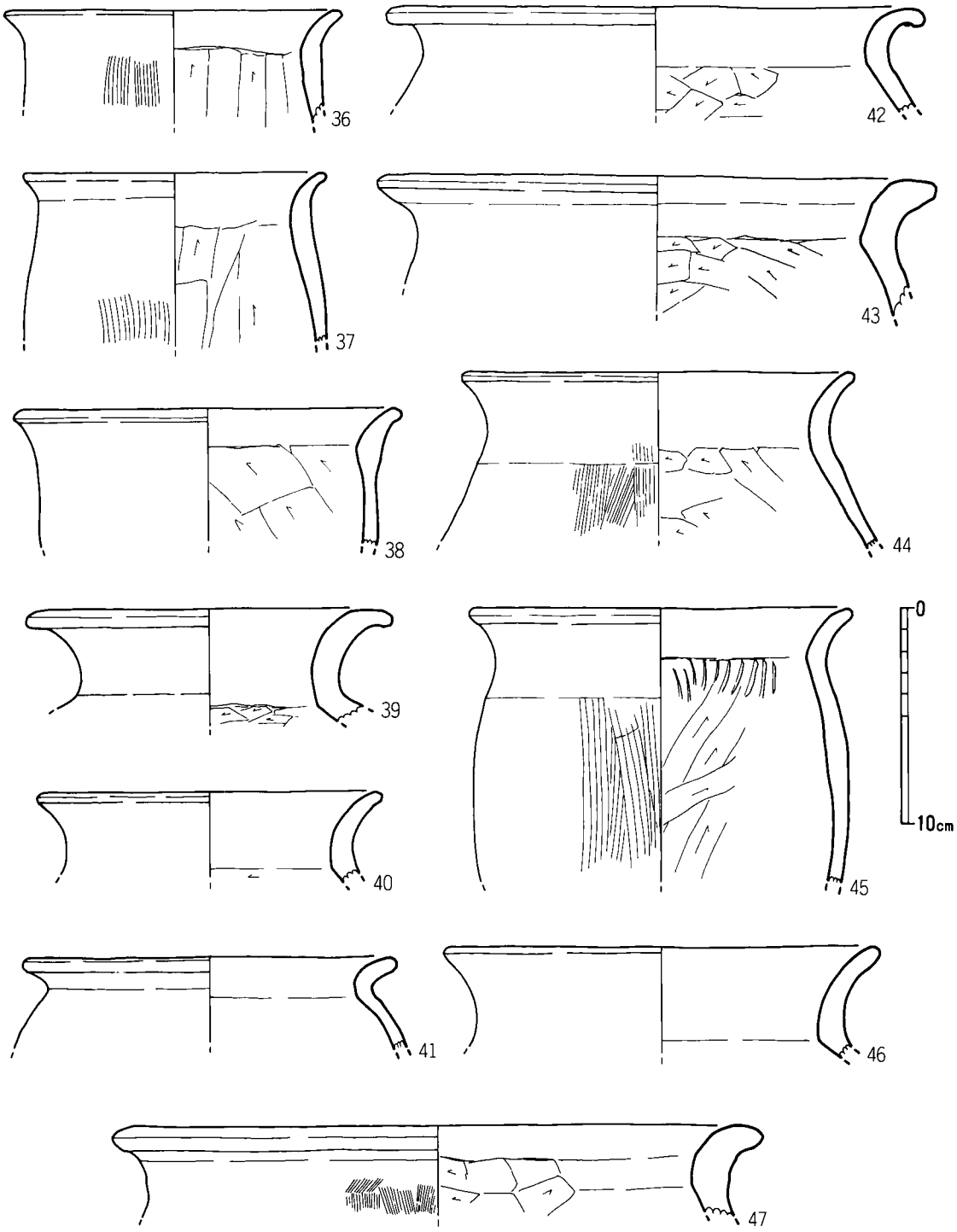
体的に摩滅が著しく器面調整のわかるものは少ないが、4については外面の底部にケズリが施される。6～14は高台の付かない坏で、古墳時代に属するもの。器面調整がわかるものについては、底部外面にケズリが施され、それ以外がナデになるのが一般的。復原口径は12～14cm。15～19は高台の付く坏、あるいは高台そのものである。15の復原口径は12cmで、摩滅が著しいが内外面ともに器面調整としてのハケが痕跡的に窺える。16の復原口径は17cmで、外面にはハケが窺えるが、内面は摩滅により調整不明。17～19の復原高台径は順に8cm、8cm、10cmで、



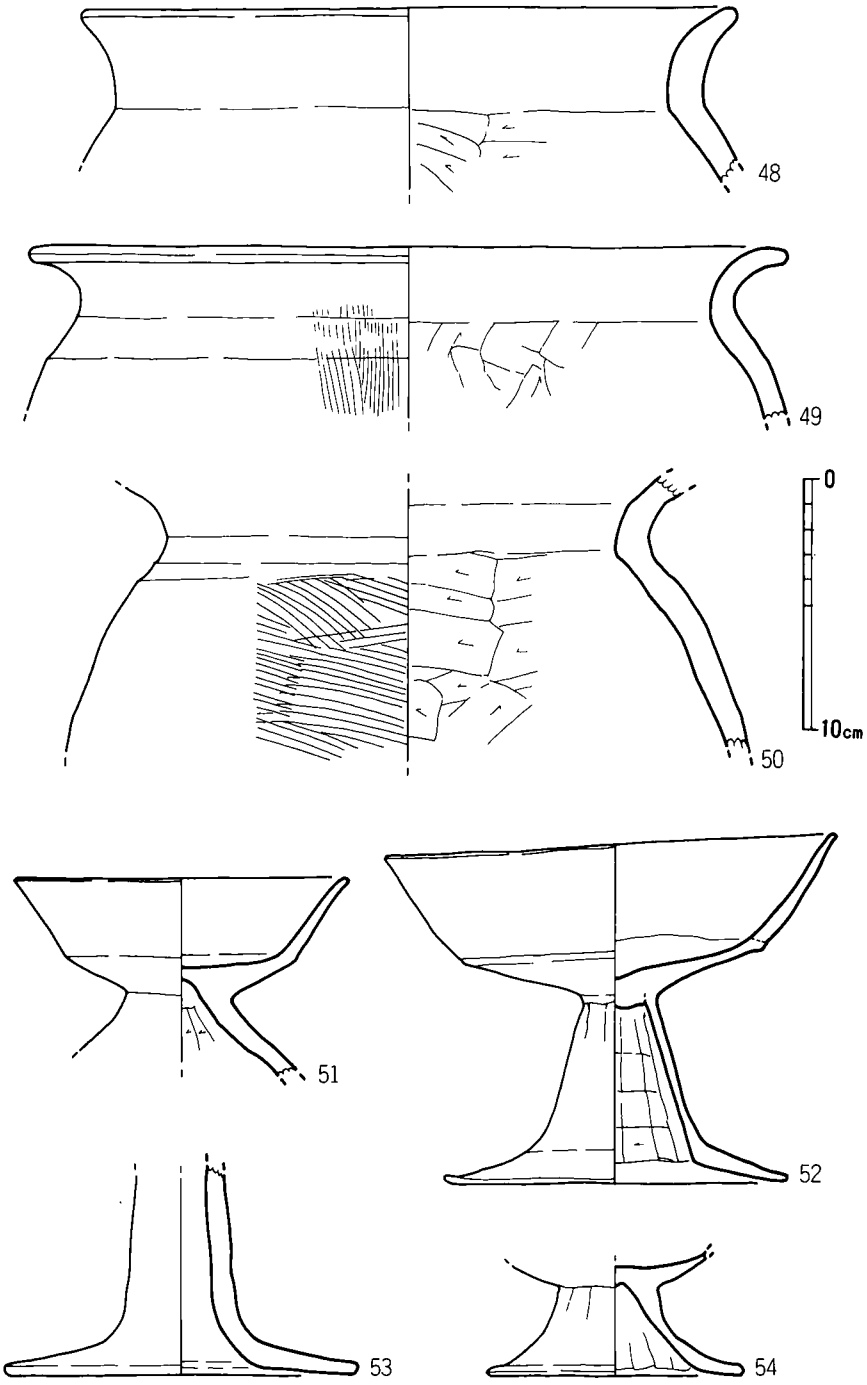
第172図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.1（1/3）



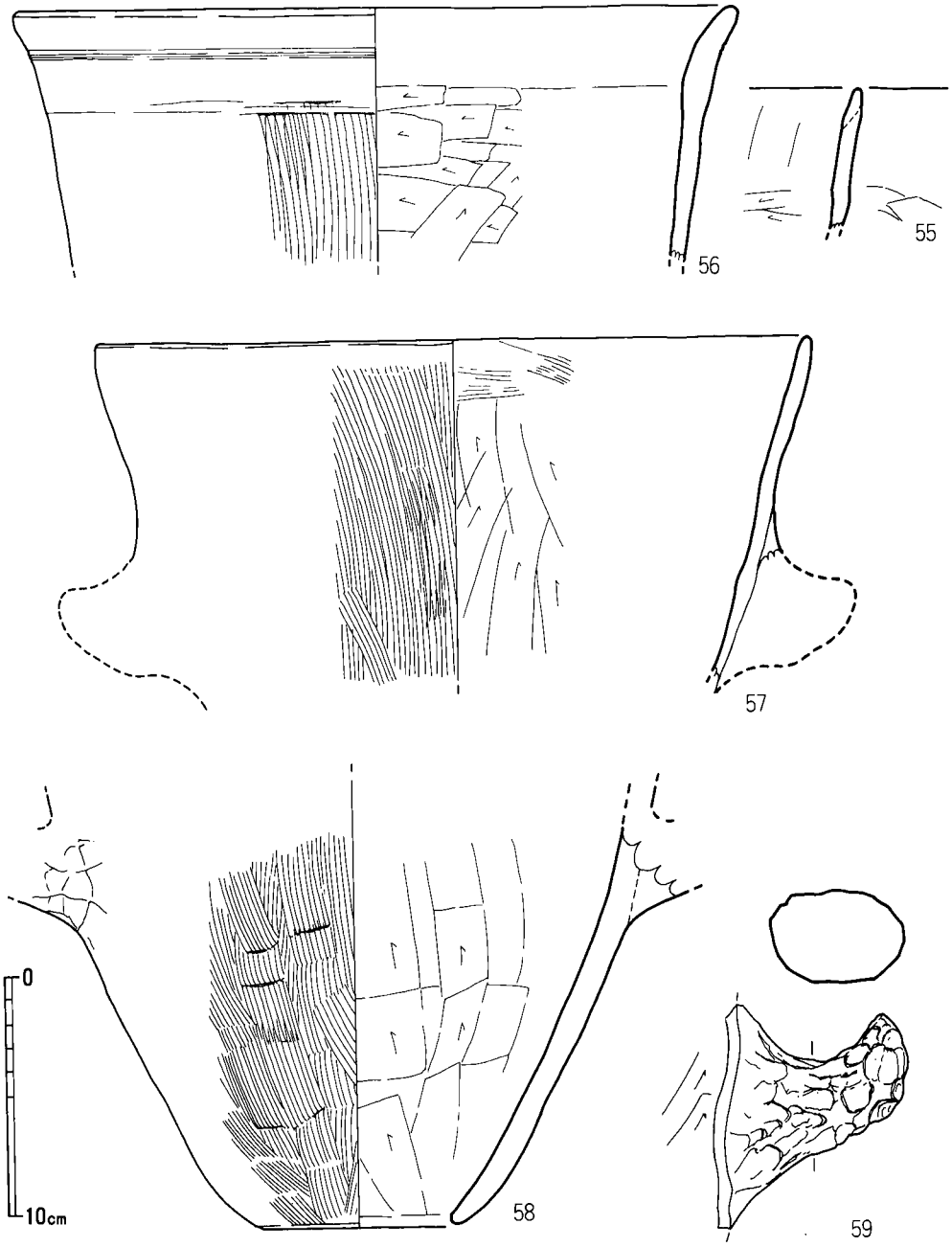
第173図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.2（1/3）



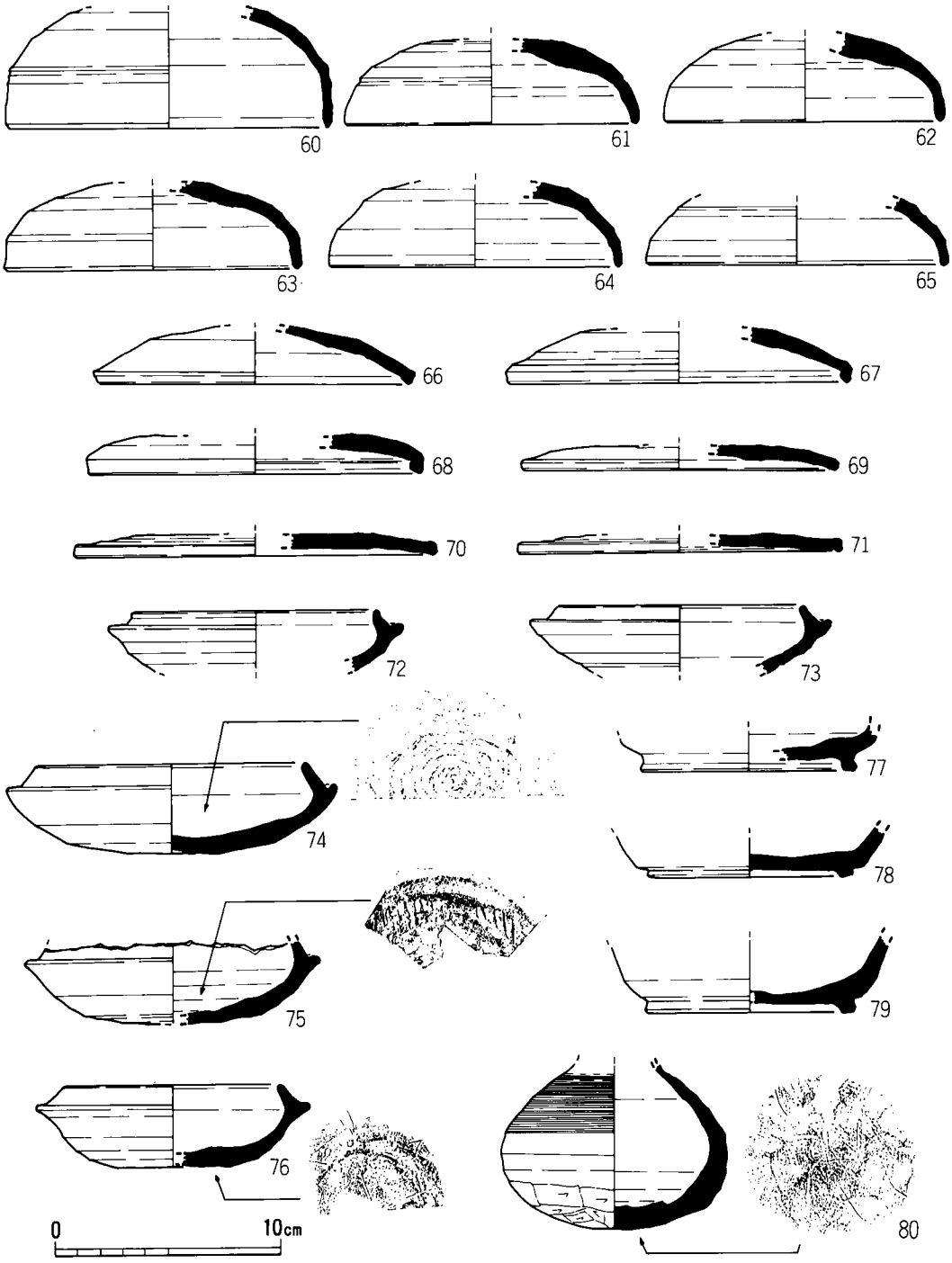
第174図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.3（1/3）



第175図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.4（1/3）



第176図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.5（1/3）



第177図　古墳時代以降のピット・包含層出土土器実測図.6（1/3）

17・19は摩滅により調整は不明。18は外面がケズリ、黒く燻された内面にはミガキが施される。19は坏部と高台の接合部分が内外面ともに明瞭に残る。20の底径は７㎝で、底部調整としてのタタキが明瞭に残る。

皿（第172・173図21～23）21は復原口径10㎝、器高2.2㎝。22は復原口径19㎝、器高2.5㎝。23は復原口径19㎝、器高1.9㎝で、底部外面の中央部にはヘラ描きによって「林」の文字が刻まれる。土器自体の残存率は１／３。

鉢（第173図24～28）24はほぼ完形の小型鉢で、口径㎝7.7、器高6.1㎝。外面の底部にケズリが施される以外はすべてナデ。25は復原口径10㎝で、内外面ともに胴部はケズリが施される。26の復原口径は14㎝で、器面調整は24とほぼ同じ。27の復原口径は15㎝、28は19㎝で、器面調整は摩滅によりいずれも不明。

甕（第173～175図29～50）29は復原口径14㎝で、口縁部から頸部にかけての内外面にはミガキが施される。30は復原口径12㎝で、二次加熱による変色と器面の剥離にため、器面調整がわかるのは内面胴部のケズリだけである。31は復原口径13㎝で、摩滅により器面調整についてはやはり内面胴部のケズリだけ。32は復原口径15㎝で、内面胴部のケズリ以外はすべてナデが施される。33～37の器面調整は外面がハケ、内面がケズリで、復原口径は順に10㎝、16㎝、12㎝、16㎝、14㎝となる。38の復原口径は18㎝で、外面はナデ。39は甕というより壺の器形に近く、復原口径は17㎝で外面はナデ。復原口径16㎝の40は摩滅が著しいが、外面はハケで、内面はケズリ。40は復原口径17㎝で摩滅により器面調整不明。42・43の復原口径は25㎝と26㎝で、摩滅により器面調整がわかるのは内面のケズリだけ。44・45の復原口径はいずれも18㎝で、45の内面頸部には工具の当たり痕が６～７㎜間隔で連続的に残る。46は復原口径20㎝で、摩滅により器面調整不明。47は復原口径30㎝の大型で、器厚も18㎜と分厚い。48は復原口径26㎝で、外面の調整はナデ。49の復原口径は30㎝。50の復原頸部径は19㎝で、外面は二次加熱により変色する。

高坏（第175図51～54）51は復原口径13㎝の高坏で、摩滅が著しく脚部内面のケズリ以外に器面調整は不明。52は復原口径18㎝、器高14㎝で、摩滅のため器面調整の窺えるのは脚部内外面のケズリだけで、坏部の屈曲部には接合痕がわずかに残る。53は脚部の復原裾径14㎝で、摩滅により器面調整は不明。54は脚部の復原裾径10㎝で、脚部の器面調整は内外面ともケズリが施される。

甑（第176図55～59）56は復原口径30㎝で、把手の部分は残っていなかったので図化していない。57は復原口径30㎝で、把手は剥がれ落ちているので図化できなかった。58は復原底部径８㎝で、全体的に加熱による変色が著しい。

［須恵器］（第177図60～80）

坏蓋（第177図60～71）60～65はツマミの付かない坏蓋で、60の復原口径が15㎝である以外はほぼ13㎝ほどになる。63の外面は灰被り。66～71はツマミの付く坏蓋で、外面の天井部には

回転ヘラケズリが施される。66は生焼けで白灰色を呈する。

坏身（第177図72～79）72～76は6世紀後半代に属し、底部外面は回転ヘラケズリが施される。74は外面全体に灰が被り、内面にて青海波の当て具圧痕が残る。75の口縁部は意図的に打ち欠かれており、内面には平行タタキの工具とみられる当て具圧痕が残る。76の外面底部には、おそらく「×」になるヘラ記号が施される。77～79は8世紀代に属する坏身の高台で器面調整はいずれもナデ。

甕（第177図80）最大胴部復原径は10cmを測り、外面の底部には器面調整としてケズリが、胴部上半はカキ目が、内面にはナデが施される。また、外面底部には「V」のヘラ記号が施される。

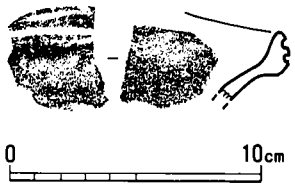
9．ピット・包含層の縄紋時代の土器（第178図）

縄紋土器（第178図）西平式の新しい段階、もしくは太郎迫式の古い段階の鉢の口縁部である。全体に摩滅が著しく器面調整は不明。口縁端部外面に2本の沈線文が施されるが、この部分によく施される縄紋については摩滅のためよくわからない。

10．ピット・包含層の弥生時代の土器（第179～188図）

弥生時代の遺物については、平成9年度に発行した『鷹取五反田遺跡Ⅰ』において報告する予定であったが、諸般の事情によりピットおよび包含層出土の遺物については本書『鷹取五反田遺跡Ⅱ』で報告することになった。本遺跡においては、純粋な弥生時代の包含層が存在しないことから、ほとんどの場合が古墳時代以降の遺構や包含層に含まれていたものである。

壺（第179図1～9）1～4はいわゆる鋤先口縁の壺で、復原口径は順に35cm、38cm、25cm、27cmを測る。器面調整はナデが主流であるが、4の口縁部内面にはミガキが窺える。4については口唇部が凹線文状に窪む。復原口径25cmの5は、口縁部が「く」字に屈曲して、頸部と胴部の境に断面三角形のシャープな突帯文が貼り付けられる。器面調整は内外面ともにハケ。6は外面が細かく丁寧に研磨される小型壺の胴部で、肉眼では確認できなかったが、おそらくは丹塗りであったと考えられる。7は復原最大腹径31cmの2本の突帯文が貼り付けられる丹塗りの胴部で、外面にはミガキが痕跡的に窺える。8は復原底部径9cm、9は7cmの壺の胴部下半から底部にかけてで、8についてはわずかにハケが施されるが、9は摩滅により調整不明。



第178図　包含層出土縄紋土器実測図（1/3）

甕（第180～183図10～50）甕は口縁部形態によって、①

口縁部の内側に突出部の付く「T」字状なもの（10～17）、②口縁部を折り曲げて逆「L」字状になるもの（18～20）、③②の口縁部下に断面三角形の突帯文が貼り付けられるもの（21～23）、④口縁部形態が「く」字状になるもの（24～31）、⑤④に似るが胴部が張らないもの（32～42）におよそ分かれる。多くの場合、器面調整は外面がハケ、内面がナデで、図示したものの中で外面の器面調整が表現されていないものは、ほとんどが摩滅により器面調整の判別がつかないものである。32については器高が低いことから鉢という分類になるかもしれないが、ここでは便宜的に甕として位置づけた。内面の下部には炭化物が厚く付着する。42は二次加熱による変色が著しい。44～50は甕の底部で、45・47・48・50の外面は二次加熱により変色しており、45については炭化物も付着する。

丹塗甕（第184図51～57）丹塗りの甕７点を図示したが、55以外は頸部に断面「M」字状の突帯文が貼り付けられる。口唇部に刻目が施されるのは51・52・57で、52と56の口縁部上面には暗文状のミガキが施されるが、これは土器の遺存状態によっては肉眼で確認できない場合がある。外面の器面調整についてはおそらくはミガキと考えられるが、確認できたのは56だけ。

高坏（第185図58～70）高坏の坏部については８点を図示したが、いずれも鋤先状口縁のものばかりである。60と63以外はすべて丹塗りであるが、この２点についても摩滅が比較的著しいため丹が剥落しているだけかもしれない。60・63・65の口縁部上面には暗文状のミガキが施される。66～70は高坏の脚部で、丹塗りは68と69。断面「M」字状の突帯文が貼り付けられる66は器面調整がミガキ。この器形や器面調整の高坏はほとんどが丹塗りであるが、二次加熱によって変色していることから、それが剥落してしまったものと考えられる。

大型器台（第186図71～74）大型器台はすべて丹塗りで、72・72・74には暗文状のミガキが施されるが、72についてはハケ状工具による。74の端部は二次加熱により変色する。

器台（第186図75～78）器台はいずれも著しい二次加熱により全面が赤褐色に変色する。器面調整もすべて外面はハケで、75・76の口唇部は凹線文状に窪む。

ミニチュア（第186図79～81）79～81の復原口径は順に、６㎝、12㎝、10㎝となり、器面調整はすべてナデ。

鉢（第186図82～86）鉢は５点を図示したが、82のように甕のような口縁部を持つものは稀で、大部分は83～86のように直線的な口縁部でボウル状の器形になる。82は摩滅により器面調整は不明だが、口縁部におそらくは蓋とセットとなる時の紐通し穴（焼成前穿孔）がある。83の外面はハケ後にナデが施される。86は復原口径31㎝で、器面調整はナデ。外面と口唇には丹が塗られる。

甕棺（第187・188図87～101）甕棺については、弥生中期後半の87～95と、後期初頭の96～98に大きく分かれる。前者については、95以外は口縁部ばかりを抽出して図化しているため、器面調整は内外面ともにナデばかりである。唯一の胴部破片である95の外面にはハケが施される。復原口径は89が最も小さく37㎝で、94が最も大きく50㎝。95の復原突帯文径は52㎝を測る。

後者の器面調整は、96の外面がナデ、97は内外面ともにハケ、98は摩滅により不明である。99～101の底部は外面がハケ、内面がナデである。

11. ピット・包含層の石器・石製品

（縄紋・弥生時代・古墳時代　第190～193図）

ピットおよび包含層から出土した石器として46点を図示した（第190～193図）。このうち1～27については縄紋もしくは弥生時代に属するものであるが、28～46は縄紋・弥生・古墳のいつの時代に属するものか確定できなかったので一括して図示した。

石鏃（第190図1～5）1～3は黒曜石製の打製石鏃で、3については片面を研磨する局部磨製石鏃である。4は稜が明瞭に残る蛇紋岩製の磨製石鏃。厚さは2㎜とかなり薄く、形態的には類例の見られないものであるが、石材に注目するなら縄紋時代に属するであろうか。5は結晶片岩製の磨製石鏃で、基部は破損している。磨製石鏃の石材としては珍しく、おそらくは縄紋時代に属しようか。6はおそらく腰岳産になる黒曜石製の縦長剥片。打点の反対側には自然面を残し、左側面には使用による微細剥離痕が多数窺える。

石庖丁（第190～191図7～21）実測可能な石庖丁15点を図示した。石材で分けるなら、結晶片岩製が7・14・21、輝緑凝灰岩製が8～10・15～19、粘板岩が11、流紋岩が12・13、蛇紋岩が20になる。11は折れ面を研磨しているが、粗くて一部にしか及んでいないことから、再利用を目的としたものではない。17は刃部の研出が不十分で、全体的な研磨も粗く、また穿孔も行なわれていないことから、製作途中で欠損した未成品と考えられる。21は未成品ではなく、打製石庖丁の完成品である。

石剣（第191図22）厚さ1.3㎝、幅3.8㎝の磨製石剣。流紋岩製であろうか。

石斧（第191図24～27）いずれも扁平片刃石斧で、24～26は頁岩製、27は片岩系の石材。25は欠損後に再加工して刃部を作り出しているので、刃部の形態が不自然である。

砥石（第192・193図28～44）砥石は17点を図示したが、石材別に分類するなら、頁岩28～30・32～34・37、砂岩31・36・39～41・43・44、片岩系35・38・42となる。28は柱状片刃石斧の破損品を砥石として転用したもので、幅4㎜、深さ3㎜の断面三角形の溝が砥石として使用された部分である。30はかなり小さいが全面が使用されている。38は側面だけの使用で、加熱により表面にクラックや変色が見られる。39・40は自然石をそのまま使用しており、砥石というよりも磨石としたほうが適当かもしれない。

窪み石（第193図45・46）45は中央部が窪み、その部分については敲打痕が窺え、窪みの周辺は磨石あるいは砥石として使用されたような擦痕が残って平坦面を作る。46は窪み石であるとともに、図の下端部には敲打痕が見られることから、敲き石としても使用されていたようである。

石製品（第189図４・10）４は軽石製の製品で、サイズおよび形態的には投弾と類似するが、かなり軽いためその用途は不明。重量は4.0ｇ。10は円盤形の石製品。視覚的には粘板岩的な色調や石質を見せるが、実際に持ってみるとかなり軽く感じて別の石材と考えられる。断面形態は台形状で、両面とも細かく研磨される。側面も部分的にやや平坦面を作るが、横方向の擦痕も多く見られる。この擦痕については、横方向の回転によって生じた可能性が高い。

12. ピット・包含層の鉄器（弥生時代・古墳時代　第194図）

ピットおよび包含層から出土した鉄器として５点を図示した。いずれも弥生・古墳時代もしくはそれ以降の時代に属するものか確定できなかったので、ここでは一括して図示した。

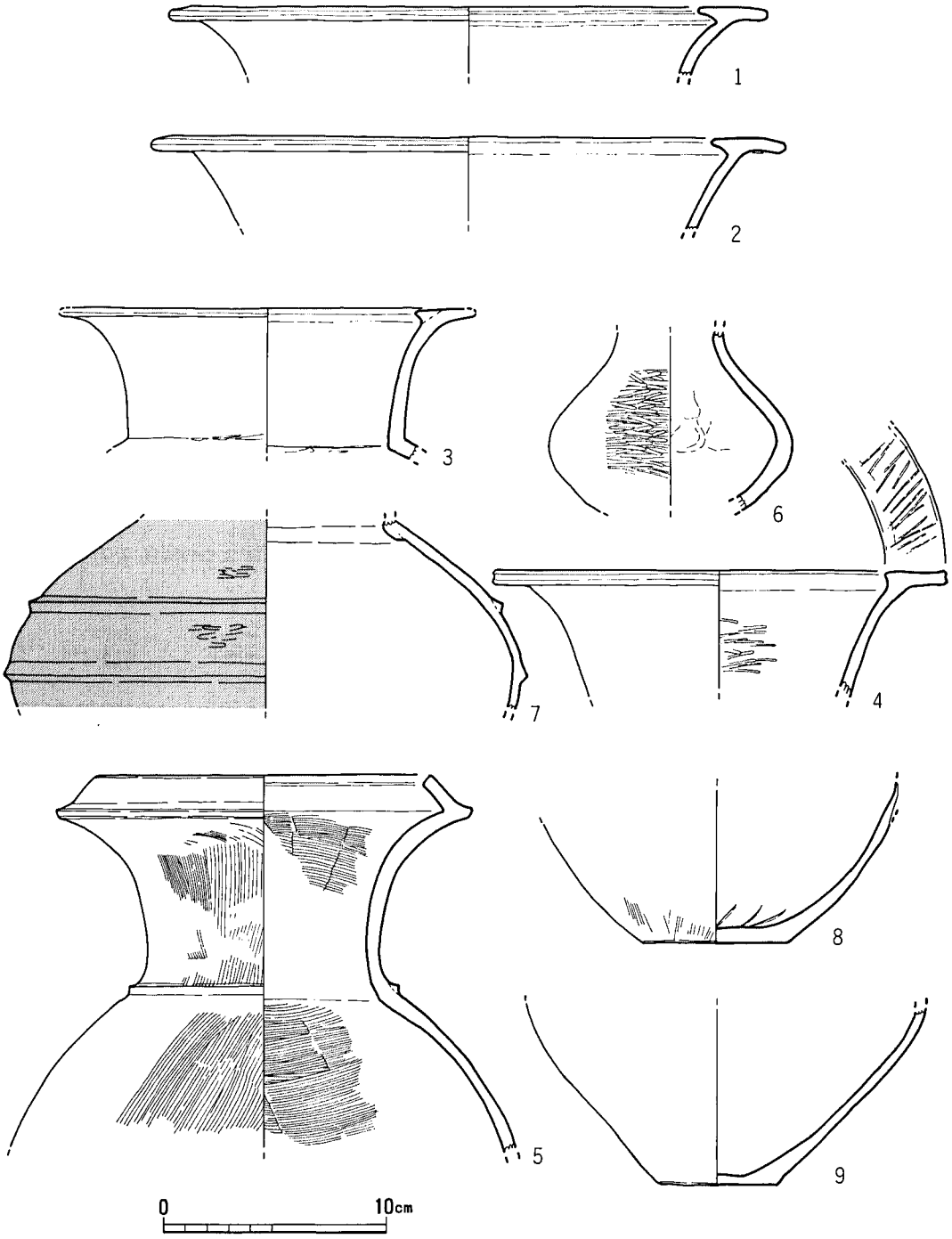
鉄器（第194図３・５・11・12・17）17はP741出土の手鎌で、左側部分を欠損する。刃部幅1.5cm、背部の厚さ0.2cmを測る。また、背部には柄の木質が遺存している。５はP786出土の棒状製品で、現存長4.8cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。断面形が長方形を呈することから鉄鏃の身部になるか。３は杭18～21間出土の圭頭広根式鏃の頭部破片で、現存長4.6cm、先端幅2.7cmを測る。折損部分での厚さは0.4cm。12は杭44北側の出土品。銹化が著しいが、現存長6.2cmである。頭部はバチ形に大きく開き、先端幅3.8cmを測る。茎部から左側には「へ」字形に開くが、右側は直線的であり、左右対称とはならない。また、右側は厚さも薄くなり、刃部状を呈する。これらのことから形状的には若干疑問が残るものの弓削刀子と考えておきたい。11は採集品で、刀子の茎部分になろう。現存長4.5cm、幅1.3cmを測る。

13. 県道東側調査区

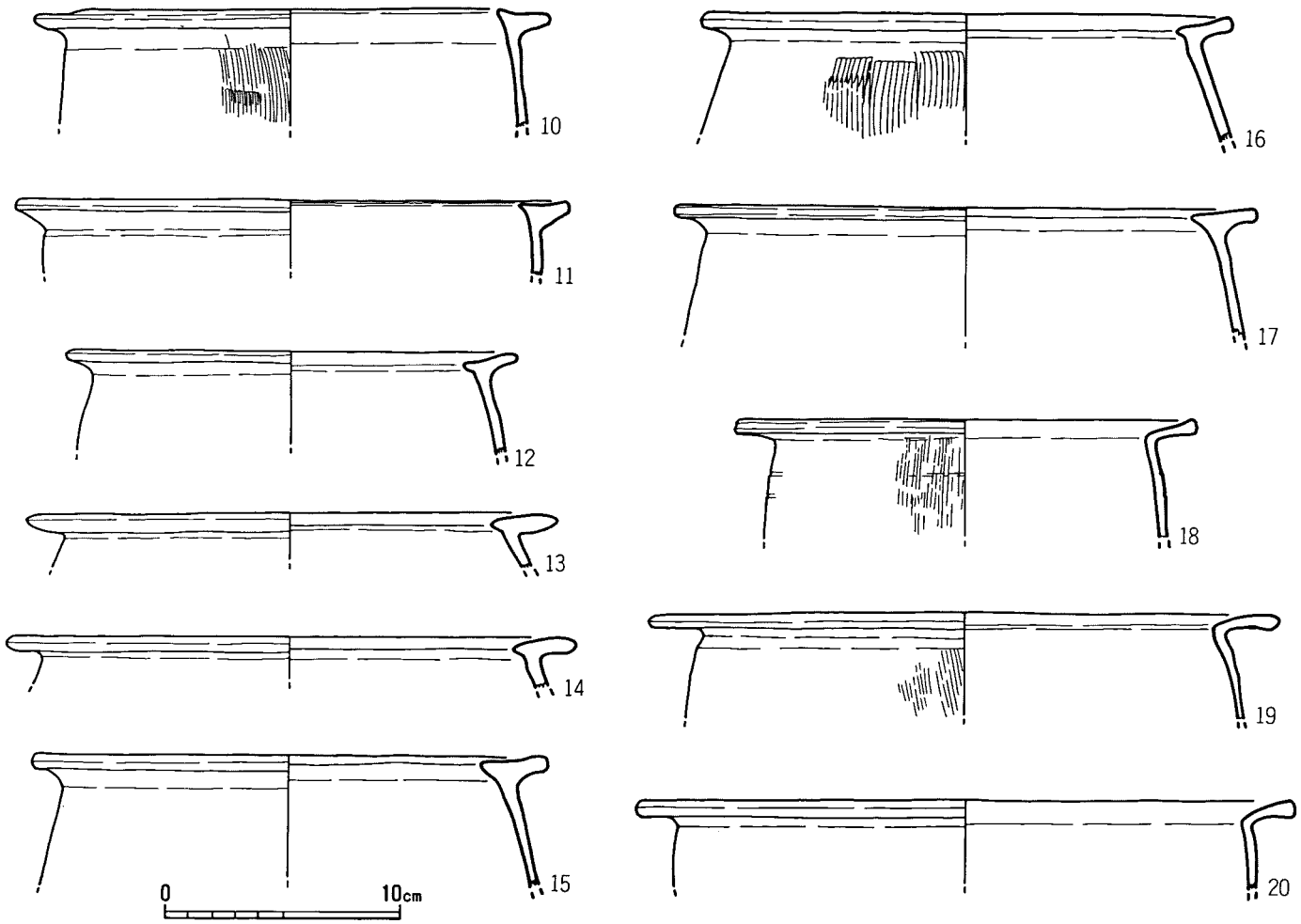
県道の東側の調査区（図版65　付図）については、平成２（1990）年度にバイパスに付設される側溝部分の調査が実施されたが、この時には遺構や遺物は特に出土していない。平成６（1994）年度には側溝部分以外、すなわち調査区の中央部を調査したところ、１本の溝と数基のピットを検出した。ここでは、その溝を16号溝として説明を行なう。

16号溝（図版66　付図　第167図）

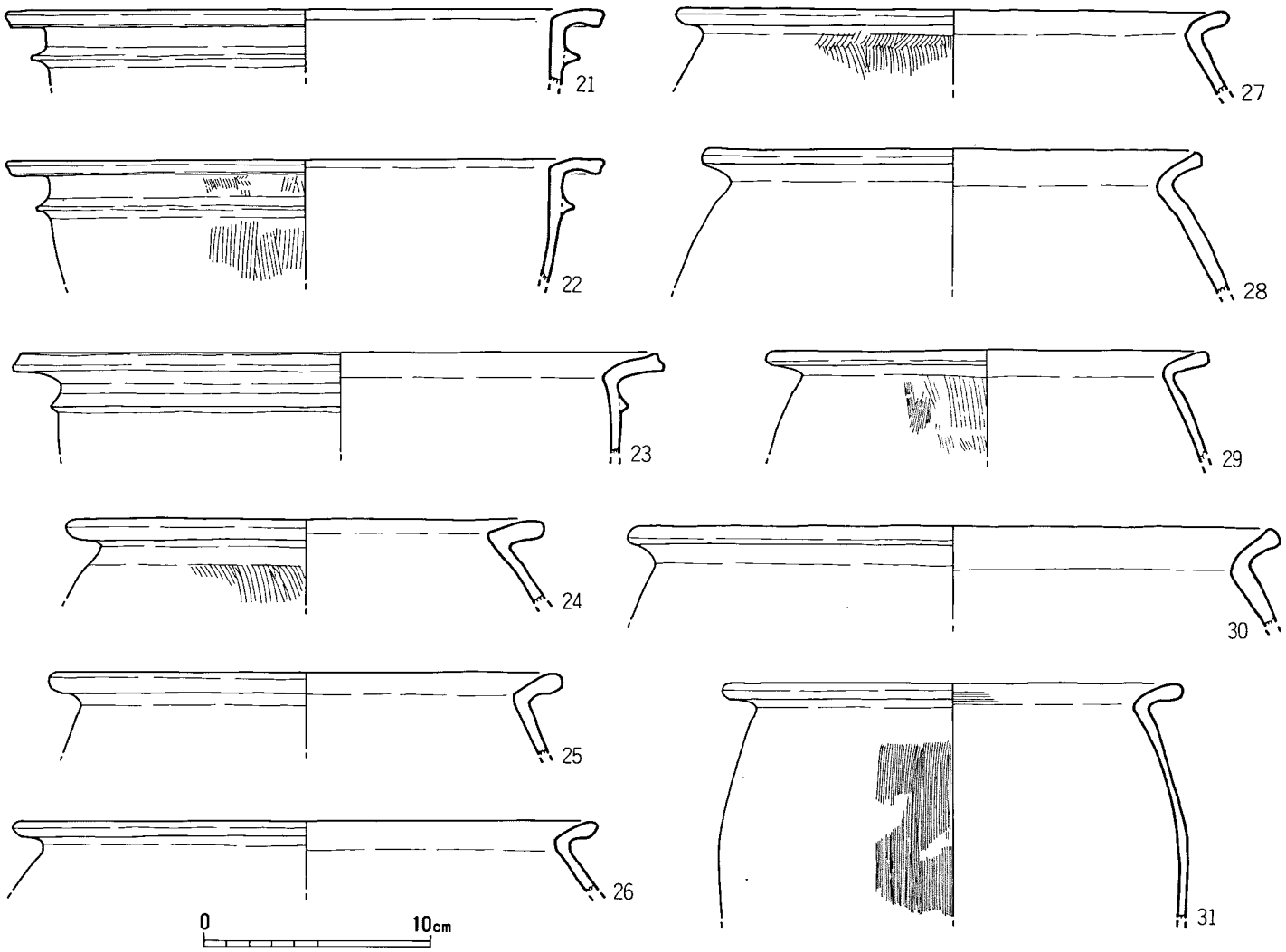
16号溝は、県道東側調査区の中央部東寄りに位置し、ほぼ南北方向に走行する。全長10mを確認したが、北側については調査区外へ延びており、その全容は不明。最大で幅1.9m、深さ35cmを測る。第167図の土層図に示したように、最下層（第３層）には灰色粘質土が堆積する。また溝の断面形態は場所によって異なり、土層断面図にも図示しているが、テラスが随所で見られる。遺物の出土はなく年代の決め手に欠けるが、本遺跡の溝およびその他の以降には見られない灰色系の埋土なので、おそらくは中世以降に属するものと考えられる。



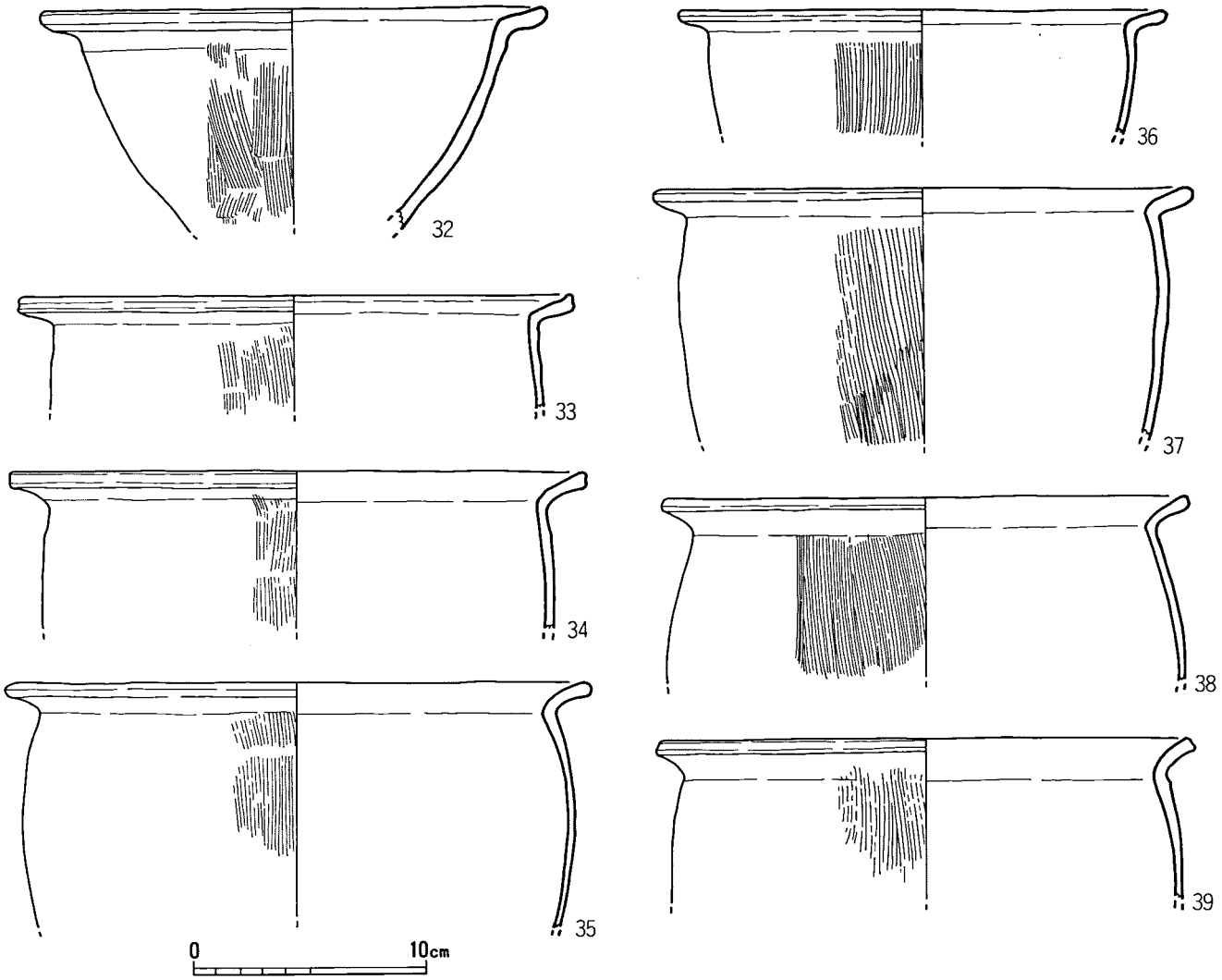
第179図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.1（1/4）



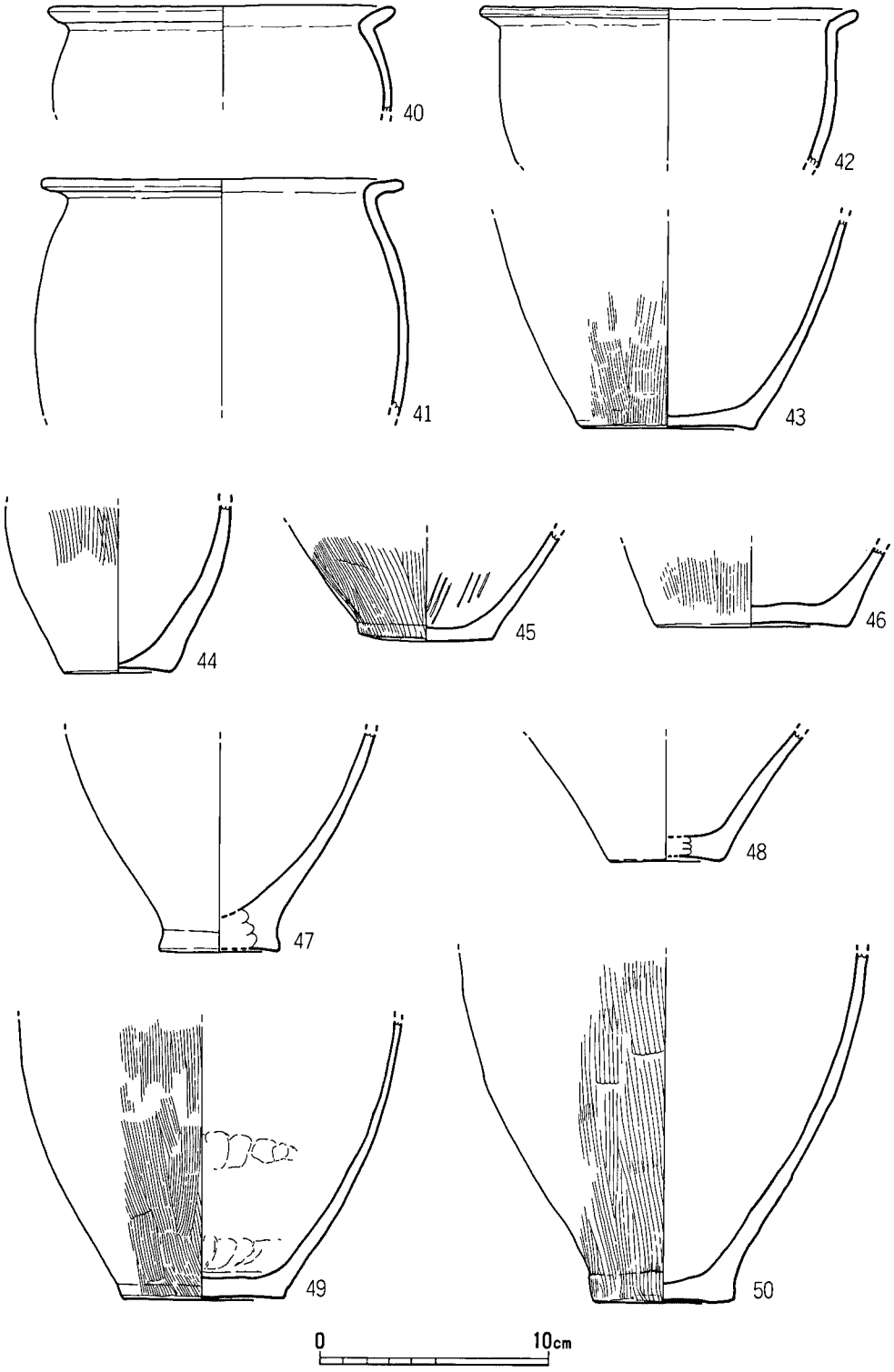
第180図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.2（1/4）



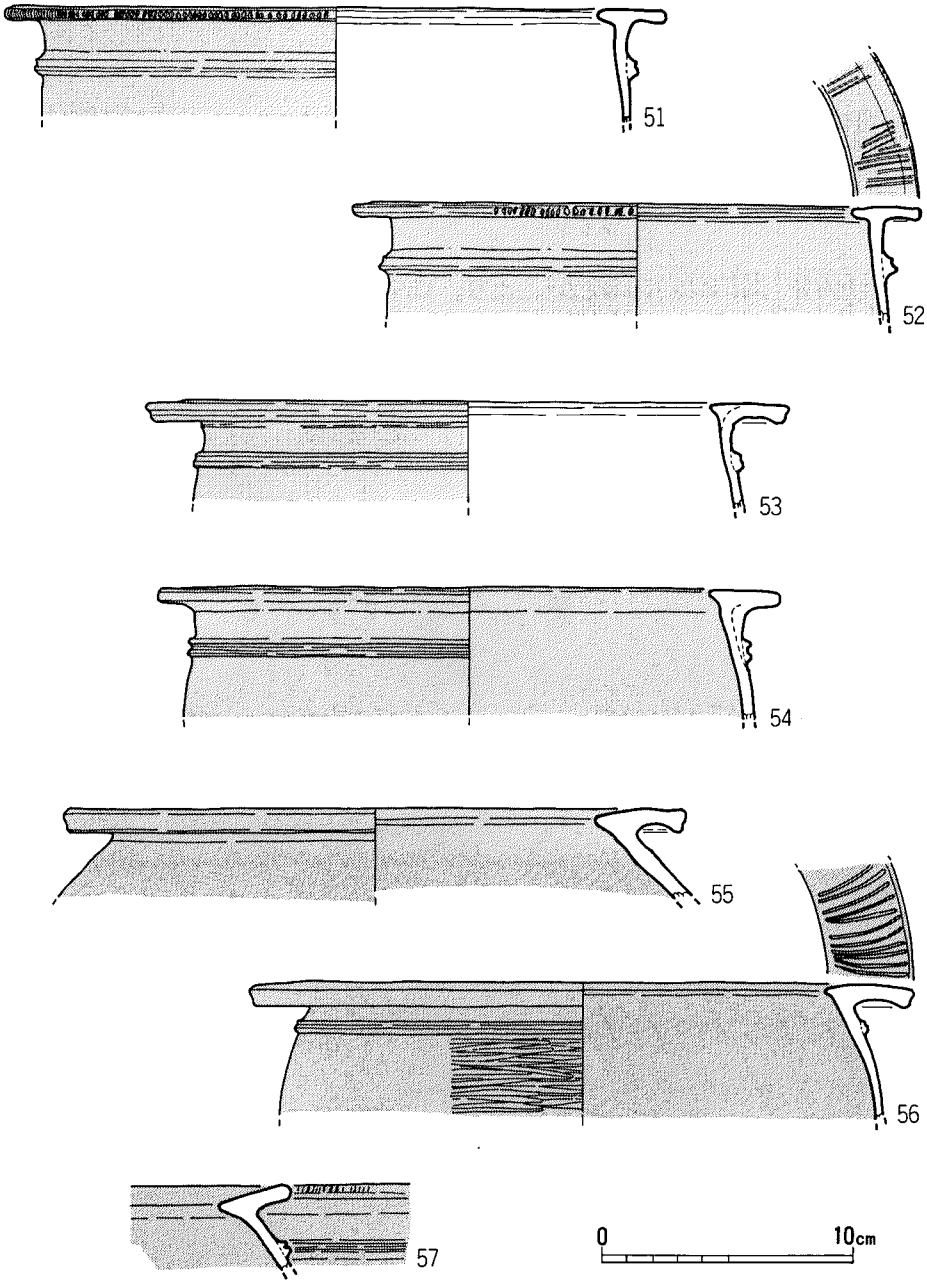
第181図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.3（1/4）



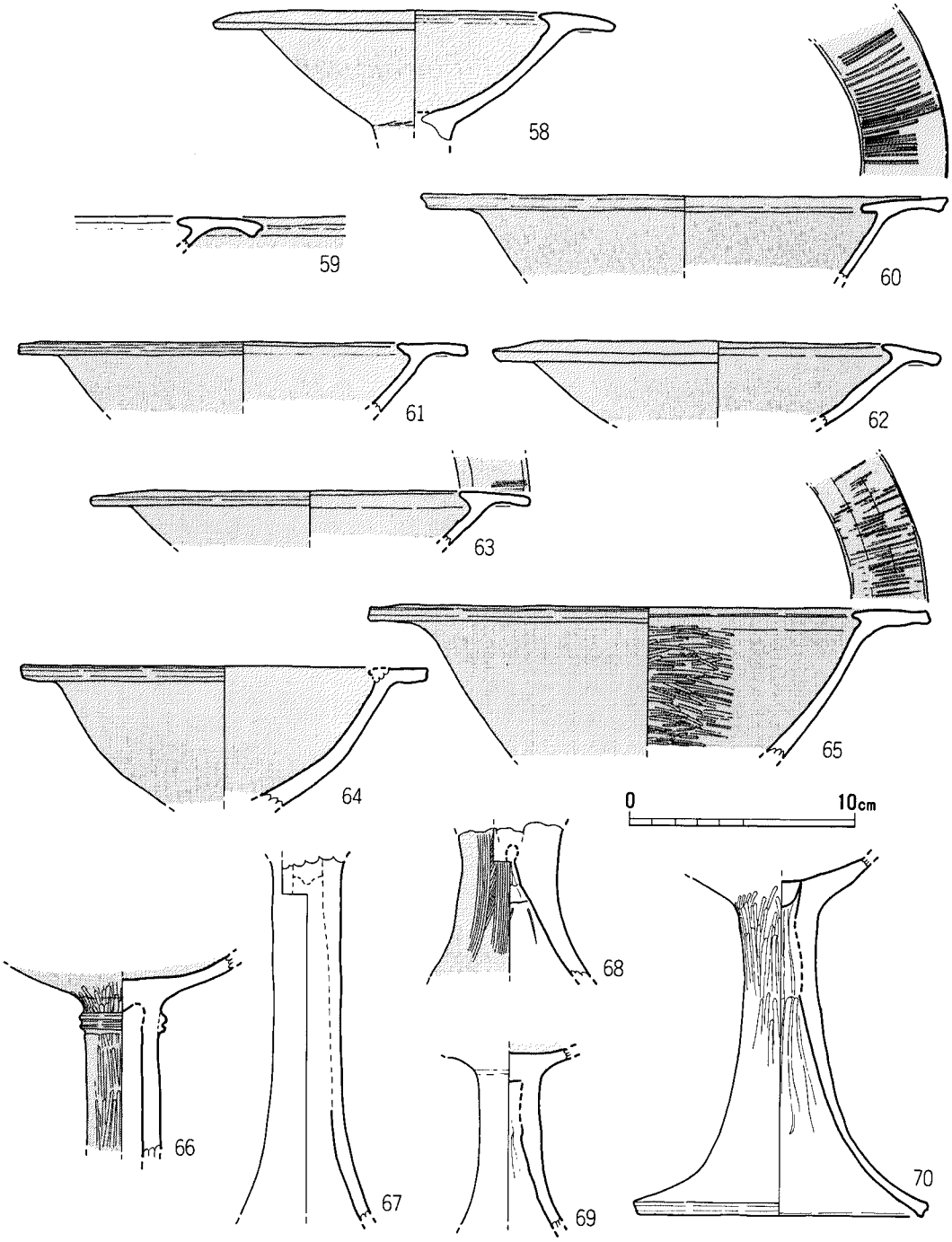
第182図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.4（1/4）



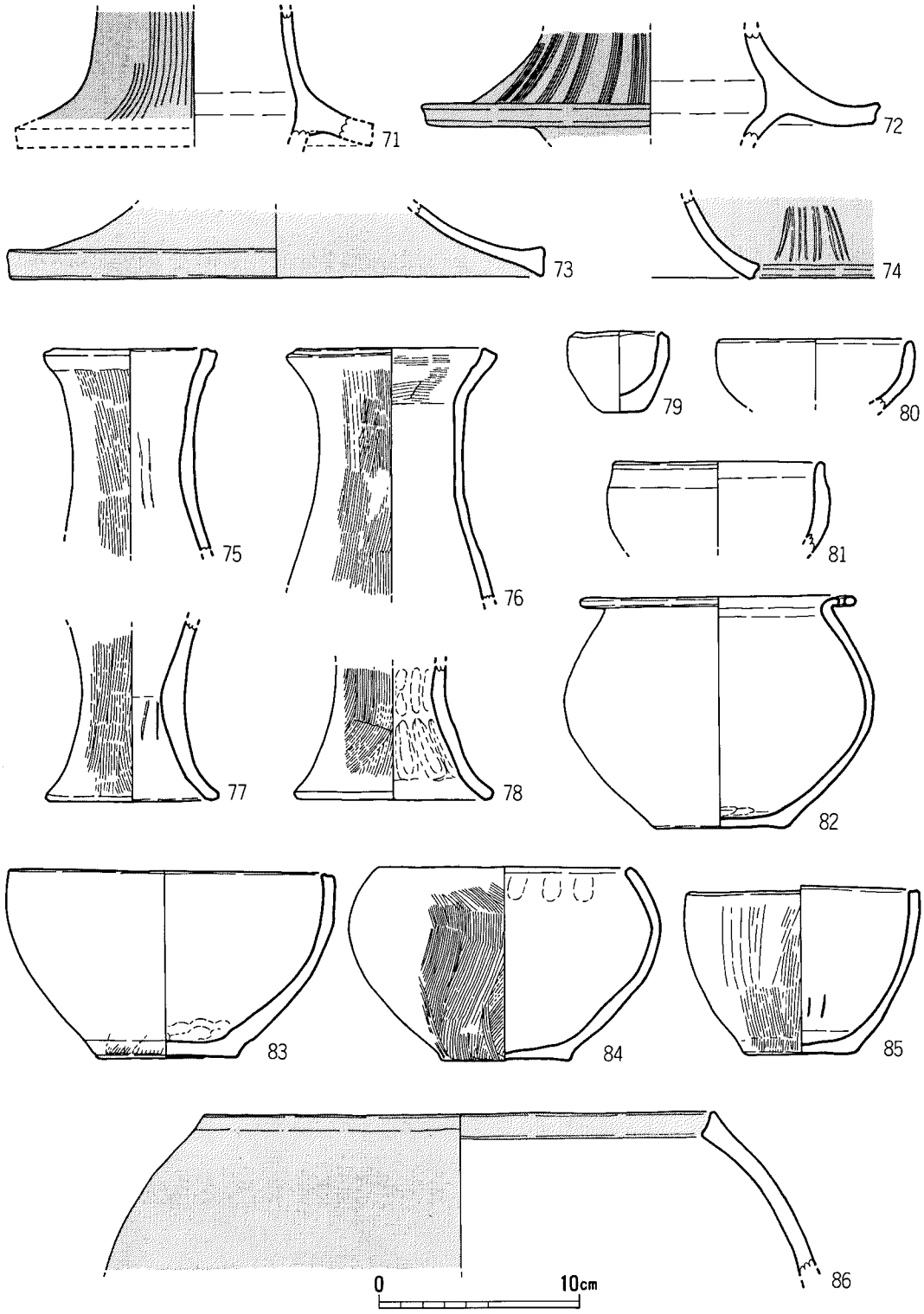
第183図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.5（1/4）



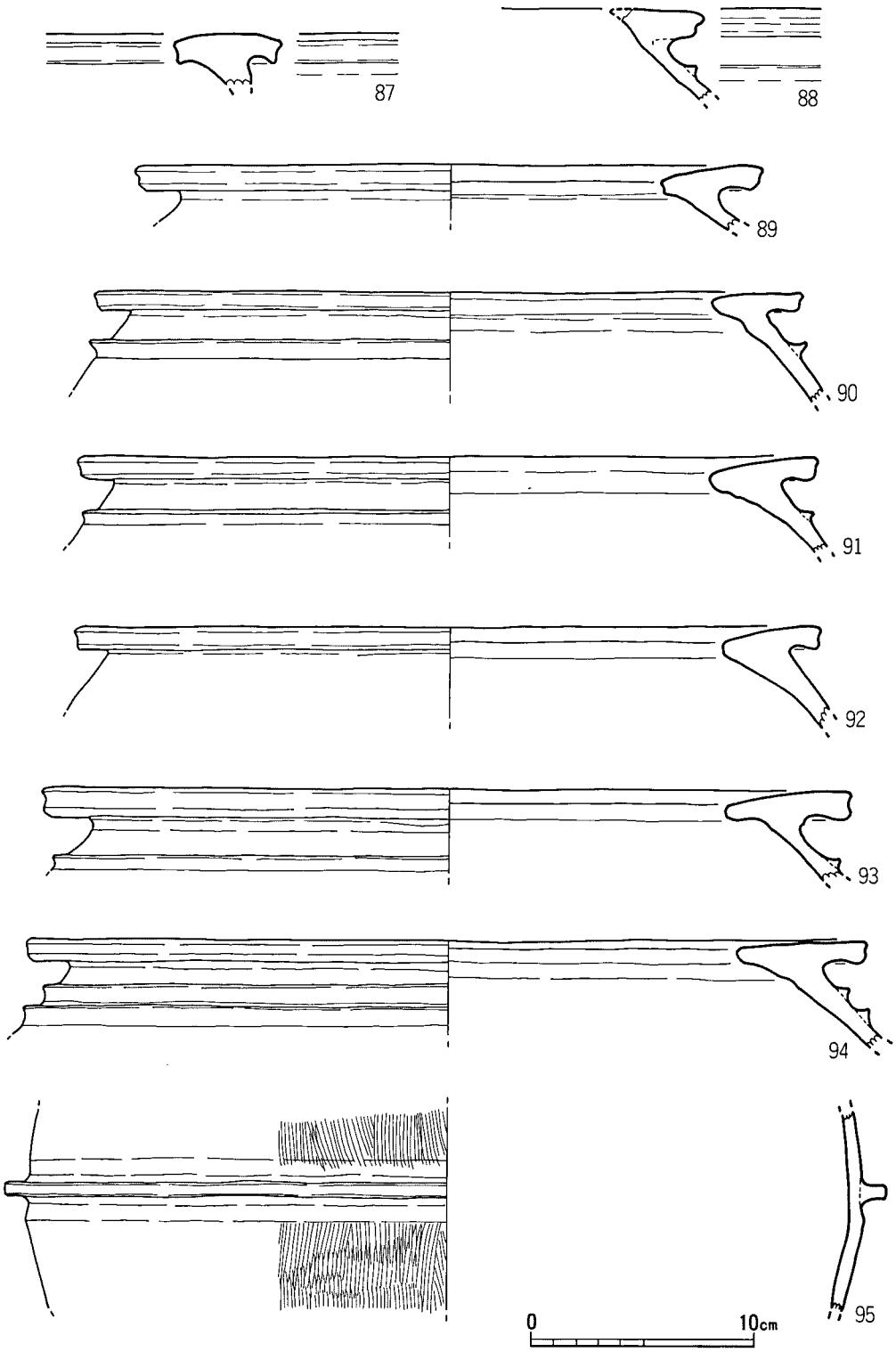
第184図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.6（1/4）



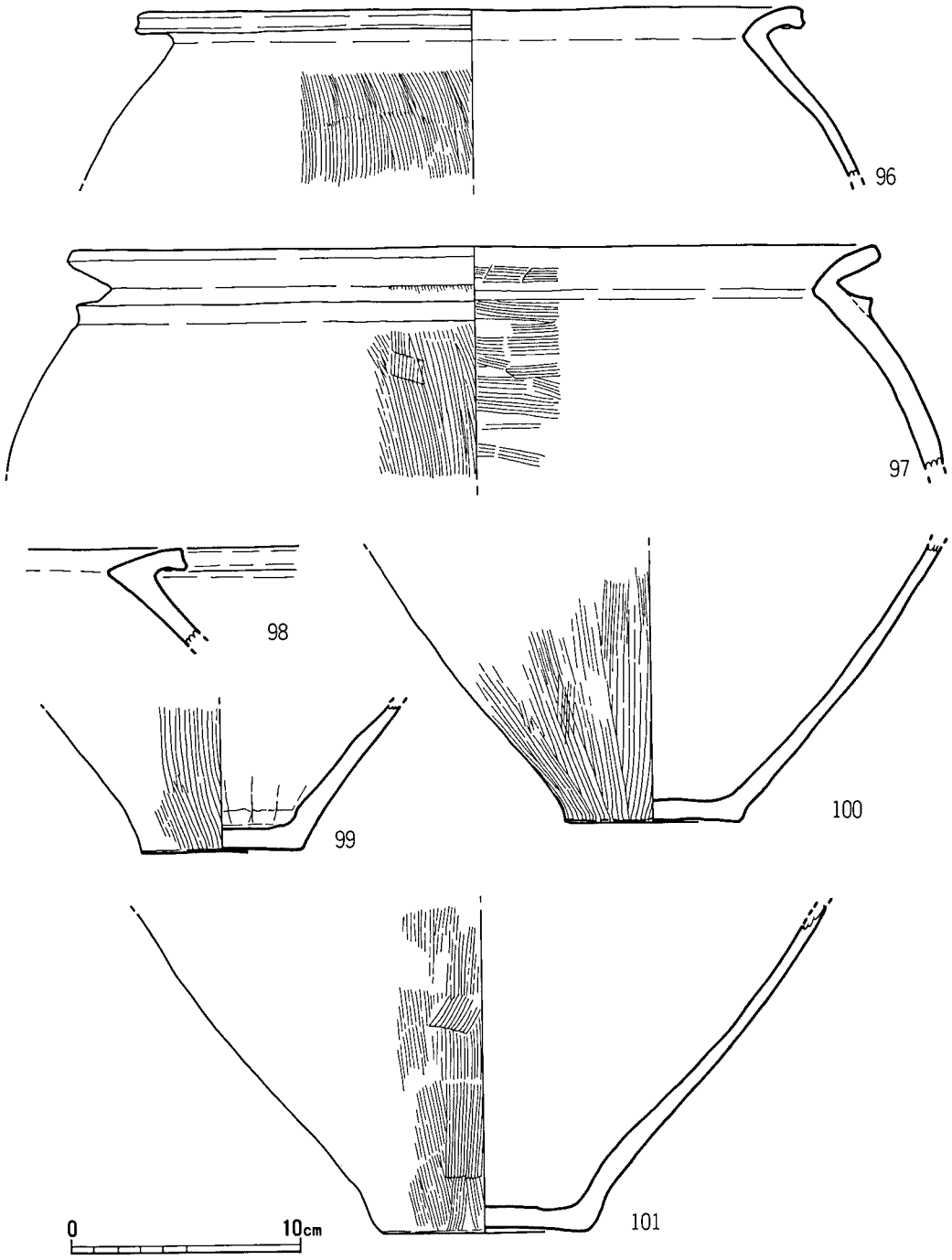
第185図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.7（1/4）



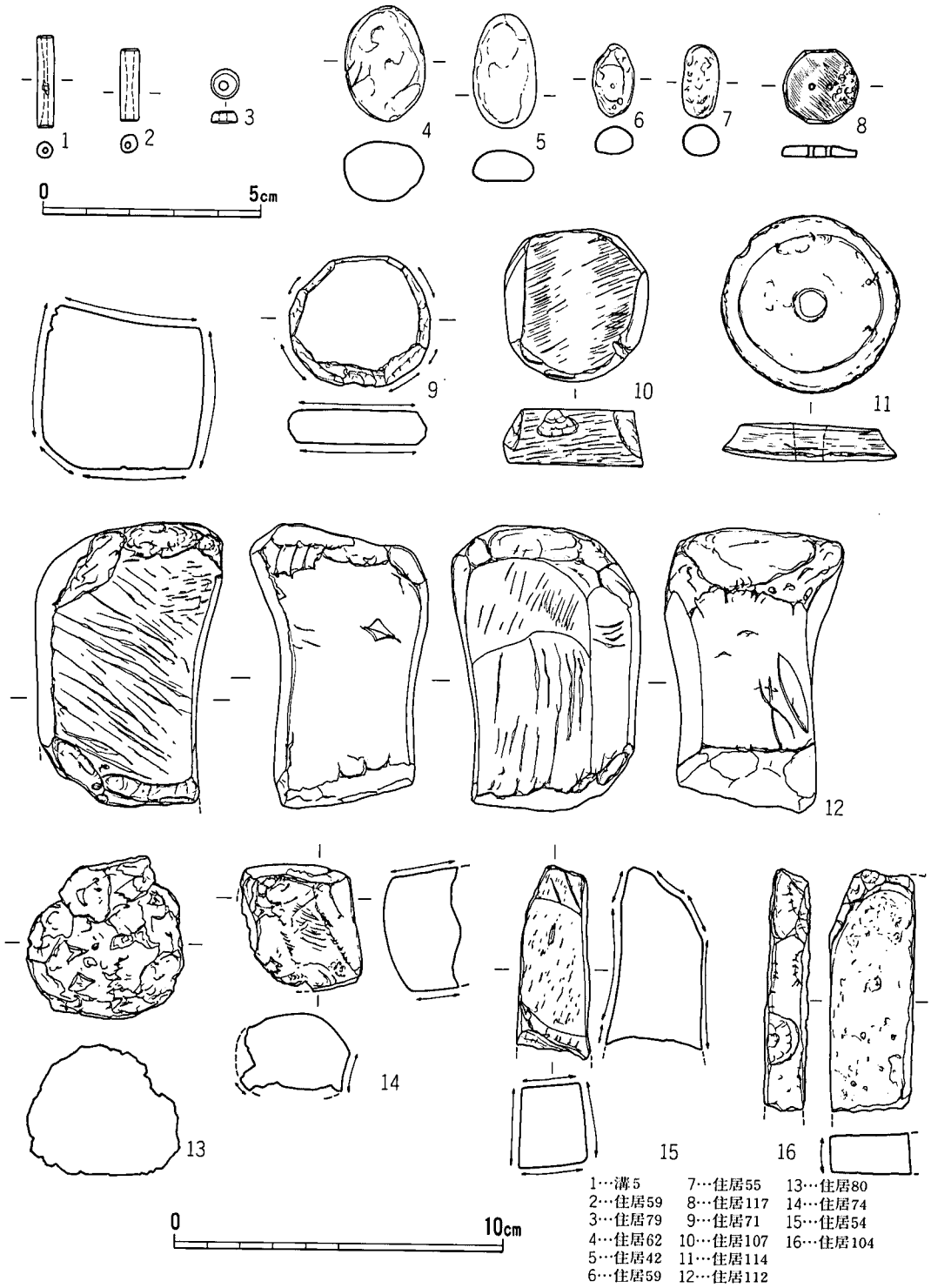
第186図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.8（1/4）



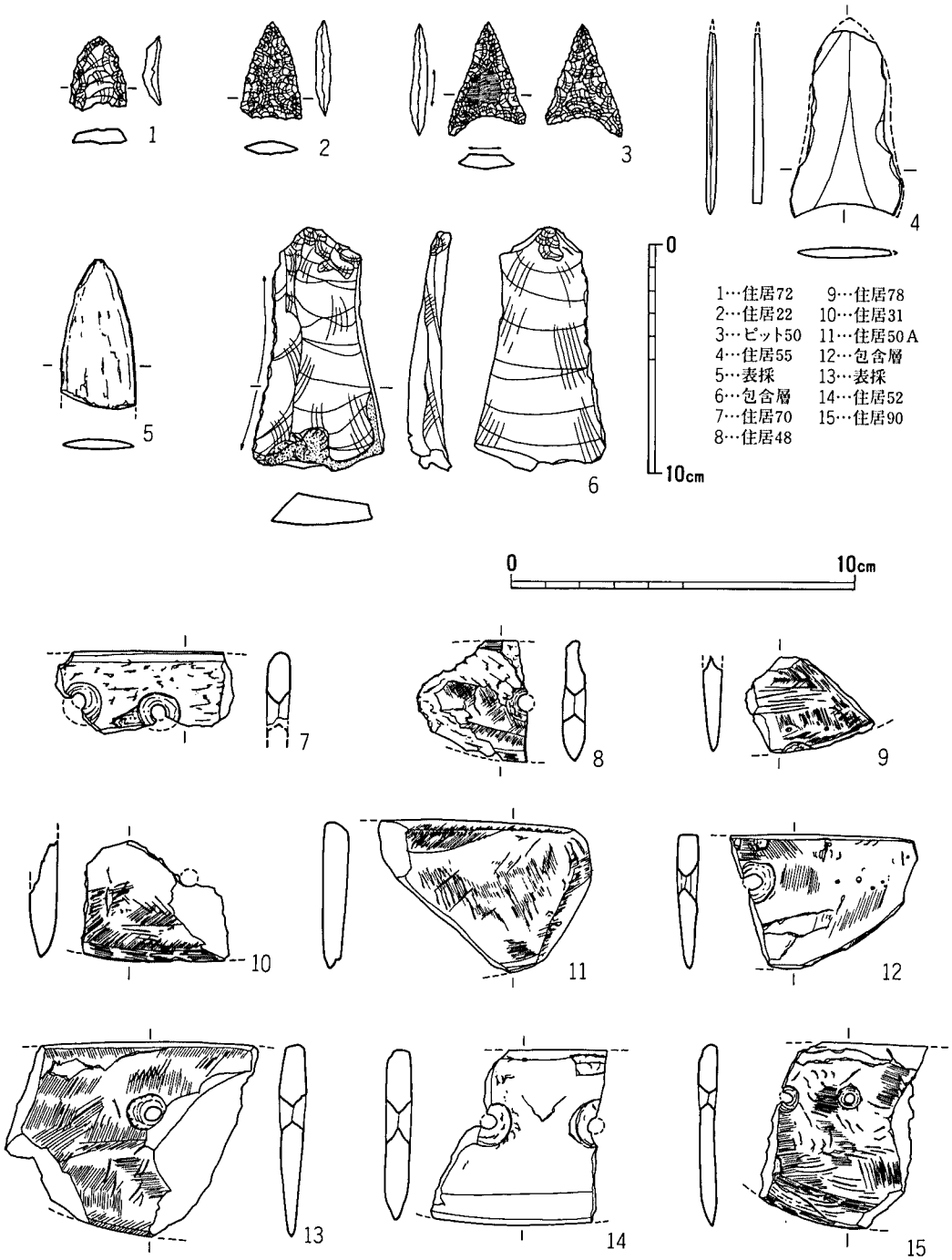
第187図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.9（1/4）



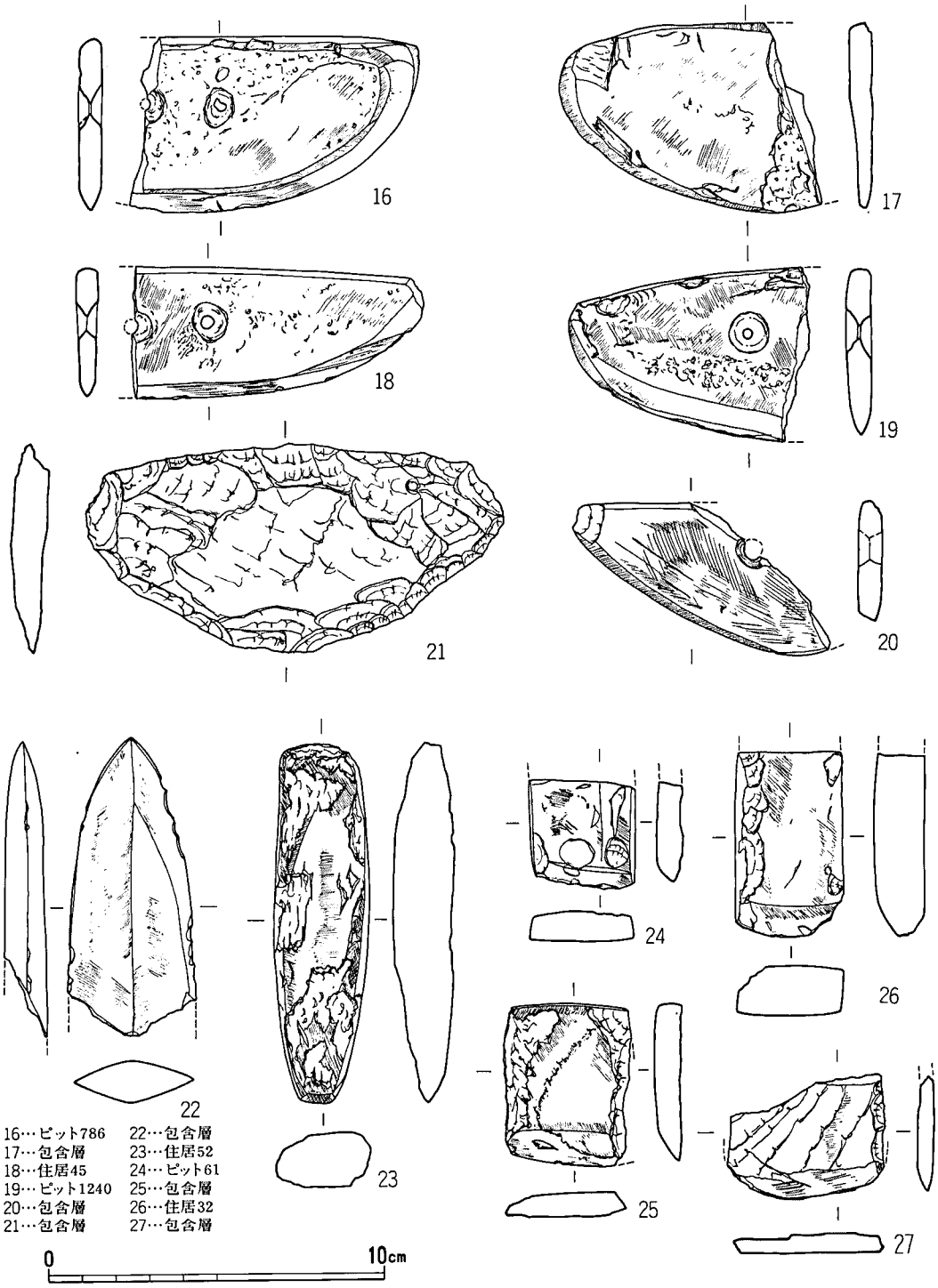
第188図　ピット・包含層出土弥生土器実測図.10（1/4）



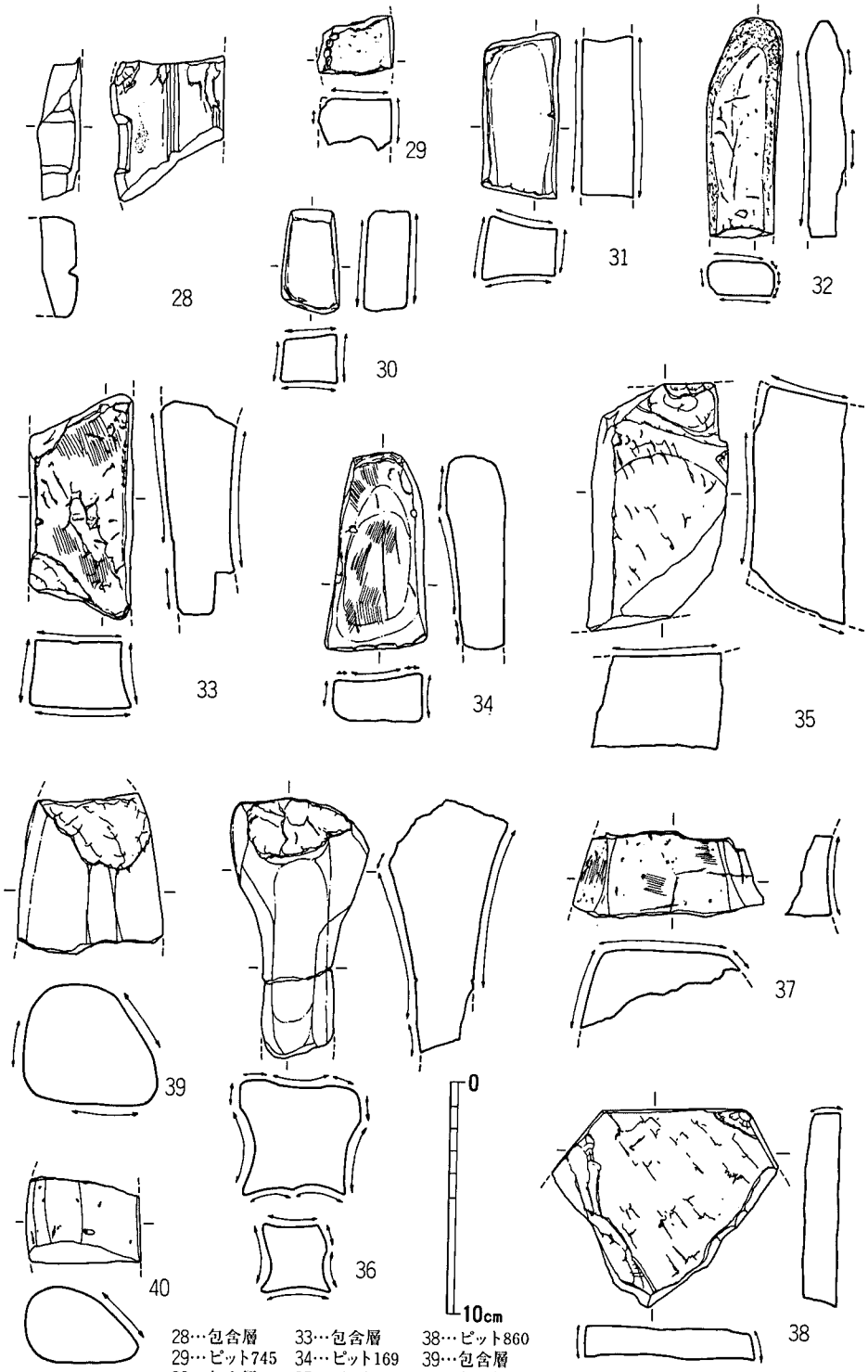
第189図　古墳時代の石器・石製品実測図（1～3は2/3　4～16は1/2）



第190図　ピット・包含層出土石器実測図.1（1～6は2/3　7～15は1/2）

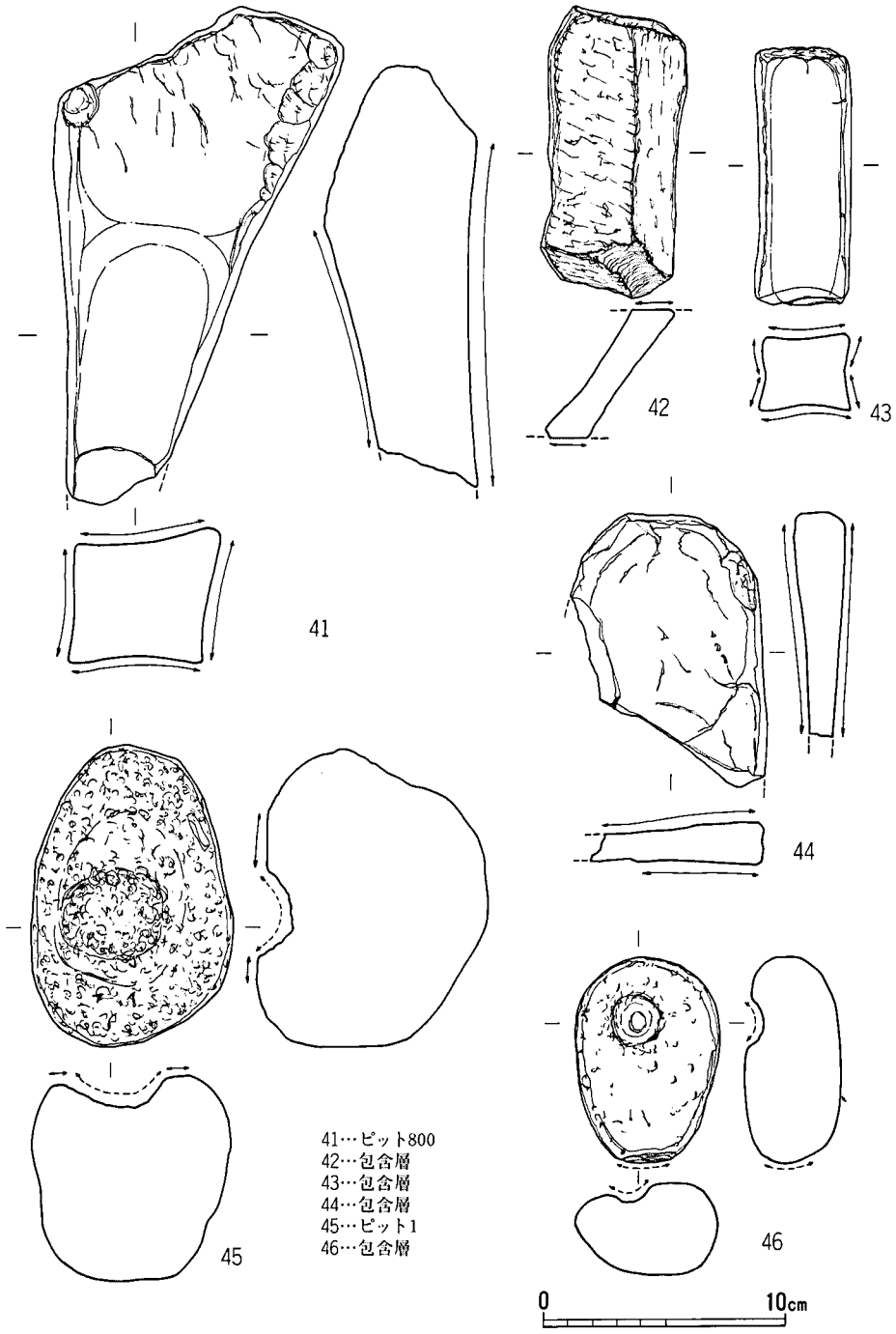


第191図　ピット・包含層出土石器実測図.2（1/2）

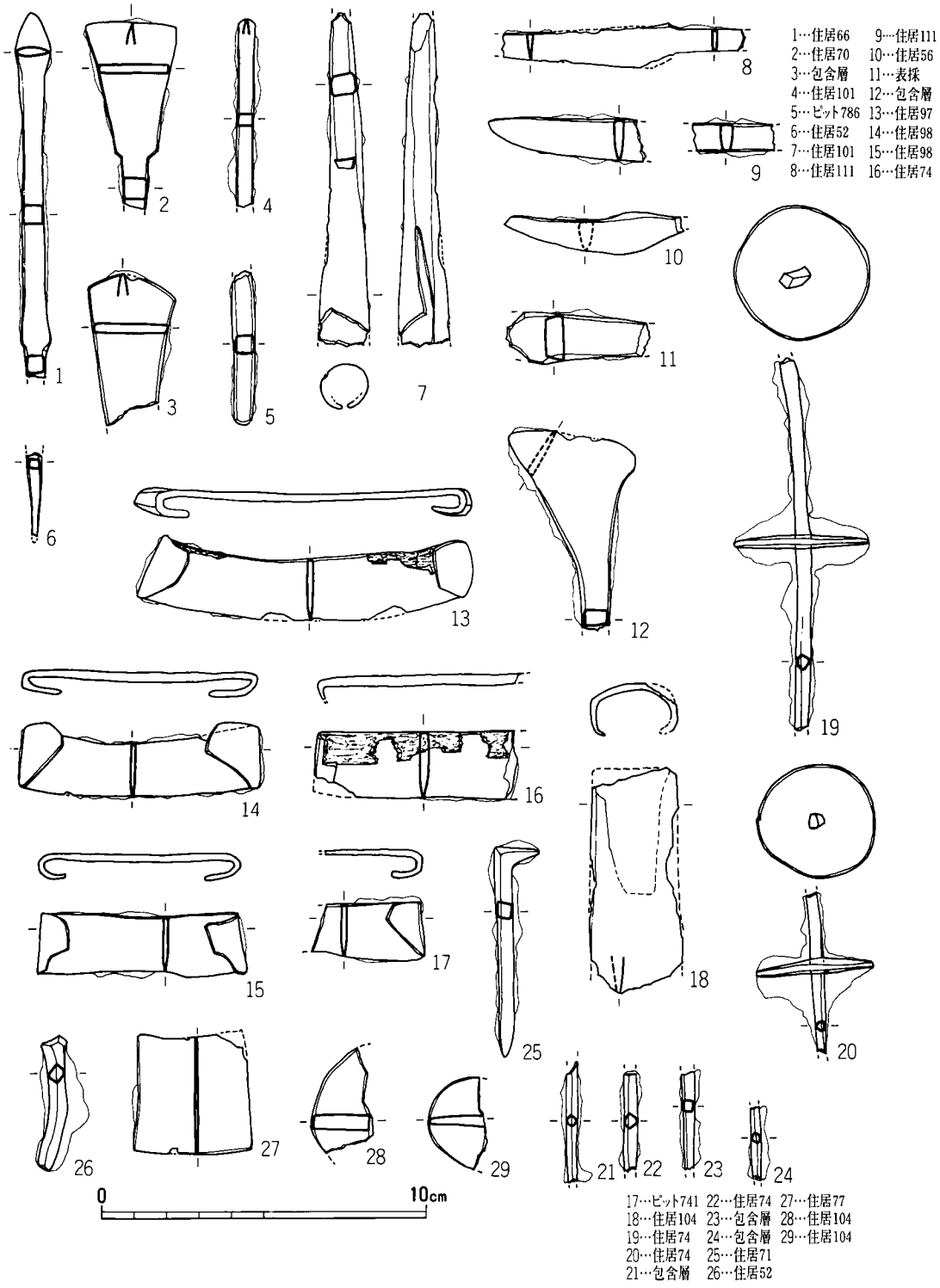


28…包含層
29…ピット745
30…包含層
31…包含層
32…包含層
33…包含層
34…ピット169
35…ピット860
36…ピット788
37…包含層
38…ピット860
39…包含層
40…包含層

第192図　ピット・包含層出土石器実測図.3（1/2）



第193図　ピット・包含層出土石器実測図.4（1/3）



第194図　鉄器実測図（1/2）

報告書抄録

ふりがな	たかとりごたんだ
書名	鷹取五反田遺跡Ⅱ
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査
巻次	Ⅱ（弥生時代包含層・古墳時代以降編）
シリーズ名	一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第10集
編著者名	井上裕弘・木下　修・小田和利・水ノ江和同
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8785　福岡県福岡市博多区東公園7－7　　TEL（092)651-1111
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たかとりごたんだ 鷹取五反田	ふくおか うきは 福岡県浮羽郡 よしい たかとり 吉井町大字鷹取 字五反田318・328・343番地および 字中ノ坪349番地	40481	630120	33°20′50″	130°43′40″	1990. 4.15 ～ 1990.11.28 1993.10.26 ～ 1993.12.10 1994. 5.26 ～ 1994.10.26	7,420㎡	道路 （一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う事前調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷹取五反田	集落 墓地	古墳中期 ～ 奈良時代	竪穴住居跡　75軒 掘立柱建物跡　7棟 土坑　1基 土壙墓　8基 溝　16本	土器（須恵器・土師器） 石器 鉄器	古墳時代～奈良時代の竪穴住居跡は5世紀前～中葉7軒、6世紀中～後葉52軒、8世紀中～後葉15軒に分かれ、分布域も異なる。

福岡県行政資料

分類番号	ＪＨ	所属コード	2133051
登録年度	10	登 録 番 号	14

一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

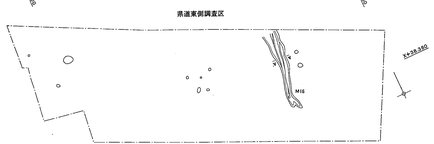
鷹取五反田遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字鷹取所在遺跡の調査

平成11（1999）年３月31日

発行　福　岡　県　教　育　委　員　会
〒812-8587　福岡市博多区東公園７番地の７
電話（092）651-1111

印刷　株式会社　川島弘文社
〒812-0051　福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６番41号

鷹取五反田遺跡全体図(1/300)

付 図 鹿取五反田遺跡全体図（1/300）